学習 科学

6年の読み物特集 上

楽しいお話がいっぱい。読書力がつく。
豊かな心が育つ。

●別冊／学習教材
ことば・ことわざ
はじめはじめ事典（じてん）

社団法人日本PTA全国協議会推薦

●編集部から――
おうちの方へ
◆この雑誌の特色

❖最後は、読書で差がつきます。

読書（本を読むこと）は、勉強ではありません。だから、いくら本を読んでも、かならずしも通知表の数字が上がるとは限りません。しかしいつかは、読書で身につけた幅広い知識がほんとうの力となって、通知表の数字を追いこすときがくるのです。小学生時代における読書の習慣こそ、未来に可能性を広げる大切な栄養剤なのです。

❖単行本10冊分がパックされています。

「読み特」（年2回㊤㊦を刊行）は、読書の楽しさを発見させ、読書を習慣づけるためのさまざまの試みに満ちています。多くの読者の好みにも応えられるよう、創作読み物（生活読み物、友情物語、ファンタジー、推理冒険）の外に、民話や名作、伝記、スポーツや科学の話題、まんがなど多彩に構成され、単行本10冊分にも匹敵する内容になっています。

❖日本で唯一の雑誌です。

「読み特」は、現在第一線で活躍する一流の作家・画家の執筆により、より親しみやすく読めるように工夫された日本で唯一の子どものための読み物総合誌です。また、国語の学習に役立ち、知的興味にこたえる別冊学習教材として**ことば・ことわざはじめはじめ事典**がついています。ぜひ、学習に役立ててください。国語への興味が開かれます。

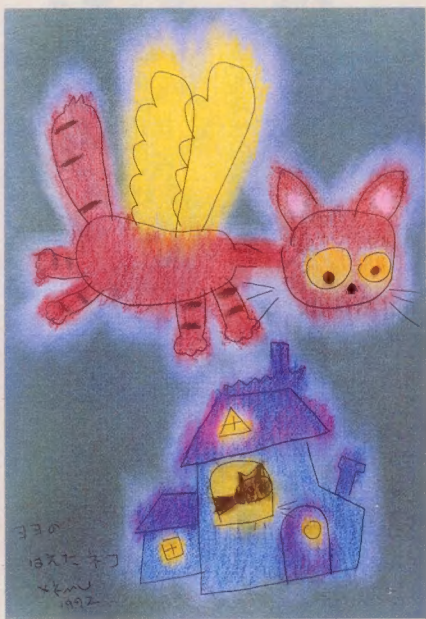
光を失った画家

「エム ナマエ」誌上展覧会

病気におそわれ、光を失った画家エム ナマエさんは、もちまえの明るさとがんばりで、ふたたび絵をかきはじめた。絵をかくナマエさんのかたわらには、おくさんであるコボちゃんがいて、心の目で絵をかくナマエさんの手つだいをする。

おくさんの助けをかりて絵をかくエム ナマエさん

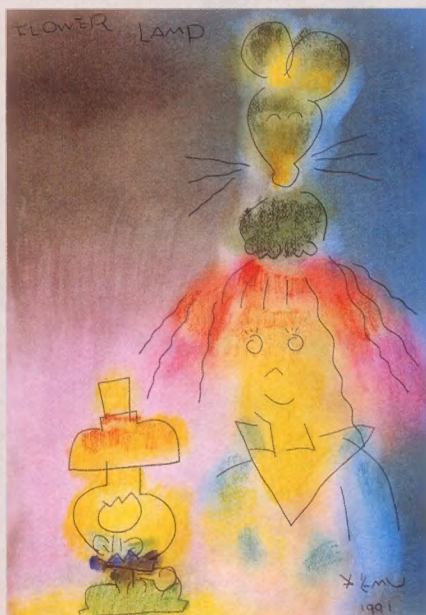
ハッピー・ドラゴン

マリン・スノウ

羽のはえたネコ

インドのトラガリ

丘の教会

エアロ・ファント

エアロ・ポリス

フラワー・ランプ

エム ナマエさんの話は一七〇ページにあります。

もくじ

6年の学習・科学・読み物特集㊤

クイズの賞品

（クイズの問題と応募の方法は276ページにあります。）

Ⓑハーティシアターロックンダイナー
★音楽に合わせてミッキーマウスたちがパフォーマンスを演じます。
7000円（タカラ） **1名**

Ⓐジェットタイフーン
★ラジオコントロールで動くすごいスピードのホバークラフト。
8980円（タイヨー） **1名**

Ⓒちびまる子ちゃん
★「おはよう、わたし、まる子」などといいながら、起こしてくれるゆかいなめざまし時計。
8500円（リズム時計工業） **2名**

Ⓓチャップリン
★「おはよう、ぼく、チャップリン」などといいながら、起こしてくれるゆかいなめざまし時計。
7000円（リズム時計工業） **2名**

Ⓕ『48時間の戦国時代』
★三田村信行・作 大古尅巳・絵
910円（学研） **100名**

Ⓔ『松谷みよ子の民話』上・下巻
★松谷みよ子の名作民話を松尾敦子が語るカセットブック。
5200円（学研） **10名**

6年の読み物特集 上

右は、古代エジプト王朝のクフ王が使ったとされる"太陽の船"。
上は、古代エジプト王朝のツタンカーメン王のひつぎ。
くわしくは、八三ページ。

《巻頭詩》

月のガムラン

寮美千子・詩／乗田貞勝・絵

それは　遠い南の島のこと。

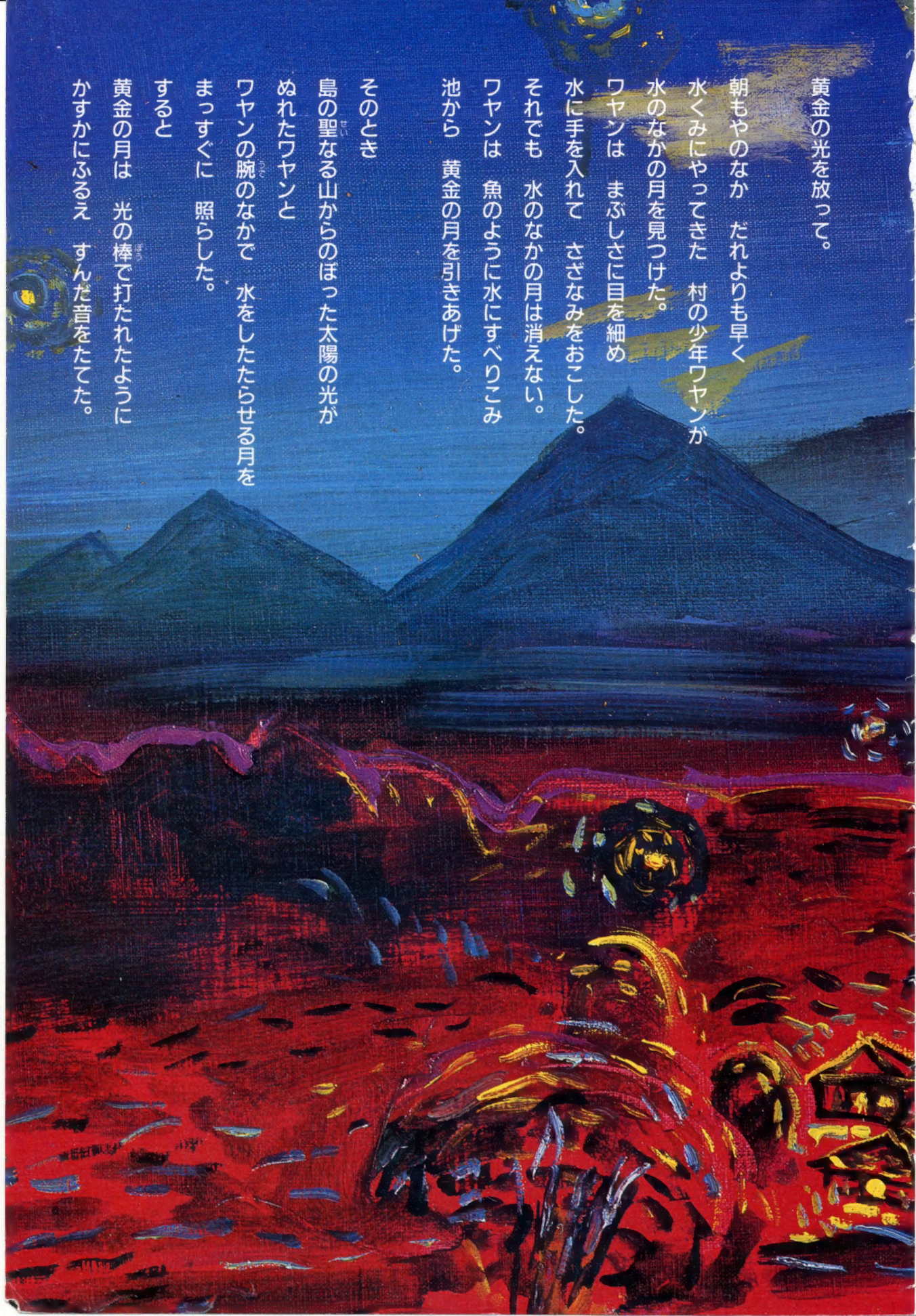
美しくまるい池があった。
満月の晩　空には雲のひとかけらもなく
月は　光の粉をまきちらしていた。
風はなく　少しの波も立たず
池は　鏡のように静まりかえっていた。

池には月が映っていた。
空にある月よりも　さらにあざやかに。

夜が明けて
空の月が　光のなかに消えても
水のなかの月は　まだ輝いていた。

黄金の光を放って。

朝もやのなか　だれよりも早く
水くみにやってきた　村の少年ワヤンが
水のなかの月を見つけた。
ワヤンは　まぶしさに目を細め
水に手を入れて　さざなみをおこした。
それでも　水のなかの月は消えない。
ワヤンは　魚のように水にすべりこみ
池から　黄金の月を引きあげた。

そのとき
島の聖なる山からのぼった太陽の光が
ぬれたワヤンと
ワヤンの腕のなかで　水をしたたらせる月を
まっすぐに　照らした。
すると
黄金の月は　光の棒で打たれたように
かすかにふるえ　すんだ音をたてた。

音は
朝もやのなかを　なめらかにすべっていく。
川をこえ　森をこえ　村へと。
魚は　よろこびに　銀のうろこをひるがえし
鳥は　さえずりをやめ　うっとりと聞きいり
人は　夢のなかで　月の音を聞いた。

人々は　目ざめる。
ほんの赤んぼうから　老人まで。
そして　耳をすます。
目ざめても　ひびきは消えない。
人々は　寝台から起きあがり
見えない糸に引かれるように
ゆっくりと歩きだし　やがて　かけだした。

池のほとりに　村人が集まる。
だれもが　ワヤンの持つ月に　ふれたがり
その音色を　聞きたがった。
人々は　よろこびの声をあげ

▶ガムラン（打楽器）で演奏されるガムラン音楽は、インドネシアが世界にほこる音楽だ。

黄金の月を持つワヤンを　かたにかつぎ
歌いながら　村に帰った。

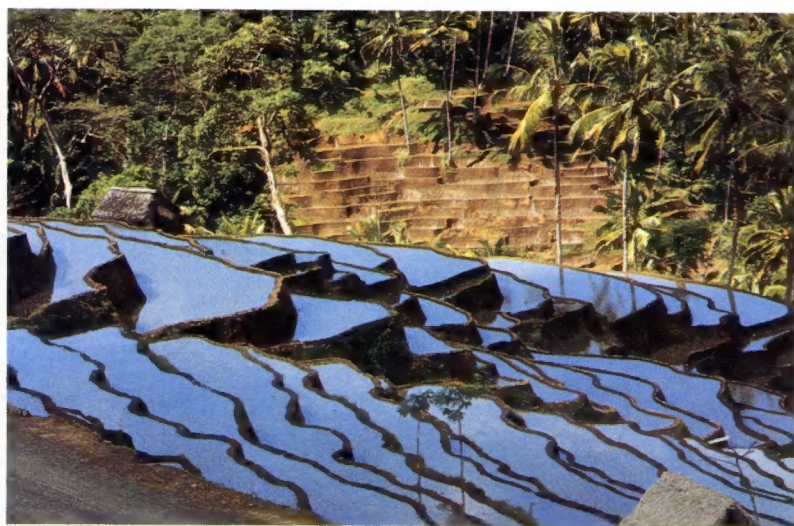
その日から　黄金の月は　村の宝になった。

満月の祭りの晩には　かならず
黄金の月が　奏でられるようになった。
音色は　人々の心をとりこにした。
だれが　たたいても
月は　美しい音色をたてたが
ワヤンが　たたくと　なにかがちがった。
心が　おどりだすような音だった。
だれもが　ワヤンが奏でる音を聞きたがった。
それでいて　だれもが　自分で
月に　ふれたがり　たたきたがった。

けれど　月はたったひとつしかない。

人々はこぞって　黄金の月をまね

楽器をつくった。
どの楽器も　美しい音を奏でたけれど
なにかがちがった。
「なぜだろう」
と　村人が首をかしげると　ワヤンがいった。
「黄金の月には　たったひとつの音のなかに
月の満ちる十五日と
月の欠ける十五日が　宿っているから。
聖なる月の鼓動だから」
人々はおどろいて　ワヤンを見た。
はだが　かすかに金色をおびて見えた。

「この月をとかして　鋳こめばいい」
人々はおどろいて　ワヤンに　いいかえした。
「そんなことをしたら　月がこわれてしまう」
するとワヤンは　ほほえみながら
たなのように重なる　水田を　指した。
くちびるから　月の光のように　言葉がもれた。
「千の鏡に映っても　月はなくならない。
ひとつひとつが　みんな美しい月だ。
千の楽器に鋳こんでも　月はなくならない。
ひとつひとつが　みんな美しい月になる」
村人は　静まりかえり　顔を見合わせた。
そして　田に映る千の月をながめた。
風のない晩だった。
水は　鏡のように　月を映していた。
「ワヤンのいうとおりだ」
だれかが　さけんだ。
すると　みんなが　いっせいに歓声をあげた。
人々は　よろこんで　火を起こし
黄金の月をとかして

▶バリ島の斜面に開けた階段状の水田

●作家紹介

寮　美千子

東京生まれ。作品に『小惑星美術館』『ほしがうたっている』など。
現在、衛星放送ラジオ局「セント・ギガ」のために詩を書いている。赤道上空三万六千キロから言葉が降りてくる……。

それぞれの楽器に鋳(い)こんだ。
そのひとつひとつが　美しい月になった。

満月の晩(ばん)になると
人々はともに　千の月を奏(かな)でた。
千の月の鼓動(こどう)が　島をふるわせる。
草も　水も　風も　波も
鳥も　魚も　獣(けもの)も　人も
すべてが　たましいをふるわせる。

それは　遠い南の島のこと。
けれど　名もない島ではない。
島の名はバリ。
音楽は　ガムランとよばれ
いまも　たくさんの　ワヤンたちが
祭りの晩(ばん)に　千の月の鼓動(こどう)を奏(かな)でている。
満ちては欠ける　永遠(えいえん)の時を　奏(かな)でている。

（終わり）

感動短編●子ども時代の犬との思い出

犬に関するふしぎな体験

笠原靖・作／山内和則・絵

わたしの身近のたくさんの犬のなかで、とくに印象深かったのが「五郎」という日本犬だった。

言葉を理解してた？「五郎」

幼いころから、いつも身近に犬がいた。二、三歳のころはチンを飼っていたし、小学生のころは捨て犬の子を拾ってきては飼っていた。

当時わたしは小浜（福井県）に住んでいた。家は若狭湾の中にある小浜の海から百メートルという近い所で、美しい海と砂浜が遊び場だった。

家の近くに細道があり、その細道に、よく段ボールに入った子犬が捨てられていた。

わたしは拾ってきて、それを飼った。母はけっして

おこらなかった。わたしの周りには、いつも数頭の犬がいた。自分の犬もいれば、近所の犬もいた。多いときには十数頭が集まるときもあった。わたしにとって、犬は最良の仲間であった。

学校から帰ると、わたしはかばんをほうり出して、犬たちを連れて海岸へ行った。砂浜にねころび、犬の背中をまくらに、キラキラとかがやく波や島、船をながめているのが好きだった。犬たちもたいていわたしの横にねころんで海を見つめていた。

犬たちと仲よくなると、かれらの考えや心が見えてくる。犬は人間のように言葉を使うわけではなかったから「以心伝心」だった。とうぜん、わたしの心も犬たちに伝わっている。

そうなると、かれらもわたしの言葉を人間と同じように理解するようになってくる。中でもわたしと仲のよかった「五郎」という名の犬は、そうだった。雑種

だったが形の良い犬で、姿も形も中型の日本犬そのものので、強いうえに頭が良く、きわだって印象深い犬だった。

わたしの家には「心」という文字を形どった大きな池があった。

中学一年のときである。わたしは池の中央にかけられている反橋の上にあお向けにねころんでいた。夏の夜で、月が明るくかがやいていた。

そのころは今ほど食糧事情は良くなかった。それに食べ盛りである。わたしはお腹が空いていた。わたしの足元に五郎がねそべっていた。五郎はわたしの犬ではなかったが、飼主の家よりもわたしの家のほうが居心地が良いらしく、うちにいることのほうがはるかに多かった犬である。

わたしは五郎に、「お腹がすいたなあ、五郎」と声をかけた。たった一度だけである。

五郎はじっとわたしを見つめていたが、つと立ちあがると、どこかへ行ってしまった。

少ししてわたしは家に入り、ねどこに入った。床について三十分くらいがたったころ、えんがわの外で、雨戸がカリカリと音をたてた。最初は空耳かと思ったが、すぐに雨戸を引っかいているのが五郎だと気がついた。カリカリという音に、鼻を鳴らす声がまざったからである。

五郎はわたしの持ち犬ではなかったから、てっきり飼主の元へ帰ったものとばかりに思っていたのだ。

「もうおそいから帰ってねろよ。」

ねむいので雨戸ごしに声をかけたが、五郎にその場から動く気配はなかった。起きあがって雨戸を開けた。すると五郎が月の光を浴びて、尾をふりながら立っていた。わたしは五郎に目をやってあぜんとした。五郎が白いにわとりをくわえていたからである。

五郎はわたしが立っているえんがわの足元ににわとりを置くと、もう一度わたしを見上げてしりをふった。鼻を鳴らした。その声はわたしに、「おいしいから食べて」と言っていた。

わたしははだしでえんがわをとびおりるなり、五郎をなぐりつけた。にわとりはとるな、とどなった。なぐるのはすじちがいだとわかっていたが、なぐらざるをえなかった。なぐりながら、なみだがこぼれた。なぐられてとうぜんなのは、犬に原因をつくらせてしまったわたし自身であったからだ。「お腹がすいた」と言わなければ、五郎がにわとりをとってくることなどなかったのだ。

五郎は尾をたれ、打たれるままにじっとしていた。いくらなぐられても反抗しなかった。わたしのこぶしははれあがったが、五郎は鳴かなかった。わたしはこうかいの念にかられて、その夜一晩、ねむれなかった。

ふとんの中で五郎にわびつづけた。

"犬の視力"の限界は?

犬は訓練によってしか言葉は覚えない、となにかの本で読んだことがあるが、犬によってはかならずしもそうではない。たしかに大半の犬はそれに近いかもしれないが、すべての犬がそうだとは言えないのだ。わたしの身近にいた数頭はそうだった。わたしはかれらに人間の言葉を教えたことは一度もなかったが、かれらはわたしの言葉を人間と同じように理解してくれていた。言葉のほかにも、犬は視力が弱いという定説がある。が、五郎の例でもわかるように、犬全体が近視だとは言えないのだ。この場合、近視の基準をどのあたりに定めるのかがポイントになる。百メートル離れた所に立っている家人と他人を識別できるか否かが、近視かどうかの分かれ道であるという人もいるが、そんなことを言いだしたら、犬が作った辞書にも「人間は近視である」と書かれるかもしれない。めがね族が多い人間社会で、どれだけの人が百メートル離れていて(めがねなしで)、友人、知人を識別できるだろうか。試してみればわかることだが、これはとてもむずかしいことである。

ある犬の専門書に、警察犬で実験したところ、動かない人間で五百五十メートルまで見きわめることができたと書いてあったが、これが事実なら、犬は視力が

弱いどころか、並の人間よりもはるかにすぐれていると言うことができる。

とは言うものの、種類によってかなりの差がある。シェパード、ドーベルマン、マルチーズ、アフガンハウンド、サルキなどはきわめてすばらしい。が、残念ながら、弱い犬が多いのもたしかである。

同じ人間でも差がある。かつてアフリカのサバンナ（大草原）をサファリカーで走っていたとき、ガイド（案内人）のアフリカ人が走る車から前方を指さして、「あそこに○○○がいる」と動物の名前を言った。わたしの一・五の視力では、それが見えなかった。それもとうぜんで、かれの指さした所は双眼鏡でなければわからないほどのかなりの遠方だったからだ。

車を近づけてみると、たしかにかれの言った所に、かれが言った動物がいる。そうしたことがたびたびあった。いつもサバンナを走りまわっているかれの視力

はチータをはじめとする野獣なみで、おそらく五・〇くらいはありそうに思えた。

その後ある新聞に、マサイ族の視力に関する記事が出ていた。それによると、マサイ族出身の動物監視員の視力を測定したところ、「七・〇」だったというから、おどろきである。正しい調査結果であるだけに、貴重な資料だ。

これほどまでの差は、美しい自然、よごれのない空気、目を酷使することのない環境などいろいろとあるにちがいない。いずれにしても同じ人間でありながらこれほどまでにちがうのである。ましてや犬の視力が同一であるはずはない。

ふしぎな犬の超能力

また犬の能力に、人間の力ではときあかすことのできない「超能力」というべきものがある。五郎が示

してくれたのが、まさにこれだった。その日は午後から二時間の授業があり、わたしは二階の教室で国語の授業を受けていた。午後の一時半ごろである。

ろうかにコツコツという犬のつめ音が響いてきたかと思うと、とつぜんに五郎が鼻面で教室の戸をおしあけて入ってきたのである。五郎は真っ直ぐにわたしの所へ来るとかたわらにねそべり、大急ぎで来たらしく大きく舌を出してあえいだ。しかし五郎にこうふんは感じられず、むしろ周りの生徒たちのほうがこうふんし、さわいでいた。

信じられないできごとだったので、帰宅後、母にそのことを話した。すると母はおどろいた顔で次のように、昼間のことを話してくれた。

昼すぎに五郎が家へやってきた。いつものようにげんかんではきものを調べたあと、わたしが不在だとわかると、畑に出ている母の所へ行った。

母のかたわらへ行くと、五郎は問いたげに鼻を鳴らした。母には五郎がなにを教えてもらいたがっているのか、すぐにわかった。五郎はわたしの居場所を知りたがっているのだ。

母はわたしの名前を口にしてから「学校へ行っている」と教えた。それを何度かくりかえして言って聞かせると、五郎はとつぜん、さけぶようにほえ、母に頭をすりつけてから走りさったという。

それから一時間ほどして、五郎は家から四、五キロ離れているわたしの学校へ来、授業中の二階の教室へやってきたのだ。

わたしはこれまでに一度も五郎を学校へ連れてきたことはなかった。しかも自転車通学をしていたから、臭いのあとをつけたわけでもない。学校ならほかにも何校かある。五郎がどうやってわたしの通学する学校を探しあて、二階のはずれにある教室まで来ることができたのか、今もってわからない。わかっているのは「犬には人間にはわからない能力がある」ということだけである。

少年時代のわたしに、犬たちはいろいろなことを教えてくれた。ただかわいがるだけではなく、理解してやること。そうすれば、犬はかならず人の心にむくいてくれる。これも人と接するときと同じである。

（終わり）

●作家紹介　**笠原　靖**

一九三八年生まれ。福井県小浜市出身。福井放送アナウンサーを経て、イラストレーターとして独立。現在、新しい動物文学作家として活躍。第七回織田作之助賞受賞。四月に、受賞作『夏の終わり』をあわせた『ウルフ街道』を出版（関西書院）。

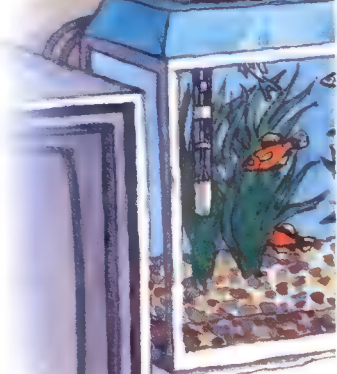
今年の夏は、アフリカを取材旅行の予定。

読み特賞入選作

《生活読み物》少年と祖母(そぼ)との心の交流

雪色のまゆ

五月、プンと草いきれのするなか、母は坂道を手をふりながら足早にかけおりていった。洋(よう)はひとりぼっち……。

大崎(おおさき)いつ・作／沢田(さわだ)　弘(ひろし)・絵

ひとりぼっち

電車は夕暮れの市街地をぬけ、まばらになった人家の明かりが、回り燈籠のように洋の目の前を通りすぎていった。

「ほんとにおばあちゃん急だったのよ。このままであんなに元気だったのに。お父さんはちょくせつ病院に行くそうだから……。」

ガタタン、ガタタンと規則的にくり返されるゆれの中で、となりに座っている母はなんとかおちつこうと、思いつくままの言葉を並べていた。それに耳をかしながら、以前にも同じように、母に連れられて祖母の家に向かっていたことを思い出していた。（もう六年も前になるのかな……）洋は心の中でポツンとつぶやいた。

「じゃあ兄さん姉さん、お母さん、すみませんがよろしくお願いします。洋、元気でいるのよ、待っててね……。」

五月、プンと草いきれのするなか、母は坂道を手をふりながら足早にかけおりていった。

「まったく、いくら手をやいても自分の子だろうが、ほっぽっちまって、なにが仕事だ。あいつらにもこまったもんだ。」

おじは小声ではきすてるように言った。

「みんな大変なんだよ。でもいちばんつらいんは洋だよね。さあ、こっちおいで。」

祖母に声をかけられても洋はふり向きもせず、じっと坂道を見下ろしていた。言いようのない不安が洋をおそった。

洋が祖母のところにあずけられて二、三日が過ぎた。しかし、洋はだれとも口をきくことができなかった。

「洋くん、ごはん食べようよ、おいで。ねえ、おいでよ。」

洋は部屋のすみでひざをかかえたまま、千里の呼びかけに答えようともしなかった。

「お父さん、お母さん、洋くんまた返事もしないよ。」
千里はこのいっぷう変わったいとこを少しょうもてあましぎみだった。腹を立てて茶の間に消えていく千里の声を聞きながら、洋はフウとため息をついた。

三時間は過ぎただろうか、人けが感じられなくなると、洋はそっと茶の間に入ってみた。テーブルの上には食事が二人分用意されていた。

「おなかすいたろう、今、おしる温めるからね。」
台所のすみで夜なべ仕事をしていたのだろう、祖母は洋を見るとよいしょとこしをあげた。この二日祖母はいつもこうして、洋が茶の間に入ってくるのを待っていてくれた。

「ン、気にしとるんかい？　ええよ、食べたくなったら食べりゃええ。ばあちゃんは洋と食べたいから、待っとったんだよ。」
向かい合わせで、温めなおしたしるをすすりながら、祖母はニコニコと洋の食べるようすを見つめていた。その日から洋は祖母のそばをはなれなくなった。

桑畑

「ばあちゃん、そんなこと言ってももうむりだろうが。桑はだんだん近くじゃ作れんようになって、今じゃもう山の上にまで行かんと植えれん。それを毎日とりにいくことも考えてみろや。だいいち、キロ千七百円じゃ元もとれん。せめて二千円ならなんとかなるんやが。な、もうこの春子で終わりにしようや、ばあちゃん。」
おじの説得にようやくあきらめもついたのか、祖母はだまってうなずくとまた蚕部屋のそうじを始めた。洋にはその祖母の背中がふるえているように見えた。翌日、春子を受けいれるため、家の中は急にいそがしくなった。
祖母は毎日山の上に桑をとりにいく。大きな竹かごを背にしょって、あえぐような山道を一歩一歩ふみしめて登っていく。しばらく行くと、洋が追いつくのを待っていてくれる。やっとのことで畑に着くと、つやつやとした桑の葉が一面にしげっていた。
「洋、これを食べてみな。なんも悪いもんはかかっとりゃせんからだいじょうぶだよ。ほーら、こうして食べてみな。」

（27）雪色のまゆ

祖母はぶどう色にじゅくした桑の実をポンと口の中に入れた。うながされるまま、洋もそっと口にひとつぶ入れてみた。あまずっぱいような、そしてちょっとしぶみのある不思議な味が口の中に広がった。

「洋くん、おいしい?」

少しまえに桑畑に着いていた千里が洋に声をかけた。

「うちらは、お蚕さんだけではやっていけんのんて。」

千里は桑の葉を小枝ごと折りながら言った。

「いままで、うちは一年に三回お蚕さんを飼っとったんよ。春に来るから春子、夏に来ると夏子、それから秋になっていちばん終わりの蚕が来るんよ。それが秋子。今家に来とるんが春子なんよ。でも、昔は、自分の家でたまごから蚕を産ませてぜんぶやっとったんだって。」

千里は熱心に蚕のことを洋に話した。

祖母の家は代々つづいた養蚕農家で、祖母が結婚したころは、周りの農家のほとんどが蚕を飼って生計をたてており、蚕は農家の命だった。しかし、時代が進むにつれて、化学せんいの進出や安い輸入生糸におされ、仕事がたいへんなわりには利益のあがらない養蚕から、転業していく農家が増えて

いった。
しかし、蚕が飼えなくなる原因はそのほかにもあった。蚕は薬や病気に対してとても弱い。いろんな農作物にまく農薬が、風で流されて付着した桑の葉を食べると蚕は死んでしまう。そのため、林に囲まれた土地や山の上にしか安全な桑畑は作れなくなった。また、蚕は温度や湿度の変化にも弱いため、天候に左右されやすく、病気で死んでしまうことが多いという。
千里が洋に蚕の話をしているあいだも、祖母はもくもくと桑をつんでいた。

蚕部屋

蚕が家に来ると、朝早くから夜おそくまできちんとしたリズムで、生活は蚕中心に回っていく。その日も洋は蚕の世話をする祖母の横をはなれず、シャワシャワシャワと桑の葉を食べる蚕を見ていた。
「洋、手を出してみな。」
そう言って祖母は一匹の蚕をそっと洋の手の中に置いた。
それはなんともひんやりとしてたよりなく、洋がいままでに経験したことのないきみょうな感触だった。次のしゅんかん、洋は蚕をゆかにたたきつけていた。
「なにするんよ洋くん、それはばあちゃんが……。」
祖母はなにも言わず、動かなくなったその蚕を手にとり、両のてのひらでつつみこんで蚕部屋の外に出ていった。洋には気味の悪いイモムシに思えたその蚕を、祖母がなぜそれほどだいじそうに手にとったのか、洋にはわからなかった。祖母の顔は、洋がこの家に来てはじめて見たつらく悲しそうな顔だった。びっくりした千里の大声も耳に入らず、洋は立ちつくしたままだった。
次の日、洋は蚕部屋の入り口からいそがしそうに働く祖母を見ていた。
「洋、こっちへおいで。」
祖母はいままでと変わらないやさしい笑顔で声をかけた。
おそるおそるかたわらによってきた洋の手をとって、その中にもういちど蚕をそっと置いた。昨日と同じ感触が走った。
しかし洋は、蚕をたたきつけることはできなかった。
祖母はほっとした表情で洋の頭をなでた。
「洋、お蚕さんはね、生きとるんよ。こうやって元気に桑の

葉をいっぱい食べて、そうしてきれいなまゆを作ってくれるんだよ。」

祖母はそう言って、小さな箱に蚕を数匹入れ、洋に手わたした。

祖母に教えられるまま、洋はその箱の蚕を飼うようになった。山の上の桑畑から桑の葉もとってきて蚕にあたえた。耳をすませると箱の中でシャワシャワシャワシャワと蚕がいそがしく桑の葉を食べる音が聞こえる。洋はその音を聞くのが楽しみになっていた。

数日が過ぎ、洋の蚕も最後の脱皮を始めた。蚕は体をくねらせながら少しずつ古い皮を後ろへとしごいていく。背中にはドクンドクンと血液だろうか、速いリズムで流れている。(このお蚕さんは生きとるんよ)祖母の声がまた聞こえたような気がした。時間のたつのも忘れ、洋はそのようすを見つづけた。蚕がぜんぶ脱皮しおわったころ、外は白じらと明けはじめていた。

蚕はまゆを作るまえになると桑を食べなくなる。はいせつぶつを出しきって体の中をきれいにして、まゆをよごさない準備をする。そして八の字に頭をふりながら口から糸をはきだして、自分の体をつつみこんでまゆを作っていく。

祖母の育てた蚕もきれいなまゆを作り、いよいよ出荷のときをむかえていた。朝早く祖母はていねいに、ふくろにまゆを入れはじめた。まゆはいくつものふくろにいっぱいつめられて、やがておじたちに背負われ出荷されていった。祖母は手を合わせたまま、丸くなった背中をますますおりかがめ、いつまでも見送っていた。

「ばあちゃん。」

洋はやっとの思いで声をしぼりだした。そして少しょう形のいびつな自分の蚕のまゆを祖母にさしだした。

「おー、きれいなまゆを作ってくれたね。これは洋のお蚕さんのまゆだから、ちゃんと持っておき。」

祖母はまゆの入った洋の手を両手でにぎりしめやさしく言った。

まゆの出荷も終わり二週間ほどが過ぎた。蚕部屋はきれいにかたづけられ、おじの仕事の道具が運びこまれていた。小さな祖母はいぜんにもまして小さくなったように見えた。

洋はふっと自分の部屋に置いてあったまゆが気になって、箱を持ちだし開けてみた。見ると二ひきの羽を持つ虫がいた。

（31）雪色のまゆ

一ぴきは動かなかった。もう一ぴきは小さな丸いものを箱の底に産みつけていた。おしりを少しずつ移動させ、自分の足でふんだり、重なったりしないよう細心の注意をはらっているように見えた。やがて、きれいな円状に産みつけると、その虫はコトリと動かなくなった。洋はそっと指でつついてみた。真っ白なつややかな毛を体じゅうに持つその虫は、ピクリともしなかった。洋の体の中からいいようのないものがこみあげてきた。洋は声をあげて泣いた。そのようすを見て祖母は、その虫がいっしょうけんめい生きたこと、小さな丸いものは自分の命を分けて産んだもの、そしてまた春に蚕になることを、洋に教えてくれた。洋は祖母にとりついて泣きつづけた。

母がむかえにきたのは、三か月あまり過ぎた夏の終わりだった。すまなそうに洋の身じたくをし、ありったけのお礼の言葉をならべておじの家を去った。別れぎわ、だまって洋をだきしめてくれた祖母のほおを温かなものが流れた。それからいくどか祖母の家を訪れることもあり、洋もしだいに周りととけこんでいった。しかし、あのとき母に置きざりにされたことを、どうしても心の中からぬぐいさることができないまま時が過ぎていった。

祖母の運びこまれた病院に着くと、あたりはとっぷりと暮れ、人影もまばらなろうかを母と転げそうになりながら病室に向かった。

部屋の中にはおもくるしい緊張感が流れ、あのころ世話になったおじたちがベッドのかたわらで、意識のない祖母の顔に見入っていた。

「すみませんおそくなって、お母さんのぐあいは……。」

母はあらい息をおさえながら小声で話しかけた。

「まにあってよかったよ……。」

おじはポツリと言った。

酸素マスクをつけられ、電極をいくつもつけられて祖母はねむっている。洋をだいてくれたあのやさしいうでに、点滴の針がさされていた。

「洋くん、これはばあちゃんが洋くんにってとっといたのよ。ばあちゃんのまゆ。」

しばらく会ってない千里は、歳があまりちがわないはずなのにおとなびて見えた。手わたされた箱の中には、雪色にやわらかく光をはなつまゆがひとつかみ入れられていた。

あのときの祖母の最後の蚕が作ったまゆだった。

祖母はブルルと体をふるわせて、大きな息をひとつしたように見えた。洋にはそれが、最後の力をふりしぼってたまごを産みつけこと切れた、あのまゆ蛾に思えた。

だれの悪口を言うこともなく、けんめいに生き、そして洋を受けいれてくれた祖母は死んだ。てのひらの祖母のまゆはせつないくらい軽くやさしかった。

洋にとっていちばん長い時が流れた。なみだは止まることがなかった。心の中でなにかがとけだしていくように思えた。

少しまえに着いた父が泣きくずれる母を無言でささえている。自分の両親もたいへんだったのだとそっちょくに理解できた。

ぼくも軽くなりたい……洋は思った。

（終わり）

●作家紹介

大﨑　いつ

高知県に生まれる。現在高知県吾川郡吾川中学校教諭。作品に『ごん、海へお還り』がある。
今年の夏も高知の海で、くじらとの出会いを楽しんでいるはず。

初恋読み物

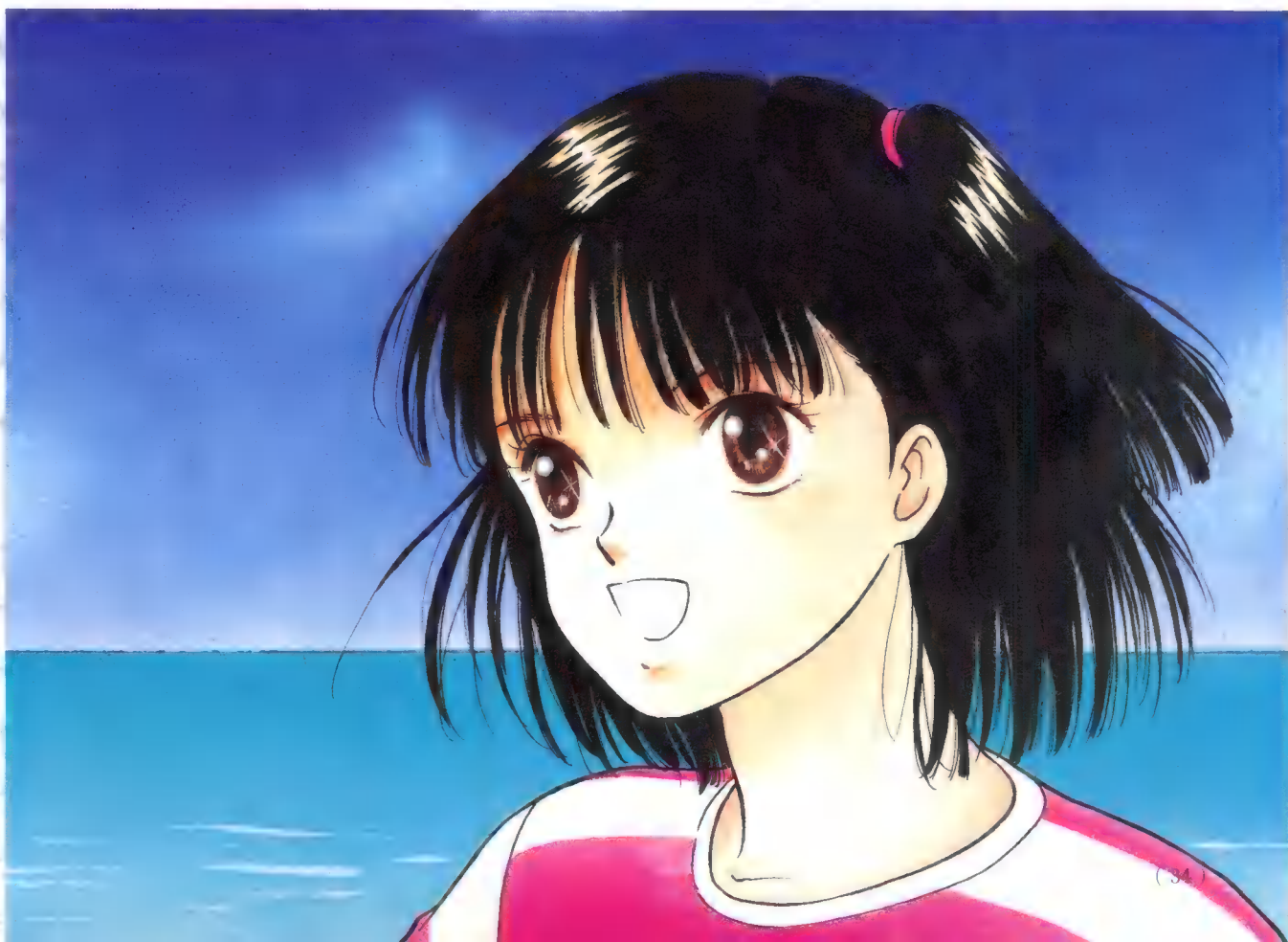
南の島のちょっぴりしょっぱい恋の味

超ピンチ！無人島で二人ぼっち

幸田鈴美・作／北山真理・絵

わたしは一色　菫。小学校六年生。今年の夏はおもいっきり楽しもうと南の島へ。

そこに待っていたのは、平　一樹という少年。菫の姉に島の案内をたのまれた、と言って真っ黒に日焼けした顔を現した。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

第一章 土地っ子のあいさつ

真っ赤な太陽が、頭の上でギラギラと燃えている。ショートパンツから伸びた足が、もうほてってきた。

ここは沖縄本島のもっと南西にある島。目の前に広がるエメラルドグリーンの海を前にして、わたしは背伸びしながら深呼吸をした。体のすみずみまで海のにおいが広がっていく。

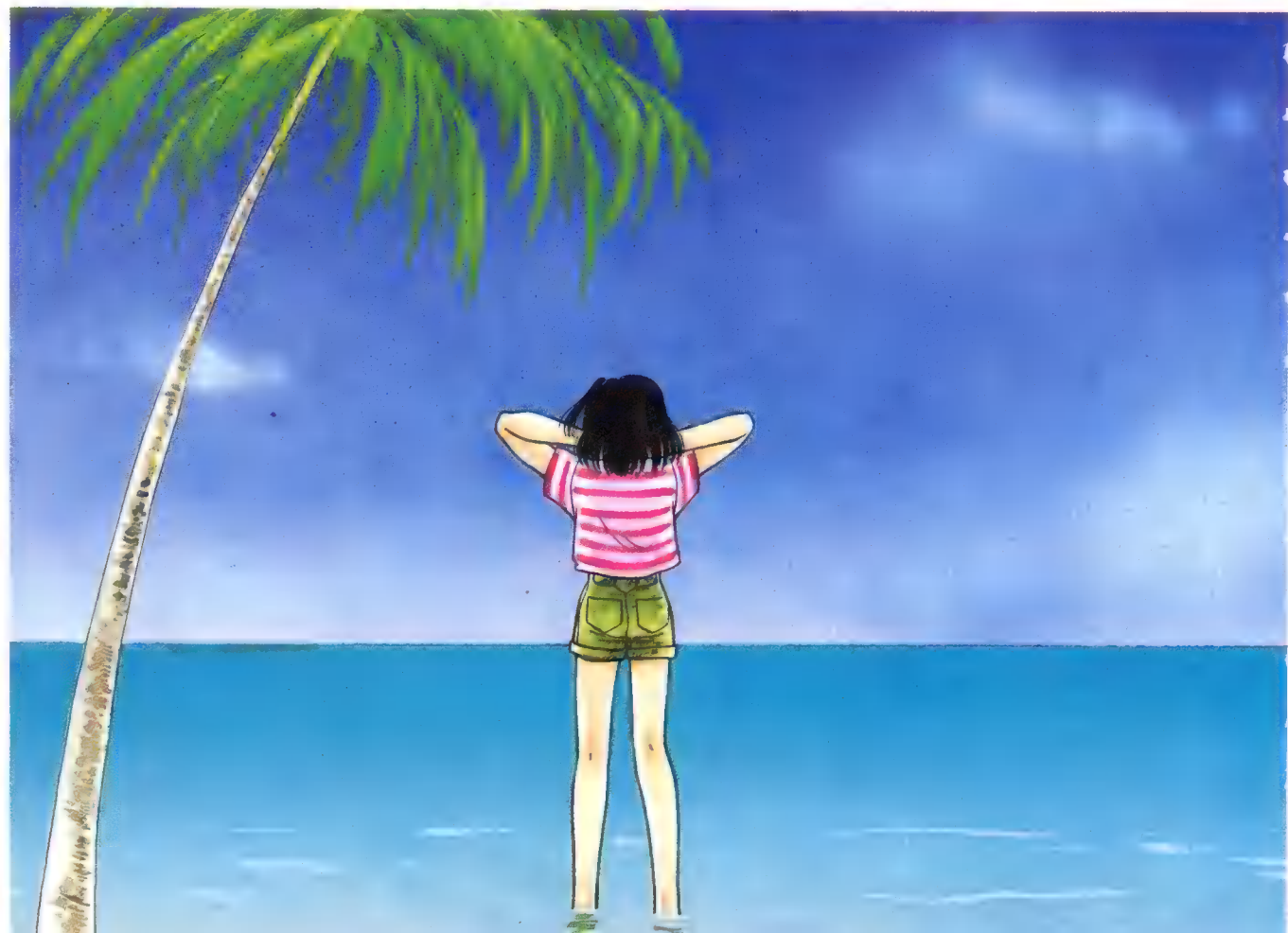
わたしは一色菫。小学校六年生。今年の夏はおもいっきりトレンドにキメようと、ここにやってきた。

真っ白い砂にまじるサンゴ礁のかけら、目の前の海にうかぶ絵にかいたような小さな島、そして、その島の中央には大きなヤシの木があざやかに緑の葉を広げている。

まさに、旅行会社のポスターで見かける南の島の景色、そのまんまだ。

「ここはエキサイティングな夏を演出するトロピカルアイランド。まぶしいほどかがやいていたい……、か。ふふん。」

ちょっときどった声で、いつかテレビで見た沖縄のCMをまねしてみる。そしてTシャツの下のオヘソまるだしに、美

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

人モデルのように、かみを手ですくいあげ、ポーズをキメ！

と、そのとき、わたしは背中をバシッとたたかれた。

「なっ、なによォ。」

あわてて後ろをふりかえる。そこにはわたしと同じぐらいの背たけの、真っ黒に日焼けした男の子が立っていた。Tシャツの胸にマンタの絵がかかれている。

「おまえ、さっきからなにやってんだ？」

男の子は、クククと笑いをかみころしていた。くちびるのすきまからわずかに見える歯が、日焼けした顔と反比例してとても白い。

し、しまった～。わたしは考えたことをすぐ口に出しちゃうクセがあって、しょっちゅうこーゆードジをしている。

「なにって……あはは、べつに～。」

笑ってごまかしちゃえ。ところが男の子は、まだ笑いをこらえながら、うろたえているわたしをものめずらしそうに見ている。

「うぐぐぐ。」

その視線に金しばりになっちゃうわたし。男の子はひとしきりわたしを観察しおえると、土地っ子らしい、ぶっきらぼうな調子で言った。

「おまえ、ムーンビーチのおばさんの妹だろ？　ほら、丘の上にある民宿の。」

ムカッ！　なんて失礼なヤツ！　わたしは男の子の正面に向きなおると、「あのねえ」という調子で、両手をこしにあてた。

「いっとくけど、ムーンビーチは民宿じゃなくてペンションだからね。それにおねえちゃんはまだ二十二歳、あんたにおばさんよばわりされる年じゃないわよ。」

すると、男の子は大きな目をパチクリさせると、くちびるをつきだして、さも意外そうな声を出した。

「だけどさあ、ここらへんのもんはみーんな、民宿ムーンビーチのおばさんて、よんでるぞォ。」

「うっ。」

あまりにもストレートな反撃に、わたしは言葉につまってしまった。一方、男の子はわたしのふくれっつらなど少しも気にせずに、あとを続ける。

「おれさ、ムーンビーチのおばさんに……。」

「おねえさんだってば！」

（37）超ピンチ！　無人島で二人ぼっち

「だから、さっきおまえのおねえさんに、『いもうとの菫が来てるから、島を案内してやってよ』って、たのまれたんだ。」
男の子はらんぼうな口のきき方に似合わない人なつっこそうな目を三日月にして、わたしに向かってニカッと笑った。
ったく、おねえちゃんたら！　いくらペンションの仕事がいそがしいからって、こんな悪ガキに、わたしのガイドをたのむことないじゃない。
どうせなら、かっこいいサーファーがよかったナ……と、目のおくで少女マンガの超美形をおもいうかべたとき、
「おれは平一樹、よろしく！　いっとくけど、サーファーより海のことはよく知ってるぜ。」
男の子はそう言うと、ベーッと舌を出した。いっ、いけない！　また口に出して言っちゃった！
でも、一樹と名乗った男の子は、気を悪くした様子もなく、
「こいよ！」と、磯の方にかけだした。
「あっ、待ってよ！」
わたしはその人なつっこい目にさそわれるように、あわてて一樹のあとを追った。

引き潮になると、ここらへんいったいは、サンゴ礁が浮上してくる。島をとりまくサンゴ礁は、ピンク、白、ブルーなどたくさんの種類があって、とてもきれいだ。
信じられないくらい遠浅なので、何百メートルも先の、ヤシの木が一本生えている小島のあたりまで、サンゴの磯が広がっている。
「うわあ、熱帯魚だ！　熱帯魚が泳いでいる！」
すっかり姿を現した磯の間の水たまりに、小指ほどの大きさの熱帯魚を見つけて、わたしは黄色い声をあげた。
あちこちにできたくぼみには、コバルトブルーの魚や、白と黄色のしまもようの魚など、デパートのペットショップでしか見たことのないような熱帯魚がいっぱいだ。
「まるで水族館みたいねえ。すっごーい！」
わたしが目をかがやかせると、一樹は、ちょっと得意げに人差し指で鼻の下をこすった。
「えーと、これはコバルトスズメ、こっちはチョウチョウウオ、……ほら、ヒトデもいるよ。」
一樹は岩かげにひそんでいたヒトデを指さした。
「ふーん、これがヒトデかあ。」
わたしは図鑑でしか見たことのないヒトデを、おそるおそるビーチサンダルの先っぽでつっついた。
「ったく、都会っ子はしょーがねーなあ。」
一樹は、平気な顔でヒトデをつまみあげると、「ほ～ら」と、わたしのほっぺたにくっつけようとする。
「きゃ～っ！」
わたし、おもわずさけんじゃった。こんなやつの前で弱みは見せたくないけど、こっちは、野生の生き物になれてないんだからね。
わたしがはずかしそうな表情を見せると、一樹はくったくなく、アハハハと大口を開けた。そして、ちょっとまぶしそうに目を細めて、わたしを見つめた。
「おまえのおねえさん、東京の人だろ。……おまえも東京育ちなのか？」
「うん、生まれたときから、ずーっと東京。」
おねえちゃんは、わたしより十も年上。一昨年、仕事で知りあった人と結婚し、しばらくは東京のアパートでくらしていたんだけど、ご主人（わたしのお兄さんになった人）がふるさとの沖縄の島に帰りたい、と言いだした。

おにいさんの実家でペンションを経営することになり、それが今年の春に完成。おねえちゃんはこの夏、さっそくわたしたち家族を招待してくれたんだけど、沖縄なんて遠い所にと、いまだに反対しているお父さんとお母さんは、わたし一人をよこしたのだ。

「……というわけなの。」

「ふーん。」

そして、一樹はポツリと「東京かあ」とつぶやき、コバルトにかがやく海の果てをながめた。そのとき、わたしはふとあることに気がつき、すっとんきょうな声をあげた。

「あれえ、さっきあんなに遠くに見えた小島が、すぐそこにある！」

島の真ん中に生えているヤシの木に、大きな実がなっているのまで、はっきりと見える。ふりかえって陸地を見ると、昼ごろ立っていた砂浜が、遠くに広がっていた。

「磯遊びにむちゅうになっているうちに、ずいぶん遠くまで来ちゃったんだねえ。」

わたしは、おどろいて一樹の顔を見た。すると、一樹はいかにもあたりまえ、というような表情で、

「これがサンゴ礁の海ってもんさ。……あの小島は竜宮島。今なら、あの島に歩いてわたれるぞ。」

と、指さした。どうする？　とたずねるような一樹の視線に、わたしはおもわず、「行く！　行く！」と、さけんだ。歩いて小島にわたるという、いかにも南国らしい体験に、心がうきうきするのを感じた。

「じゃあ、ついてきな。」

いきなり一樹が、わたしの右手をギュッとにぎりしめた。ポッと顔が赤くなる。でも、一樹はそんなことおかまいなしに、わたしの手をグイッと引っぱった。

しばらく行くと、最初はひざまでしかなかった海水が、しだいに深くなってきた。ショートパンツが小さな波にふれそうになる。思っていたより引き潮の流れがきつく、ときどき足がふらつく。

（ほんとに、だいじょうぶなのかなあ。）

わたしは口に出しそうになって、あわてて言葉を飲みこんだ。ちらっと一樹の顔をうかがうと、一樹は口を真一文字に結んで、まっすぐ小島を見つめている。

わたしは、わたしの手をにぎっている一樹の左手の指が、

力強くふしくれだっていることに気づいた。
なんだか、ちょっと勇気がわいてきた。

「よーし、もうちょっとだ。」

「うん!」

一樹の声に、わたしはビーチサンダルの底に力を入れて、海水をかきわけた。

第二章　竜宮島の伝説

竜宮島は〝星の砂〟とよばれる真っ白い砂にふちどられたとても小さな無人島だった。島の中央に、巨大なヤシの木が、しげった葉を広げているのが目につくだけ。ほかには雑草の茂みがあるだけで、なにもない。

「砂浜を歩いて、島の反対側まで行ってみようぜ。」

一樹は、わたしの手をにぎったままでいることなど、いっこうに気にする気配もなく、砂浜をかけだした。

二、三百メートルも行かないうちに、わたしは目の前に広がる光景に「うわあ」と声をあげた。深い、どこまでも深い海の色。ライトブルーのサンゴ礁の海とはぜんぜんちがう、あい色の海がそこにあった。

あっけにとられたように立ちつくすわたしの耳に、一樹の力強い声が聞こえた。

「どうだい? これが、外海さ。」

遠くに白く波頭が立ち、そのはるか沖には大型の貨物船がうかんでいる。わたしは、一樹の手からじぶんの手をそっとはなすと、ゆっくりと砂浜に座った。

一樹も、わたしのとなりにこしをおろし、沖の方に目をやりながら、ちょっとあらたまった声で言った。

「サンゴ礁の中は、いってみればプールと同じさ。波もなければ、水も底が見えるほど浅く、温かい。でもサンゴ礁を一歩出れば、うねりはあるし、高波はすごいし、海底に光がとどかないほど深い。人食いざめだっているんだぜ。」

「ふーん。」

ここで生活をしている人たちにとっては、たしかに外海は危険なところなんだろう。でも、今のわたしにとってはそんなことは関係ない。とにかく、広くて大きい、それだけだ。

「♪う〜みはひろい〜な　おおきいな〜」

わたしは一樹の話を無視して、感情のおもむくままに童謡を口ずさんだ。一樹はちょっとおどろいたようだったけど、

（43）超ピンチ！　無人島で二人ぼっち

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

すぐにクスクスと笑って、いっしょに声をはりあげた。
三番まで歌いおわって、おたがいに顔を見合わすと、もう一度歌いたくなった。わたしたちは、わけもなくアハハハと笑い、もう一度、これでもかという大声で同じ歌をうたった。
「♪い〜ってみたい〜な　よそのくに〜」
歌が最後の余韻を残して終わると、聞こえてくるのは波の音だけになった。そのときわたしは、ふと思った。なんとなく一樹を、それまでより身近に感じられる、って……。
わたしは、しばらくの間、心地よい潮風に全身をゆだねていた。そして、ゆっくりと口を開いた。一樹に対するわたしの声は、それまでよりもずいぶんやさしかった。
「ねえ、竜宮島って、ずいぶんメルヘンチックな名前ね。」
「うん。えーと、それはだね。」
もったいぶる一樹。その様子がおかしくて、わたしはこみあげてくる笑いをひっしにこらえた。
「この島には、ナントカっていう本当の名前があって、竜宮島ってのは、このへんの人の呼び名なんだ。」
一樹は、その呼び名の由来を話してくれた。
……昔、漁師をしていた若者と、海女をしていた少女が、

人目をしのんで、この島であいびきをしていた。そのとき、とつぜん、海の底から巨大なウミヘビが現れて、有無をいわせず少女をさらっていった。

悲しんだ若者は、それから三日間この島で、恋人が帰ってくるのをひたすら待ちつづけた。三日後、若者の前に姿を現したウミヘビは、二人の仲の良さが竜のねたみをかったこと、少女は竜宮城で、竜のお妃になったことを告げる。

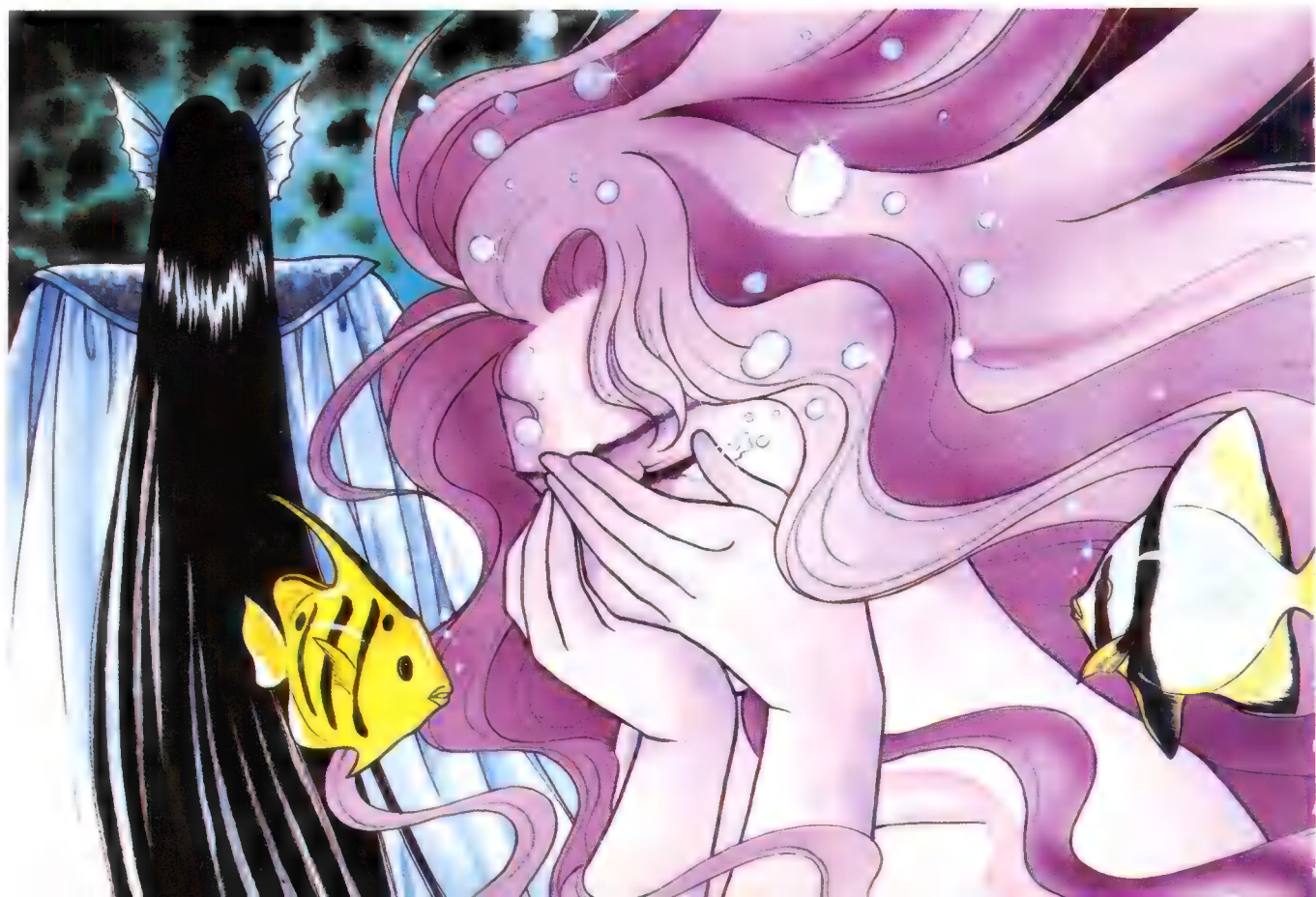
若者は命よりも大切な恋人を取りかえそうと、船で竜宮城に向かった。しかし、そのとちゅう、竜の起こしたあらしに船をしずめられ、ついに帰らぬ人になってしまった。それ以来、この島は竜宮島と呼ばれるようになった、と……。

「だから、竜宮島には、ぜったいに恋人どうしでわたっちゃいけない、っていわれてるんだ。」

「ふーん。」

ありがちな伝説だけど、それでもちょっとこわい。わたしは、そよそよと体をなでる潮風を、少し冷たく感じた。

水平線の上のうすい雲に、燃える太陽がかくれると、空が黄金色にそまった。雲のすきまからさす光で、大海原も黄金

★★★★★★★

色に変わる。
「うわあ、きれい！」
　夕日が落ちていくにしたがって、空と雲と海が混ざりあったように、濃いオレンジ色になっていく。わたしは、時間がたつのも忘れて、その光景に見いっていた。
　わずかに広がっている磯の端から、一樹が両手いっぱいに貝をかかえて、砂浜にもどってきた。そして、うっとりとしているわたしを、「さあ」とうながした。
「そろそろ帰ろう。潮が満ちてくると、海を歩いてわたれなくなっちまう。」
　わたしは一樹の言葉をさえぎって、うーんと、夕日に向かってのびをした。
「もう少しいいじゃない。こんなすっごい夕焼け、わたし、はじめてなのよ。ねっね！」
　一樹はチッと小さく舌うちをして、こまったようにわたしの顔を見つめた。
「ったく、しょーがねーなあ。ちょっとだけだよ。」
　わたしがいっこうに立ちあがりそうにもないので、一樹はあきらめたように、わたしのとなりにこしをおろした。
　いつしか夕日は水平線にしずみ、空がオレンジから朱色、深紅と変わり、やがて青みがかった赤になった。
　わたしと一樹は、しばらくの間、自然のえがく絵画を、ぼんやりとながめていた。ふと気がつくと、大きな星が一つ、薄暗くなった空にかがやいていた。
　一樹が、ハッとしたように立ちあがった。
「いけない！　もどらなくちゃ！」
　走りだした一樹のあとを、わたしは、トロトロとした足どりでついていった。
　ところが、島に上がった岸の近くまで来たとき、わたしは自分の目を疑ってしまった。対岸の磯が、はるか遠くにしか見えない。
「どうして、さっきはあんな近くにあったのに！」
　竜宮島までわたってきた底の浅い海には、さっきとは比べものにならないほどの速さで、潮流がザザーと流れていた。太陽がしずんだせいもあって、海の色がみょうに黒い。
　わたしは、あわてて海の中に飛びこんで、たちまち深みにはまってしまった。
「きゃああ！」

潮流に足をすくわれ、体が思うように動かない。ひざがくずれて、わたしは水中に転んでしまった。

「だめだよ、危ないじゃないか!」

ひっしでもがくわたしの手を、一樹が引っぱった。あせりまくったわたしは、一樹の体にしがみつくと、なんとか水底に足をつけようと、水面下で両足を動かした。

ハアハアとあらい息をはずませ、岸にもどる。……ショートパンツもTシャツも、びしょびしょだ。ビーチサンダルの片方は、転んだときどこかにいってしまった。

岸に上がると、わたしはヒステリックにさけんだ。

「帰れなくなっちゃったじゃない! なんでもっと早く、こうなること、教えてくれなかったのよ!」

黒ぐろとした不安に胸がおしつぶされそうになって、あとからあとからなみだがあふれてくる。一樹は、ムッとしたように口をとんがらした。

「だから、さっき、帰ろうと言ったじゃないか。」

「ここに連れてきたのは、あんたよ! あんたのせいよ!」

わたしは、しゃくりあげながら一樹を責めた。すすった鼻水が、のどのおくでしょっぱかった。

わたしは、こうなった責任がわたしにあることは、よくわかっていた。だけど、だれかのせいにしないと、今の自分があんまりみじめで……。それでつい、一樹に当たったのだ。

「……」

一樹は、だまってしまった。沈黙のすきまをぬうように、二人の間に、ひたひたと夜のやみがおしよせてくる。わたしはたえられなくなって、二、三歩、海に足をふみだした。

「助けてえ！　だれか、助けてえ！」

声のかぎりに、対岸の島に向かってさけぶ。しかし、声は潮さいの音にかきけされてしまい、すぐにそれが無意味なことであることがわかった。

「うっう、うううう。」

わたしは、なみだと鼻水で顔をグシャグシャにして、まるでボロぞうきんのように、対岸の島を見つめていた。

第三章　もしかして初恋？

わたしと一樹は、だまったまま砂浜に座って、今ごろおいしい夕食を食べていたはずの対岸の島を見ていた。

ううん、見ていたという表現は、ちがっているかもしれない。日はもうとっぷりと暮れて、あたりは暗い。

とうぜん、たよりは月明かりだけで、対岸の島など輪かくがぼんやり見えるだけだ。

「わたしたち、どうなっちゃうの？」

わたしは、心細さのあまりふるえた声を出した。すると、一樹は、わたしとは反対に落ちついた声で言った。

「どうにもならないよ。今ごろ、島では大さわぎしているかもしれないけど、この島までは探しにこないさ。」

一樹は満天の星を見上げて、わたしを力づけるように言った。……夜明けまでここで待つしかない。どうやら天気はいいようだから、今夜はこの島で過ごそう、と。

わたしは、またちょっとなみだぐんで、体をゆらした。

「こんな真っ暗の中で、どうやって過ごすのよ！　わたし、こわい、こわいよ～！」

なみだがにじむ。そのとき、はるか右の沖合いに小さな光が点滅しているのがぼんやりと見えた。きっと貨物船だ！

わたしは砂浜を、その光に向かってかけだした。

「助けてえ！　わたしはここよ～！」

後ろからわたしを追いかけてくる気配がした。あらい息づ

かいが近づいてきて、わたしはかたをグッとつかまれた。

「聞こえやしないよ！」

「だって、だって……。」

じぶんのすすり泣きが、やけに大きく聞こえる。それに気づいて、ひっしになみだをこらえると、こんどは茂みの葉がすれる音さえ、気になってくる。

オ、オバケ？　竜の使いのウミヘビかもしれない！

「もし、このまま助けが来なくて、ここに一生いることになったら……うっう、どうしよう。」

キョーフのあまり、わたしがムチャクチャなことを口走ると、一樹はわたしのかたを軽くポンポンとたたき、座れよ、というように、その手に力を入れた。

「おまえ、けっこう勉強できるんだってな。おばさん、あ、おねえさんが言ってたぞ。」

わたしは、さからう気もちもなくして、その場にヘナヘナと座りこんだ。それでもまだ、にくまれ口をきく気力ぐらいは残っている。

「それがどうしたってのよ。」

わたしは、かみつくように一樹に言った。

「それにね、わたしには一色　菫って、りっぱな名前があるんだから、おまえなんて呼ばないでよ。」

すると一樹は、あきれたように深いためいきついて、わたしのななめ前に座った。

「おれなんてさあ、成績悪くて、いっつもかあちゃんにどやされてる。……菫ちゃん、おまえ、理科は得意か？」

「まあね、一学期の成績は4よ。」

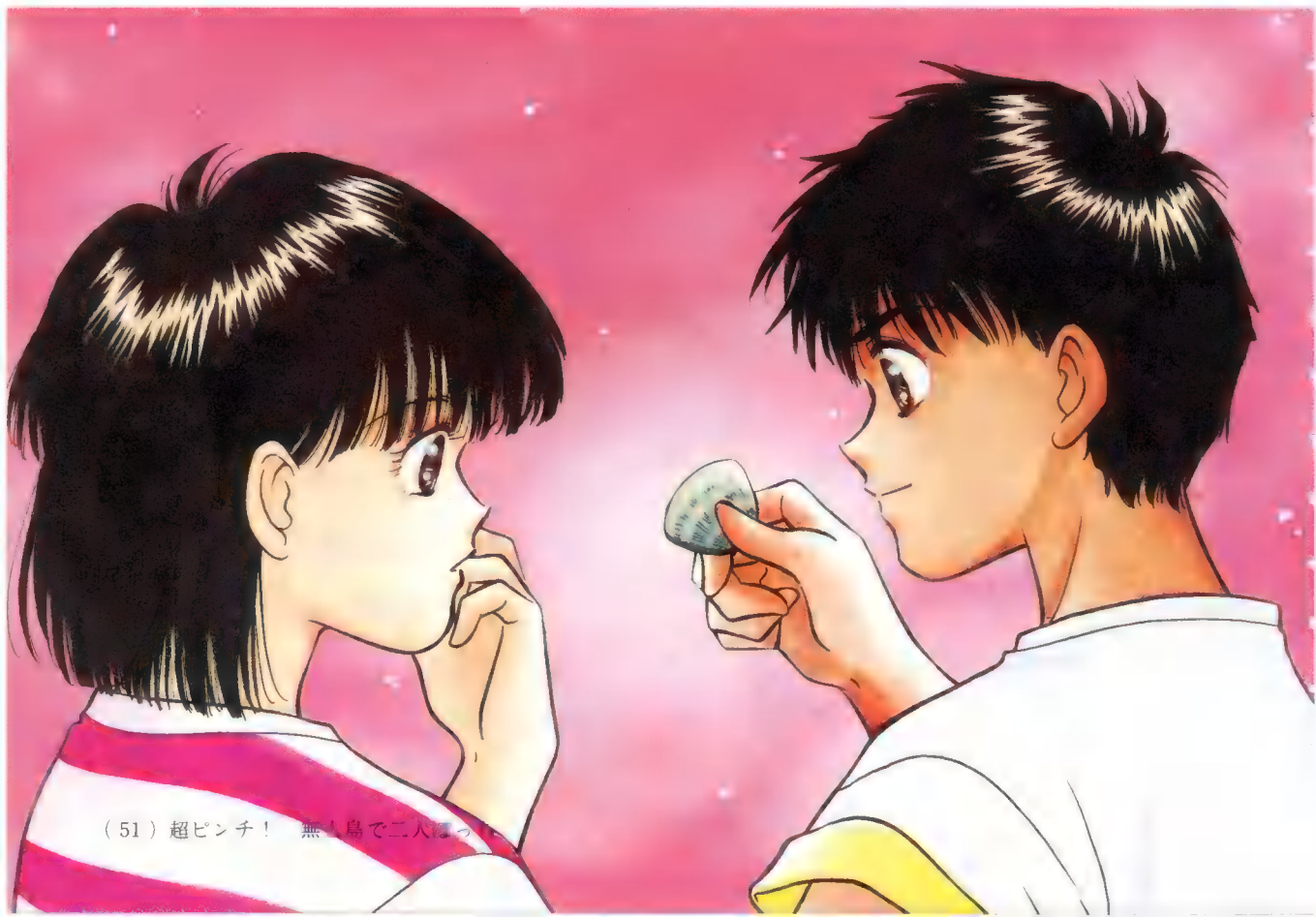
ふしぎ、一樹と話しているうちに、少しずつ心が落ちついてくる。わたしは、ほっぺたに伝うなみだを、下を向いて手の甲でぬぐった。一樹は、そんなわたしを気づかうように視線をはずし、体をずらして海の方を向いた。

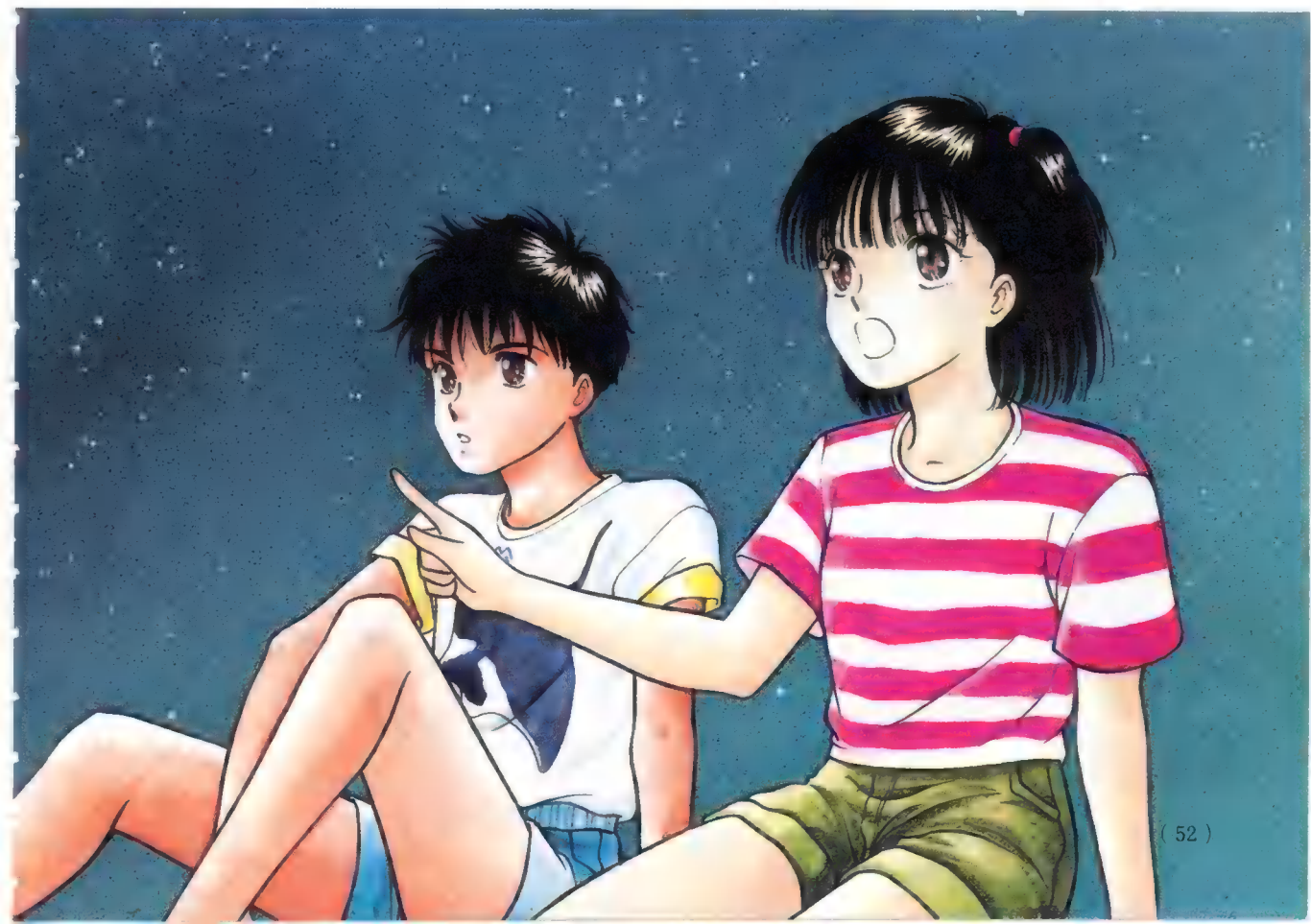
「そしたら、知ってるだろう？　海には満潮と干潮があるってこと。」

一樹は、子どもとはおもえないほど、冷静な声で話しだした。今は潮が満ちてる状態だけど、潮が引けば、また昼間みたいに歩いて向こうの島にわたれること。

満潮と干潮は約六時間ごとだから、次の干潮は真夜中。さすがに真夜中に海をわたるのは危険だから、明日の午後、ふたたび干潮になるまで待とう、と。

「それに、たぶんおれ、思うんだけど、夜明けがきたら、島の人がボートで探しにくるんじゃないかな。」
「……うん。」
わたしは、小さくうなずいた。あすの午後には帰れる、それがわかって、ちょっぴり心によゆうができた。一樹の落ちついた態度も、わたしの気もちをしずめてくれた。
一樹はそんなわたしに、「ちょっと待ってて」と言うと、茂みの中に入っていった。そしてしばらくすると、こぶし大の石を手に、もどってきた。
「そんなもの、どうするの？」
ポケットの中をゴソゴソ……。すると、昼間、磯でとった貝がいくつも出てきた。一樹はその貝のからを石でたたきわり、わたしに差しだした。
「おなかすいたろ？　食えよ。」
月明かりの下、あわい黄色をした貝が、てろりと光っていた。わたしはこわごわ、それを指でつまむと、思いきって口にほうりこんだ。
「……おいしい。」
わたしの言葉に、一樹がニカッと笑った。

★★★★★★★

「だいじょうぶ。のどがかわいたら、果物もとってきてやるから。」
一樹の白い歯が、夜のやみによけい白く見えた。

どのくらいたったんだろう。わたしは、一樹がいるからだいじょうぶ、と、自分で自分をはげましていた。
それでもときどき、ふいになみだがにじんで、わたしはあわてて空を見上げた。夜空にはたくさんの星が、ふるようにかがやいている。わたしは、わざと元気な声を出した。
「すっごい！　星って、こんなにたくさんあったのね。」
わたしの言葉に、一樹が上を向く。
「ねえ、あの白い雲のようなの、あれはなに？」
すると一樹は、目をパチクリとさせて、なんだこいつ、という感じで言った。
「天の川にきまってんだろ。おまえ、見たことないのか。」
「……」
わたしは天の川を見たことがない。もちろん、天の川だけではなく、学校ではいろんな星座を習ったけど、東京ではプラネタリウムでしか見ることができない。

そんな星ぼしが今、じっさいに真上に光っている。わたしは急に胸がキュンとなった。

いつまでも星をながめているわたしに、一樹は、手をあげて、一つひとつ、星の名前を教えてくれた。あれが白鳥座、さそり座、へび座、と……。

「ねえ、南十字星はどこにあるの？」

「ここからじゃ見えないよ。もっと南に行かなくては。」

一樹が、信じられないという表情で笑う。わたしは一樹という男の子を、ちょっぴり見直した。

「あんたって……一樹くんて、海のこととか、星のこととか、ずいぶんよく知ってるのね。」

一樹は両手を頭の後ろで組むと、砂浜にゴロンとひっくりかえった。そして、夢見るような声で言った。

「おれさ、大人になったら、まんが家になりたいんだ。」

「ええっ？」

とっぴょうしもない言葉に、わたしは一樹の目をのぞきこんだ。大きな目が、星のようにかがやいていた。

「海や星、自然や宇宙を舞台にしたSFチックなストーリーを、かっこいいヒーローを主人公に、まんがにするんだ。」

★★★★★★★

一樹はそう言うと、わたしの方をふりむいた。
「菫ちゃんは、大きくなったらなんになりたい？」
わたしは答えにつまってしまった。わたしは今まで、将来のことなど、具体的に考えたことがない。たぶん来年、私立の中学を受験して、高校・大学と進んで、それから……？
「菫ちゃんは成績がいいから、なんにでもなれるよなあ。」
「そんな……。」
わたしは、口をつぐんだ。勉強のできるわたしより、一樹のほうがずっといろんなことを知っている。満潮・干潮、貝の食べ方、星座の名前、生きる知識をいっぱい知っている。
反面、わたしが知っているのは、教科書の中の知識だ。それが必要なのは、テストのときだけ。いざとなると、からっきし役に立たない。
「わたし、勉強しかできないもん。……ふう、なんになれるのかなあ。来年は中学生になるってのに。」
「そうか、菫ちゃん、おれより一つ年上なのか。」
わたしは一樹の言葉に、心臓がシャックリしそうなくらいおどろいた。一樹が年下！　五年生？
「ウッソー！　わたしより、ずっとしっかりしているのに。」
わたしは、まじまじと一樹を見つめた。
体つきは、わたしとそう変わらないのに、なぜだろう、わたしより一回りも、二回りも、大きく見えた。
「……たのもしい。」
ふいに、口をついて出た。「ん、なに？」と、聞こえなかったらしく、一樹がわたしに顔を向ける。
「ううん。」
ほっぺたに、ポッと血がのぼる。わたしがドキマギと目線をはずしたときだ。
「きゃっ！」
わたしは、おもわず一樹にだきついた。

（55）超ピンチ！　無人島で二人ぼっち

「ウ、ウミヘビ？」
そのとき、わたしは、一樹の体がこきざみにふるえていることに気づいた。……寒いんじゃない。そうよ、本当は一樹もこわいのよ！
「だいじょうぶだよ、きっと鳥かなにかさ。」
一樹は、わたしのかたを引きよせ、いつもと変わらない落ちついた声で答えた。
わたしは、胸のおくがジーンと熱くなった。一樹はわたしより年下なのに、今までこわいのをグッとがまんして、女の子のわたしを守ろうとしてたんだ。
「う、うん。」
そして、一樹に聞こえないように、口の中で小さく「ありがとう」とつけくえた。
のどもとに、熱いかたまりがつきあげてきた。今まで経験したことのない、このふしぎな感覚……。これってもしかしたら初恋？　わたし、年下の子に恋しちゃったの？
しばらくの間、わたしは一樹にしがみついたまま、一樹もわたしのかたをだいたまま、だまってふるえていた。
「ふるえるなよ、ウミヘビなんてうそっぱちさ。あしたになれば、きっと助かるよ。」
一樹が、わたしをだく手に力をこめる。わたしは一樹の胸に顔をよせて、目をとじた。
「どうか、わたしたち二人、竜のいかりにふれませんように。」
「……え？」
いけない、また思ったことを口に出しちゃった。じつはわたしが、恋の予感にふるえているなんて、一樹はぜんぜん気づいていないのかもしれない。……クスッ！
（終わり）

●作家紹介

幸田鈴美

東京都出身。大学卒業後、主に青少年向きの雑誌・書籍の編集にたずさわる。
著書に『初恋はミステリー色』や『夢色のメッセージ』などがある。
趣味は演劇鑑賞（大学時代は劇団四季のおっかけをやっていた）。また、温泉旅行が大好きで、二か月に一度のわりで日本のアチコチを回っている。どこかオススメの所があったら、教えてほしいそうです。

《推理読み物》おなじみ迷犬ルパン登場

迷犬ルパンとカツカレー

辻　真先・作／うちべ けい・絵

健のお姉さんであるタレントの川澄ランは、『るんるん』というカレーライス屋のマスコットガールになった。そのカレー屋で大事件が……。

カレーライス宇宙一

かぜひいちゃった

マクドナルド、好きですか。ケンタッキーフライドチキン、好きですか。ロッテリア、好きですか。

どこのお店をのぞいても、カラフルな制服のお兄さんやお姉さんが、キビキビと立ちはたらいていますね。

「いらっしゃいませ！　お持ちかえりですか、こちらでめしあがりになりますか。」

「お待たせしました！　六百七十円いただきます。」

少しぐらい列をつくっていても、みるみるうちに自分の番がまわってきます。早くて安くておいしいというモットーは、中学生の健くんの家の近くにできた『るんるん』でも、同じです。だけど、ここのお店の売り物は、ハンバーガーやチキンナゲットではありません。

〝カレーライス宇宙一の店！〟

カレーライスだったら、メニューが二十種類もあります。辛口が好きならキムチカレー、甘口がよければまんじゅうまであるんです。でも健くんと小学校からのガールフレンドの

美々子さんの、いちばんのお気に入りはカツカレーでした。

「カツの肉がぶ厚い。」

というのが健くんの感想ですし、

「カレーをかぶった衣がおいしいの。」

というのが、美々子さんの意見でした。

「カツカレーのことはわかったけど、わたしはどうなの、わたしについてのご感想は！」

真剣な顔で言ったのは健くんのお姉さんの川澄ランでした。

おや、どこかで聞いたことがあると思ったきみはえらい。ランお姉さんは、大喜びできみをだきあげて、キスしてくれるかもしれません。

なぜかといえば、ランの仕事はテレビのタレントでしたから。はっきり言って、それほど有名じゃないんです。ミステリードラマで大写しになるというので、ねむいのをがまんして健が見たら死体の役だったり、せりふが五つもあるというので無理して覚えたら、四つまでカットされていたり。まあ、その程度のタレントですから、本職だけではとても食べてゆけない……というわけで、『るんるん』が代々木上原にオープンする、そのマスコットガールになったのです。

まだ春の四月ごろから、レオタード姿でのぼりを持って、
「宇宙でいちばん、カレーがかれえ！　あせをかくから春でも暑い！」
なんて言ってたと思うと、夏が近くなると暑苦しい宇宙服に身をかためて、
「宇宙でたったひとつの、UFOカレー！」
なんてさけばされています。いったいなにがUFOかといえば、お皿が円盤のかっこうをしているだけで、中身はただのビーフカレーなんですから、さぎみたいな話ですね。
お姉さんのふんとうを見るに見かねて、『るんるん』へ通っている間に、すっかりカレー評論家になった健と美々子でしたが、ここにもう一人、いや一匹、『るんるん』をごひいきにしている者がいます。いうまでもなく、迷犬ルパン。健と美々子の二匹、いや二人に連れられて『るんるん』へ出かけている間に、すっかりカレーファンになったみたいです。
わん　クシャン。
おや、ルパンがくしゃみをしました。
ラン姉さんの出勤前に川澄家のざしきに集まっていた三人が、いっせいに庭を見ました。
「かぜひいたの？」
美々子が心配そうに声をかけると、まるで返事するようなタイミングで、縁の下からつづけざまにクシャン　クシャンという声が聞こえました。
キャンキャンと庭のすみから別な犬の声。ルパンのおくさんのサファイヤが、ずっとはなれた場所から、ルパンのいる縁の下を見つめています。なんだってそんなにはなれているのかと思ったら、サファイヤがちょっとでも近づこうとすると、ルパンがほえることがわかりました。
キャンキャン。
わん、クシャン。
というわけなんです。
「かぜをサファイヤにうつしたくないんだ、きっと。」
「えらいわね、ルパン。熱があるのなら、注射をうってもらおうか？」
美々子がそんなことを言うものですから、ルパンもびっくりしたみたいです。
わんわんわん！　クシャンクシャンクシャンクシャン！
「あ、こりゃひどい。」

「氷まくら、いるかしら。」
「ルパンがベッドであおむけになるもんか。」
「それよか、おいしいものでも食べに連れてゆくの、どうだろう。」
「なによ、健。食べたいのは自分のほうじゃない？　行き先はカツカレーでしょう。」
「わかってるんだなあ。」
「まだわかってること、あるわよ。わたしのおごりで食べようと思っているんでしょ。」
「当ったりィ。」

「なにが当たりよ。今日またおごるんじゃあ、あなたにカツカレー食べさせるために働いてるようなものだわ。」
「まあ、おさえて、おさえて。……姉さんだぜ、一人も客が来ないとみっともない、食べただけおごってあげるから、毎日でも来てって言ったの。おれたち魚釣りのルアーみたいなもんなのか。」
「もうびくはいっぱいになってるの。ルアーなんていらない。」
勝手なことを言って、ランはさっさと『るんるん』へ出勤してゆきました。
おいてけぼりをくった二人は、がっかりです。
「どうするの、健ちゃん。」
「どうにもならないなあ……。」
健がうなると、どこかでグーという音がしました。
「おなかが鳴ってるわ。」
「うん。朝トースト一枚食べたきりだもんな。」
今日は日曜日です。健のママはお友だちとデパートへ、美々子の家ではパパとママそろってお芝居へ行ってしまったので、かわいそうに二人とも欠食児童でした。でもご心配なく。
健はかえって張りきって、美々子に電話をかけました。
「こんなときこそ、好きなものをジャンジャン食べるぞ！」
「だめよ、健ちゃん。」
「え、なぜだい。」
「おこづかいをむだにしては、こんなときこそ、お金をうかせて貯金するのよ。」
「まさか一食ぬかせって言うんじゃないだろうな。」
「そんなこと言わないわよ。うちへいらっしゃい。冷蔵庫の残り物でごちそう作ったげるから。」
ぎょっ。
それを聞いて健が目を白黒したというのは、いつかもこんなふうにさそわれて、美々子手作りのごちそうにありついたとたん、口の中で花火が爆発したからです。あ、本気にしてはいけません。つまりそれほど、美々子の作る料理が辛かったというわけです。
食べないうちにあせをかいた健、
「それよりうちの姉貴におごらせようよ。」
と、自分の家にさそったのですが、そのランにあっさりにげられたのは、大きな計算ちがいでした。
「しかたがないや……やっぱり自分のおこづかいで、食事し

よう。」
「じゃあワリカンね。」
「うん。」
外へ出た健と美々子のあとを、クシャミの音が追いかけてきました。
「なんだ、ルパン。おまえも来るのか。」
わん。
「来るのはいいけど、ワリカンよ……というわけにはゆかないわね。」
ハクション。
きょとんとして、ルパンが見あげてます。
「わかった、わかった。ついといで。」
かぜをなおすには、栄養をとる必要がある。とルパンが考えたかどうか知りませんが、大喜びでしっぽをふってついていきました。

おそわれちゃった

「『るんるん』へ行くの、健ちゃん。」
「やだよ。おごってくれないのなら、行く義理なんてないや。」
という健と美々子の会話が聞こえなかったのか、『るんるん』の店の前まで来ると、はじめから予定していた行動みたいに、ルパンはどんどん中へ入ってゆきます。
「あらやだ。ルパン、入っていった！」
「おい、ルパン、待てったら。」
健たちが止めようと、『るんるん』の前までかけてゆくと、とたんにランのほがらかな声があがりました。
「いらっしゃーい。元気のいいお兄さんと、とてもかわいいお姉さんの二人連れですね！　さあどうぞ。」
今日のランのいでたちは、ビラビラのついた革の上下にカウボーイハット。ウエスタンルックのつもりらしく、ちゃんと拳銃もこしに下げていました。言うことを聞かないと、バンと撃たれそうだったので、しかたなく二人は『るんるん』に入りました。なんだか、ランとルパンの共同作戦にひっかかったみたいです。
「こら、ルパン。アルバイトに客引きをしてるのか？」
小声でおこりましたが、ルパンは知らん顔でただもうしっぽをふっています。好物のカツカレーをさいそくしているの

でしょう。「ちえっ。買えばいいんだろ、買えば。」
半分やけみたいになって、健がレジへ進んだときでした――事件が起きたのは。
だしぬけに店の表で、悲鳴があがりました。それも一人や二人ではありません。男の人と女の人の声が、何人かまじっています。
「な、なんだ?」
はっと健がふりむいた、その鼻先に男が二人飛びこんできたのです。一人は三十をこしたぐらいのジャンパーを着た男、もう一人ははでなスーツ姿ですがまだ二十ぐらいと、とっさの間に観察できたのは、さすが健でした。
作者のぼくにも、まだ二人の名前がわからないので、これから先は男たちを三十と二十と呼ぶことにします。三十にはがいじめにされたランと、二十にうでをつかまれた美々子を見て、健の全身がこおりつきました。
(姉さん! 美々子ちゃん!)
あとでランと美々子はいばりました……
「大勢の中からわたしたちを選んだっていうのは、それだけ目立ったからよ。ねえ、美々子ちゃん。」

「ええ、もちろん。ほかにあんまり美人がいませんでしたものねえ。」

事件が終わったから、そんな気楽なことが言えるのですが、このときは二人とも真っ青。それを見ていた健も真っ青です。

「どけ！」

二十が血走った目で、店の中のみんなを見回しました。左手で美々子をつかんだそいつは、右手に拳銃を持っていました。ずしんと重そうな銃、黒光りしてよく使いこまれた感じ。けっしておもちゃではありません。

それがわかったのでしょう、いったんシンとしていた店の中が、ふたたび大混乱におちいりました。悲鳴をあげて何人かが、表へ飛びだしていこうとすると、バシッとするどい音があがりました。つづけざまにガラスの割れる音。三十が、やはり手にした拳銃をうったのだとわかりました。店の正面にあったカレーライスの写真と、値段表が、こっぱみじんに飛びちっています。

「動くな。」

三十がドスの聞いた声でどなりました。

「動いたやつは、うつ。」
なんなんだ、こいつらは？
レジに張りついたきり、動けなくなった健は、それでも一心に頭を働かせました。
（なにか悪いことをして、警察に追われてるんだ。きっと、そうだ！）
その考えは当たっていました。パトカーのカン高い電子サイレンが、店の前で鳴りひびいたと思うと、ばらばらと警官たちがかけこもうとしたのです。

（あっ、朝日さん！）
先頭に立っているのは、健の家に下宿している朝日正義刑事でした……これもあとから、朝日に聞いたことですが、この二人は近くに事務所をおいているやくざの仲間でした。やくざというと、映画かテレビの中だけにいるようですが、じつは、みなさんの街にだっているのかもしれません。それもちゃんとしたビルの中に、ちゃんとした事務所をかまえているのですから、ぼんやりしていると見すごすでしょう。
でもこの男たちは、ごく最近やくざ同士のいざこざから殺

人を犯して、事務所にかくれていたのです。密告をうけた朝日たちが逮捕に向かうと、それに気づいた二人は、いち早くにげだしました。追いつめられたあげく、この『るんるん』へおどりこんだのです……まるで季節外れの嵐みたいに。

「来るな！」

三十がさけびました。その手の拳銃が、ランのこめかみに当てがわれたのを見て、朝日もたまげたようです。

「川澄くん！　どうして……。」

どうしてここにいるのかときく前に、この店が『るんるん』であることを思い出したらしく、戸口に足をくぎづけにしたきり、くやしそうに三十をにらみつけました。

「ほう……刑事さん、あんたこの女を知っているのか。そいつあかえって好都合だ。女を助けてほしかったら、さっさと出てゆけよ。ついでに車を都合して、おれたちをにがすんだな。安全な場所までにげたら、女は許してやる。」

どこかでぎりぎりきしむような音が聞こえました。どうやらそれは、負けずぎらいな朝日刑事が、歯を食いしばっている音のようです。

三十がせせら笑いました……。

「早く出てゆけったら。十だけ数えて待っててやる。……いいかい。ひとおつ……ふたあつ……。」

男のうでの中のランは、半分気絶したみたいで、目をつむったままビクリとも動きません。あべこべに美々子のほうは、どんぐり眼をぎろぎろさせて健をにらみつけています。

「なにしているのよ！　健ちゃん、早く助けて！」

とでも言いたいのでしょうが、さすがに声を出す元気はないみたい。もちろん健だって、ガールフレンドや姉さんを助けてやりたいのはやまやまですが、男はどっちも銃をつかんだまま、カウンターにもたれるような形で油断がありません。

店の中には六、七人の客が残っていました。へっぴりごしで女友だちにかばわれている男の子がいたり、しりもちをついているふとったおばさんがいたり、健みたいにぼう立ちになったままの少年がいたり。

健の記憶では大きなリボンをつけた五つ六つの女の子がいたはずですが、こうやって見回したところ、子どもは一人もいません。どさくさにまぎれて、うまくにげだしたのでしょうか……それならいいのですが。

カウンターの内側にいた店員は、二十にどなられて一人残

らず外へ出されました。背後からおそわれては困ると思ったのでしょう。

「……やっつ、ここのつ！」

三十の声がひときわ大きく高まると、朝日が電気に打たれたみたいにとびのきました。

「みんな、さがれ！」

人質をたてにされては、どうにもなりません。戸口にかたまっていた制服の警官も、私服の刑事たちも、どどっと道へ後退します。それを見て、三十が歯をむきだしました。

「それでいいんだ。次はおまえらの車を貸せ……あと二十、

数えるあいだにだ。」

戦っちゃった

(あれっ！)
とつぜん健は、ルパンの姿がないことに気がつきました。(ルパン……どこだ？)
首を左右に回していると、だしぬけに二十がさけびました。
「動くな！」
落ちついて見える三十に比べて、二十はほとんどヒステリーです。つかまれた手首が痛いとみえ、美々子の顔がべそをかいたように見えます。
(くそったれ！)
穴があくほど二十の顔をにらみつけてやると、相手もカチンときたようです。
「文句あるのか。」
「……ある！」
いまにもなきだしそうな美々子を見て、健はとうとうたまりかねました。
「その女の子を放してやってよ！ 代わりにおれが、人質になる！」
「ばかいえ。」
キンキンと耳ざわりな声で、二十が言いました。
「お前みたいに小ぎたないやつより、この子のほうがずっとマシだ。なあ、かわいい子ちゃん。」
むりやり美々子をだきしめて、ほおずりしようとしたのです。てきめんに美々子は悲鳴をあげました。
「やだあ！ 健ちゃん、助けて！」
「健ちゃんだと？」
二十がいやあな目つきをしました。
「そうかよ。おまえら友だちかよ。だから身代わりになるっていうのか……えらいなあ、ぼうず。えらい、えらい。」
言いながら二十の手の拳銃が、えものをねらうヘビみたいに、ゆっくりとかま首を持ちあげました。健の目に、まるでその銃口が洞穴みたいに、大きく拡大して見えました。
「動くなよ。もしおまえが動いたら、この女の子の首をねじ切るからな、動くなよ！」
ガンとかみなりのような音がして、健の耳のへんを熱い風

が吹きすぎました。わざと外してうった拳銃の弾だと、頭の中ではわかっていても、実感がわいたのはその何秒かあとのことです。健の両ひざがガクガクとふるえて止まりません。それでも強情な健ですから、カウンターに支えられて、けんめいに声を張りました。

「う……動かなかったぞ。ざま見ろ！」

「なにをっ。」

かんしゃくを起こした若者が、もう一度銃をとりなおしました――店の中がまたもやシンと静まりかえったとき。

ハクション！

とんでもない瞬間に、大きなくしゃみがひびいたのです。それも二十が背にしていたカウンターの中から。

「だれだっ！」

反射的に若者が銃を向けてうちました。だがむろん、そこにかくれていたのはルパンだったので、人間みたいに的が大きくありません。弾は大きくそれて、こんどはルパンの逆襲です。

わん！

かみついた先は、二十がしめているネクタイでした。カウンターをのぞきこんだ男のネクタイがたれさがったのを、ルパンが見のがすものですか。ころころしたルパンの体重全部をネクタイにあずけられて、二十は動けなくなりました。

「ぐわあ……い、息が、できねえ！」

カウンターに首をつっこんだポーズでバタバタやっているのへ、健が飛びかかって右手をねじあげます。拳銃さえうばってしまえばこっちのもの！

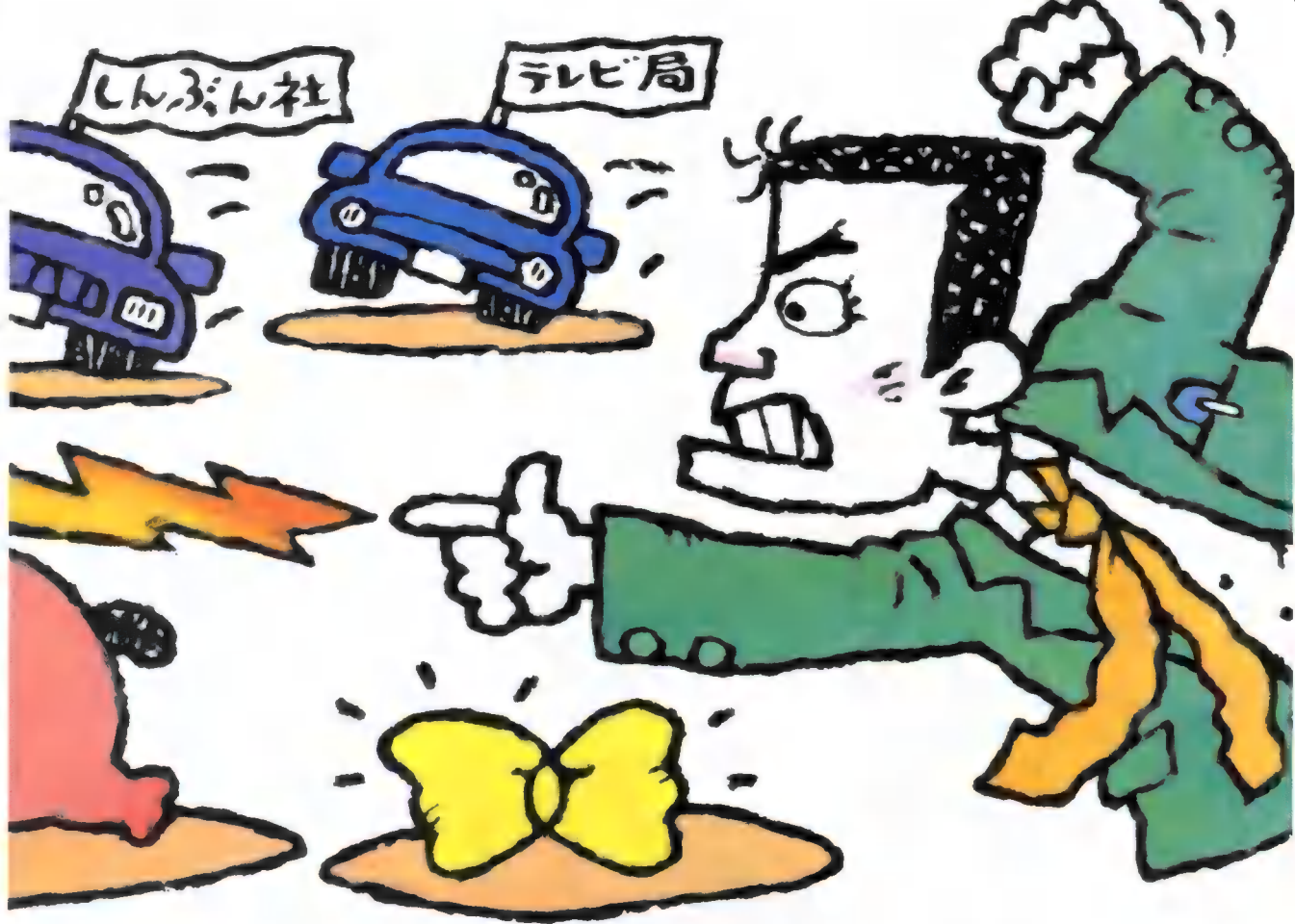
といっても、悪者はまだ一人残っていました。十八まで数えたところであわてて中止した三十が、
「この野郎！」
銃を向けた先は、のびた二十をそっちのけにカウンターに飛びあがったルパンです。だがのろい人間とちがって、見かけ以上にすばしこいルパンがうたれるのを待っているはずはありません。赤茶色の固まりがジャンプしたと思うと、三十の右手に向かって飛びかかりました。遠い相手なら役に立つ拳銃も、近くにおどりこまれてはねらいに迷うばかりです。
「うわあ。」
手首をかまれて、三十が銃を取りおとしました。とっさにどこへすべっていったのかわからずうろたえていると、
「ピストルならここよ！」
「わあっ。」
やにわにランに銃口をつきつけられて、思わずバンザイしてしまった男。そのようすを見た朝日が、ふたたび突撃してきました。
「よくやった、川澄くん！」
ふてくされている三十と、もうろうとなっている二十の二

人に、警官が手錠をかけるのを見て、ランがふらふらとなりました。その手からいまにも拳銃が落っこちそうになったので、健も美々子もびっくりです。
「あぶない、姉さん！」
やっとのことで拳銃を受けとめた健が、ヘンな顔をしました。
「なんだこりゃ。まるで軽いぜ。」
「あらっ、健ちゃん！　あそこにもピストルが落ちてるわ。」
「ええっ？」
軽いはずです。
「これ、オモチャじゃないか。」
「そうよ。本物のピストルなんて、拾うひまがなかったもの。それは、わたしの持っていた小道具。」
ウエスタンルックのランが、ホルダーにさしていたにせの拳銃を、とっさにつきつけたのだと知って、三十はものすごくくやしそうでしたが、あとの祭り。
「よし、連行しろ。」
気もちよさそうに命令した朝日は、念のために店に残されていた客たちに、たずねました。
「みなさんおさわがせしました。おけがはありませんか。」
だれも撃たれた者はいなかったようです。やれやれと思ったのですが――事件はまだ終わっていませんでした。
「アユミがいません！」
さけびだしたのは、買い物袋を持った、まだ若いおくさんでした。

消えちゃった

「アユミ？　だれです、それは。」
めんくらったように朝日刑事がたずねます。おくさんはくちびるまで白くしていました。
「わたしの子どもです！　まだ五つなんです、それがこのさわぎでどこへ行ったのかわからないんです！」
あ……と、健が思い出しました。
「ね、その子こんなに大きな、黄色のリボンをつけてたんじゃありませんか。」
「そうです、そうです！　あなた、ごぞんじなんですか！」
ごぞんじと言われても、健だってカウンターに張りついて

いたのですから、その子がどこへ行ったのかまではわかりません。
朝日が、声をはりあげました。
「みなさん！　五つの女の子だそうです。黄色いリボンを頭につけていました……どなたか、ご記憶ありませんか！」
みんな顔を見あわせたきりです。朝日といっしょにこの場に残っていた、別の刑事が外に集まった野次馬に問いあわせたようですが、だれもろくな返事をしません。
「いったい、どうしたんでしょう。」
声をふるわせるかわいそうなママに、朝日が問いかけました。
「あの男たちが入ってきたとき、おくさんはどこにいらしたんですか。」
「ここです。」
と、おくさんはカウンターのいちばんはしをたたきました。
「ここで食事してました……おそろしいことが始まりそうだったので、あわててアユミをおしやったんです。」
カウンターの一部にドアがあり、キッチンの内部へ入れるようになっていました。
「するとお嬢さんは、この中へにげこんだのかな？」
朝日が首をかしげると、店長らしい男が否定しました。
「しかし、おくにはだれもいませんよ……。」
キッチンの向こうには、路地に開いた通用口があります。そこから顔をのばした店長が、「あっ」と口の中でつぶやいて、しゃがみこみました。
「これですか、リボンというのは？」
持ってきたのを見ると、たしかにあの女の子が髪につけていたリボンでした。
「はい、アユミのリボンです！」
ママが金切り声をあげました。リボンは路地に落ちていたのです。ということは——
「アユミちゃんは路地を出たんだ。だがそれから、どこへ行った？」
路地の右手はドブ川ですから、左へ行く以外に方法がありません。だがその先、表通りには大勢の野次馬がいたのです。野次馬だけではなく、警察のパトカーだって何台も……それなのに、だれもアユミちゃんが飛びだしてくるのを、見た者はいないのです？

「そんなはずはない！」
朝日がどなりました。
「ぜったいにアユミちゃんは、このあたりにいる！　手分けしてさがそう！」
悪者がつかまってホッとするひまもなく、また大さわぎになりました。アユミちゃんが一人で家へ帰った可能性もあるとママが言い、電話をかけにゆきましたが、すぐがっかりしてもどってきました。家にかけてもだれも出ず、近所のおくさんに聞いてもアユミちゃんが帰ってきたようすはなかったのです。

事件を聞きつけた新聞記者たちが、次から次へやってきましたが、朝日はおしゃべりする気にもなりません。

「今はそれどころじゃない！　ニュースより、子どものほうがたいせつだ！　梨本だろうが桜井だろうが待たせとけ！」

ガンガンどなっている朝日に、ランがささやきました。

「ルパンにたのんだら？」

「ルパンだって？」

「ええ……アユミちゃんがつけていたリボンがあるんでしょう。だったらその子のにおいをたどって。」

「そうか！」

朝日刑事はおどりあがりました。

「その手があったか！　こらルパン、なんだって早く名乗りでないんだ！」

わん……

ところがルパンの声のあわれっぽいこと。

「あ？　どうした」

「朝日さん、無理なんだよ……。」

と、健も元気がありません。健に代わって、美々子が説明してやりました。

「ルパン、かぜをひいてて鼻がダメになってるの。」
「なに、かぜだって? この大事なときに。けしからん!」
けしからんとおこっても、どうにもなりません。
ハックシュン。
ルパンがまたくしゃみをしました。そのくしゃみのせいでしょうか、健にうまい知恵がうかんだのは。
「おばさん!」
と、健はうなだれている若いママにかけよりました。
「アユミちゃんはそのとき、カレーを食べていましたか!」
「ええ……食べていましたよ。カツカレーを……あの子が大好きでしたから。」
「あいつらが入ってきたときも、食べてたんですね。」
「はい、そうですけど。」
「だったらびっくりして、こぼさなかったかな?」
おかしな質問をもらって、ママは目をパチパチしながら答えます。
「そうね。手がすべってエプロンにこぼしたみたいだけど、でもそれが?」
「カレーならルパンも大好きだし、とくにカツカレーのにお

いはきょうれつで、ルパンもよく知ってます！　なあ、ルパン。」

うわん！

ルパンの目が急にいきいきとしてきました。

そうか……リボンについている人間のにおいぐらいでは、かぜっぴきの鼻に感じられなくても、カツカレーがエプロンにかかっているとすれば……？

店長がいそいでカツカレーを持ってきてくれたので、朝日がその皿を、ルパンめがけてつきだしました。

「さあ、このにおいだ。たのむぞ！」

わん！

いくらかぜをひいていても、人間の鼻よりはずっとマシなはずです。通用口に出たルパンは、左右に向かってクンクンとやりました。

その結果、とことこと走りだしたのは右でした。

「おい、そっちは川だぞ！　ま、まさかアユミちゃんが川へ落ちたというんじゃないだろうな！」

わん、わん、わん！

朝日に返事しようともせず（あたりまえですが）、ルパンは川の手前、路地の右側にならんだ倉庫めがけて、けたたましくほえたのです。

ルパンを追いかけた朝日は、たちまちあっとさけんで足を止めました。

「ここだ！」

倉庫と倉庫の間の細いすきま。ネコやネズミならともかく、そんなすきまに人間が入るわけがないと、ついだれもさがそうとしなかった場所に、小さなアユミちゃんはにげこんでいたのです！

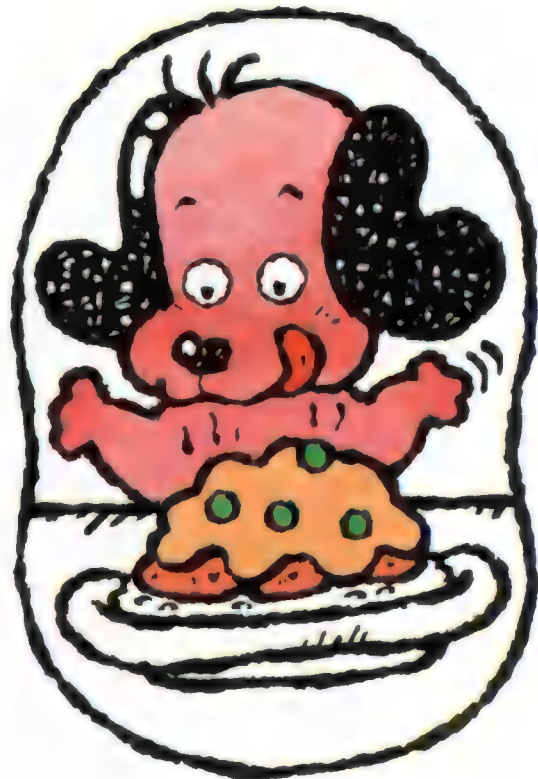
悪者に追われたこわさに、無我夢中でもぐりこんだまではよかったが、そのあと進むこともどることもできなくなって、倉庫のかべにサンドイッチされたまま、しくしく泣いていたのでした。

老朽化した倉庫の一方のかべをくずして、アユミちゃんは無事助けられました。

「ありがとうございます、ありがとうございます！　本当にルパンちゃんは、名犬ですわ！」

ルパンの前へおでこをこすりつけそうなほど、アユミちゃんのママは何度も何度もおじぎしました。

うわん、ハックション。
ルパンはてれたみたいです。いつもならルパンの悪口を言う朝日刑事も、今日ばかりはニコニコ顔で、
「よくやった。」
ほんのちょぴりですが、ほめてくれました。でも健や美々子にいわせると、
「口ばっかりで、なーんにもしてくれないんだもん。」
そこへゆくと、ラン姉さんの気前のいいこと。店長に向かって、
「カツカレー三人前！ わたしのギャラから引いていいわ。」
「なあんだ。お姉さんもカツカレー食べるの？」
「そうじゃないわよ。ルパンだっておあまりじゃなく、一人前に食べたいわよねえ……。」
笑顔でのぞきこまれて、わんわんとすごい勢いでしっぽをふります。明日はこのニュースが新聞に出て、きっと『るんるん』は超満員になるでしょう。めでたしめでたし！

（終わり）

●作家紹介

辻 真先

一九三二年名古屋に生まれる。名古屋大学卒業後、NHKに入り、初期のテレビプロデューサー、ディレクターを務める。のちにフリーとなり多くのアニメ脚本を書く。現在はミステリーを主として執筆中。
旅の仕事をするために、鉄道と温泉を中心に旅行ばかりしている。

▲夕日にそまるカイロ市。

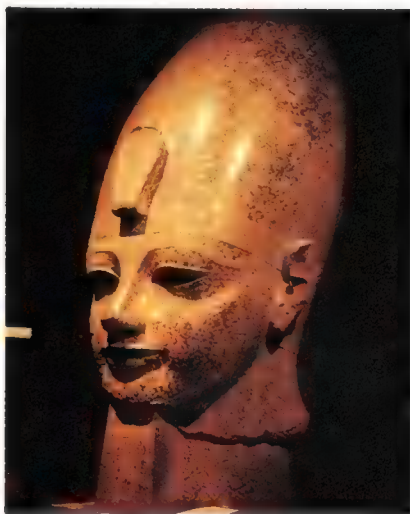
〈ノンフィクション〉

夢を追いつづける

古代エジプトにとりつかれて

吉村作治・文・写真／瀬野丘太郎・絵

古代エジプト文明は、今から約五千年前、ナイル川のほとりに栄えた。私は二十六年前、このエジプトにはじめて足をふみ入れて以来、人生の半分以上の歳月をエジプトでの仕事に費やしてきた。

▼「魚の丘」から出土した彩壁画片。

◀アメンヘテプ三世の巨像頭部（ルクソール博物館蔵）。

1

カイロの朝は早い。遠くの方から、高く低く聞こえてくるのは、アラビア語で唱えられるアザーンという祈りの呼びかけだ。カイロはエジプト、正確に言うとエジプト・アラブ共和国の首都である。人口は日本の首都、東京と変わらない約千二百万人という、アフリカ大陸でいちばん大きな街である。

私はベッドから起きだして、ベランダの大きな窓を開けて外に出た。少しほこりっぽいが、朝の空気は冷たくて気もちよい。ここはカイロ市内、ナイル川の中洲にあるゲジラ島にあるザマレクという地区だ。日本から仕事のためにエジプトへやってきている人々や、エジプトの上流階級の人びとが暮らす高級住宅街なのである。

そこに私たちのカイロでの宿舎「ワセダハウス」がある。下の道を行き交う車の列が見える。エジプトの車は、とても日本なら走ってはいけないようなオンボロの車が多い。ド

▶一九七三年、早稲田大学古代エジプト調査隊により「魚の丘」で発掘されたアメンヘテプ三世の彩色階段。

アをおさえていないと、落っこちてしまうようなタクシーだって走っているのだ。

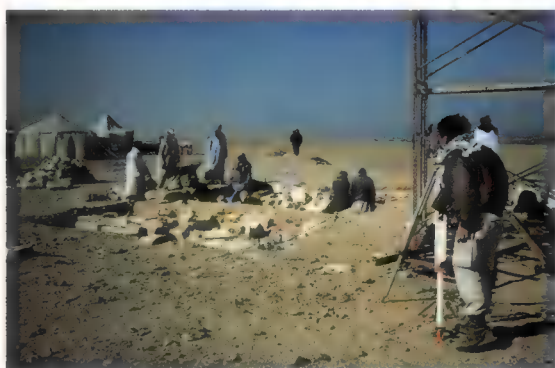
クラクションがあちこちでブー、ブーとけたたましく鳴らされている。本当にエジプトの人たちはあたりかまわずクラクションを鳴らすんだから、まったく朝からうるさくて仕方ない。時計を見るとまだ朝の五時である。水道の音や、かすかな話し声が聞こえてくる。みんなもそろそろ起きだしたようだ。

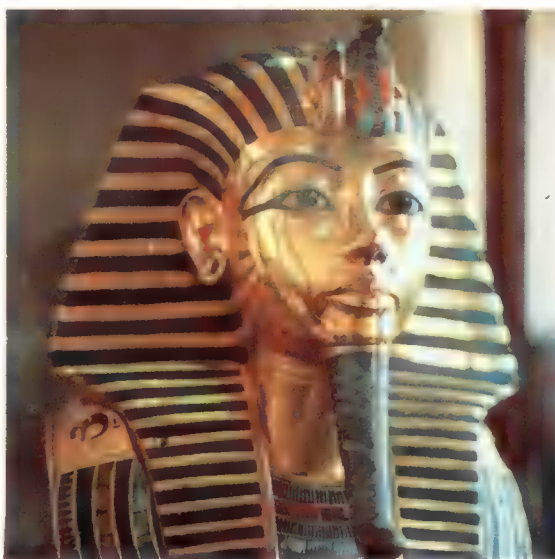
「今日もまたいそがしくなるぞ。」

私は、今日やらなければならないことを、頭の中で整理しながら、顔を洗いにいった。

「さあ、出発するぞ。忘れ物はないか。ほら早くしないか、おいていくぞ。」

現場へ向かう車に、機材を積んで出発するときはいつもあわただしい。ねぼうする学生や、忘れ物を取りに部屋にもどる学生などで、なかなか出発できないのだ。今、掘っているのはカイロから南へ、約二十キロほど行った砂漠の中にあるアブシール南という遺跡だ。混んだカイロ市内をぬけて一時間半の道程だ。

▲ハイテク機材を使用したピラミッド調査（クフ王の大ピラミッド内部の"王妃の間"）。

▲アブシール南遺跡の調査。

▲スフィンクスとピラミッドも吉村少年の心をとらえた。

◀ツタンカーメン王の黄金のマスク（カイロ博物館蔵）。

▼ツタンカーメン王の墓で有名な"王家の谷"。

走りだした車の中もとてもにぎやかだ。私はゆれる車の中で、昨日、どうやら掘りあてた神殿跡について思いをめぐらした。
「何回味わっても、遺跡を発見する興奮はいいもんだ。」

2

私はエジプト考古学者。大学で学生を教え、授業が休みの間は、エジプトにやってきて、古代の遺跡の発掘調査をしている。
私が研究している古代エジプト文明は今から約五千年前、ナイル川のほとりに栄えた。そのころ、まだ日本では人々は野山で木の実を採ったり、川で魚をつかまえたりする生活を送っていた時代だ。
しかしエジプトではファラオとよばれる王様を頂点にして大臣や貴族、神様に仕える神官、そしてさまざまな職業の人びとが暮らす社会がすでに完成していた。象形文字が使われ、古代エジプト人は高度な知識でピラミッドを建設し、神殿を各地に造った。エジプトの宗教はたくさんの神様がまつられる多神教の世界で、太陽や月、タカやネコなどさまざまなものが神様として信仰された。古代エジプト文明は約三千年間にわたって続いた華麗な古代文明なのである。
私がエジプトにはじめて足をふみ入れてから、もう二十六年もたった。そして、毎年、毎年、お正月はエジプトで過ごし、初日の出をむかえている。
砂漠の彼方から昇ってくる新年の太陽を目のあたりにすると、今年もまたがんばろうという気分になるから不思議だ。同じ太陽のはずなのにエジプトの太陽は日本で見るのより、もっとずっと大きくて、光もパワーアップしている感じなのだ。
私はエジプトにあこがれて、人生の半分以上の歳月をエジプトでの仕事に費やしてきた。そして私がエジプトを目指すきっかけは、中学生になったばかりのころのほんのぐうぜんのできごとだった。

ぼくは早く授業の終わりのベルが鳴らないか、そればかり考えていたので先生の話はちっとも頭に入らなかった。ベルが鳴ると、ぼくはいちもくさんに教室を出た。
（今日もまたあのお兄さんたちはいるだろうか。）
ぼくは少し心配だったが、いっしょうけんめい走った。背中に「さんちゃん、今日もいっしょに帰らないのか」という友だちの声がしたが、ふり向かなかった。
通りを曲がると、昨日と同じように作業をしているみんなが見えた。
（ああ、よかった。）
ぼくはまた昨日のように道ばたにじんどって、よく見えるように居場所を決めた。帽子をかぶったぼくよりも年上のお兄さんがちらっとこちらの方を見たが、なにも言わなかった。ぼくはほっとした。ぼくがここへ来たのはこれで三回めだ。

ぼくはつい三日前の帰り道、いつもとちがう道を通ったのだ。ぼくは近所の中学に行かずに、電車通学をする中学に通っていた。その理由はとってもかんたんで、ただ首にぶら下げた定期券を持って学校に通いたかったからである。しかしおなかが減って買い食いをするのに、よく定期券のお金を使ったりしてしまい、それで自転車で通うはめになることも多かった。学校の周りは小さいころから遊びなれた土地ではないから、通りが一本ちがっただけで、まったく知らない町に変身してしまうのだ。そのころはそれが楽しくてならなかった。

その日もぼくは自転車で学校に来ていた。そしていつもとちがう道を通ったのだ。しばらく行くと向こうの斜面で何人もの男の人たちが、集まってなにかをしているのが見えた。生まれつき好奇心の強かったぼくは、いったいなにをやっているのか、知りたくて、近づいてみたのだった。そこは練馬区にある石神井公園で、今も緑に囲まれた三宝寺池という池のある美しい公園だ。

そこで働いていたのは少し年輩の人と、その他は高校生くらいのお兄さんたちだった。きっと大泉高校の学生だとぼくは思った。

みんないそがしそうで、だれもぼくのことを気にとめなかった。土を掘って、その土を運んでいる人がいるかと思えば、向こうでは巻き尺でなにかの長さを計っていたり、また熱心に鉛筆を動かして記録をとっている人がいたり。

しばらくいるとみんなが、それぞれちがう仕事をやっていることに気づいた。ようやくぼくはなにをやっている場所なのか、わかったのだ。みんなは発掘をやっているのだ。それがぼくと発掘とのはじめての出会いだった。

ぼくは小さいときから本が好きで、「少年ケニア」や「ツタンカーメン王の発掘記」などで、エジプトにとてもあこがれをいだいていた。そしてツタンカーメンの墓を発見したカーターは考古学者というもので、遺跡は発掘して、はじめていろいろなものが出てくるということを知っていた。その年ごろの少年らしく、ミイラ男の恐怖とか、ファラオの呪いとか、そういったおどろおどろしいさし絵のついた読み物もぞくぞくするほど好きだった。

そして小学校六年生のとき、ぼくは野外調査というものをはじめて経験した。社会科の授業で近所の古い民家の調査をしたのである。昔の人たちがどんな暮らしをしていたのか考えながら、家の間取りなどをむちゅうになって調べた。とても楽しかったのを覚えている。きっとそのころから古いことを研究するのが好きだったのだろう。

でも発掘現場をこの目で見るまでは、じっさいのところ、知識では知っていても、発掘というのはどういうことなのかよくわかっていなかった。それがいっぺんにわかってしまったのだから、ぼくにとってはすごいことだった。ぼくは家に帰ってきてからも、自分が考古学者の仲間入りができるような気がして、なんだかわくわくしてしかたなかった。そしていつの日か、考古学者のカーターのように

王様のお墓を発見したいものだと思った。ぼくは明日も石神井公園の発掘現場に行ってみようと決心した。

ぼくは次の日も出かけてみた。そして今日で三日め、昨日よりもっと地面が掘りかえされ、穴も深くなっている。ぼくはいつものところからながめていた。と、そのとき、

「先生、ちょっと来てくださーい。」と、年輩の人を呼ぶ大きな声がした。作業をしていたみんなの注目が、声を出した学生のところに集まる。先生とよばれた年輩の人はゆっくり、ゆっくり足元に注意をしながら歩いていく。

なにかが見つかったのだろうか。ぼくも中に入って見てみたかったが、じゃまをしてはいけないとおこられるかもしれない。そのとき、ぼくがいつも見ていたお兄さんが、こちらを向いたのだ。そして信じられないことに、ぼくに手まねきをしているのだ。

「おーいこっちに来てもいいぞ。足元に注意するんだぞ。」

ぼくはうれしくなって、思わずかけだした

くなるのをこらえて、ゆっくり歩いていった。

それ以後、学校の帰り道、発掘現場に行くのはぼくの日課となった。

「そんなに好きなら、手つだわせてあげるよ。」と言ってもらえたときは、とてもうれしく天にものぼるような気もちだった。ぼくはいっしょうけんめい発掘の手つだいをした。それで、なぜみんなが足元に注意して歩くのかもわかった。遺跡はとてもこわれやすいのである。

その調査隊は、ぼくが思ったようにやはり大泉高校の人たちで、考古学クラブの生徒たちだった。ぼくに声をかけてくれたお兄さんはとても親切で、それからいろいろなことを教えてくれた。石神井公園はその昔、江戸時代以前にこのあたり一帯を治めていた領主豊島氏の出城があった所で、その城の跡や住居の跡を発掘していたのである。

毎日おそく帰るぼくに、母は「いつもなにをやってこんなにおそくなるの」と、たまにうるさいときがあった。でも父は仕事の手を少し休めて、にこにこするだけだった。

「学校のクラブでちょっとね、いそがしいんだ。」

父は友禅師とよばれる職人で、いつも家で絹の反物に美しいもようをかいていた。花や鳥などの生き物や、連続した文様など、子ども心にきれいだなあと思ったものだ。家にはお弟子さんが三人いて、ご飯を食べるのもねるのもみんないっしょだった。ぼくはそんなにぎやかな家で育った。

そのお弟子の中で、ぼくをいちばんかわいがってくれた徳さんに、じつは発掘の手つだいをしていることを話した。本当はだれかに話したくて、うずうずしていたのだ。徳さんは「さんちゃんは今にきっと偉い人になれるよ。好きなことやって、飯が食えるなんて話はめったにないんだからな。勉強するんだぞ。」とはげましてくれた。

「どうしてここが家の跡だってわかるんですか。」

ぼくはみんなが「チュウケツ」と呼んでいるところを指さしてお兄さんにきいてみた。

「それは一度、土を掘りかえしたところはもう二度と元にはもどらないからさ。よく見てごらん。土の色がちがうから。だから何百年もたって、土にうもれてしまっていたって、ここに柱があったことはすぐにわかるんだ。」

「すごいんだなあ。」

「そうさ、地球の土を人間が掘るということはそういうことなんだよ。二度とふたたび元にもどすことはできないんだからね。」

このときの高校生のお兄さんの言葉はぼくの心にしみこんだ。そして、それからの生き方に大きな影響を与えることになった。

早稲田大学に進んでから、さらに考古学の道を続けようと、期待に胸をふくらませていた。しかしそのころ、日本じゅうの大学は学生運動が真っ盛りの時代で、毎日、学生たちは学費値上げに反対する運動をくり広げてい

た。大学に行っても授業は休みで、図書館や研究室も閉められてしまい、せっかく勉強をしようとしていたぼくはとまどってしまった。師である先生たちに向かって、いろいろな要求をつきつけて闘争をしている学生たちを見ているうちに、疑問がわいてきたのである。そしてその混乱の時代に、自分が本当になにをしたいのかを考えた。そしてぼくが選んだのが「エジプト考古学」だった。

　まず仲間をつくろうと考えた。入学式など人のたくさん集まる所に、手作りのおでん屋台を出して、いっしょにエジプト学を学ぼうという学生を探した。それが成功して、同じ夢をもつ学生が十数人も集まった。かれらも闘争のみに明けくれる、そんな学生生活に終わりを告げ、自分の目的を見つけようとしている人たちだった。そして「エジプト研究会」が誕生した。

　しかしいざエジプトの勉強を始めてみたものの、とうじの日本にはエジプト学というものがまだしっかりと根づいていなかった。図

▲カルナック・アメン大神殿の大列柱室。

◀カルナック・アメン大神殿全景(神殿の北西上空より)。

書館に行っても参考になる資料はなく、研究はなかなか進まなかった。しかし、エジプトへ行きたいという希望はどんどんふくらんでいく。ぼくたちのなかに、このままではいけないのじゃないかという気もちが大きくなってきた。

　そこでこんどはエジプト学の先生を探すことにしたのである。ぼくはとうじ、文学部の講師の中に、今は亡き川村喜一というオリエント考古学を専攻し、なおかつ発掘もできる先生がいることをつきとめた。さっそく一通のはがきを書いた。この一通のはがきが生涯の師となる川村教授との出会いをもたらした。川村先生はおだやかな表情で、熱っぽくエジプトへの夢を語るぼくの言葉を、黙って最後まできいてくださった。そして先生はこうおっしゃった。

「エジプトへ行けるかどうかはわかりませんが、エジプトの研究をしたいという諸君とともに勉強会をすることは大賛成なので、いっしょにやりましょう。」

「ありがとうございます。」

　先生の言葉を早くみんなに知らせたくてならなかった。これでやっとぼくたちのエジプト学が始まったのだ。それから川村教授の指導を受けながら、勉強を続けた。しかし現実はきびしく、エジプトに関する本や論文は少なく、図書館のほかに、神田の古本屋を回って本を探したりした。またエジプトに行ったことのある人を訪ねたり、エジプト大使館にも出かけて話をきいたりした。そのうち集めた資料は次第に多くなっていった。

　そして一年が過ぎたころ、ぼくはじっさいにエジプトに出かけ、自分の目でエジプトを見てみたくてたまらなくなった。巨大なピラミッドやスフィンクス、壮大な神殿、たくさんの発掘品を展示しているカイロのエジプト博物館など、どうしても実物を見たくなったのだ。とうじではまったく学問として確立していなかったエジプト学の先駆者になりたい。そう思うと矢もたてもたまらなかった。

　そして勉強会の席でみんなに提案した。

「ぼくたちの研究も、かなりの成果をあげてきたと思う。だから、こんどはエジプトにじっさい行ってみようじゃないか。」

　今とちがってそのころはかんたんに外国に行くことはできなかった。

「でもエジプトに行く費用はどうするんだ。」

　お金がなかったぼくたちには、それも大きな問題だった。

　さらにぼくは、

「どうせエジプトに行くのなら、中途半端な気もちではなく、一年くらい向こうに滞在して、じっくりと勉強しよう。」

とみんなに呼びかけたのである。エジプト行きには賛成してくれたみんなだったが、一年間も学校を休んで行くとなると決心がつかない友だちのほうが多かった。それで最終的にエジプトへ行くことになったのは、ぼくを入れて五人の学生だった。

　それから、一年後のエジプト行きという目標に向かって進み始めた。エジプトに行くためには飛行機代や食費、宿泊代などたくさん

の資金が必要だ。ぼくたちは廃品回収や荷物の配達などのアルバイトをしてかせいだが、なかなかお金は集まらなかった。

そこで計画を変更し、もっと安くエジプトに行くにはどうしたらよいか、知恵をしぼったのである。まず運賃の高い飛行機で行くのをあきらめ、タンカーにただで便乗させてもらうことにした。そして現地でも、ホテル代を節約するために、テント生活にかえ、食事も持参したインスタントラーメンですませることにした。

そのお願いをするために、大学の先輩を訪ねた。テントやラーメンはそれを作っているメーカーに勤めている先輩に頼んだ。ありがたいことに先輩たちは、ぼくたちの計画に賛成してくれ、こころよく協力をしてくださった。ジープのような高価なものまで、自動車会社からゆずってもらえたのである。このとき、こういった人々の暖かい支援がなければ、とうていぼくたちの計画は実現しなかっただろう。

5

そして一九六六年の秋、ぼくたちを乗せてくれたタンカー「東海丸」は兵庫県相生港から、アラビアを目指して出発した。見送りにきてくださった川村教授が小さく見えなくなるまで、ぼくたちは手をふりつづけた。

航海をぶじに終え、タンカーは湾岸戦争の舞台となったクウェート港に着いた。そこからエジプトのカイロに向かった。カイロに到着したのは、日本を出てからすでに一か月もたってからである。ぬけるような青い空とかわいた大気が気もちよく、ついにエジプトにやってきたぞ、という期待感でいっぱいだった。

それからは、現代のエジプトで暮らすために追われる毎日が待っていた。ミミズがはったような文字を使うアラビア語は、日本で勉強してきたとはいえ、思うようには通じない。食べ物ひとつとってみてもまるで見たことないようなものばかり。道行く人びともガラベーヤという木綿の長い服を着ており、やはり異国へきたのだという実感がわいてきた。

そしてカイロに入ってから三か月後、別便で送ったジープや他の機材が到着し、いよいよエジプト全土の遺跡の予備調査をするジェネラル・サーベイに出発した。いつの日か、エジプトで発掘をしたいというぼくの夢の第一歩がしるされたのである。

はじめて訪れたエジプト各地の遺跡は、雄大で、息を飲むほどの感動を与えてくれた。デコボコの道をジープでつっ走り、たき火を囲んでラーメンをすすり、夜空にたくさん輝く星をながめながらねむる旅は約二か月間におよんだ。その後カイロに川村先生をむかえ、本格的な調査を行った。空港で、川村先生を「都の西北」という校歌を歌って出むかえたことを、まるで昨日のことのように思い出す。

その調査結果を検討し、発掘地点を決めて、エジプト政府から発掘権をもらうための申請を行った。ぼくは本格的にこしをおちつけて勉強しようと決心し、大学を休学して、カイロ大学の考古学研究所に留学の手続きをとったのである。

エジプトにおける調査の歴史は、イギリスやフランスなどヨーロッパの人々によって、約二百年前から行われてきた。欧米の国ぐには発掘調査隊を組織して、エジプトの各地で調査を行っていた。日本人というだけでなく、アジアの国でもまだだれもエジプトで発掘をしたものはなかった。それで発掘の許可をもらうために、ぼくは何度もエジプト政府の考古庁にお願いに通った。

そしてついに一九七一年、念願かなって発掘権が与えられ、日本人としてはじめてエジプトでの発掘調査が開始されたのである。ぼくがエジプトにわたってから五年の歳月が流れていた。隊長は川村喜一教授、その他に考古学、建築史の専門家三人、そしてぼくを加えた発掘隊が組織された。

ぼくたちに与えられた場所は、現在のルク

ソール市、かつて古代エジプト時代の都テーベのあったところだ。首都カイロからは南に、約七百キロ、飛行機で約一時間の距離である。発掘地の正式名称はナイル川の西岸、マルカタ南遺跡という場所で、今から二千年くらい前のプトレマイオス朝からローマ時代にかけて、信仰されていたイシスという女神の神殿があった地域である。

ぼくたちの発掘調査では、ローマ時代の住居跡や井戸の跡などが発見され、ミイラの納められた棺やとうじの人びとが使った日用品をはじめ多くの品々が見つかったのである。中学生のころ、土中から次つぎと発見される土器のかけらに一喜一憂していたことが思い出された。あのときの感動をぼくは今、エジプトの地で味わっているのである。

第一次調査から第三次調査の半ばまで、このローマ時代の遺跡の発掘は続けられ、いちおう終了した。そしてその次にどこを発掘するか、川村先生やぼくたちは何度も何度もミーティングを開いて検討した。するとある日、エジプト人の発掘人夫頭のハムザ親方がぼくのところにやってきたのだ。エジプトでの発掘は現地の人夫をやとって行われる決まりになっていたからである。

ハムザはぼくに、

「こんど掘るのは、コム・エル・サマック（魚の丘）にしましょうや。あそこの丘の下にはかならず財宝がうまっていると、村のじいさんが言っていますから。」

と、真顔で教えてくれたのである。

「サマック」というのはアラビア語で魚を意味し、その名のついた丘は、イシス神殿からほんの二百五十メートルほど北に行った所にあった。砂漠の真ん中にポツンとある丘で、それだけでもふしぜんな感じがした。見わたすかぎり砂漠が続くなかで、視界をさえぎるこの丘は作業をする隊員たちのトイレがわりになっていたのである。

川村先生はぼくたちの発掘があくまでも、宝さがしではないことを強調しながら、この伝説の土地「魚の丘」を発掘する決定を下した。ぼくはきっとなにかが見つかりそうな予感があった。それは一九七三年のことだった。

いよいよ魚の丘の発掘が開始された。そして作業をはじめてまもなく、村のおじいさんの言っていたことが正しかったのを、自分の目で確かめることができたのである。ぼくは心の中で、やったとさけんだ。ついに考古学者カーターのように、新発見にめぐまれたのだ。みんなはいっしゅん声を失ったようで、土の中から現れた絵の描かれた階段を見つめていた。

発見された階段は全部で二十段、一段おきに人物像と弓矢の絵が交互に描かれているすばらしいものだった。時代は古代エジプト時代で最も国が繁栄した第十八王朝、アメンヘテプ三世という王様の儀式を行った建物の跡だったのである。とても千五百年も昔のものとは思えないほど、あざやかな色彩で描かれた彩画片がたくさん発見された。この彩色階段発見のニュースは、あっという間に新聞にのり、遠く離れた日本にも伝えられた。この

◀アメンヘテプ三世王墓内で調査をする吉村先生。

大発見はぼくたちのエジプト発掘における門出であった。

現在、早稲田大学古代エジプト調査隊は、毎年エジプトにおいて発掘調査を行っている。調査対象も、魚の丘の調査以降、彩色階段の建物の持主アメンヘテプ三世の時代にしぼって、比較研究を進めている。同じ時代の貴族の墓やアメンヘテプ三世の王宮の跡などを調査し、最終的には彩色階段の建設目的を解明し、階段を復元することにある。

しかし発掘は順調なときばかりではなかった。恩師の川村喜一教授は志し半ばで病のため亡くなられ、私はその悲しみを先生の意志をつぐことに変えて、いままでがんばってきたつもりだ。

最近は遺跡をじっさいに掘らずに、地中になにがあるのかがすぐにわかるハイテク機器を使って、私たちは大きな成果をあげている。ピラミッドの中にまだ知られていない部屋があることや、ピラミッドのかたわらに世界でいちばん古い木造船が解体されてうめられていることなどが、私たちの開発した最新の電磁波レーダー装置で確認されたのである。

また今年はカイロで、年ねん傷みがひどくなるスフィンクスを救う目的で開かれた国際会議に、世界で十七の発掘調査隊が選ばれたが、私たち早稲田大学も招待されるというれしいできごともあった。

私の心にいつもあるのは「地球を掘ったら、二度と元にはもどらないんだよ」と教えてくれた高校生の言葉である。そして今、私は遺跡をむやみに破壊しなくてもよい方法で、子どものときからの夢を実現しようとしているのである。

（終わり）

著者紹介

吉村作治

東京に生まれる。早稲田大学人間科学部助教授、早稲田大学古代エジプト調査室主任。

主な著書に『ピラミッドの謎』『日本人とアラブ人』など多数ある。

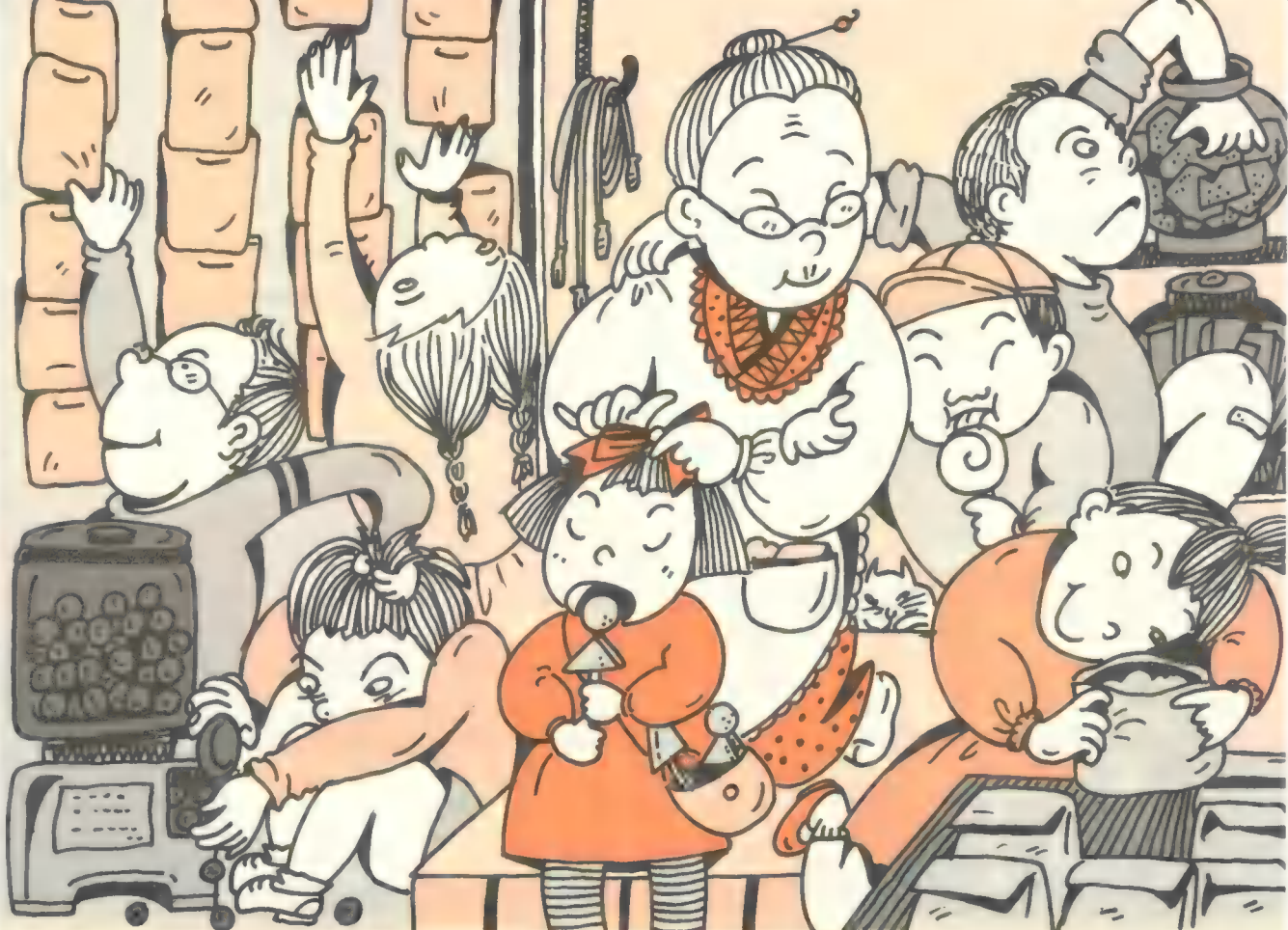
現在はアブシール南遺跡で発見された、ラムセス二世の王子カエムワセトの葬祭殿の発掘と、王家の谷の未発見王墓の探査で、いそがしく日本とエジプトを行き来している。

●推理冒険読み物●

出動!! ハヤブサ探偵団

悟空の少林寺拳法「豆打ち」がおどる

わが「ハヤブサ探偵団」は、ぼくと「悟空」と「魔子」の３人。今日も事件を求めて……。

浜野卓也・作／古茂田杏子・絵

★みんな大好き十円堂

ぼくの名は山川一郎。わが「ハヤブサ探偵団」の団長だ。探偵事務所は、ぼくの家の庭にあるスタディ・ハウスだ。

土曜日の午後、ぼくは悟空に、新美南吉の童話「ごんぎつね」を読み、日本語を教えていた。

「悟空」はあだ名。もちろん孫悟空からとった。本名は村田五郎。探偵団の一人である。去年、中国から日本に来たいわゆる帰国子女だ。クラスでお話し会をやったとき、まだなれない日本語で「西遊記」の話をして、とてもうけた。そのときからこのあだ名がついた。悟空は、あとでわかるが、中国にいたとき、少林寺拳法の天才少年としてたたえられていたそうだ。

「とんとん……とん、とん！」

事務所のドアがはげしく鳴って、

「ネムイ　ネムイ　トテモネムイ！」

と、女の子の声がした。

「ヒルマデ　ドウゾ……。」

ぼくは言って、ドアを開けた。
「ネムイ　ネムイ　トテモネムイ」「ヒルマデ　ドウゾ」は、ぼくたち探偵団の合言葉だった。
「事件よ！」
と、入ってきたのは、もう一人の探偵団員、魔子だった。本名は真子。でもオカルト・ミステリー好きで、「魔子」のほうがふさわしい。とくいは、ヨーヨーとさいみん術だ。これは女子大生の姉さんからの直伝だ。
「ジケン……ソレナニ？」悟空がきいた。
「十円堂のおばあさんが、転んで足を折った。」
「なーんだ、それは事件じゃなくて事故だよ。」
ぼくたち、あさひ市あさひ区三丁目に住む子どもで、十円堂のおばあさんを知らない子どもはいない。
十円堂のおばあさんは、三丁目の商店街のかたすみで、ぼくたちの生まれるずっと前から、子どもあいての商売をやってきている。アイドル歌手のブロマイド、マジックボール、くじつきのふくろづめ、ぶっかきチョコレート、おでん……と、なんでも売っている。
ぼくたちは、みんなおばあさんが大好きだ。小さなお店の中で、ぼくたちはよく立ち話をする。おばあさんはだまって、ただにこにこして聞いている。ときには女の子のリボンを結びなおしてやったり、きたない手でぶっかきチョコをつまんでいる男の子の手をふいてやったりする。
とにかく十円玉ひとつ持っていけば、なにかが買えるというのはありがたい。それというのも、おばあさんがおこづかいの少ない子どもたちの立場になって、安いものを仕入れてくるからだ。
思い出すと、ぼくも四年生のころまでは、よく十円堂へ遊びにいったものだ、というようなことを言うと、魔子もうなずいた。
「わたしもよ。おばあさんによくお話ししてもらったよ。でも、空襲の話をきいたとき、いちばんこわかった。」
「そういえば、おばあさん、一人っ子を戦争でなくしたんだろう。」
「そうじゃないのよ。」
と、おばあさんととくに親しかった魔子は、話しだした。
おばあさんの一人っ子の太一さんは、十六歳で少年飛行兵を志願した。両親はひっしに止めたけど、「お国のために戦っ

て死ぬことが、日本人としていちばんりっぱな生き方なのだ」と、教えられてきた太一さんは、両親の願いをふりきって、飛行兵になった。

そのころ戦争はもう末期になっていて、日本軍には、ほとんど飛行機らしい飛行機はないまま、太一さんは南の島に送られた。

やがて島はアメリカ軍に攻めこまれ、日本軍はぜんめつした。

親元には、戦死の知らせといっしょに骨つぼがとどけられた。その箱を開けてみて、両親はおどろいた。中には小さな石ころがひとつ入っているだけであったから。(あの子は死んではいない。南の島のどこかで生きているにちがいない)と、両親、とりわけ母親はそう思いこんだ。

戦争が終わって、夫にも死なれひとりぼっちになったおばあさんだが、ときどき、南の島のジャングルに、元日本兵が残っているらしいなどというニュースを聞くたびに、もしやわが子ではないかと期待をもったりもした。おばあさんのふるさとは四国だったが、もし息子の太一さんが、日本に帰ってきたとき、家がなくなっていたらこまるだろう。親を探さなければならなくもなるだろう。それで、郷里へは帰らずそのままそこで、小さな商売を始めた。

こうして「十円堂のおばさん」は、何十年かたって、いつの間にか「十円堂のおばあさん」になってしまった、というわけだ。

そういえば、いつかおばあさんは、ぼくの頭をなでて言った。

「一郎君、十になったのかい。うちの息子も、もしかしたら南の島で、一郎君みたいな男の子と暮らしているかもしれないね。もうとっくに戦争が終わったんだから、早く日本に帰ってくればいいのに……。」

「ソウナノ　ニッポンモ　タイヘンダッタノネ。」

悟空も、はじめて知ったという表情で言った。

☆　☆

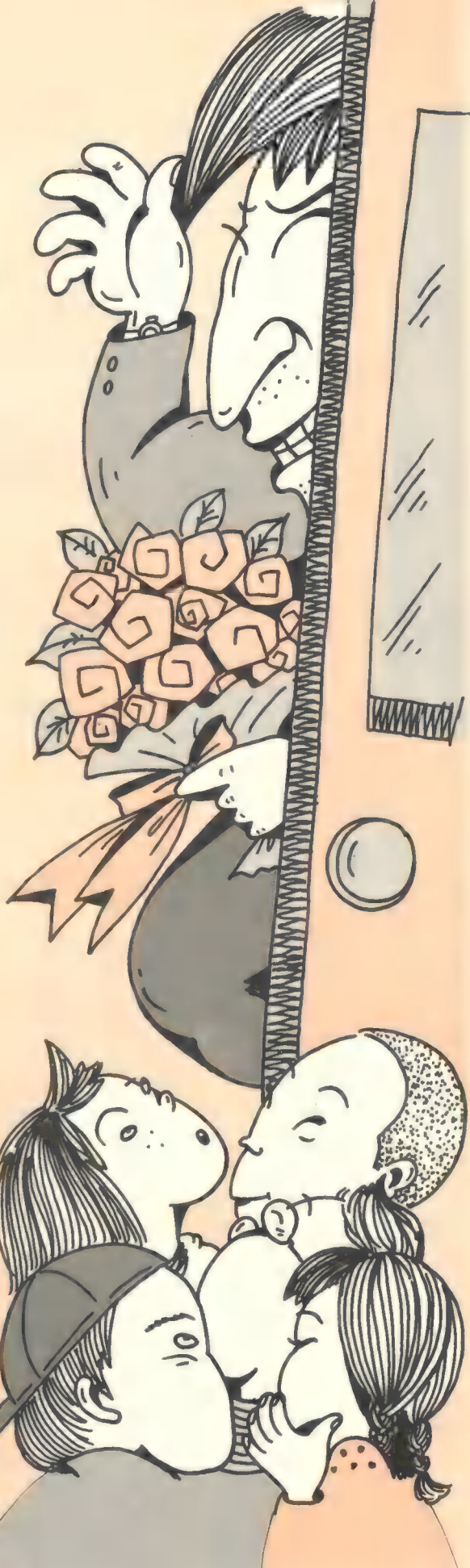
ぼくたち探偵団の三人は、中央病院三〇五号室に入院しているおばあさんのおみまいに行くことにした。

おこづかいでカステラと花を買って、病院のエレベーターを三階で降りたら、ろうかにおおぜいの子どもたちがいた。中に一人泣いている子がいる。魚屋のター坊だ。

「ぼくじゃないったら！」
と、きかんぼうのター坊が大声でわめいていたが、ぼくを見るとかけよってきた。
「一郎ちゃん、みんながね、ぼくがおばあさんをけがさせたって言うの。」
「それどういうこと？」
ター坊は泣きながら話しだした。
おばあさんがけがしたのは、台所の床板がはずれて足の骨を折ったということだそうだ。ところが、その一週間前にもおばあさんは、お店の前ですべって転び、こしをいためたという。その日は、十二月になったばかりなのにとても寒い朝で、明け方うっすらと雪が降った。それで、いたずらぼうずのター坊が、商店街に水をまいてこおらせ、スケート遊びをしていたと、みんなが言うのだ。そのこおった道で、十円堂のおばあさんはすべって転んだということらしい。そのときこしをいためたのが第一の原因で、その一週間後、こんどは台所の床板をふみはずして足の骨を折ったというわけだ。
「わざとしたわけじゃないから、しかたないだろう。」
ぼくがそう言うと、ター坊は強く首をふった。
「でもさ、ぼく十円堂のお店の前には水なんかまかなかったんだよ。ほんとだよ。」
よしよしとぼくは言って、とにかく三〇五号のおばあさんの病室に入った。
三人部屋の南の窓ぎわにいたおばあさんは、意外に元気に見えた。
「おや、真子ちゃんに一郎君……それに……。」
「おばあちゃん、ぼくを覚えていてくれたの！」
ぼくはうれしくて思わず言ってから、あわてて悟空を紹介した。

「へえー、こんな子まで、まだ戦争で苦労してるんだね。」
おばあさんはしみじみ言った。
「それでけがのぐあいは……。」
と、魔子がたずねた。
「いいあんばいに、骨にひびが入ったていどだから……」と、言ったとき、ノックして一人のおじさんが、顔に似合わない大きな花束を持って現れた。
「まあ、山本さん。たびたびすみませんね。」
と、おばあさんが頭を下げた。
「おばあちゃん、また子どもたちのおみまいかね。けっこうけっこう。」
「山本さん」は、ぼくたちを見て、気もちの悪いほど愛想よく笑っていったあと、
「ところでおばあさん、このあいだの話だけど……。」と、一歩ベッドに近づいた。

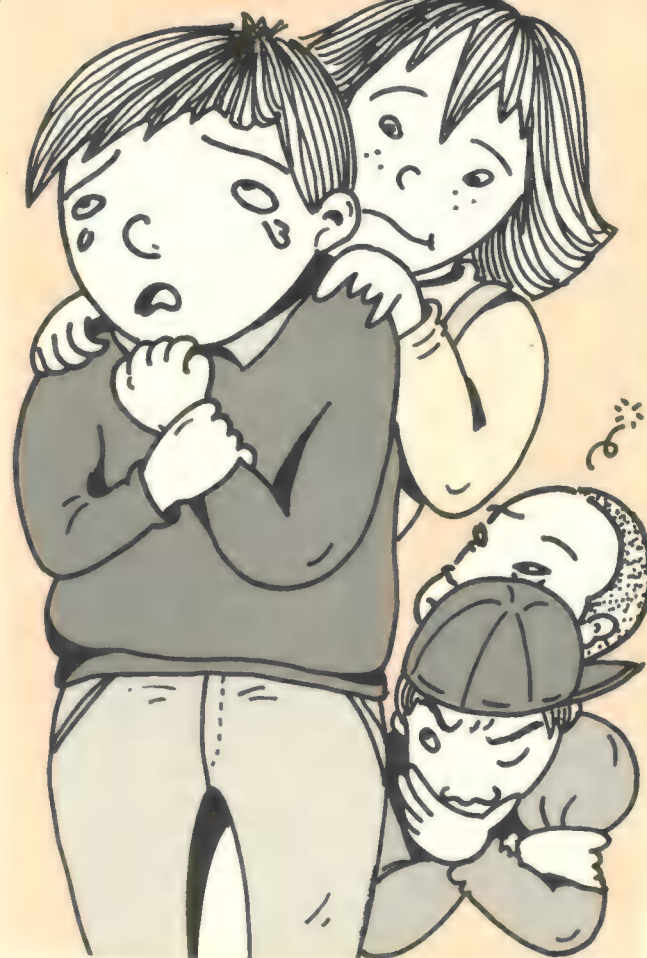
★カメさんがおそわれた！

二日後の夕方のことだった。
その日は、ぼくが悟空に中国語を教わる日だった。
「モ、イチド　ヤル。ヨイカ。マタアオウ　ハ。」

「ツァイ　チェン。」
「ウマイ。マタ　イッショニアソボ　ハ『イーホウ　ツァイイーチー　ワール』」
このとき「ネムイ　ネムイ　トテモネムイ」と魔子の声がした。
「ヒルマデ　ドウゾ。」
中国語の勉強にあきていたぼくは、ほっとして合言葉を言った。
「事件よ！　カメさんが何者かにおそわれてけがしたの。」
「何者かに？」
「そう、暴力団らしいって。」
「モシカシテ　カメサン　テンノーヘイカノ　ワルクチ　イッタノ？」
悟空が身を乗りだして言った。どうやら悟空は、暴力団と右翼をごっちゃにしているらしかった。
「カメさん」の名は吉田だけど、フリーのカメラマンで、日曜にはぼくたちとサッカーをしたりして遊ぶ、のんきなおじさんで、ぼくたちはカメラマンのカメをとって「カメさん」と呼んでいる。ときには十円堂にもふらっと立ちよって、写真をとったりもする。
「銭湯の帰りに、アパートの前で二人組にカメさんがおそわれたの。」
「なんで？」
「おまえ、よけいなおせっかいするんじゃねえって、ぐぁんと一発。」
魔子は、まるで自分がやられたみたいに言った。
ぼくたちは、カメさんのアパートに行った。アパートは、十円堂の向かいの魚屋さんと八百屋さんのある商店街の二階だった。ぼくたちが行くと、カメさんがちょうど部屋を出るところだった。
「うわーっ、ひどい。四谷怪談のお岩だあ。」
と、魔子が悲鳴をあげそうになった。
「チュウゴクニモ　コンナヒト　シバイニ　デテクルヨ。タイテイ　ワルイヒト。」
「じょうだんじゃない。ぼくは被害者なんだぜ。」
と言いながら、ポケットから眼帯を出して右目をおおった。
「これじゃ仕事にならないから、これから……。」
と言って、パチンコだまをはじく手つきをした。

「十円堂のおばあさんもけがしたし、この三丁目はさいなんつづきだね。」
ぼくが言うと、カメさんは、
「えっ!? 十円堂のおばあさんが……なんで？」
ぼくが説明してやると、カメさんは、「うーん」と言って首をひねりながら、「ひょっとすると……」とつぶやいた。
「ひょっとすると、ってなんのこと。」
「い、いや、いいんだ子どもには関係ない。」
ぼくは少しむーっとなって、ポケットから「ハヤブサ探偵団　団長山川一郎」の名刺をとりだした。
「探偵ごっこもいいけど、おとなの世界になんて首をつっこんじゃいかん。」
ところが、いつものカメさんとちがう。
ぼくはむっとなって、悟空や魔子と顔を見合わせた。
「よし、いやなことは忘れてさ、ぼくの部屋でぱーっと焼き鳥パーティーでもするかい。」
と、カメさんはいつもの顔にもどって、ポケットから一万円札をとりだした。
さて、カメさんの部屋で、焼き鳥とジュースでパーティーをした、というよりごちそうなったぼくらだけど、いつもみたいにはもりあがらなかった。それというものも、カメさんの「ひょっとすると……」ともらした言葉が気になったからだ。

☆　☆

カメさんのアパートを出て、ぼくたちは、中央公園へ行ってベンチにこしかけた。
「なにかがおかしい。」
と魔子は言って、ポケットからとりだした赤いヨーヨーをあやつりだした。
でも、カメさんがなぐられたことと、おばあさんが台所の床板をふみぬいたことと、どう考えても関係のあるはずがない。
しかし、ぼくたちはたいくつしていた。期末テストもだいたい終わった。かといってサッカーボールをけとばすには、先日の雪でぐちゃぐちゃの公園のグラウンドではむりだ。
よし、おかしくなくてもおかしい、と思い、事件にしなければ——。
「おばあさんは自分の店の前ですべって転んだ。ぐうぜんか、だれかのしわざか。ター坊は、自分じゃないといっている

が。第二にカメさんは、なぜ『よけいなことをするな』と
いわれてなぐられたのか。」
「ターボークンニ　キイテミルコト　タイセツノコトネ。」
「たいせつなこと」とぼくは言いなおしたあと、「レッツ・ゴー」と右こぶしをあげた。
まず、ぼくたちは魚屋のター坊の話を聞くことにした。
「こんにちはー、ターちゃんいますか。」
と、店に出ていた魚屋のおばさんに声をかけると、
「おや、一郎君かい、めずらしいね。」
と、にこっと笑ったあと、店のおくに声をかけた。二、三年

前、公園で遊んでいたター坊が足をねんざしたことがあり、ぼくはター坊をおんぶして家まで送ったことがある。「情けはひとのためならず」というが、そのとおりで、魚屋のおばさんはうちのママが魚を買うと、よくおまけをしてくれるのだ。
出てきたター坊に、そっとたずねると、
「ちがうよ。ほんとうにぼくじゃない。」
と強く言ったあと
「酒屋の横の駐車場のすみにあった雪の小さな山に、たしかに水をまいたよ。学校から帰ってきたら、こおっているだろうから、箱ぞりで遊ぼうと思ってさ。」
「十円堂の店の前じゃなかったのね。」
魔子が念をおした。
「ちがうよ。……でもね、水をまいていたら、とつぜんだれかに『こんな所へ水をまいたりしちゃ、だめだ。すべって転んだじゃないか』ってどなられたんだ。」
「じゃ、なんでみんなは、きみがやったなんて言うんだい。」
「ちょうどそのとき、おばあさんが店の前で転んだらしいんだ。ぼくが近くにいたからかな。そのおじさんは、おばあさんを助けおこしながら、ぼくをどなったんだ。おじさん

の声があんまり大きいんで、ぼくはそのままにげちゃったんだ。近所でも、おどろいて窓から顔を出した人もいたくらいだよ。」
「それ、何時ごろ？」
「学校へ行く前。うちは魚屋で朝早いからね。」
「キミヲ　オコッタヒト　ダレ？」
「わかんない。天気悪くてうす暗かったし……。」
「ほかに、だれもそこにいなかったの？」
「えーと……あ、となりのパン屋のおばさんが、ちょうど店を開けた。」
「きみになにも言わなかった？」と魔子。
「うん、パン屋のおばさん『おや、めずらしい』なんて言ってた。」
「だれに？」
「さあ、十円堂のおばあさんか、大声を出したおじさんにかな。」
このあと、ぼくたちはパン屋のおばあさんをたずねて、その日の朝のことをきいた。
「あ、十円堂のおばあさんを助けおこしてたのは、不動産屋の山本さん。あの人、午前中はほとんどお店に顔を出さない人だからね。」
そのとき、なにかひらめいたのか、悟空がぴーんと人差し指を立てた。
「ヤマモトサン　モシカシテ　ビョウインニ　ミマイニ　キタヒト。」
「あ、そう。たしかおばあさんそう言っていたわ。」
魔子も手をたたいて言った。
「あの朝、おばあさんは、雪のためにすべって転んだんですか。」
ぼくはたずねた。
「そんなことはないね。降ったばかりの雪だったからね。」
「でも山本さん、ター坊が水まいてこおらせたから、おばあさんはすべって転んだと思ったらしいですよ。」
「じゃ、やっぱりター坊のいたずらかね。」
と、パン屋のおばさんは首をひねった。
でも、ター坊はそこへは水をまいていないという。すべるはずのない店の前で、十円堂のおばあさんは、なぜすべったか。あれはただ「転んだ」をまちがえて「すべった」と言っ

たのだろうか。

★見たか！ 少林寺拳法「豆打ち」

探偵の仕事は、疑うことから始まる。
ター坊以外のだれかが、なにか理由があって十円堂の前に水をまいて、おばあさんをけがさせたとすると、二度目の事故、つまり台所の床板がはずれてけがしたことも、だれかのしわざと考えられないだろうか。

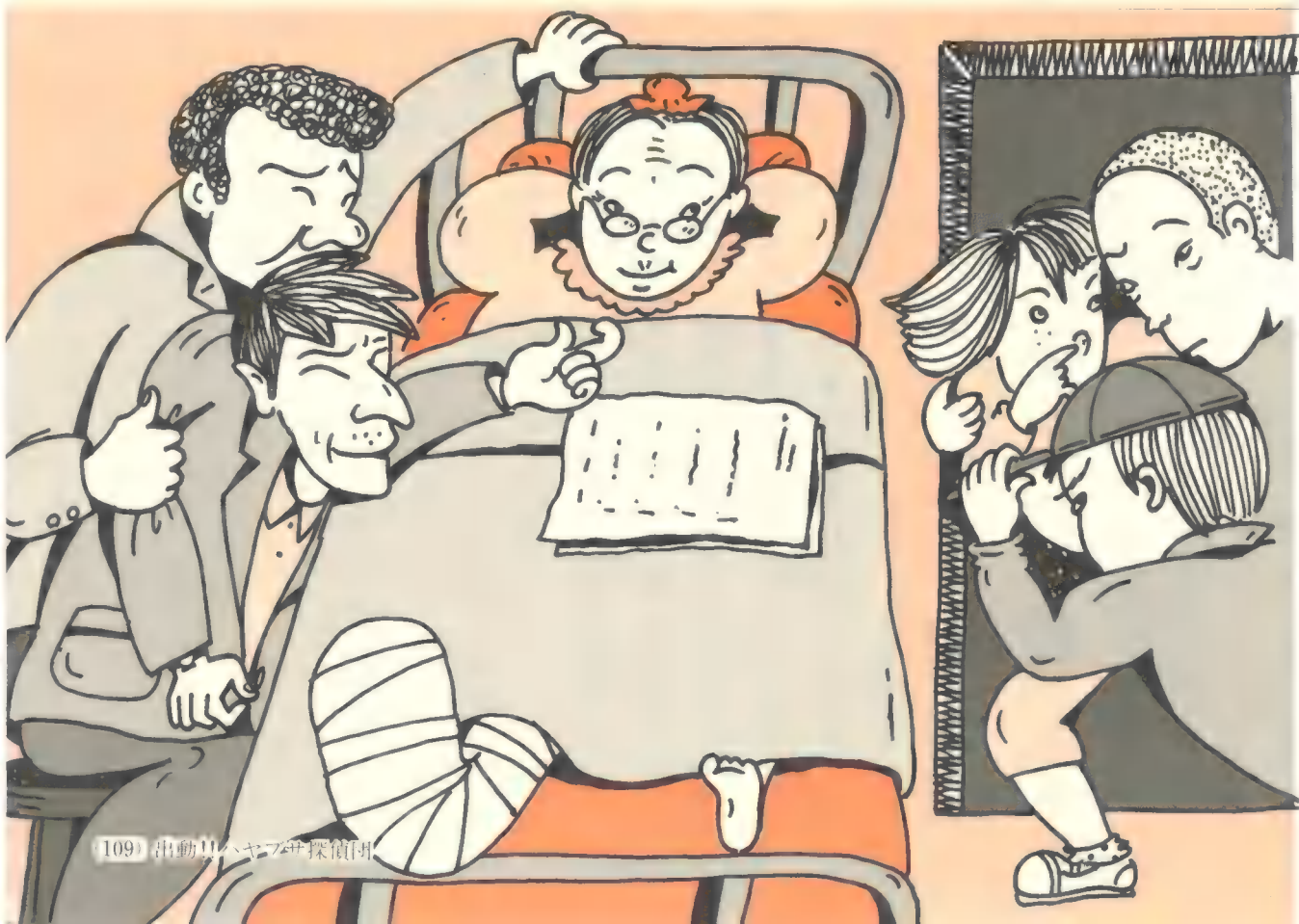
ぼくたちは、ふたたび病院に行った。こんどはおみまいでなく、おばあさんから事情を聞くためだ。

すると二人の先客がいた。ぼくたちは思わず顔を見合わせた。一人はこのまえもいた山本さんとかいうおじさんだったからだ。

「おう、またちびっ子のファンだ。おばあちゃんもてるね。」

山本さんはこう言うと、

「じゃあ、ひとつよく考えておいてね。けっして悪いようにはしないから。」

と言ってつれに目くばせして出ていったが、ドアのところでふりかえった。

「ばあさん、夕食にすしの差しいれでもしようか。」
だが、おばあさんはいらないと手をふって、顔はぼくたちに向けて言った。
「たびたびありがとうね。」
「おばあさん、ぼくお願いがあるんだけど。」
ぼくはさっそくきりだした。
「おばあさんがふみはずした台所の床板を調べたいんだけど……。」
ぼくは、しょうらい建築家になるつもりだけど、さいきんは少なくなってきた古い日本の家を研究しておきたいと言って、
「ついでに、こんど板がはずれないように直しておいてあげる。ぼく工作が大好きなんだ。」
「ついでに、ぬかみそをかきまわしておくわ。」
と、魔子が言ったら、おばあさんは、喜んで家のかぎを貸してくれた。
魔子には、もっぱら聞きこみを、そしてぼくと悟空とは、夜、十円堂の台所を調べることにした。
十円堂は、昔ふうの家だから、台所はたたみ半分くらいが床板で、そこから一段下がったところが、洗い流し場になっている。台所の数枚の床板は、とりはずしができるようになっていて、床下は夏でもすずしく、ぬかみそのおけもそこにあるのだ。おばあさんは、その床板がはずれたために床下に落ちて足をいためたのだ。
床板ははずれたままになっていた。
「アッ、ココヘンヨ。」
悟空が指さした。懐中電灯を近づけると、床板をささえているはずのさんが細すぎる。よくよく見るとけずったあとがあるのだ。床下は土だが、そこに木のくずが落ちている。

「ダイクサンノ　シュウリデ　ナイネ。」
「ちがう。ぎゃくだ。……ということは、だれかがしのびこんで、わざわざ、さんをけずった可能性が高いということだ。」
「ナンノタメ　ケガサセルタメ……」と言いかけて、悟空はおや？　っと目を光らせ、床下の土に手をのばした。
悟空が、なにか紙切れのようなものを拾いあげたときだ。
「だれかいるのか！」
げんかんでおとなの声がして、ぼくたちは息をのんだ。足音が近づいてくる。二人だ。しまった。ぼくは自分で、自分の体がふるえだすのがわかった。
「オチツクコトネ」と、悟空が耳元でささやいた。
そうかここは台所だ。出口があるはずだ。ぼくはそっと手で台所のかぎをさぐりあてて、くるくるとはずしはじめた。
かぎがはずれたとき、ぱっ！　と電灯がつけられた。
「あっ！　がきだ。」
「つかまえろ。」
とさけぶ声を背にして、間一髪ぼくたちは外へ飛びでた。
「にがすな！」
「表へ回れ！」
さけぶ声をあとにして外へ出たものの、そこはせまいふくろこうじでにげるためには、家にそって表に回らなければならない。
ぼくたちが表通りに飛びでようとすると、すでに先回りしたおとな、しかも、二人が立ちはだかっている。暗いし街灯の逆光で顔はわからないが、大きくて強そうだ。
「マカセテ、ダイジョウブイ。一、二、三デ　トビダスノダヨ。」
悟空がまた耳元でささやいた。やけにおちついている。
「がき！　出てこい！」
「イチ、」悟空が声をあげた。
「ニイ、サン　イケ。」
「うわっ！」
「いたっ！」
二人の男が顔をおおった。
ぼくが走りだすとどうじに、
あ、そうか。少林寺拳法平安二段の悟空がとくいの「豆打ち」の秘技を出したのだ。

ぼくに続いて男たちの横をすりぬけて通りに出た悟空は、くるりとふりかえって、かたひざをついた。
ぼくは、悟空の少林寺拳法を見ようというおちつきをとりもどした。
悟空がポケットからピーナッツを取りだして、てのひらにのせた。
男たちが追ってくる。
まさに三メートルにまで近づいたとき、ふたたび悟空の右人差し指が、左手のてのひらにのったピーナッツを「ぴゅーん！　ぴゅーん！」と二発はじいた。
「あっ！」「ちくしょう！」
男たちは、ふたたびうめいて顔をおさえてたじろいだ。
そのすきにぼくらは逃走した。

☆　☆

家に帰ってぼくは、さっそく魔子に電話した。
「悟空がいっしょでなかったら、ぼくはあいつらにつかまって行方不明、どこかの地下室で白骨で発見！　というところだったよ。ところできみのほうの調査は？」
「パン屋のおばさんが、『おや、こんなに早くめずらしいね』と言ったのは、不動産屋の山本さんのことね。あの山本さんかけごとが好きでね、ふだんはおくさんに店をまかして自分はパチンコや……。」
「それに競輪なんか？」
と、ぼくが言ったら魔子がおどろいた。
「え、一郎君どうして知ってるの？」
ぼくは、悟空が床下から拾った紙切れをポケットから出した。
「十円堂の床板のさんがけずりとられたあとがあったんだ。そして、床下に競輪の半券が落ちていたんだ。」
なまけものの不動産屋の山本さんが、めずらしく、しかも寒い雪の朝に起きたのはなぜか？　また、ター坊が水をまいた場所ではないのに、近所に聞こえるように「そんなとこに水をまいちゃだめじゃないか」と、大声をだしたのはなぜか？
さらに、十円堂の床板のさんをけずりとったのも、競輪の半券から推理して、山本さんという線が出てくる。
さらにおかしいことは、その山本さんはせっせと、病院のおばあさんをおみまいしているのだ。このなぞは？

☆　☆

次の日の夕食のときだった。

ぼくは、ニュースを見ていて思わずあっとさけんだ。町のど真ん中にある三差路のとうふやさんにトラックがつっこんだ画面が出ていた。アナウンサーは、暴力団の地上げ屋のしわざと言っていた。

「ねえパパ、地上げ屋ってどういうこと?」

パパは、うるさがらずにわかるように教えてくれた。

そのとうふやさんは地主から土地を借りてお店を出し、何十年もそこで商売をしてきた。ところが土地の値段がどんどん上がってきたので、地主は銀行か大会社に売ってもうけたい。しかし、とうふやさんがそこをどいてくれなければ、売ることができない。そこで暴力団の地上げ屋を使って家をこわさせた。貸した土地は、家が建っているあいだは貸しておかねばならないが、家を新しく建てなおすときには契約をしなおさねばならない。そのとき地主がいやだと言ったら、借り手のとうふやさんは、立ちのかなければならないのだそうだ。

するとママが言った。

「このあさひ市でも、商店街のあたりには地上げ屋がやってきて、さかんに土地を売れ売れとやってるそうよ。マーケ

ットのおばさんから聞いたんだけどね。」

そうか！　とぼくは思った。

日曜日、ぼくたちはカメさんのアパートに行った。

「やあきみたちか。また、焼き鳥パーティでもやれって言うのかい。」

「ぼくたち今日は探偵として来ました。」

「おやおや……こわいね。」

「カメさんはたしか『よけいなことするな』ってなぐられたって言いましたね。」

「そうだっけ。」

と、カメさんがとぼけた。

すると、魔子がポケットからヨーヨーを取りだして、

「カメさんのおじさん大好き。子どもをばかにしないで、ほんとのことを話してくれるからね。」

そう言いながら、魔子の目がカメさんのひとみを深くのぞきこんだ。

魔子、とくいの催眠術をかけたなとぼくは思った。よし、行けとばかりぼくは質問した。

「カメさん、十円堂のおばあさんとなかよしだったでしょ。

二人とも子ども大好きだしね。」

「うん……。」

「おばあさんから、いろいろ相談をうけたでしょう。」

「ああ。」

「どんな？……もしかして十円堂の土地のことじゃない。」

「そうだよ。」

「カメさんは、十円堂のおばあさんに、だまされちゃいけない、っていうようなことを言ったでしょう。」

カメさんはうなずいた。

よし、これでわかった。でも、カメさんをなぐったのは不

動産屋の山本じゃないらしい。とすると、このまえの夜、ぼくたちを追ってきた二人のひとりが山本で、あと一人は仲間の暴力団か地上げ屋ということになる。

「きみたちにはまいったな。」

魔子が催眠術をといたので、カメさんの口の聞き方がふだんのようになった。

ぼくは、ぼくたちが調べたことをカメさんに話してやったので、カメさんはおどろいたり感心したりした。

「で、おばあさんは土地を売るの？」

「いや、売らないから、やつらは手をかえ品をかえなんとか土地を取りあげようとしているんだ。」

「そりゃそうだよ。おばあさん、いつか南の島から自分の子が帰ってくるかもしれない、って夢を持っているんだから……。」

と、魔子が目をうるませて言った。

「土地を売らないとわかったものだから、やつらはなんとかして、おばあさんを病院か施設に入れて、そのあいだにごまかして、土地を処分しようとたくらんでいるんだよ。」

と、カメさんは説明してくれた。

☆　☆

ぼくたちは山本の行動を見張った。

今までの調べで、犯人はわかったはずだが、カメさんに言わせると、もうひとつ決め手になるしょうこがほしいと言うのだ。

ちょうど冬休みになったから、ぼくらは行動しやすくなった。ある昼すぎ、悟空が自転車でかけつけてきた。

「イマ　アノフタリ　キッサテンニ　ハイッタヨ。」

「どうしてあの二人とわかるの。」

「ダッテ　ヤマモトト　モウヒトリ　メニ　フタシテタ。」

「ふた？……ああ、眼帯ね。」

「アレ　ボクノ　マメウチノ　セイ。」

ぼくは、悟空の少林寺拳法のいりょくのすごさに、いまさらながらおどろいた。

ぼくと魔子は、探偵七つ道具をバッグにつめ、自転車に飛びのった。ぼくと悟空は暗がりとはいえ、一度顔を合わせているから気づかれやすいというので、魔子があとをつけることになった。

「わかった。尾行ははじめてだけどやってみるわ。あぶなく

なったらたのむわね。」
魔子はトランシーバーを取りだして言った。ひとつはぼくが持っている。
喫茶店は十字路の角にあるから、外からでも、なんとなくようすはわかる。
山本と眼帯をした男は、中央の柱の横でひそひそ話している。
魔子はと見ると、山本と背中をへだてたとなりの席にいてストローに口をやっている。
「ちえっ！　魔子のやつチョコレートパフェなんか食べてやんの。」
ぼくは舌打ちした。喫茶店に入ったのは探偵団の仕事だから、チョコレートパフェの代金は探偵団から出る。といっても、それは三人で出しあったお金なのだ。
とつぜん山本が立ちあがってくるりと魔子に向きなおった。
魔子が立ちがった。両手でひっしにテープレコーダーをかかえている。
「助けて！」
こっそり録音していたのに気づかれたのだ。

魔子がドアから飛びだしてきた。
そのあとを山本と眼帯の男が……。
「お客さん、なにをするんです。」
と、店のマスターが飛びだしてきた。
ほかの客もなにごとかと立ちあがっている。
「悟空、魔子を助けて!」
ぼくはさけんだ。しかし、そのときには悟空のてのひらには、ふたつぶのピーナッツが。
悟空の右人差し指がぴーん、ぴーんと空に鳴る。
そのしゅんかん、「いたっ!」「や、やったな。」
山本たちが、うずくまって足をおさえた。そのすきにぼくは魔子の手を引いて走った。ひっしに……。
だがその必要はなかった。ちょうど通りかかったパトロールの二人の警察官が、山本たちの前に立った。
ぼくたちは交番に連れていかれた。
魔子がテープを回した。
「競輪場のそばにてごろなマンションがあるんだ。そこへ移ってもらおうじゃねえか。」
「うん、と言うかな、十円堂のばばあ。なにしろ子ども好きでやっている商売だ……。」
「おい山本、おまえ三千万が欲しくないのか。もうひとおしなんだぜ。」
聞いていた山本とあいぼうが顔色を変えた。
「本署へ行ってもらう。」
年長の警察官が言ったあと、
「きみたちからもいろいろききたいんで、別のパトカーに乗ってもらうがいいかね。」
ぼくたちはいっせいにVサインを出してうなずいた。

(終わり)

●作家紹介

浜野卓也

静岡県に生まれる。山口女子大学教授・『東国の兄弟』などの作品がある。
体力のみなもとは足。落ちた筋肉を復活させるため、もっぱら水泳。それもバタ足を主にしたクロールでがんばる。

『読み特賞』の作品を募集します

●本誌の来年度版（1993年夏刊行）に掲載する作品を募集いたします。子ども達が興味をもつ清新な創作をご応募ください！

《応募要領》

▽**資　格**　制限なし。（住所・氏名・年齢・電話・職業を明記）

▽**作　品**　未発表の創作に限ります。ただし同人誌および私家版に発表したものは構いませんが、必ずその旨を原稿に付記してください。（枚数も明記してください）

▽**読者対象**　本誌は、小学1年～6年まで学年別に6誌あります。原稿には必ず対象学年を明記してください。

▽**枚　数**
『1年の読み特』『2年の読み特』〉400字詰用紙で6枚～15枚
『3年の読み特』『4年の読み特』〉400字詰用紙で15枚～35枚
『5年の読み特』『6年の読み特』〉400字詰用紙で20枚～40枚

▽**締切日**　1992年11月30日（当日消印有効）

▽**入選発表**　編集委員および編集部で選考したうえ本人に直接通知し、『読み特』誌上に作品を掲載します。

▽**賞　金**　入選作に十五万円（一点）

▽**送り先**　〒145　東京都大田区上池台4－40－5
学研・第一編集局**「読み特賞」**係（太字は朱記で）
TEL03－3726－8279

※応募原稿はお返しできません。

盲導犬サーブ記念

動物とわたし文学賞

の原稿を募集しています。おうちの方にお知らせください。

●**この文学賞の趣旨**　主人をかばって車にはねられ，三本足となった盲導犬サーブを記念して，「動物とのふれあい」をテーマにした児童文学作品（フィクション・ノンフィクションを問わない）を，資格を問わず，広くもとめます。

●**原稿枚数**　400字詰め用紙にて30枚～50枚程度の未発表の作品。

●**受賞作**　サーブ大賞（5作）──→賞金各30万円（あとで学研より単行本にて発行。）
優秀作（5作）──→賞金各5万円　佳作（10作）──→記念品

●**応募先**　名古屋市港区十一屋1－70－4（〒455）
中部盲導犬協会内　盲導犬サーブ記念文学賞係（052-382-6776）

●**応募しめきり**　平成4年9月30日（当日消印有効）

●**受賞発表**　平成4年11月25日（新聞に発表・受賞者にも通知します）

●**選考委員**　戸川幸夫・小林清之介・森一歩・井上明子・角田光男・手島悠介・河西光

《感動ノンフィクション》

とっておきの話

井口民樹・文
北沢優子・絵

◀ペルシャ湾で水鳥を助ける馬場さん。
▼助けた水鳥の油を洗いおとしているところ。

▶高校の先生から大相撲に挑戦した成松。

1 離島の野球教室

「あっ、村田兆治だ！」
野球のユニホームを着たちびっこたちの顔が緊張した。
プロ野球の元ロッテの名投手、村田。野球少年たちは、彼が豪速球で相手のバッターをばったばったと三振に取る姿を、いまでも覚えている。
ただし、見たのはテレビでのこと。じっさいに元プロ野球の名選手を間近に見るのは初めてだ。
「みなさん、こんにちは。生月島ではたいへん野球がさかんだと聞いて、今日は楽しみにしてまいりました。」
村田さんが、あの馬のように長い顔に笑みをたたえてあいさつをした。
ここは長崎県北松浦郡生月町。平戸市の北西、東シナ海にうかぶ離島だ。昨年夏、平戸との間に生月大橋が完成して交通は便利になったが、人口がどんどん少なくなっていく過疎の町。
でも、町にじまんできるものが三つある。新鮮な魚と、夏の砂浜にさくはまゆう。それともうひとつが野球のさかんなこと。
生月中学は、三年前に県の中学野球大会で優勝したことがあるし、町内には草野球のチームが十一もある。
この日、平成四年四月十九日には、町民グラウンドに村田兆治さんをむかえて「野球教室」が開かれたのだ。
まず、「村田兆治に挑戦」というイベントが始まった。
村田さんが投げる。それをちびっこたちが打つのだ。参加したのは小学五年生以上。そして生月中学の野球部員たち。
「ひえーっ、速い！」
バッターボックスに立った少年たちは、の

けぞっておどろいた。村田さんはかげんして投げてくれているのに、往年の名投手の生きた球はものすごく速い。

それでも、こつんとバットに当てる選手がいる。

「うん、なかなかいい振りをしているぞ。」

村田さんにほめられて、その子はとくいそうだ。

「挑戦」が終わったところで、こんどは中学チームと大人の選抜チームとの親善試合。村田さんは熱心に試合を見つめたあと、手ぶり身ぶりをまじえながら解説と指導をしてくれたのだった。

村田さんにとって、これは離島めぐりの第一歩。今年、かれはこうやって十五か所の離島で野球教室を開く計画を立てている。

村田さんは二十三年間、プロ野球生活を送ってきたが、その間、ひじを故障して再起不能とまでいわれた危機をのりこえてきた。

「ぼくがあそこまでやれたのも、ファンのみなさんのはげましがあったからです。これ

からはその恩返しをしたいんです。」
そう思って昨年、北海道の過疎の町、中標津や、新潟県の離島、粟島浦などで野球教室を開いてきた。そのときに感じたのは、少年たちのうれしそうな目のかがやき、そしてガッツ……。なかには、村田さんから手をとって教えてもらったことに感激し、なみだを流していた子もいたという。
（ふだん、いいコーチにめぐまれないこの子たちこそ、野球を通じてスポーツの楽しさを味わってもらおう）と村田さんは決心したのだ。
「人の住んでいる離島が、日本には二百以上もあるそうですね。今年は十五か所ですが、何年かかっても、二百か所は回ります。私は二百勝投手ですからね。これが、これからのライフワークです。」
村田さんは、そう語っている。

2 最後の希望

オペレータールームに並ぶ電話がどれもこれも鳴りっぱなしだ。
ここは札幌市の一流デパート「M」。池上芙佐子さんは家庭の主婦であるかたわら、Mの通信販売専門のオペレーター（電話受付係）として、パート勤務していた。
何人かの電話注文を受けたあと、さっきから鳴りつづけている電話を取りあげた。
「お待たせしてもうしわけありません。」
「よろしいかしら。」
相手は品のよさそうな、でも、消え入るようなかぼそい声で話しかけてきた。
「送っていただいた冬号のカタログにのっている、カシミヤのコートをお願いしたいんですの。」
十万円を超える高価な黒のコートだ。ところが、七サイズか九サイズか、なかなか決まらない。サイズによって袖付け、肩幅が少し

ちがってくる。その差に神経質なほどにこだわって、迷っているのだ。

さんざん迷って、七サイズに落ちついた。でも、こういう人はまた心変わりすることが多い。それで池上さんは、電話を切るまえにいちおう自分の名を名乗っておいた。十分ほどして、やっぱり電話がかかってきた。

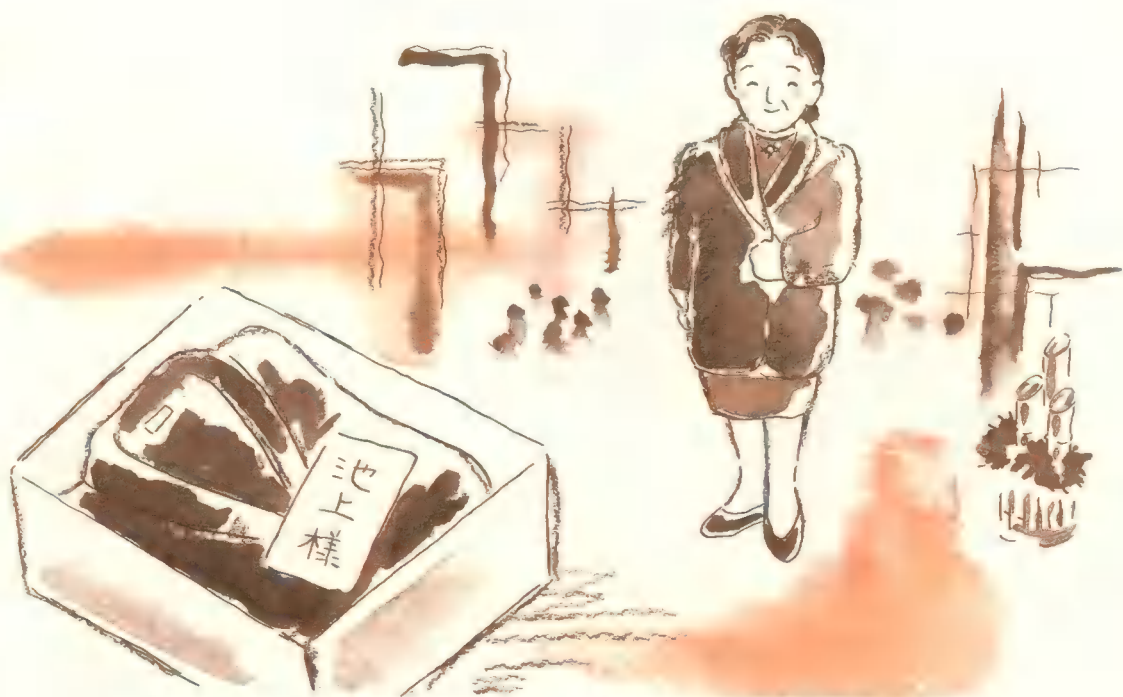
「ごめんなさいね。ゆったりしていたほうが着やすいと思いなおしましたの。冬場は中に着こみますものねえ。」

あなたはどう思うかと言うので、池上さんは、私も少しぐらい大きめのほうが……とあいづちを打った。

「そうですよねえ。」

これで九サイズへの変更が決まった。

でも二度あることは三度ある。池上さんはそんな予感がして、まだ注文をコンピュータに打ちこまないでおいた。はたして、三度目の電話がかかってきた。池上さん名指しである。

「やっぱり考えましたが、年ですからもうこ

れ以上太ることはありませんものね。七号でよろしいと思うんですの。おかしいでしょうけど、私には大きな買い物ですので、ついしんちょうになってしまって……。」

本当は、さっさと決めてくれるのが楽なお客さんである。優柔不断なお客の相手は疲れるものだ。オペレーターによっては、つい言葉がつっけんどんになることもある。

でも池上さんは、相手の顔がわからないだけに、言葉のやりとりにはいつも気をつかっていた。

「いいえ、奥様、カタログだけではお迷いになるのはあたりまえですわ。」

彼女はそう言ってからつけくわえた。

「ご来店なさって、いろいろ試着なさってからサイズをお決めになっては？」

すると相手はこう答えた。

「じつは退院してきたばかりで、まだ人ごみの中に出ていく気がしませんのよ。でも、お正月ぐらいには街に出かけたいなと思いまして。そのときに、このコートを着たい

と思ってますの。」
あ、そうだったのかと池上さんはなっとくがいった。カタログで注文してくる人には、このように外に出られない人が多いのだ。
　このカシミヤコートは予約注文なので、お届けは二か月ほど後になる。そのことを告げてから、彼女が言った。
「早くお元気になってください。コートが届きましたら、お召しになってお買い物にいらしてくださいませ。」
「ご親切にありがとう。そうさせていただきますわ。」
　相手は病みあがりの声だが、うれしそうだった。
　二か月あまりがたった。お正月休みが明けて出勤した池上さんのもとに、ひとつの商品が返品されていた。箱を開けてみると、黒のカシミヤコート。池上さんあての手紙がそえられていた。依頼主のおじょうさんからのものだ。
「本日、商品を受け取りました。三日前に配達のご連絡を受けたのですが、その日は母の通夜の日でした。母が楽しみにしていたコートなので、私ども子どもで寸法が合う者がいれば形見に……と思ったのですが、体型がまったくちがって、だれも合わないのです。まことにもうしわけありませんがお返しさせていただきたく……。」
　あんなに思いなやんだあげくに決めたコートなのに、あの奥さんはいちども袖を通すことなく亡くなったのだ。池上さんは、顔も知らない相手なのにとてもさみしい思いがした。でも、最後に言葉をかわしたときの、彼女のうれしそうな声。彼女は、お正月にあのコートを着て街に出るのを楽しみにしていた。あのときの注文は、人生最後の希望を燃やしたときだったのだ。
　あの方の最後の希望の糸になれたんだわ……。池上さんはそう思うことにした。
（注・この項、池上芙佐子さんのエッセイ「聞いてよ、奥さん」＝未刊＝を参考にさせていただいた。）

3 挑戦

大相撲春場所二日目。

大阪府立体育館の客席にはまだ空席がめだっていた。三段目の取り組みが終わって、ようやく幕下の番組が始まろうとしていた。

ところが、幕下のはなを切って土俵に上がった力士に、客席から若貴も顔負けのすごい声援が飛んだ。

「ナリマツーッ！」

学校の先生という職をなげうって相撲界に入った成松を、みんなが激励していたのだ。

成松伸哉、このとき二十七歳。

熊本県出身の彼は、日本大学の相撲部で活躍した。四年のときは主将として全日本学生選手権の団体で優勝、個人では三位の成績だった。

卒業後は山口県立大津高校の教諭となり、保健体育の先生として生徒たちから人気があった。

四年間、先生を勤めたあと、なんと今年二月、相撲協会の新弟子検査を受け、プロの相撲取りをめざすことにしたのだ。

その決心を聞いたとき、周囲はあぜんとした。新弟子になるのは、ほとんどが中学を卒業したての十五歳。それなのに、彼は二十七歳と年をくっているばかりか、妻も、二歳になる子どももいる。

おまけに、いま幕内で活躍している久島海は日大での一年後輩。大翔山は二年後輩だし、大翔鳳、舞の海は三年も後輩だった。

「あんた、正気なのか。これから後輩たちのふんどしかつぎをやるというのかね。」

そんなことを言う者もいた。

ふんどしかつぎとはきたない言葉だが、つまり関取の付け人のこと。相撲界では、十両以上が関取と呼ばれ、それ以下のものは関取の身の回りの世話役をやらされる。ちゃんこ

▲成松は夏場所も六勝一敗の好成績をおさめた。

なべを作るのも彼らの仕事なら、ふろたきやそうじも彼らの務め。そんな下積みの仕事をしながらけいこにはげむのだ。もちろんその間、給料は安く、とても妻子を養うことなどできない。

「とにかく自分の実力をプロでためしたいんだ。これ以上年をとると、もうそのチャンスもなくなるからね。」

成松センセイはそう言った。

そんな彼のよき理解者だったのが、夫人の千秋さん（二十八歳）。

「自分の思ったとおりやってみれば？　私や子どものことは心配しないで。私が働いてかせぎますから。」

かくて成松先生の挑戦が始まったのだ。

高校をやめるとき、生徒たちが「応援に行きますよ」というと、先生はてれながらこう答えた。

「関取になるまでは来ないでくれや。」

立浪部屋に入門した彼は、学生相撲出身ということで幕下付け出しからスタートを切る

ことになった。もし負けこせば、いっきに三段目まで落ちてしまう。

初の対戦が、三月九日の春場所二日目。相手は六つも年下の山の湖（北の湖部屋）。みごと上手投げで成松の勝ち。「きんちょうしていたので、なにもおぼえていませんよ」と、彼。

そしてこの場所、六勝一敗の好成績をおさめた。

「ほっとしました。でも、十両になるまでは、まだまだ……。」

後輩の舞の海らが幕内で土俵をわかせているのに、あくまでもマイペースの成松。山口の教え子たちは、「あくなき挑戦」の姿勢を、これから毎場所教えられることだろう。

今年六月、成松は二十八歳になった。

4 木綿のランドセル

「丸山ワクチン」で有名な丸山千里医学博士が、三月六日、九十歳で亡くなった。

なんでもお金、お金の世の中で、この人ほど清貧をつらぬいた人はめずらしい。

日本医大の皮膚科の医師だった博士は、戦前に多かった皮膚結核を治そうとして、結核菌から丸山ワクチンをつくった。これがガンにも効くというのでガン治療剤として厚生省に認可をもとめてきたが、いまだに結論が出ていない。

博士は医師としての生涯のほとんどを、このワクチンの研究にささげてきた。とぼしい給料まで研究費に入れあげてきたので、家計はいつも火の車だった。長女が高校に通っていたころ、千円の授業料が払えないこともあったという。

そんな博士を、かげでささえてきたのが夫人の夏さんだった。

「どん底の生活をしているときでも、母はいつもおおらかで、子どもたちにみじめな思いをさせませんでした。」

長男の茂雄さん（エピック・ソニー副社長）はそうふり返る。

茂雄さんは、いまでもだいじにしまっているものがある。それは、小学校時代に使っていた布製のランドセルだ。

「母が、厚い木綿の布でランドセルをぬってくれたんです。ぼくはこの手作りのランドセルを、子ども心にほこりに思っていましたね。だから、どうしても捨てられないんです。」

博士も日常生活では夏さんを頼りにしていて、「あなたがいないと、ぼくは家のことはなにもわからないのだから。ぼくより長生きしておくれよ」などとよく言っていた。

その言葉どおり、博士は献身的な夏さんにみとられながら、やすらかに永遠の眠りについたのであった。

5 思いやり

「シチズン・オブ・ザ・イヤー」という賞がある。新聞社の社会部長らが選考委員になって、無名の良き市民を表彰するもので、時計メーカーが主催している。

一九九一年度の受賞者の一人に、川崎市の獣医さん、馬場国敏さん（四十四歳）が選ばれた。

馬場さんは近所のイヌ、ネコや小鳥たちの病気を治療するかたわら、近くの多摩川で傷ついて飛べなくなった野鳥の治療を、無料で続けている。

でも、受賞の対象になったのはそんなことではない。全世界に貢献したひとつの出来事に対してであった。

昨年の湾岸戦争のとき、みなさんはテレビでこんな光景を見たはずだ。石油の流出で真っ黒になったペルシャ湾で、身動きのとれなくなったかわいそうな野鳥たちの姿を。

クウェートの油田を爆破したのはイラク軍ともいわれ、あるいはアメリカ軍ともいわれる。

（責任はどっちにあるかを言っている場合じゃない。とにかく、石油まみれになったあの野鳥たちを救わなくては！）

そう思った馬場さんは、環境庁を説得して、みずからペルシャ湾に出かけていったのだ。馬場さんの助手として、日本鳥類保護連盟の関研究員、環境庁野生生物課の奥山技官も同行した。

サウジアラビアのアルジュベイルにある野生生物救護センターに到着したのは、昨年四月二十二日。あたりはオイルスモッグで昼でも真っ黒。とてもこの世の風景とは思われなかった。

すでにいろんな外国人ボランティアが救護活動にあたっていたが、獣医さんが来たのは

◀石油流出の犠牲となった動物（上）と水鳥を救出する馬場さんたち。

はじめて。みんな大喜びで協力してくれた。

馬場さんらはそれから二か月のあいだに、約千五百羽の野生生物を救護センターに収容した。ペルシャウ、カワウ、ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、それにカモメやサギなど。

これらのほとんどが石油を飲みこんで胃や肝臓をこわしていた。馬場さんは、黒い海岸で野鳥をとらえてくると、まず胃を洗浄し、栄養剤をあたえる。羽が油のヨロイになっているため、重い身体をささえるあしが関節炎を起こしているものもある。この場合はすぐに切開して、抗生物質を注入してやる。こうして回復を待つのだが、とちゅうで死んでいくものが多い。南方のきれいな海に放鳥できたのは約五百羽にすぎなかった。

なかにはペルシャ湾の水鳥をとりに降りてきたハヤブサが、石油でやられるというケースもあった。

「石油流出の犠牲となって死んだ動物は、全部で二万羽とも五万羽ともいわれています。人間のおろかな行為が、そこに生息してい

◀救出した水鳥に注射をして手当てをする馬場さん。

る動物だけでなく、生物の生態系全体をおびやかしたのです。」

馬場さんはそう言う。

それにしても、一市民にすぎない馬場さんが、なぜペルシャ湾にまで出かける気になったのか。

「ふだん、動物のおかげで生活をさせてもらっているから、その恩返しですよ。」

あごひげをはやした馬場さんはじょうだんっぽくそう言って、つけくわえた。

「地球上に住むのは人間一種類ではないんですからね。ほかの動物への思いやりがあってこそ、みんなが共存できるのだと思います。人間同士でもそうです。相手の気もちになって行動をすれば、周りの環境も良くなっていくのです。」

馬場さんは、受賞のとき、賞金として百万円をもらった。いま、そのお金で、野鳥のためのリハビリセンターをつくっている。多摩川で、テグスにひっかかって羽をやられたヒヨドリ、廃油を飲んで身体の弱ったカモなどを、元気にして放鳥したいからである。

6 自分に負けるな

「自分に負けてはだめ。」
これが福岡市に住む、武田イクさん（七十二歳）の口ぐせだ。人気タレントの武田鉄矢のお母さんである。
イクさんは、小学生のころから苦労の連続だった。八歳のときに母が家出をして、まもなく父も行方不明になってしまった。五歳の弟が食中毒で苦しんで死んだときは、（両親さえいてくれたら！）と泣きじゃくった。
その後、熊本のおじさんの家に引きとられたが、おじさんが商売で失敗。イクさんは洋服店に弟子入りした。朝は四時に起きてごはんをたき、夜は十一時まで仕事をつづけるというたいへんな毎日だった。
（友だちは上の学校に進んでいるのに、なぜ自分だけが……。）
そう思うと、気もちがいじけて、ぜんぶ投げだしてしまいたくなる。でも、そんなとき彼女は、いつも自分にこう言いきかせた。
（自分に負けたらだめだ。どんなときでも将来に希望を持って前に進んでいこう。）
福岡で結婚し、七人の子どもを生んだ。そのうち二人は栄養失調でなくしてしまった。イクさんはほそぼそとたばこ屋さんを営んでいたが、食べるものにも不自由する、苦しい時代だったのだ。
それでもイクさんは、せめて子どもには上の教育を受けさせたかった。長男を大学に進ませ、その学費をかせぐためにひっしでがんばった。朝はとうふを売って歩く。昼間は外国人ハウスのメイド。そして夜はその家のベビーシッター。ひとの三倍も働いた。
そのころ末っ子の鉄矢が、母に泣きついた。
「ぼくの名前が学校に張りだされてる。給食費ば払わんからばい。」
イクさんはこう答えたものだ。

「いまは、うちが倒産するかどうかのせとぎわ。学校は給食費払わんでも倒産せんよ。」

そんなイクさんも、一度だけ自分に負けそうになったことがある。

食べるのにも不自由をしていた昭和二十三年に、彼女は妊娠をした。これ以上子どもが増えては、一家が飢え死にしかねない。そう思った彼女は、夫にないしょで、妊娠中絶の手術をしてもらおうと決心した。

家を出て病院に向かうとちゅう、べんとうを忘れてとりに帰る夫とばったり出会った。

「おまえ、どこに行くんだ。」

ふしぎそうに聞く夫に、わけを話した。すると彼は、「うーん」と考えたあと、言った。

「苦しくても生もうや。長男のあと、ずっと女の子がつづいていたけど、こんどは男の子の気がする。」

翌年、ぶじに生まれたのが鉄矢である。

のちに鉄矢は「母に捧げるバラード」というフォークソングが大ヒットして、歌手の仲間入りをした。しかし、あとがつづかず、うちしおれた姿で東京から帰ってきた。

イクさんは、しかりつけた。

「弱い自分に負けとるよ。もう一度、やり直せ！」

鉄矢は今の自分があるのは、この母のおかげだと思っている。

ひとはだれでも弱い心を持っている。そんな自分に負けるか、勝つか。それが、その後の自分の人生を決めるのではないだろうか。

（終わり）

●作家紹介

井口民樹

一九三四（昭和九）年、大分県に生まれる。早稲田大学卒業。産経新聞社を経て、執筆活動に入る。

著書に『ガンが消えた』『再考丸山ワクチン』『東京ベイエリア殺人事件』『モザンビークから来た天使』など多数。

この夏は休みを返上して、丸山千里博士の伝記に取り組む予定。

写真提供／共同通信社・産経新聞社・馬場国敏

●外国読み物●

ぼくが先生だったら

旧ソ連の小学生にとっていちばんこわいものは？

ナターリア・ソロムコ・原作
中込光子・訳
河口峰子・絵

みんなは六年生になったのに、ミチューシキンだけは五年生のまま。今日もアンナ先生におこられると思うと……。

1

ぼくが学校へ行くのをどんなにいやがってるか、だれも知らない。もちろん自分が悪いんだ。勉強ができないから！

友だちはみんな進級したのに、ぼく一人だけ落第してしまったんだ。校庭で遊ぶのも、こっそりたばこをすうのも、カバンをふりまわして学校から帰るのもいっしょだけど……。やっぱりなにかが変わって、へだたりができてしまった。きっと、みんなは六年生で、ぼくだけ五年だからだ。それでぼくはみんなをさけ、会わないようにしている。新しい友だちはいない。一年下のガキなんか、およびじゃない。だからぼくはいつも一人だ。一年間本を読もう。本は大好きだ。でもだれかと話をしたい。なにもかもわかってくれて、腹(はら)を立てたりしない人と……。母さんは？　母さんはそんなひまない。それに本は好きじゃない。ぼくが落第したのを苦にしているんだ。

「勉強しなさい！　そんな本を読んでなんの役に立つのよ。必要なことは教科書に全部書いてあるんだから。」

ぼくは母さんに口答えしない。とくに今は、母さんがもう

ひと月も入院して、ぼくは一人でくらしているから。

いちばんいやなのは夜だ。暗いのはこわくない。でも家の中が静かで、物音ひとつしないのはたまらない。これにはなれることができない。だから、夜も草原で馬たちとすごすんだ。

馬たちはやさしいけど、無口だ。ぼくは馬たちを相手におしゃべりする。馬たちはじっと聞いていて、そっと鼻をならすんだ。馬たちといっしょにいると楽しい。馬番のサモイレンコおじさんも、ぼくを追っぱらったりしないし、馬に乗るのも大目に見てくれるんだ。

2

始業のベルが鳴って、ぼくの毎日の苦しみが始まった。

アンナ先生が教室に入ってきた。

「おはよう、着席。欠席者はだれ？」

「全員出席です」と、日直が返事をする。

「宿題はなんだったかしら？」

クラスじゅうがきんちょうでしーんとなった。宿題は詩の暗記だった。

「詩を暗記してくるんだったわね。全員ちゃんとやってきましたか？」
「全員やってきました」と、優等生のレンカが答えた。
「そんなことありえないわ、レンカ。じゃあ、あなたから。」
レンカはすらすら朗読して、いつもの〈5〉をもらった。
「アファナシェフ！」
「ぼく、あの……。」
クラス一ののっぽが立ちあがった。
「やってこなかったのね？」
「家の菜園の手つだいで、できなかったんです。」
「着席、2点。」
「あしたまでに暗記してくるから、〈2〉はつけないで……。」
「暗記してきたら、相談しましょ。次、ツイブリコ！」
「欠席してます！」と、ツイブリコが言った。
「ふざけるんじゃありません！」
ツイブリコがため息をつきながら始めた。
「しめった牢獄にいた……おりの中で育てられた若ワシが……」
「その先は？」
「えーと」と、ツイブリコは時間をかせいだ。
「いんきなわが友は……」と、レンカが横からそっと教えた。
「翼をふって……。」
「横から教えるのはやめなさい！」
レンカはびくっとしてだまった。もちろんツイブリコも。
「さあ、続きはどうしたの、ツイブリコ？」
「忘れました。」
「もっと勉強しなさい。すわって。これも〈2〉。」
「あちゃあ！」
ツイブリコはへいきそうな顔をした。
「うちでしかられても、へいきだといいけど。ミチューシキン！」
さあ、ぼくの出番だ。
「はあ？」と、ぼくはばか笑いをうかべてきいた。
「はあじゃありません。立ちなさい！」
「どうして。」
「ミチューシキン、先生をおこらせないで。」
ぼくは起立した。
「宿題やってきた？」

ぼくは返事をしなかった。ばかみたいな顔をしていた。
「ミチューシキン、もう一年、五年生に残りたいの？」
「そう。悪い？」
「なんて子なの！　ミチューシキン、あなた、はずかしくないの？」と、先生は大声でおこった。
「ぜんぜん！」
アンナ先生は、ゆううつそうにぼくを見た。
「暗唱するの、しないの？」ときいたけど、先生は、もちろん、ぼくが宿題をやってこなかったと思っていた。
「します」と、ぼくは意地悪で答えた。
先生は、ぼくから、いいことはなにも期待できないとわかっているから、けいかいした。
「かつて、冷たい冬の間、しめった牢獄にいた。見ると、おりの中で育てられた若ワシが、ゆっくりと山を登っていく……。」
予想外にぼくがじょうずに朗読するので、クラスじゅうは大喜び。
「ミチューシキン、やめなさい！」
「いんきなわが友は翼をふり、いげんをもって、音もなく歩

く、大きなブーツをはき、ヒツジの半オーバーを着て、まどの外で血のしたたるえものをついばんでいる……。」

「ミチューシキン、わからないの！　だまりなさい！」

ぼくはだまらなかった。

「日直、いそいで校長先生を呼んできなさい！」

校長先生がやってきた。校長先生は大学を出たばかりの若い人だ。とても変わっていて、一度もどなったことがない。みんなをこわがっているようだ。もしかしたら礼儀正しいだけかもしれない。ぼくは、ときどき校長先生が気のどくになるくらいだ。

「アンドレイ……、また授業をぶちこわしたんだね？」と、校長先生はため息ついた。

ぼくは返事をしなかった。

「きみはこの詩はよく知ってるじゃないか。どうして、すなおに、その……、これ見よがしの態度をせずに暗唱しないんだね？」

ぼくはだまっていた。

「なんのことですの？　この子にはなにを言ってもむだですよ、石頭のはじ知らずなんですから！」

「それはちがうと思いますよ。アンドレイ、校長室に来なさい、話をしよう。」

「行かないよ！」

「どうして？」

「行きたくないもん！」

「ミチューシキン！　あなた、だれに向かって話してると思ってるんですか？」

「この子にはかまわないでやってください。」

静かにそう言った校長先生の顔は悲しそうだった。

「アンドレイ、すわりなさい。気が向いたら、放課後、校長室によりなさい。さあ、授業を続けて。」

校長先生が出ていくと、教室はきんちょうでしずまりかえった。

「いつになったらわたしたちは、あんたから解放されるのかしらね？」と、アンナ先生がゆううつそうにきいた。

「今すぐ」と答えて、ぼくはカバンをつかむと、口笛をふきながら外へ出た。ろうかを通り、だんだん足を早めて階段をかけおり、校庭を横切ると、校庭のすみに積まれた大きなまきの山のかげにかくれて泣いた。

「どうしたの？　だれにしかられたの？」
まきの向こうからささやき声がした。
ぼくはさっと顔をふって、いそいでなみだをふいた。ほかにもいたなんて、よせよ！　まきの山とへいのすきまに、耳の大きなちびがすわりこんでいた。三年生の子だ。
「どうして、こんな所にいるんだ？」
「教室から追いだされたの。お兄ちゃんは、どうして泣いてたの？　ぶたれたの？」
「ばかか。ぼくが泣いてただって？」
「そう見えたんだもの。ぼくはぶたれるからなの。」
「だれに？」
「パパに。今日、パパが学校に呼びだされるの。」
「もしかしたら、ぶたないかもしれないじゃないか。」
「ううん、ぶつにきまってる。〈2〉をとったら、そうじ機のぼうでたたかれる。ぼく、遠くへ行くんだ。」
「出てこいよ。どうしてそんな所にいるのさ。おまえ、名前は？」
「ミトリー。」
ちびはやっと聞こえるような声で返事をした。
「ぼくんちへ行こう。腹へってないか？」
ちびは返事をしない。信用してないんだ。
「とまってもいいぞ。」
ミトリーは短い金髪のまつ毛をばちばちさせた。

翌日、ぼくらは一日じゅう草原ですごした。
ぼくはミトリーに馬の乗り方を教えた。サモイレンコおじさんはぼくらを見ても、たばこをすっていて、なにも言わなかった。もともと無口なんだ。
日のくれるのがとても早かった。太陽が西にかたむいたので、家に帰ることにした。
「あっというまに一日が過ぎちゃったねえ！　楽しかった。あしたも来ようよ、ね？」
「ここにいたのか！」
後ろですごい声がした。
ミトリーはびくっとして、ふりかえると、青くなった。ぶしょうひげの大男が、ブーツをならしてぼくらの方へ走ってきた。

「どこにいたんだ、ぼうず!」と言って、大男はミトリーを両手にだきあげ、かたくだきしめた。

「パパー、パパー!」

ちびはその人の首にしがみついた。

「あの先生の首をへし折ってやるから、こわがらなくていいぞ。」

大男のパパは、ミトリーのふるえる背中をなでた。

ミトリーのお父さんは、しくしく泣きだしたちびを、おおまたで運んでいってしまった。ぼくはひとり家へ帰った。

家へ帰ると、郵便受けに『ミチューシキン様、息子さんのアンドレイの不品行につき、至急学校へ来られたし』というメモが入っていて、アンナ先生のサインがあった。メモは破りすてた。家の中はからっぽだった。ストーブのそばにすわって、冷たいじゃがいもを食べた。それから病院の母さんに会いにいった。ぼくはいつでも面会させてもらえるんだ。

母さんは悲しそうにぼくを見た。

「ちゃんとごはん食べてる?」

「食べてるよ。」

「やせちゃって。学校はさぼってない?」

「うん。」

4

翌朝、ツイブリコがやってきた。

「アンナ先生が、言ってたよ。今日お母さんが来なければ、退学だって。」

「勝手にすればいいさ。」

「お母さん、知ってるの?」

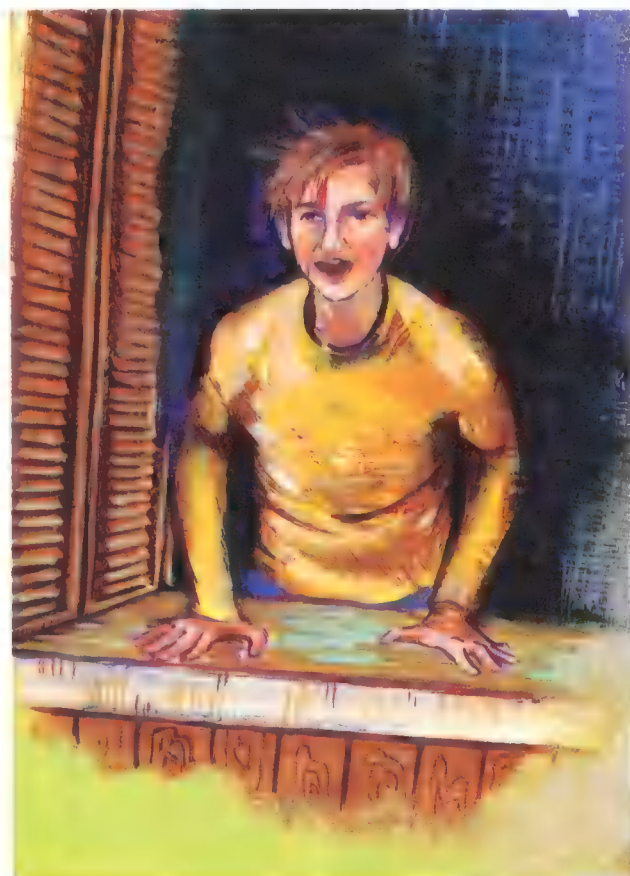
「母さんは入院してるよ。」

「じゃあ、一人なんだ。ついてるなあ。それで学校には来な

いの？」
「あんなとこ行くほど、ばかじゃないよ」と、ぼくはどうしようもない不良らしく、にやりとして答えた。
「じゃあね。でも、なにするの？」と、ツイブリコは坂道を下りながら、ふりむいてきいた。
「クラブへ映画を見にいくよ。」
ぼくは家の中にもどって、まくらの下から読みかけの本を取り、まどぎわにすわった。クラブに行くというのはうそだった。金もないし、金があっても、どっちみち行く気はなかった。

5

「ミチューシキン、ドアを開けて！　いるのはわかってるのよ、すがたが見えたもん！」
と、優等生のレンカが大声で呼んだ。
ぼくはテーブルの下に座っていた。ぼくはどうでもよかった。なにがあっても出ていくもんか。
そのあと、ツイブリコが来た。
「なんだ？　どうしてしつこくするんだよ？」

「アンナ先生が来いってさ。」
「そんな命令なんて知っちゃいない」と、ぼくは不良みたいに外につばをはいた。
「ぼくは自由なんだ。なんの用さ？」
「ぼくが、きみのお母さんは入院してるって言ったから。」
「たのみもしないのにか？」
「ぼくはよかれと思って……。みんなで校長室にも行ったんだよ。」
「なんでだよ？」
「きみを退学させないでってたのみに。」
「大きなお世話だよ！　おまえたちには関係ないの、わかった？」
「どうして関係ない？　きみだってクラスの一員だろう。行こうよ。じゃないと、先生、病院のお母さんのところへ文句を言いにいくよ。お母さんがかわいそうだよ。」
ぼくらは学校へ行った。アンナ先生が言った。
「やっと来たのね、ミチューシキン。わが国は義務教育制だから、あんたも学校に来なきゃいけないの！　わかった？」
ぼくはだまっていた。

「わからないわよね。でも、それはどうでもいいの。どっちみち勉強しなきゃならないんだから。だけど、お母さんが入院してるって言えばいいのに、ちゃんと口があるんでしょう？」
「ありますともちゃーんと」と言って、ぼくはあかんべーをしてやった。
「いいかげんにしなさい。まともに話をしようとしているのが、ちっともわかってないのね！　どうしようもないわ。」
優等生のレンカがろうかにいて、だれかを待っていた。
「ミチューシキン、おなかすいてない？」

こいつ、気はたしかかよ? ぼくは立ったまま目をしばたいた。なにか言わないと……。すぐに腹(はら)を立てて、しつこくまとわりつかなくなるようなことを。

「勉強のやりすぎで、頭がおかしくなったのか?」

でもレンカはおこらなかった。

「まじめよ。お母さんが病気なんでしょ。うちへ行きましょう。うちのママの作るボルシチおいしいんだから!」

「ぼくだって、きみんちのママに負けないボルシチぐらい作れるさ!」

「うそ!」

「かけてもいいよ! 作ってみせようか?」

レンカは疑(うたが)わしそうにぼくを見た。でも本当なんだ。ぼくの作るボルシチは、よだれが出るほどおいしいんだ。母さんから、入院するまえにしっかり教わったんだ。レンカとぼくは、ぼくのうちへ向かった。

木戸の所にツイブリコが立って、待っていた。あいつ、どうしてぼくにつきまとうんだろう?

「映画(えいが)、おもしろかった? 話を聞かせてよ……」と言って、ツイブリコはぼくらのあとについてきた。

ぼくの作ったボルシチは上できで、レンカの気に入った。
「わたし、あんたがうそついてると思ったわ。だいたい、あんたって、ちょっと変わってるわね。」
「すごくたくさん本があるんだなあ！」
「わたしね、あんたほんとに不良だと思って、こわがってたのよ。」
そのとき、だれかがそっとドアを開けようとしている音がしたので、ツイブリコが開けにいった。
「どっかのぼうずが呼んでるよ。」
出ていってみると、外にミトリーが立っていた。
「どうしたんだい？　さあ、入れよ。」
「あとにする。友だちが帰ってから……。」
「クラスの子だよ。入れよ。さあ、こわがらないで！」
「やだ……。ねえ、あした、とまりにきていい？」
「うちで許してもらえるのかい？」
ミトリーは泣くまいとして、口をとざしていた。
「なにかあったんだな？　また家出する気か？」
「今日、テストがあったの。もし〈2〉だったら……。」
「いいかげんにしろよ！　まえもぶたれるって言ったけど、作り話だったじゃないか！　ぶたれなかったろう！」
「最初はぶたなかったけど、あとでひどくぶたれたの」と小声で言って、ミトリーはシャツをまくりあげた。あばらぼねの上に、むらさき色のすじが三本はっきり見えた。
「アンドレイ、お茶を飲みましょう。お湯がわいたわ」と、レンカが中から呼んだ。
「今行く。おまえも来いよ。もしかしたら〈2〉じゃないかもしれないだろう。」
ミトリーはだまっていた。レンカが戸口まで出てきた。
「あんた、何年何組？」
ミトリーは地面を見たまま、長いこと一言も言わなかったが、最後にやっと聞きとれるようなかぼそい声を出した。
「三年A組。」
「マリア先生が担任ね。じゃあ、確かめられるわ。わたしが学級日誌を教員室にとどけたとき、マリア先生がちょうど点数をつけてるとこだったもの。あんた、名前は？」
「ソコルコフ。」
ミトリーの目には、もうなみだがうかんでいた。
「泣くのはまだ早い！　泣くな。でないと、おでこをごつん

だぞ！　レンカ、見てきてくれないか？」
「いいわ。」
レンカは三十分してもどってきたが、そのときにはミトリーは、目の前の不幸のことなどわすれて、テーブルにすわって、ツイブリコにお茶をはねかけていた。
「〈２〉だったわ」と、レンカは気のどくそうにミトリーを見やった。
「しかられる？」
ミトリーは泣きだした。
「ノートをぬすんでこようと思ったんだけど……、だめだったの。先生、テストのできが悪いって、一人でぷりぷりしてた。」
「夜にしのびこめば？」と、ツイブリコが提案した。
「わたしもそう思ってさぐってみたら、ノートは家へ持ってかえるって。」
「どうして！　採点したのにうちへ持ってかえるの！」と、ツイブリコがいきまいた。
「ぶ、ん、せ、き、するためよ！　先生がそう言ってたわ。」
ミトリーはずっと泣いていた。
「それで、先生は帰るしたくをしてた？」と、ぼくは質問した。
「ううん、まだ半分残ってるって。」
「ミトリー、泣くな。ここで待ってろ。レンカ、きみのネッカチーフをかしてくれよ。」
ぼくはもう決心がついていた。

6

五月の晴れわたった夜空には、星がまたたいていた。ぼくの馬はまちの暗くなりかけた道を、ほこりをけたててしっ走した。学校の敷地に入って、げんかんのそばの暗がりにかくれた。ぼくは目のすぐ下まで、レンカのネッカチーフでふくめんをした。
まにあった。教員室の明かりが消え、マリア先生が校舎のげんかんに姿を現し、通りに出て、くつ音をひびかせながら歩いていく。
ぼくの心は空っぽで、冷たくなった。
「とまれ！　ノートを出せば命は助けてやる！」と、ぼくは先生に追いついて命令した。

マリア先生はきゃーっとさけんで、背中をへいにおしつけた。

「だれなの？」

「ノートを出せ！」

「ばかなまねはよしなさい！　警察を呼ぶわよ。」

「三年A組のテストのノートをわたせ、早く！」

「これはどういうこと？　わたし頭が変になりそう！」と、マリア先生はノートの束をぼくに差しだした。

ぼくはあたたかい夜のやみの中を、家へかけもどった。

「やるじゃないか！」と、ツイブリコが歓声をあげた。

「まあ、アンドレイ、すごいわ！」と、レンカ。

ミトリーはなにも言わず、心から感心した目でぼくを見ていた。ぼくらはまたお茶を飲み、ストーブでノートを燃やした。

7

二時間目の休み時間に、ツイブリコがぼくをすみっこに引っぱっていって、おびえたようにささやいた。

「にげろ、警察が来てるぞ！　さいふをさがしに。」

「なんのさいふ？」

「なんのだって！　きみが昨日、マリア先生からとったやつだよ！　さいふには百ルーブル入ってたんだろう！」

「ぼくはとってないよ、ばかな……。さいふなんかに用はないよ。」

「じゃあ、だれがとったんだろう？」

「そんなこと知るか！　ぼくはノートだけいただいたんだから。」

ツイブリコは安心したように、息をはきだした。

「けど、マリア先生が昨夜ごうとうにあって、さいふをとられたって話なんだ。さがしにいこうよ。きっと落ちてるんだ。」

「わたしもいっしょに行くわ。二人だけでひそひそ話して、わたしにはなにも教えてくれないんだから！」

レンカがおこって、追いかけてきた。

ぼくらはへいにそって走った。あたりが明るくて、なにもかもがちがっていた。レンカとツイブリコが草むらをさがした。

「あった！　ばんざーい！」と、ツイブリコがさけんだ。よれよれの茶色のさいふだった。ぼくらは学校へ飛んでかえった。

「あんたは教室にもどって！　わたしとツイブリコは、ぐうぜん見つけたふりをして、教員室にとどけるから。」

ベルが鳴って、ぼくは教室にもどったけど、二人は教員室からもどってこなかった。

「ペンを出して、ノートを開きなさい。今日は作文を書いてもらいます。ピオネール新聞から依頼されたんです」と、アンナ先生が言った。

「ひゃー！」

歓声とも悲鳴ともつかないさけびが教室に流れた。

「『もしわたしが先生だったら』という題です。」

「ひゃー！」

「学校について書けばいいわ。好きな科目や好きな先生のこととか……。さあ、おしゃべりはやめて始めて。」

レンカとツイブリコはまだもどってこない。

「でも、先生になりたくなかったら？」と、ぼくはすわったまま質問した。

「ミチューシキン、だれもあんたに先生になってくれとたのまないわ！　あんたは書かなくていいわ。授業とはちがうから。」

だけど、ぼくは書いた。急いだから、まちがいだらけだろう。でもかまうものか！　ゆかいでいて、こわいような気分だった。

「ぼくが先生だったら」

五年B組　アンドレイ・ミチューシキン

ぼくは、先生にはぜったいなりたくないし、面白半分で

想像するのもごめんだ。でも、今とはなにもかもちがって、まったく逆にならなければだめだということはわかる。

たとえば、こんなふうだ。ぼくが登校すると、先生たち全員がぼくに「おはよう、アンドレイ！」と、やさしい目をしてあいさつする。

「おはよう」とそっけなく答えて、ぼくはさっさと通りすぎる。

「校長先生をすぐ呼んで！　二日も会ってないけど、またさぼってるのかな？」

「会議があったんですよ」と、先生方はかばう。

「まあ、どこに行っていたか、調べればわかることだ」と、ぼくはおどかす。

校長先生が走ってくる。びくびくしてうつむいている。

「わたしに用かい、アンドレイ？」

「ぼくのクラスに来て！」と、ぼくは冷たく言う。

「どうして呼んだかというと、またまた先生方の規律が乱れて、授業中のふるまいが目にあまるからなんだ。」

「やれやれ、またですか？」

「昨日、地理の時間にユリア先生はペトロフをばか呼ばわりしたんだ！　これがわが校の教育法なのかい？」

「アンドレイ、わたしの手には負えないよ。何度もユリア先生には注意したよ！　だが、彼女のこともわかってやってほしい。家庭内でもめてね、このまえも話しただろう。」

「けど、ばか呼ばわりはひどいよ。」

校長先生はだまったまま、みじめな顔をして、しかられた子どもみたいに、いまにも泣きだしそうだ。

「しょうがないな！　泣くより、教育の本質をつきつめてみるのが先でしょう。かんたんなことだ。」

「とんでもない。きみが、まずつきつめて、教えてくれないか。」
「ぼくに言わせれば、ただやさしくなればいいんだ。ただ生徒に愛情を持てば。」
「それが、そんなにかんたんにはいかないんだ！」

「あと二十分しかありませんよ、いそいで！」と、アンナ先生が大きな声で言った。レンカとツイブリコはまだ来ない。どこにいるんだろう？
「ミチューシキン、あんた、なに書いているの？　書かなくていいって言ったでしょう。」
ぼくは返事をせずに、続きを書いた。

「アンナ先生には、とくに注意してほしい。昨日も先生は……。」
「ひどいことを言ったのかね？」
「もっと悪いよ。ラプキンをなぐったんだ！」
「なんてことだ！　はずかしいかぎりだ」と、校長先生は頭をかかえる。

「アンナ先生をすぐここに呼びたまえ！」
アンナ先生が連れてこられた。校長先生はこうふんして真っ赤になり、すぐには口がきけない。
「あなたは、なんてことをしてくれたんです！　どうしてそんなことができるんですか、え？」
アンナ先生は、とつぜん鼻をひくひくさせはじめる。
「二度とわたし、あんなことはしませんから。じつはあの子が……。」
「あの子ってだれです？」
「ラプキンです。ラプキンは落ちつきがなくて。思わずたたいてしまったんです。」
「なーるほど」と、わざとゆっくり言って、校長先生はぼくの方を見た。
「どうしたもんかね、アンドレイくん？」
「アンナ先生は退校処分にすべきだと思う。ぼくらは先生に苦しめられるのは、もううんざりだ。説得も協力もしたけど、がまんにも限界があるよ！」
「ごめんなさい！　けっしてもうしないわ。」
アンナ先生は声をあげて泣く。
「だめだ。たのんでもむだです。あなたの口約束は聞きあきました。あなたは別の学校に移ってもらって、そっちに処分をまかせます！」

そこでベルが鳴った。ぼくは作文の紙をアンナ先生にわたした。レンカとツイブリコはどこだろう？
二人は次の授業のとちゅうになって、やっともどってきた。
二人とも、変な顔をしていた。
「どうだった？」と、ぼくは小声でツイブリコにきいた。
返事がない。
「なあ、どうだったんだよ？」
「むだ話はやめなさい」と、物理の先生が注意した。
「三ルーブルしか入ってなかったんだ。」
「で、残りは？」
「なかった。」
レンカもおしだまって、こまったようなふくれっ面をしていた。
「ぼくたち、身体検査されたんだ。それから、どこへかくしたか白状しろって命令されて……。」

こんどは、三人ともがだまってしまった。

ノートのことは、最初は思い出しもしなかった。最初は百ルーブルの行方だけをきかれた。そのあと、どういうわけか警察は学校に来なくなり、マリア先生はつんとした顔して、人と目を合わせないようにしていた。それがとつぜん、ノートのことが問題になった。あのばん、レンカが学校に来て、ソコルコフが何点とったか、きいたことも。

でも、レンカはなにも言わなかった。そこでミトリーとミトリーのお父さんが呼ばれた。ミトリーはだまって泣くばかりだった。でもそのあと、お父さんになぐられて、全部話してしまった。

「アンドレイ、開けてくれ」と、ドアの向こうで声がした。

いやなこった！　ぼくらは、遠くから校長先生の姿に気がついていた。だからテーブルの下にかくれて、じっとしていた。

「アンドレイ。家にいるんなら、中に入れてくれ。どうしてもきみと話があるんだ」と、校長先生がまた言った。

「話なんてしたくない！　帰って！」と、ぼくはどなった。

「どうして声だすのよ！　だまってればよかったのに！　そのまま帰ったのに！」と、レンカがとがめた。

「アンドレイ、いるんだろう？」

ぼくは返事をしなかった。

「きみの作文を読んだよ。聞いてるかい？　多くの点できみの意見に賛成だ。」

「ぼくはどうでもいいんだ！」と、ぼくはどなった。

「うそを言いなさい。わたしの言うことを聞くんだ、おこら

ないで。じっさい、万事それほどかんたんじゃないんだ。わたし自身、教師になれば、なにもかもうまくいくと考えていたんだ。だが、そうはいかなかったよ。」

「そんなこと、ぼくには関係ないよ。」

「あるさ！　生徒に愛情を持つということだって……かんたんなことだろうか？　やさしくなれだって！　どうやってきみに愛情を持てるんだい？　きみはだれも必要としていないのに！　一人でくらして、本を読んで、ほかのことには無

関心だ。みんなをわきからながめて、弱いところをほじくりだして。きみといっしょにいると、寒ざむするよ。まるできみは人間じゃないみたいだ！　そうやって、一生ひとりぼっちで生きていくんだね。」

「ばかなこと言ってらあ！　アンドレイといっしょでも寒いもんか」と、ツイブリコがささやいた。

「校長先生の言うことなんか、聞いちゃだめよ！　あんたはひとりぼっちじゃないわ！」と、レンカ。

「アンドレイ。だが、わたしたちも……まちがってた。許してくれ、アンドレイ！」

「ぼくをほっといてくれ！　ぼくはなにもいらないんだ！」

けっきょく、ぼくはにげ出した。裏の窓から野菜畑に出て、へいをこえて、森の中へ。レンカやツイブリコの前で泣きだすわけにはいかなかったからだ。

9

ぼくはもう一週間学校へ行っていなかった。学校なんて、くそくらえだ！　学校へ行かなくても、こんなに楽しくやってるさ。行くもんか！　草原で、サモイレンコおじさんや馬たちと毎日すごした。というのは、アンナ先生が家のそばで待ちぶせしていたからだ。

「校長先生から、さんざん言われたんだよ。どなったんだって、想像つく？」と、ツイブリコがこうふんして話した。

いやあ、あのもの静かで、礼儀正しい校長先生がどなるところなんて、ぼくには想像がつかなかった。

「レンカに聞いてみろよ！」

「校長先生は、あんたの作文を職員会議で読んでね、わたしたち全員は、もち、わたしたちじゃなく、先生たちがよ、生徒からこんなふうに思われているとすれば、はずべきだって言ったんですって。そしてアンナ先生に、あんたを学校に連れもどすようにって命令したのよ」レンカも言った。

「校長先生、こわい顔して、学校の中を歩いてるのよ！」

「アンナ先生に、アンドレイをつれてもどってくるか、あんたがとてもふゆかいな目にあうかどっちかだって、言ったってさ。」

だからアンナ先生はぼくを待ちぶせてるんだ。〈ふゆかいな目〉にあわないように。

「もどる？」と、レンカがきいた。

ぼくは首を横にふった。
「どうして？　ずっとこんなふうにくらすの？　勉強しないで？　でも大人になったとき、どうするんだよ？」
ツイブリコが、おそるおそるきいた。
「森の番人になるんだ。森の番人で大事なのは森を知ってることで、数学や化学や物理なんか必要ないもん。字はちゃんと読めるし。森でくらして、木を世話して、動物にエサをやって……、ひまなときに本を読むんだ。」
「森でひとりぼっちじゃこわいわ」と、レンカが考えこんだ。
「へいきだよ。うるさくしかったり、どなったりする人はいないからね。せいせいするくらいさ！」
それは負けおしみだった。朝、レンカとツイブリコが学校へ行ってしまうと、さびしかった。馬とおしゃべりするやり方も、ほとんどわすれてしまった。もちろん、馬は大好きだけど、やっぱり人間じゃないもん。
学校なんかなかったら、どんなにいいかなあ！　みんなでここの草原でくらせたら！　せめて、春から秋まででも。サモイレンコおじさんは、いつものとおり、たき火のそばにすわって、だまっていた。夜が知らないうちにそっとしのびよってきた。
空が暗くなり、風がやんで、青白い月が出た。ぼくはあったかい草の中にねころんだ。地面から冷気が伝わってくる。
馬たちが鼻を鳴らした。

10

「アンドレイ！　どこにいるんだい？」という声で、ぼくは目をさました。もう朝で、太陽が上り、草つゆが光っていた。
ぼくは草の中に身をひそめた。

「アンドレイ、ぼくらだよ、出てこいよ！」
大人の声じゃなかったので、ぼくは立ちあがった。五年B(ビー)組のみんなだった。ぼくは出ていった。
「ばんざーい！」とさけんで、みんながかけよってきた。
「ミチューシキン、元気？」
「おまえ、やるじゃん！」
「あんたが作文に書いたことは、みんな正しいわ！」
「アンドレイ、腹(はら)へってないか？」
「こんなとこにいて、いいなあ！」
ぼくはにこにこして立っていた。だれかがりんごをぼくにくれた。それをかじりながら、ぼくはきいた。
「これは、きみらが考えついたのか？」
「ぼくらは使者さ。」
「だれの？」
「きまってるじゃないか！　もちろんアンナ先生のだよ。だれのだと思ったんだい？　きみがもどらなかったら、学校から追いだされるんだよ、今日はその期限(きげん)の最後の日なんだ！　やったね、ミチューシキン！　いいきみだよ！　もどるなよな！」

みんなは口々に言った。
ぼくはなんだか落ちつかなくなった。
「お母さんが来て、泣いてた」と、アファナシェフが言った。
「お母さんて、いったいだれの？　アファナシェフ、なんの話だい？」
「だれのって、アンナ先生のお母さんだよ。ほかにだれがいる？　校長室にいたんだ。ぼく、見たんだよ。」
「うそだろう！」と、ぼくは言った。
「なんでぼくがうそつくんだよ？　すわって泣いてたよ。」
心臓がどやしつけられたみたいに、しくしくいたんだ。母さんのことを思い出した。教員室にすわって、ぼくがどんなに悪い子か聞かされて、そっと泣きながら、ぼくに二度とさせませんからと言う姿を……。
ぼくは苦しくなった。むねがいっぱいで、いたくなり、先生のお母さんや、泣いて許しをこうすべての人がかわいそうで、ぼくは草の中にたおれて、泣きたくなった。でも、泣かなかった。泣いてるひまなどない。おくれるわけにはいかないんだ。だって今日が最終日なんだから！
ぼくは口笛で馬を呼び、その背中にまたがると、草原をこえ、高い草の間をかきわけて走った。
「ミチューシキン、ミチューシキン、どこへ行くんだよ？」
というさけび声が、後ろでしたけど、ぼくは答えなかった。
ひづめを鳴らして、通りをかけのぼった。アンナ先生のお母さんが泣いている学校をめざして……。
こうさんだ。ぼくは泣かれると弱いんだ。

（終わり）

●作家紹介

ナターリア・ゾーレブナ・ソロムコ

ロシア、ウラル地方スベルドロフスク市に生まれる。モスクワ文学大学卒業後、「ピオネール」「カスチョール」などの児童雑誌に作品を発表。旧ソ連作家同盟会員。単行本では、『ぼくが先生だったら』と『消火栓第一号』が出版されている。若手作家の中心的存在。

★旧ソ連の小学校では、生徒は全員生徒日誌を持っており、授業で先生の質問に答えられたか、宿題はちゃんとやってきたかで、そのつど五段階の点がつけられる。

ユジノサハリンスクの夏

《写真ルポ》日本の列車が走るサハリン(旧ソ連)

平野伸明／文・写真

旧体制がこわれ、新しい世の中を目ざして苦闘している旧ソ連の現状をサハリンからおとどけします。

▲コルサコフ港（地図参照）。コルサコフは漁業基地で、木材加工業もさかん。

▲イリンスク号の船内でくつろぐ平野カメラマン。

▲平野カメラマンがサハリンまで乗ったイリンスク号。

▲日本が第二次世界大戦以前にしいたレールの上を、日本製の車両が走っている（右はくさってしまった機関車）。

★サハリンをめざして

ぼくは動物カメラマン。二十歳のころから写真を撮りはじめて、もう十年以上が過ぎました。今のぼくの夢は、いまだ多くの人々が足をふみいれていない場所が多く残っている国、ソビエトに住み、ここで生活する動物たちや人々の写真を撮ることです。

ソビエト大使館の人々にお願いして、待つこと半年。やっとのことで、ぼくはソビエトでしばらくのあいだ生活できる許可をもらうことができたのです。

一九九一年四月二十九日、午前八時、東京港のすぐとなりの川崎港の埠頭に着岸したイリンスク号は貨物船で、たくさんの丸太を積んできました。えんとつにソビエト連邦の国旗が描かれています。ぼくはこの船に乗って、あこがれのソビエト・サハリンに向かうのです。

通関や出国手続きをすませ、午後にはイリンスクの丸太の積みおろしも終わり、ぼくの

▲ユジノサハリンスクの市場のようす。色とりどりの果物や野菜が売られている。

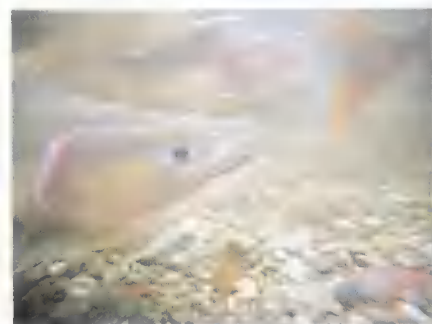
▲結婚式のごちそう。

▲アパートの前で遊ぶソ連の子どもたち。

▲市場には、服やくつなども売られている。

▲ミンクの飼育もサハリンの重要な産業だ。

▲カラフトマスが川いっぱいにさかのぼる。

▲ときには水面がもりあがるほどだ。

▲婚姻色をしたカラフトマス。

▲マスやサケからとれたイクラを加工する工場。

カラフトマスを水あげしたところ。▶

車が船のデッキの上に積まれると、「本当にこれからサハリンに行くんだなあ」とやっと実感がわいてきました。

やがて、イリンスクはいかりをあげました。川崎からサハリンまでは約四日の船旅です。日本の太平洋沿岸を北上し、サハリンをめざします。見なれた、東京の街なみがゆっくりと遠ざかり、やがて見えなくなると、ちょっぴりさびしい気分になりました。

★サハリンへ到着

長いようで短かった船旅でしたが、船はぶじサハリンの南の港、コルサコフに到着しました。

夢にまで見たサハリンです。街なみや港の景色は、日本とはまったくちがう景色です。風は冷たく、山の木々の芽吹きはまだまだのようで、北国のきびしさをはだで感じます。

船が着いた岸壁にはたくさんの人々が出むかえにきてくれました。

「伸明さんですか。」

▲氷と雪におおわれた北サハリンのツンドラ。

▲雄大な山々が続くサハリンの自然。

▲サハリンの美しい自然。

▲美しい水と緑。しかし、サハリンでも自然破壊が始まっている。

▲雨あがりに、巨大なにじがむかえてくれた。

電話できいたなつかしい声。これからぼくの通訳をしてくれるイリエーナさんです。

「はい、平野です。お世話になります。」

船の中で入国の審査がおこなわれ、荷物や車の通関手続きもぶじ終えて、いよいよサハリンでの第一歩をふみしめました。

車を走らせて、港から約四十分、ぼくたちはユジノサハリンスクに着きました。

「ここが伸明さんのお部屋があるアパートです。」

そこは、市内の中心から少しはずれた場所にありました。部屋は居間がひとつにキッチンルームとバスルームがひとつずつ、そして冷蔵庫とラジオと電話があります。

「すてきなお部屋ですね。イリエーナさん、どうもありがとう。」

と、お礼を言うと、イリエーナさんたちもとてもうれしそうに笑顔をかえしてくれました。

★サハリンでの生活

翌日からぼくは通訳のイリエーナさんの案

▲サハリンの朝やけ。きびしい自然のなかに多くの動物たちがすむ。

▲サハリンには多くの水鳥がすんでいる。

▶木のこずえから見おろすリス。

▲水鳥の代表白鳥。冬には日本にも飛来する。

▲500kgをこえるヒグマは迫力満点だ。

内で、ユジノサハリンスクの市内を見てまわりました。

イリエーナさんは、まずパンやジャガイモを売っている所を教えてくれました。ソビエトの人々の主食はパンとジャガイモ。パンはいっきん五ルーブル（日本円で約五十円＝当時）、ジャガイモは一キロ三ルーブル（約十五円）で売られていました。日本の物価にくらべたら安いかもしれませんが、ソビエトの人々の平均月収が五百ルーブル（約一万五千円）ということを考えると、けっして安くはないようです。

いろいろ回って少しつかれたうえに、帰りはバスがゆれてよけいつかれてしまいました。道をよく見ると、いたるところが穴だらけなのです。少し注意をおこたると、車は穴にドンと落ちてしまいます。だから、タイヤがパンクしたり、車そのものもこわれてしまいます。ときどき、ライトのない車やときには前のガラスが割れている車も走っています。整備不良でとても危険だと思いました。

サハリンでの生活も落ち着いたある日、ぼくはイリエーナさんの家に招待されました。

イリエーナさんの家族はご主人のセリョーシャさんと十一歳のアルチューマと五歳のローマ、それにおばあちゃんの五人家族です。まずはイリエーナさんのロシア料理をごちそうになり、そのあとアルチューマとローマにさそわれてシャーシキとよばれるゲームを教えてもらったり、日本でも見られるようなアイスホッケーのゲームをして遊びました。外で遊ぶときはサッカーが大好きというアルチューマ、大きくなったら英語や日本語を勉強するんだというローマ。元気で心のやさしい子どもたちにかこまれて、とてもしあわせそうなイリエーナさん一家でした。

★サハリンの自然

いまも姿を残す大自然を一目みたくてサハリンにやってきたぼくです。その期待にみごとにサハリンはこたえてくれました。

サハリンの自然で、なんといってもすばら

◀シャーシキとよばれるゲームで遊ぶアルチューマとローマ。

しいのは、六月から九月まで各地の川で見られるサケ・マスのそじょう（川をさかのぼること）です。川で生まれた稚魚たちは、えさの豊富な海にくだり、おとなになります。そして、こんどは卵を産むために、また自分の生まれた川に帰ってくるのです。

サハリンの川にやってくるサケ・マスは、おもにアメマス、カラフトマス、サケの三種類。とくに八月ごろに大挙してやってくるカラフトマスは、すごい。体長五十～七十センチほどに成長したカラフトマスたちが、河口から上流まで川はばいっぱいにびっしりうまるほどです。ぼくも初めてそのようすを見たときは、その数の多さに声もでないほどおどろきました。休日にはたくさんのサハリンの人々も家族で魚たちを見物にやってきます。

これらの魚たちは、とても大切な資源です。イクラ（タマゴ）をとったり、切り身を塩づけにしたりして、サハリンのみならず、大陸各地に出荷してゆきます。

さらにぼくはほかの動物も見たくて、北緯五十度をこえて、北サハリンにも足をのばしてみました。北の大地は景色も変わって、ツンドラ地方独特のただっぴろい平原に、無数の川が蛇行しています。

ここには、おおきなヒグマが生息していました。サハリンのヒグマは体格がよく、ときには五百キロをこえるものもいるそうです。ぼくが出あった数頭のヒグマたちは、子連れの家族だったり、氷の上でアザラシを食べていたり、さすが北の王者、迫力は満点です。ぼくは夢中でカメラのシャッターを切り、念願の北国の動物の姿をカメラにおさめたのです。

しかし、ヘリコプターに乗ってサハリンの山々を上空からながめたときに、ぼくは悲しくなってしまいました。美しい森をはぐくむはずの北国の山々が、伐採につぐ伐採で、無残にも丸裸同然なのです。開発を急ぐあまり、木を切りすぎ、木を育てることはおこたっていたのです。

北国のきびしい自然の中では、一度こわれ

▶子どもたちの表情はどこまでも明るい。

てしまった自然は回復がおそいのです。これ以上、大切な北国の自然を破壊しないで、といのらずにはいられませんでした。

★冬のサハリン

北国のサハリンでは、一年のうちの約半分はきびしい冬の生活をしいられます。街中にも根雪がつもり、人々はロシア独特の毛皮でおおわれた帽子をかぶり、足早に家路に急ぎます。元気なのはどこの国でも子どもたち。そりをひいたり、スキーをしたり、雪国の子どもたちもほっぺを赤くして、遊びまわっています。

外の寒さにくらべると、部屋の中は別世界。各部屋には、じゅうぶんに暖房がゆきわたり、シャツ一枚でもすごせるほどです。人々は家族だんらんで食事をとり、食後のデザートに熱い紅茶とケーキやチョコレートを楽しみながら、音楽を聞いたり、テレビを見てすごします。

ソビエトはいま、七十五年間続いた社会主義国家体制から、各共和国が集まって構成する独立国家共同体に変わりました。各地で民族問題が起こり、生活が苦しくなって、各共和国内は混乱が続いています。サハリンでも物価が何倍も高くなり、人々の生活も不安がますいっぽうです。

でも、性格の明るいロシアの人々は、きびしい寒さをたえぬいてきた歴史があります。ちょっとやそっとでは、へこたれません。きっと冬のトンネルをくぐりぬけて、春の日ざしをあびる日も近いことでしょう。

サハリンに一人でわたったぼくですが、いまは新しい家族もできました。

こんどは家族三人でサハリンにくらしながら、もうすこしサハリンの人々のくらしと、雄大な大自然を見つめてゆきたいと思っています。

（終わり）

冬のトンネルをぬけて、春の日ざしをあびる日が待たれる。

《ノンフィクション》困難にめげず立ち向かう心

「光を失った画家」エム ナマエ

岡本文良・文／高田 勲・絵

小学生のころ、雅則は父の郷里である裏磐梯地方で、毎年夏休みを過ごした。山や湖や林や草原が雅則の空想をかきたてた。

盲導犬とともに（中部盲導犬協会にて）

空想と絵の少年

雅則は、自分が三歳のときからきちんとした絵をかきはじめたことを、はっきり覚えている。

育ったところが、東京都新宿区で、近くにはんか街が多かった。そのせいで、雅則は、早くから祖母や両親に映画館や演芸場に連れていかれた。

あるとき演芸場で、かみしも姿の曲芸師が、かさを開きその上に大きな皿を立てて、くるくる回すのを見た。

（落ちたら、お皿が割れてしまうぞっ！）

ひやひやしたが、皿は落ちない。

その情景が、雅則の頭のフィルムにしっかりと焼きついた。

雅則は、それをクレヨンでじょうずにかいてみせたのであ

る。

「まあ、見て……。この子ったら、絵がこんなにじょうずよ。天才じゃないかしら？」

祖母と母がびっくりしながら、喜んだ。

雅則はそれがうれしくて、その後もどんどん絵をかきだした。

（父も、ぼくが絵がじょうずなことを喜んでいたのかなあ？）

雅則は、あとになってそのことを考えたが、それはよくわからなかった。

父は、雅則に映画などを見せるほかに、いろいろな本も買ってあたえた。

雅則は絵をかくだけでなく、それらの本にも親しむと、泣いたり笑ったり、知識をふかめたりして、楽しみの世界を大きく広げた。

やがて、新宿区内の小学校に入った。

「しっかりお勉強しなくてはね。」

「うん。」

はじめのうち雅則は、自分もほかの子と同じように、母とそういう話をかわしながら、小さな胸をときめかせたことだ

ろうと考えている。
でも雅則は、少したつうちに学校がつまらなくなってしまった。
雅則は、すでに三、四年生で習う漢字の読み書きができるようになっていた。算数の計算も、かなりのことができるようになっていた。それなのに、学校で教えるのは『あいうえお……』であり、『1＋2……』だったからである。
雅則は、授業中先生の話を聞きながら、いろいろな空想を楽しんだ。
日曜日に父といっしょに見にいった映画の時代劇を思い出し、自分がその主人公の鞍馬天狗になって、悪者をばったばったと切りたおしたりしていた。先生の目をぬすんで、こっそりその絵をノートにかいたりしていた。
「はーい、生江雅則くーん。この答えは、いくつですか？」
ふいに先生に指されて、まごついてしまったことが何回もある。
雅則は家でも、同じようなことを何度もしでかした。
あるとき、鞍馬天狗になっておもちゃの刀をふりまわし、庭にあったヤツデの木の葉をのこらず落として、父にしから

れた。
　クレヨンで部屋の壁いっぱいに鞍馬天狗の絵をかいて、母にもしかられた。
「まあ、なんてことを……！　ここは、お父さんの会社の社宅なのよ。」
　雅則は、二、三、四年とクラスでトップの成績を続けた。体が大きく力も強かったので、女の子たちの人気者だった。
　五年生になるとき父の転勤で、千代田区内の小学校にかわった。
　学校は、どうどうとそびえたつ国会議事堂の裏側にある有名校だった。引っ越しした社宅からバスで行くと、皇居のおほりばた、外務省、大蔵省、文部省などの前を通る。あたり一帯が、日本の政治の中心地で、人のおへそのような所なのだ。
　雅則は、なんだかとくいな気がした。
　でも学校がはじまると、雅則はびっくりした。
　クラスには外交官の子、大会社の社長の子というような子が何人もいる。
　ほんとうは家が遠くにあるのに、有名校に入るために、自分とお母さんの住所だけを千代田区に移して、その学校に入ったような子も数多くいる。
　そのせいかどの子も、よく勉強するし成績がいい。
　まえの学校でトップだった雅則は、たちまち下のほうに落ちてしまった。
　雅則はひどいショックを受けて、まえの学校では大きくはっていた胸が空気でもぬけたようにみるみるしぼんでいくのを感じた。
　それ以外にも、やっかいなことがかさなった。その年齢の子がたいていそうなるように、雅則にもクラスに好きな女の子ができたのである。
　きれいで、上品で、よくできる子だった。昔なら、とのさまの家のお姫さまのように思えた。
　雅則は、授業中もちらりちらりとその子の方へ目を走らせた。そのたびにきゅーっと胸がいたくなり、自分もその子に好かれたいなあという望みをいだいた。
（そうだ。そのためには、このままではいけないのだ！）
　雅則はそう思うと、空想と絵にかける時間をだいぶ勉強のほうに回した。

おかげで六年生になると、なんなくトップクラスの仲間入りがはたせて、その子の注目も引いたはずだった。

雅則の父は、福島県北部の裏磐梯地方の出身である。

小学生のころ雅則は、毎年その父の郷里へ行って、楽しい夏休みを過ごした。

六年生の夏休みは、とくに楽しく過ごした。

そのころ雅則は、SF（空想科学小説）にむちゅうになっていた。宇宙のどこかから地球に飛んでくるといわれるUFO（未確認飛行物体）の話には、とくに心をひかれていた。

裏磐梯には、山があり、湖があり、林があり、草原がある。

（こんな場所こそ、UFOがいちばん飛んできやすいところだ。）

雅則はそう考えて、UFOが裏磐梯に飛んできたところを空想した。

空想のなかで、UFOに乗ってきた宇宙人と親しくなり、自分もそれに乗せてもらって、いろいろな探検、冒険をした。大好きなクラスの女の子もいっしょだった。それだけに幸せな感じがして、楽しい夏だった。

画家になろう

やがて、同じ千代田区内の有名中学校に進んだ。

がらりと環境がかわって、小学校で好きだった女の子への恋心も、しだいにうすれた。それはただ、心地よい春風のような思い出となって、かすかに雅則の心の中に残った。

しかし中学生になってもかわっていないものが、一つあった。空想と絵が好きなことだった。

雅則にとって、空想と絵は別のものではなかった。

絵をかくといっても、雅則は人物の肖像画や写生的な風景画は、あまり好きではなかった。自由自在にものごとを空想し、それを自由自在に絵にしていくのが、もっとも好きだった。

そういう意味で、雅則にとっては空想と絵は一つのものといえた。

雅則はつねに、空想的、幻想的な絵をかいては、うっとりしていた。

（将来、画家になろう!）

そういう人生の目標も、しぜんにかたまった。

(175) 光を失った画家　エム　ナマエ

ただそのころから、雅則は、この世の多くの親がそうであるように、父も雅則を画家にはしたくないと思っているらしいことがわかった。

雅則はまだ中学生で、そういう父に反抗する気にはなれなかった。

(でも、ぼくはやっぱり画家になるんだ!)

その志だけは変えずにひそかに絵をかきながら、父の前ではおとなしくしていた。

「慶応大学の付属高校を受けなさい。」

三年になると父に言われた。

「うん、いいよ。」

雅則は、逆らわずにそれに従った。そのうえ難関をみごとに突破した。

埼玉県内にある付属高校に通った。ゆたかな田園風景に心をうばわれた。雅則は裏磐梯へ行ったときのように、空想と絵心をそそられた。

高校三年になるとまた父に言われた。

「慶応大学の法学部に行きなさい。」

父は、雅則が絵をかきつづけていることを知ってか、さら

に続けた。
「法学部以外だったら、学費は出さないよ。」
「お父さん、わかってるよ。」
雅則は、また言われるとおりに慶応大学法学部に入った。
もちろん、画家になるという初志は捨ててはいなかった。
大学の同好会に、『マンガクラブ』というのがあるのを見つけた。

マンガこそ、空想したものを自由自在にかける最高の絵である。雅則は磁石に吸いつけられる鉄のように、マンガクラブに飛びこんだ。

生き生きとして大学に通いはじめた。しかし足を向けるのは、法学部の教室よりもクラブの部屋のほうが、だんぜん多かった。

毎日、教授の講義をきくより、仲間たちとマンガをかいて過ごす時間のほうが多かった。

一学年が終わるとき、大学の事務室に呼ばれて言われた。
「きみは、出席日数がたりません。残念ですが、留年ということになります。」

留年とは、昔流にいえば落第のことである。しかし大学を、いやマンガクラブをやめる気はなかった。

雅則は家にはだまったまま、大学、いやクラブに通いつづけた。

やがて、自分で費用を出して、それまでかいたマンガ作品を一冊の本にまとめた。

著者名を『エム　ナマエ』とした。『エム』は、『Masanori』の『M』であり、『ナマエ』は名字の『生江』をカタカナにしたものである。

いろいろな人に配ると、ある有名なマンガ家に言われた。
「この人は、絵はへただけど、やる気はある。」
雅則は内心ショックを感じながら、それまで以上にやる気を起こした。

また一年たって、二学年に進学した。

その年、雅則は銀座の高速道路の下にある小さな画廊（絵などを見せるところ）を借りて、自分の絵の個展（個人の展覧会）を開いた。

ある出版社の編集者がそれを見てかえって、編集長に話した。
「まだ学生だけど、なかなかおもしろい絵をかく人を見つけ

てきました。」
すぐにその編集長が来て、絵を見たあと雅則に話した。
「ぜひ、うちの雑誌にイラストをかいてください。」
雅則は、ふわりふわりと空にまいあがっていくような喜びを感じた。
その出版社にイラストをかくと、よその出版社からも注文がきた。三社、四社と、それは増えた。
もう学費を、父に出してもらう必要はなかった。自分で出してもお金はあまった。
ただ雅則は、二学年の終わりにもまた留年させられた。
(父も、ぼくのしていることをもう知ってるだろうな。)
雅則はそう思うと、家からはなれてひとり立ちしたい気がした。
「お父さん、ぼく、下宿をしたいんだけど……。」
雅則は父に話した。父は、やはり雅則のしていることを知っていたらしく、なにも言わずにそれを許した。
雅則は、家をはなれて絵をかきはじめた。
そのうちに、大学で三回目の留年をさせられることが決まった。

（ぼくはもう一人前の画家だ。これ以上留年してまで、大学を卒業する必要はない。）

雅則はそう考えて大学を中退した。

父も雅則の気もちをわかってくれたらしく、だまったままだった。

光を失う

雅則は、イラストレーター（さしえ画家）として活躍しはじめた。

その合間を見て、ヨーロッパやアフリカを訪れた。

ヨーロッパでは、有名な美術館を回った。

時代によって、絵のさまざまなかき方がある。かき方はちがっても、それぞれに、かならず名作といわれる絵がある。

雅則は、そういう絵を目の前にして、身も心もしびれてしまうような感動を何度も味わった。

（ぼくも、自分の選んだ分野で、傑作といわれるものをかいていこう。）

雅則はそう思いながら、むらむらとしたやる気がわいてくるのを感じた。

アフリカでは、広大な自然をかけめぐる動物たちの姿に接した。雅則は、それをもとにさまざまな空想をした。
（よし。いつか、動物たちのファンタジックな楽しい絵をかいてみせるぞ。）
雅則は、また自信のようなものがわいてくるのを感じた。
帰国すると、ふたたびあふれるような気力で仕事にかかった。
そのころ多いときには、月々何種類もの雑誌のイラストをかくほか、年に十冊の本のイラストをしあげたこともある。みな評判がよかったため、仕事はそれからも増えていった。
仕事中、なんとなく目がかすむように感じだしたのは、たしか二十九歳の春ごろのことである。
目がかすむほか、体に少しぶつぶつもできてだるさも感じる。
雅則は、近くの医者にかかった。
「アレルギー症状でしょう。」
診察したあと、医者は言った。
「アレルギーですか？」
「そうです。ほら、特異な体質で、サバなどを食べるとじんましんができたり、下痢や腹痛などを起こしたりする人がときどきいるでしょう。」
なるほど、そういう人がいることは雅則も知っている。
「アレルギーですから、時期がくればまもなく治りますよ。」
雅則は、かんたんな薬をもらってかえった。
目のかすみは、初夏になると治った。医者のいうとおりだと、雅則は思った。
しかし次の年から、春になるたびに同じことがつづいた。雅則は、念のため別の医者にかかった。でも診断は同じだった。
いっぽう、仕事のほうは年々いそがしくなっていく。とうとう、雅則は医者に行くのをやめて、仕事を続けた。
すると、年とともに目のかすみがひどくなって、体のむくみもでてきた。
雅則は、内心あわてて、大きな総合病院に足を運んだ。
医師は、検査したのち雅則に話した。
「生江さん。あなたは重い糖尿病にかかって、じん臓がおかされています。すぐ入院してください。」

糖尿病は、血液中にふくまれるブドウ糖が必要以上に増えすぎたために起こる病気で、長いあいだに、心臓・じん臓・目・神経などをおかしていくのだという。

雅則は、翌日入院した。

ふたたびくわしい検査をして、こんどは眼科の医師に言われた。

「あなたは糖尿病のため、目の網膜を走っている血管がひどくいためられています。このままでは失明するでしょう。」

雅則は、ふいにまっ暗やみの深い谷につきおとされていくように感じた。谷底の岩にたたきつけられて、自分の身が粉ごなにくだけていくような恐怖にふるえた。

（なぜ、もっと早くこの病院に来なかったのだろう。）

そう思うと、あらためて、その場に全身でのたうちまわりたいような、はげしい後悔の念に心をきざまれた。

しかし、どうじに思った。

（このまま失明などしてたまるか。これは、自分の不注意でかかった病気だ。だから、かならず自分の努力で治して、立ちなおってみせるぞ！）

毎日注射をしながら、食事を三分の一以下にへらすという闘病生活がはじまった。

「糖尿病の治療は、空腹とのたたかいである。」そういわれるくらい、病気が重ければ重いほど、糖尿病患者の食餌制限はきびしい。そのため、医者のいいつけを守れない患者も、たくさんでてくる。

しかし雅則は、強力な意志の力でその苦しみに打ち勝った。おかげで、三か月後視力がもどり、体の調子もだいぶもどった。

医師はおどろきながら、雅則に退院を許した。

山ほどの仕事が、雅則を待っていた。雅則は、また絵をかきはじめた。

(今日は、このくらいでやめておこう。)

毎日、そう思う。しかし、たのまれるとついついかいてしまう。いや、人のせいにはできない。自分が絵が好きでかくのが楽しいから、ついついかいてしまう。

翌年の春、雅則はふたたび入院した。目がまえ以上に悪化していた。

こんどは、治療で眼球注射を行った。

目を開けたまま、黒目と白目のさかいめに針をさし、眼球の内部に薬を注入する。雅則はあまりの痛さに、頭が割れて死ぬかと思った。

「一日おきに、両方の目に注射をします。」

「いえ、それでは痛くてがまんできません。片方ずつ毎日してください。」

しかしそういう努力もむなしく、やがて完全に失明するときをむかえた。最初の入院から二年半後、三十六歳の二月のことだった。

いっしゅんのあいだ、雅則は絶望した。自殺することをしんけんに考えた。

見えなくなった目から、とめどなく涙があふれた。

UFOと心の旅

それからまもなく、雅則は眼科の医師に病院の図書室に連れていかれた。

医師は、雅則に自分がクリスチャンであることを話して、笑った。

「生江さんあなたは芸術家です。芸術家なら、失明してもで

きることがあるでしょう。わたしは、あなたが失明したのは、あなたにそれをやらせるために神さまがえらんでくださったのだと思いますよ。」
ふいに、一条の光が雅則の心の中にさしこんできた。その光に照らされながら、雅則は考えた。
(そうだ。失明したといっても、ぼくはまぶたの裏に、この世のありとあらゆるものを思いうかべることができる。さらに、自由に想像し空想することもできる。ぼくはこれまで、それを絵にかいて表現してきたが、先生、いや神さまは、今後はほかの方法で表現してみろと言っておられるのだろう。)
絶望の念はふきとんだ。かわりに勇気が、やる気が、喜びが、こんこんとわいてきて胸がおどった。
ほどなく、クリスチャンの医師に心からお礼をのべて、退院した。
父と母がかわりばんこに来て、いっしょに生活してくれた。二人とも、雅則がとても明るいのを見て、内心おどろきながら喜んだ。
雅則は原稿用紙を置いて、つくえの前にすわった。
原稿用紙の左上に十円玉を置くと、それを左手の指でそっとおさえる。そこから始まって、右手で横書きに文章を書いていく。一行が書きおわると、十円玉を一段下にずらして、また書いていく。
短編童話がしあがった。
訪ねてきた編集者が、それを読んでおどろいた。
「先生、この作品、うちの雑誌に掲載させてください。」
雑誌が出ると、童話は読者にも評判がよかった。
(これで、絵も文もおおもとでつながっていることがわかった。たいせつなのは、どちらもぼくの中にある生き生きした夢や心を伝えることなのだ!)
あらためてそういう自信と喜びがわきあがり、なにか、自分の体験や知識をもとにして、もっと長い、楽しい作品を書いてみたいと思う。
すると、ひとりでに、雄大で美しかった父の郷里の裏磐梯の自然が、まぶたの裏にうかびあがった。小学生のころ、夏休みのたびにその大自然の中で遊びまわった自分の姿もうかびあがる。
(あのころ、裏磐梯でUFOが飛んでくればいいな、なんて

思ってたなあ……。）

そこまで考えたとき雅則は、ふと頭の中にかみなりが光って全身がしびれた。

いっしゅん雅則の頭の中に、そのころの自分を主人公にした一つの物語が誕生したのである。

あのころ雅則は、好きな女の子がいて、はなれたところからあこがれていた。物語には、その子も自分の仲よしとして登場してもらうことにして、ひそかにほほえんだ。

雅則には、三つちがいの弟がいる。悪いけど、その弟も雅則の引き立て役として登場させることにして、にやにや、ほくそえむ。

十円玉を左手に、やがて書きだした。

——夏休みのある日、宇宙人のネコ博士の乗ったリンゴ型UFOが、裏磐梯に飛んできた。ケータとカコの二人は、ネコ博士と親しくなると、UFOリンゴに乗せてもらって、いろいろな探検、冒険をする。——

そういうすじである。

残念なことに、雅則は書いても自分でそれを読みかえすことができない。

（185）光を失った画家　エム　ナマエ

すると、高校時代やマンガ仲間の友人たちが、毎日のように来て読んでくれた。雅則はそれを聞きながら、物語の気にいらないところを直した。

雅則は、小さいときからSFや宇宙科学の本をたくさん読んできた。そのため、その方面の知識にこまることはなかった。

また雅則は小さいときから、祖母や母と演芸場に行って落語をきいていた。そのため、落語が好きになり、失明したあとも、家に有線放送を引いたりして、毎日のように落語をきいている。

そのせいか、物語には気のきいたユーモアがたっぷりとばらまかれている。

さらに雅則は、物語の舞台である裏磐梯を自転車でさんざん走りまわった。だから、

「畑の近道を行く。でこぼこ道だから、ハンドルがガチャガチャ踊る。……」と書いただけで、読者の体を、がたがたとはげしくゆする。

雅則は、退院したその年のうちに長編物語を完成させ、二年後、『UFOリンゴと宇宙ネコ』という題で、ある出版社か

ら出版した。著者名は、「エム　ナマエ」にした。
雅則は、その「あとがき」に記した。
『いきなりこんなことを書いたら、きみたちはびっくりしてしまうかもしれないけど、今、ぼくは、ぜんぜん目が見えません。……』
じっさいそのとおりで、これ以上読者がおどろくことは、ほかにないだろう。
雅則の失明を知っている者も、『UFOリンゴ……』を読んでいるうちに、そのことを忘れてしまう。とちゅうで気がついて、あらためてびっくりしてしまう。
出版の翌年、『UFOリンゴ……』は、日本児童文芸家協会から、同文学賞の新人賞を受賞した。平成元年、雅則が四十歳のときのことである。

飛べ！　自由に

雅則は、失明して退院したのちも、やはり糖尿病で悪くしたじん臓の治療をするために病院通いをしていた。
じん臓は、体内に入ってきた食物などから不要なものをとって小便にする。雅則のじん臓はその働きが弱っていたため、

週に三日、器械でそれをしてもらう治療を続けていたのである。とても苦しくしかも時間が長くかかって、それをする日は一日つぶれてしまうという、やっかいな治療だった。

小堀きみ枝は、雅則が治療に通う病院の看護婦だった。

きみ枝は、雅則が失明者にもかかわらず少しもめそめそしたところのない、明るく、快活な人なのに、おどろいた。まえには絵をかいていて、失明してからは、子どもたちのためにゆかいな物語を書いたと聞いて、もっとおどろいた。

（見た目はやさしいけど、きっとしんの強い人にちがいないわ。でも、目が見えないでそういうお仕事をするって、たいへんなことでしょうに……。）

そう思うと、なにか力になってささえてあげたいような気がした。

いっぽう雅則は、コボちゃんという愛称の看護婦がいて、とりわけ親切にしてくれるのをうれしく感じた。治療は苦しかったが、しかしコボちゃんの声をきくことができると思うと、病院通いもつらくはなかった。

やがて、二人のあいだに愛が生まれた。結婚することに決める。

友人たちも雅則の父や母も、そろって喜んでくれた。

「コボちゃん、みんなに結婚式の記念品をあげよう。」

「そうね。なにがいいかしら……？」

二人は、相談した。

そのとき雅則は、絵をかいてみたいと思った。なぜか、かけそうな気がした。

さっそくスケッチブックを開くと、線画でライオンやネコの絵をかいてみた。

「あらー、すごいっ！　目が見えないのに、どうしてそんな絵がかけるの？」

きみ枝が、びっくりしている。こんどは、想像しながらきみ枝の顔の絵をかく。

「コボちゃんて、こういう顔かな？」

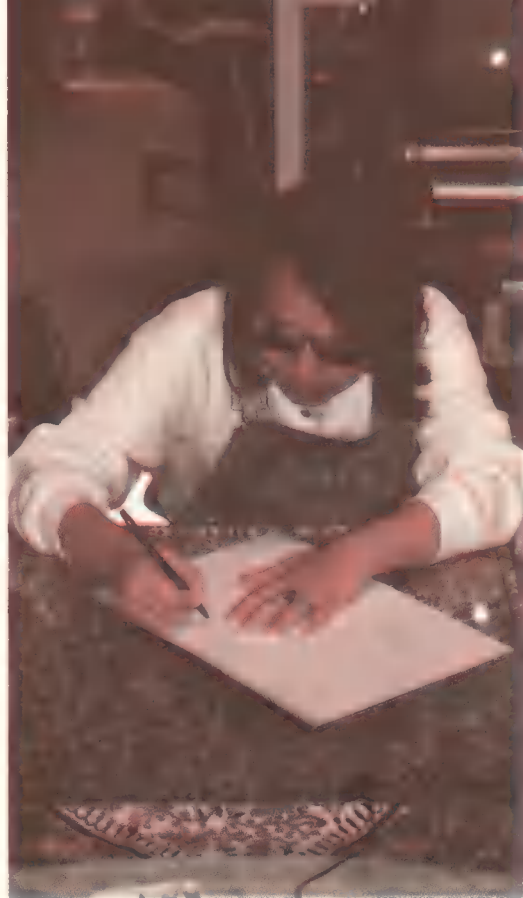
「あらー。にてる、にてる。」

よしっ、これで結婚式の記念品は決まった。雅則はあらためて、画用紙と百五十色のパステルを買ってきてもらった。

画用紙に、まず、きみ枝と自分の肖像画をかき、上のほうに太陽をかいたりする。

「コボちゃん。空をぬるから、うすいブルーの色ちょうだい。」

(189) 光を失った画家　エム　ナマエ

きみ枝が指定された色のパステルをわたす。
「太陽の位置は、どこ?」
きみ枝が、雅則の左手にその位置を教える。雅則は、太陽をおさえながら空の色をぬる。終わると、きみ枝がガーゼなどでパステルの上をこすって、色をなじませる。
平成二年三月、二人は結婚した。式の出席者たちは、記念品に雅則のかいたパステル画をもらって、みな喜んだ。
「それにしても、びっくりしたなあもう! エムさんは、まだ絵もかけるんだ。」
東京コロニー・障害者アートバンクというところがあって、障害者のかいた絵などを広く紹介する仕事をしている。
六月にそのアートバンクの人が来て、雅則に話した。
「もっといろいろな絵をかいて、アートバンクにあずからせてください。」
雅則は、そのすすめに従った。するとさっそく雅則の絵が、東京都のある区の広報用ポスターに使用されたりした。
雅則は、その年『障害者アートバンク大賞』にかがやいた。
「エム先生、ぜひ個展を開きなさい。」
雅則は人のすすめに従って、平成三年一月、東京・新宿で絵の個展を開いた。

▲絵を制作中のエム ナマエさん。

▲エム ナマエさんのかいた絵(くわしくは3ページ)。

（人はやろうと思えば、なんでもできるはずだ。）
雅則は、そう考えて、これまでにいろいろなことをやってきた。人にもそのことを教えるために、よく空とぶネコやキリンなどの絵をかく。空とぶ魚の絵もかいて、その魚に「絵夢魚」と名づけた。絵夢魚とはもちろん雅則のことである。
雅則はその絵に次のような詩をそえて、個展に出品した。

飛べ！　自由に
翔べ！　チャレンジャー

魚が空を飛んでもいい
蒸気機関車がレールのないとこを走ってもいい
目の見えないイラストレーターがいてもいい
絵筆の詩人がいてもいい
ぼくらはみんな　ミラクルメーカー
奇跡への挑戦者なのさ

まえに『UFOリンゴと宇宙ネコ』を出した出版社の人が見にきて、笑った。
「すばらしいですね先生。これからは先生の詩と絵をいっしょにした『エムナマエ詩画集』も出版させてください。」
現在、その詩画集はパート2までが出ている。（終わり）

●作家紹介

岡本文良

東京生まれだが、茨城県で育ったので自分では茨城生まれと言っている。
作品は『ことばの海へ雲にのって』『二つの国をつなぐ子ら』『アマミノクロウサギ』などノンフィクションを中心に多数ある。
ドライブが好きで、東京から大阪をへて、九州の佐賀県まで一人で運転していったこともある。大学時代は水泳部できたえたという。

＊巻頭の折りこみページの〝エム　ナマエ誌上展覧会〟をごらんください。

エム・ナマエ（本名生江雅則）年譜

・昭和23年（'48）9月　東京都に生まれる。
・〃26（'51）　寄席の絵をかく。
・〃30（'55）　新宿区戸塚三小に入る。
・〃34（'59）　千代田区永田町小へ転校。
・〃36（'61）　同麹町中学入学。
・〃39（'64）　慶応大学付属志木高校入学。
・〃42（'67）　慶応大学法学部入学。
マンガクラブにはいる。
・〃46（'71）　このころ、『空』をテーマに個展。出版社にイラストをかきだす。
・〃48（'73）　慶応大学中退。
・〃49〜51（74〜76）　ヨーロッパ・アフリカなどを旅行。見聞をひろげて、人間としての自信をつける。
・〃52〜53（77〜78）　春、目がかすんで医者に行く。
「アレルギーではないか？」
・〃58（'83）　大病院へ行き、失明を宣告される。
・〃59（'84）　恐怖のなかで、夏まで仕事を続ける。
・〃61（'86）2　完全失明
秋、『UFOリンゴと宇宙ネコ』を書く。
・〃63（'88）　『UFO……』を出版。
・平成元年（'89）　『UFO……』で日本児童文芸家協会新人賞受賞。
・〃2（'90）3　小堀きみ枝と結婚。
その前に絵をかきはじめる。
6　東京コロニー・障害者アートバンクの戸原一男氏が雅則の絵を見る。
東京コロニー・障害者アートバンク大賞にかがやく。
・〃3（'91）1　個展を開く。
4　エムナマエ詩画集パート1を出版。
・〃4（'92）1　日本ボーイスカウト愛知連盟の「盲導犬を贈ろう愛の募金有志会」より中部盲導犬協会で訓練中の盲導犬『セシール』（メス・二歳半）の無償貸与を受けることが決まる。
名古屋で贈呈式。
3　エムナマエ詩画集パート2を出版。

台風が強めた親子のきずな

りんご生産日本一の青森県が
台風におそわれたのは、
昨年の九月でした。

協力／写真＝広船小学校・青森県りんご協会・広船町役場

りんご村をおそった風速五十四メートルの風

青森県は全国一のりんご生産県です。りんごの収穫をまぢかにひかえた昨年の九月二十八日の早朝、最大風速五十四メートルを記録した台風十九号が、青森県を太平洋側から日本海へかけぬけるようにおそいました。

弘前市の近く、十和田湖の北側にある南津軽郡平賀町の広船は、もっとも大きな被害を受けた地域のひとつです。

その日の朝五時ごろから風が強まり、電気もとまってしまいました。強風は、屋根を飛ばし、電柱をたおし、小屋をこわしました。さらにとりいれを待っていたりんご畑をようしゃなくおそい、赤く色づいたりんごをほとんど残らず地面にたたきおとしたのです。

斉藤厚先生は、その日自分の勤める広船小学校への道を、強風をついて急いでいました。いたる所で、電柱がたおれ大木がおれて通行止めになっていました。学校がもうすぐそこなのにたどりつけず、いらいらしながら回り道をしてやっと着いたときは、一時間半もよけいな時間がかかっていました。

通る道すがら見たりんご畑は無残でした。昨日までは、み

◀台風の翌日のりんご畑。

◀屋根もふきとばしてしまった台風。

ごとに実っていたふじや王林、陸奥、北斗、ジョナゴールドなどの品種のりんごが、いまはあとかたもないのです。

(自然はなんとざんこくなのだろう。ここまでたくさんのめぐみをあたえてくれながら、あと少しのところでりんごをたたき落とす。自然は味方なのか敵なのか……。)

斉藤先生は受け持っている六年生二十人の生徒の顔を思いうかべながらつぶやきました。

広船小学校は全校生徒が男子六十三名、女子六十名の学校です。ほとんどの子の家がりんご農家です。りんごが全滅したらその年の収入はなくなってしまいます。

一家総出であとしまつ

強風が少しやわらいだころ、どこの家庭でもりんご畑にかけつけました。りんごは赤い姿を地面にさらしています。木にはほとんどありません。また多くのりんごの木が枝をおられたり、幹がさけたり、根こそぎたおれたりしています。

「ああ、どうしたらいいべか。」

お昼ごはんもそこそこにかけつけた人たちは、収穫まぢかだったりんご畑に立ちすくみました。

▲真っ赤にじゅくしたりんごも、ほとんどが地面に落ちてしまった。

▲広船小学校の校門。

▼いつまでもくよくよしてはいられない。

▶斉藤先生と六年生たち。

そのときの様子を六年生の長尾育美さんは次のように作文に書いています。

台風十九号

長尾育美

朝、目がさめたら家がぐらぐらゆれていた。風が強いので窓も音を立ててゆれていた。すぐ着がえて下に降りたら、父や母が心配そうに窓から外を見ていた。私も外を見ると、シルバーシートが細かくくだかれ空全体に雪のようにうかんでいました。私は（りんごだいじょうぶだべが）と心配でした。

（中略）

畑を見ると防風ネットがたおれていたり、りんごの木がたおれている所がある。自分の畑もこうなっているのだろうと予想はしていたが、畑に行くともっとすごかった。根元からひっくりかえっている木や、布がさけているようにまっぷたつに割れている木も何本かあった。私は、父や母がいっしょうけんめい作ったりんごがこんなにされて、とてもくやしかった。毎日手つだいをしているが、仕事はぜんぜんはかどりません。でもこれからまたいっしょうけんめいがんばってい

◀雪にかこまれた広船小学校の校舎。

きたいと思います。

次の日から停電が四日間続いたので、広船小学校では毎日朝だけで学校が終わりになりました。学校から帰るとみんな家の手つだいです。

りんご畑に行って、おれた木やたおれた木を立て直すお父さんたちのそばで、落ちたりんごを傷つけないようにそっとかごにつめます。おじいさんやおばあさんもみんなで作業しますが、拾っても拾ってもりんごはなくなりません。数えきれないほどのりんごが、山の斜面にひらかれたりんご畑に落ちてしまったのです。後に青森県りんご協会が調査したところによると、青森県全体で、りんごの落果数量は三十四万五千トン、おれたりおれたりしたりんごの木は五十六万七千本、被害金額七百四十一億七千万円にもなりました。

ロウソクの明かりで暮らす暗い夜

いつもの年だったら、りんごの出荷でいそがしく、これが終わったら、クリスマスプレゼント、お正月のお年玉の楽しみが待っている秋なのに、この年はそれどころではありませ

ん。一年間の収入のほとんどが、数時間ふきまくった青森県史上最大の強風によってうばいさられたのです。

四日間続いた停電は、台風でうちのめされたりんご農家の夜をいっそう暗いものにしました。落ちたりんごを拾う作業も五時には終わらねばなりません。暗くならないうちに家に帰り、おふろに入ったりいろいろな家の中での仕事をしなければならないからです。短くなったロウソクの明かりで食べる夕食のときも、みな口数が少なくなるのはしかたがありませんでした。

「働きにいかねばなんねべな。」

お父さんの口からそんな言葉がもれました。家族はだまって聞いています。出稼ぎ、です。間もなくおとずれる冬は、この地方一帯を厚い雪でつつみます。雪深い地方では、冬働きにいくというのは、東京などに出稼ぎにいくことを意味しています。それは家族がはなればなれになることです。

「はじめての経験ですから、子どもたちの心は不安と心細さでいっぱいだったでしょう。」

斉藤先生はそのころのことをふりかえって言います。先生の受け持つ六年生二十人の生徒のうち十五家族が、雪の消え

◀深い雪をかきわけた道を通学する。

る三月まで出稼ぎにでかけることになりました。

父を思う

十月の四日ごろから落ちたりんごが畑でくさりはじめました。もう手のうちようがありません。次つぎと父や母が働きにでかけます。子どもたちもさびしそうです。

斉藤先生はそんな子どもたちを見て、学級だよりの「サイト通信」でよびかけました。

六年生のみなさんへ

精魂こめて育ててきたりんごがだいなしになって、家の人たちは今がっくりきています。これからの生活のこともいろいろ考えています。歯をくいしばってがんばっています。

みんななにをなすべきか、なにができるか家族と話し合ってほしい。

子どもたちから心の思いがたくさん「サイト通信」によせられました。

両親が群馬県に行って、祖父母と姉と妹の五人で家を守っ

◀雪国育ちのみんなは、さすがにスキーがとくい。

▲校庭でもごらんのとおり、スキーがかつやく。

▼雪にうもれそうな広船小学校の位置表示。

ている長尾由香里さんは、こう書きました。

「そのときは泣くのをがまんしていました。心配するからです。行ってしまってから、目からポロポロとなみだが流れてきました。でも母たちもがんばるので私たちもがんばります。」

外川千里さんはお父さんへの思いを、少してれながら次のように書きました。

父

今日の朝、八時に父は出稼ぎにいきました。車で父の友だちと行きました。父は私に、

「元気でいろよ。」

とやさしくひとこと言って東京に行きました。私はてれくさくてなにも言えなかったけど、心の中でいのりました。

「神様、父を見守っていてください……」と。

心の中で思っていただけだったけど、私は心から思って言いました。

ふだんだったら、父から「元気でいろよ」という言葉をかけられることはないでしょう。神様、父を見守ってください……」と心から思うこともないでしょう。父や母と長い間はなればなれに生活をするという、はじめての体験にとまどいながらも、父と子が、子と母が思いやる様子がよく現れています。

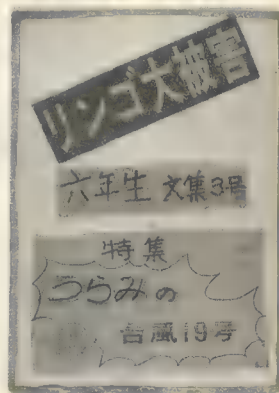
この「サイト通信」は出稼ぎ先にも送られました。

うらみの台風を乗りこえて

台風十九号の被害は大きな打撃をりんご農家にあたえましたが、人びとはそれにいつまでもうちひしがれてはいませんでした。広船にひとつある小さなジュース工場で、落ちたりんごでジュースを作りはじめました。くさらないりんごをできるだけ早くたくさん集めて作った、手作りの百パーセント天然ジュースです。できたジュースは、知り合いや、友人などを通じて売ります。大手のジュース会社のようには売れませんが、それでも、一日に五百本（一リットルびん）ほど作り、売ることができました。

父や母が出稼ぎにでた家では、りんご畑のあとしまつや家

◀落ちてしまったりんごを利用して、ジュースを作る。

▼6年生が作った文集。台風によるりんごの被害のすさまじさがよくわかる。

の仕事は、残されたおじいさんおばあさんにくわえて子どもたちもいっしょになってやりました。

ごはんを作ること、せんたくをすること、そうじをすること、雪かきがたいへんなこと、いままでなんにも感じていなかったが、自分たちが朝ごはんを食べ夜ねるまでの生活が、どういうことでなりたっていたのか、子どもたちは身にしみてわかったようだと、斉藤先生は言っています。

子どもたちは、お父さんから土曜日や日曜日にかかってくる電話を心待ちにしていました。なにかのつごうで、電話がなかったりすると、事故じゃないか、なにかあったんだろうかと家族が心配するので、お父さんたちもお酒を飲んでうっかり電話を忘れることができません。お父さんから電話がかかってくると、兄弟で取り合いになり、かんじんの家への用があとまわしになってしまいます。

お正月に父や母が帰ってきたときは、元気な姿を見ただけでなみだがこぼれたそうです。おみやげよりもなによりも、元気な両親の姿がいちばんだったのです。

お正月が過ぎるとふたたび、りんごの仕事がはじまる三月まで出稼ぎです。

◀農産物処理加工施設（ジュース工場）は、昭和58年に建てられたものだ。

▼ジュース工場はフル活動だ。

まだおれたままのりんごの木が雪にうもれた姿に、心を残しながら父や母は出かけました。

六年生は三月には卒業です。にくい台風にひどいめにあった年ですが、いろいろなことを考えさせられ、成長した年でもありました。

来年はきっとたくさんのりんごを作ってみせる。ぼくはおとなになったらりんご農家をつぐんだ。わたしはりんご農家におよめにいくわ。みんな口ぐちにそう言います。一家で、みんなでいっしょにりんごを作る仕事ができるからだそうです。台風のせいで、やむなく出かけなければならなかった出稼ぎの体験が、父母と離ればなれに暮らさなければならなかった経験がそう言わせるのかもしれません。

三月、父や母が帰ってくるまで広船は雪におおわれます。寒さや雪にはなれています。卒業記念に六年生が制作したトーテムポールが見守る、雪のつもった校庭で、元気にスキーの練習をする広船小学校の子どもたちの姿は明るく力強く、心のさびしさを感じさせませんでした。

（終わり）

歴史読み物

明治維新後のあるスリの話

「どろん」

吉橋通夫・作／北島新平・絵

ドジ吉の仕事はスリだ。親分は、ホクロの安。ドジ吉は、あるレンガ製造所にはいりこんだ。何日かまじめに働いて信用させ、すきをみて、ごっそり持ちにげするつもりだ。しかし、すでにひと月がすぎたが、なかなかどろんできない。

1

もうこれ以上ぐずぐずしては、いられない。今夜こそ、どろんしよう。
ドジ吉は、手足にこびりついたねんどを洗いながら、腹をきめた。
このレンガ製造所へ来てから、すでにひと月がすぎた。どこに金めの物があり、どこからにげだせばいいのか、とっくに調べはついている。なのに、なかなかどろんできない。
すべて、親方が悪いのだ。
かりそめにも、自分のフトコロがねらわれたのだから、もっとドジ吉を疑うべきだ。いくら、「でき心です、ゆるしてください。」と両手を合わせられても、かんたんにスリを信じてはいけない。
ところが親方は、ドジ吉のへたな身の上話に、もらい泣きして、めしを食わせてくれた。そのうえ、このレンガ製造所へつれてきて、本気で職工にしようとしている。
何日かまじめに働いて信用させ、すきをみて、ごっそり持ちにげする、お目見得どろぼうという手口があるのを知らないらしい。お人よしのきわみだ。
おかげで、にげだしづらくて、もうひと月も、ここにいる。
だが、今夜をのがすわけにはいかない。
ドジ吉が来てから、ずっと燃えつづけていたのぼりがま[*1]の火が、きょうはじめて落とされた。いつもは、かまにマツの割り木をくべるために夜通し起きている職工たちも、今夜はねてしまう。この機会は、のがせない。
——まず、腹ごしらえや。
ドジ吉は、手足をふいたてぬぐいをつなにかけて、ピッとのばした。
食堂から、もうにぎやかな話し声が聞こえてくる。うまそうな焼き魚のにおいもする。
だが、動きはじめたドジ吉の足が、すぐにピタッと止まった。
——おやっ?
北工場のえんとつから、けむりが出ている。
ずらっとならんだえんとつの中で、北工場のだけが、いきいきと黒いけむりをふきあげている。
——そんな、あほな!

*①のぼりがま　傾斜地に数個のかまを階段状に築き、下から上のかまへと余熱を使って陶磁器を焼くかま。

(205) どろん

琵琶湖疏水工事のために建てられたこのレンガ製造所の中で、北工場は京都監獄所の受けもちだ。懲役六か月とか一年とかの刑を言いわたされた囚人たちが、赤いつつそでに、赤いももひき姿でレンガを焼いている。

はじめてこの製造所の門を入って、赤い囚人服の群れを見たとき、ドジ吉は、きもをつぶした。

「な、なんでこんな所に、囚人が？」

すると、親方があっけらかんと答えた。

「人手が足りひんからや。」

ひょっとしたら、囚人の中にドジ吉を知っているやつがいるかもしれない。お目見得どろぼうをたくらんでいると、ばらされたらおしまいだ。

たとえ親方はかばってくれたとしても、この製造所でいちばんえらいヒゲの主任が、だまってはいないだろう。

とにかく、北工場には近づかないことだ。

そう腹をくくって働いてきた。

いつも囚人たちは、日が落ちる前に近くの仮の獄舎へ帰っていく。二人ずつ鎖でつながれ、看守にかこまれて引きあげていく。暗くなるまでに獄舎へ閉じこめてしまわないと、にげだす者がいるからだ。

きょうも、まだ明るいうちに、裏山のふもとを帰っていった。

なのに、北工場のえんとつが、まだけむりをふきあげている。

――何人か残って、夜業をさせられとるんやろか。

そういえば、きのうも親方がぼやいていた。

「石積みにするはずやった隧道[*②]のかべまで、レンガ巻きにかわってしもうたから、なんぼ焼いても、工事に追いつかへん。」

としたら、一晩じゅうかまをたくつもりかもしれない。

ドジ吉が今夜しのびこむのは、いつもヒゲの主任がつめている事務所だ。悪いことにその事務所は、北工場とこちらがわをへだてる竹のさくのそばにある。

――よしっ、行ってみたろ。

ドジ吉は、パッと走りだした。

大きなカマボコをならべたようなのぼりがまの横をかけあがり、こちらがわのえんとつのそばを走りぬけて、さくの前

*②隧道　地下をほってつくった通路。トンネル。ずいどうともいう。

に立った。
カンテラのあかりの輪の中に、サーベル[*③]をさげた看守の姿がうかんだ。その向こうがわに、赤い囚人服が動くのも見えた。ひとつ、ふたつ……全部で四つ。
のぼりがまのいちばん下の口へ割り木をほうりこんでいるから、まだ、たきはじめたばかりだ。ということは、やっぱり一晩じゅうたくつもりらしい。
——こりゃ、シゴトがしにくいな。
でも、囚人たちは顔をかくすためのまんじゅう笠を深くかぶっているし、看守は、こちらに背を向けて立っている。うまくやれば、気づかれずにすむかもしれない。
——思いきって、やってみるか……。
ドジ吉が、さくからはなれようとしたとき、ジャラッと鎖の音をさせて、左手の納屋から囚人が二人出てきた。両手に割り木のたばをさげ、ゆっくりと、さくの前を通りすぎていく。
——おやっ？
ドジ吉の目が、背の高いほうの男にすいよせられた。
男は、すこしねこぜで、うつむきかげんに歩く。

*③サーベル　オランダ語。西洋風の長い刀。

——ひょっとして……

思わずつかんだ竹のさくが、ギシッと音をたてた。

とたんに看守が、サーベルの金メッキを光らせて、さっとこちらを向く。

「ん？　なにか！」

あわててドジ吉は、首を横にふる。

「い、いいえ、なんでもありまへん。」

その声に、ねこぜの男がふりむき、まんじゅう笠を持ちあげて、こっちを見た。とがったほほにある大きなホクロが、カンテラのあかりにくっきりとうかんだ。

——親分！

まちがいない、「ホクロの安」親分だ。

ドジ吉は、スリの手口をこの親分に教えられた。

といっても、さかずきをもらってないので、いっしょに住んでるわけではない。スリとった時計や指輪を金にかえるときは世話になるが、あとはかってにシゴトをしている。かせぎの三割をおさめるという決まりも、あんまり守ったことがない。

でも、「スリは人ごろしをせえへんのが、ほこりや」と教えられた言葉は、しっかり胸にきざみこんでいる。

——親分、おひさしぶりです。ひょんな所でお目にかかりやして……。

とあいさつしたいけど、看守が目を光らせている。ここは、だまって引きさがるしかない。

ドジ吉は、ぺこんと頭をさげて、さくの前からはなれた。

ホクロの安親分は、これまでに何回もつかまっている。そのたびに、自分の名前が、戸籍にのってないのを逆用して、「名無権兵衛」だの「大馬鹿三太郎」だのと名乗り、はじめてスリをやったことにしてもらって、一、二か月で出獄して

いる。

こんども、たぶんそうだろう。

しかし、これから夏場はスリのかせぎどきだ。着るものがうすくなるのでフトコロぐあいがわかるし、帰省で汽車や船もこみあう。乗り物の中でシゴトをする箱師が、いまごろ鎖につながれていて、いいのだろうか。

どっちにしても、ここにいるのを親分に見られたからには、急がねばならない。ぐずぐずしていると、スリから足を洗ったのかと疑われる。

今夜は、なにがあっても、どろんしなければならない。

2

ランプのあかりの下で、職工たちが陽気にめしをかきこんでいる。その食堂のすみっこにこしをおろしたドジ吉の目の前に、すまし汁のおわんがトンとおかれた。

「おそかったなあ、なにしてたん?」

親方のひとりむすめの花ちゃんが、おぼんを持って立っている。

まだ四つなのに、年ごろのむすめみたいに赤前だれをかけ

ている。口がたっしゃで、九つも年上のドジ吉のほうが、いつもやりこめられる。
「はよう食べに来いひんし、さめてしもうたわ。」
と、白いほっぺたをふくらませた。
「ごめん、ごめん。」
手を合わせてあやまると、すぐ、ごきげんをなおして、耳もとでささやいた。
「大きなお魚を、残しといたしね。」
飯台のお皿の上に、半身のアジがのっている。ごはんのにおいが鼻をくすぐり、腹の虫がグーッと鳴いた。
「いただきまあす。」
おはしでアジの身をほぐし、麦めしの上にのせて、かきこむ。
「うん、一日しっかり働いたあとのめしは、うまい。」
「もっと、よくかんで食べなさい。」
母親が子どもをしかるみたいに、花ちゃんが言う。
「はい、はい。」
「ハイは、いっぺんでいいの。」
「はい。」
すなおに答えて、牛みたいにモグモグと何度もかみしめる。
いつも、こうだ。ドジ吉が食べているあいだじゅう、そばにいて、なにかと世話をやく。
だから、職工たちから、よくひやかされる。
「正吉は、しあわせもんじゃ。こんなに若うて、べっぴんの世話女房がいて……。」
いくらなんでも四歳ではまだ若すぎる。
ドジ吉は、ここでは「正吉」と呼ばれている。「これからは正しく生きろ」と、今の親方がつけてくれたのだが、なんだか、くすぐったい。
「ドジ吉」というのは、ホクロの安親分がつけた名前だ。といっても、べつに、へまばっかりやってるわけではない。すこしは、そんな意味もあるかもしれないが、最初にぬすんだのが、スリ仲間の言葉で「ドジ」、つまり「イモ」だったからだ。
自分のほんとうの名前は、わすれた。
「ねえ、正吉にいちゃん。ごはんがすんだら、ほたるがりに行こうよう。」
そういえば小さいころ、河原で、飛びかうほたるを見てい

*④**ざんぎり頭** 明治初期、ちょんまげを切ってかりこんだ髪。
*⑤**御一新** 明治維新の一般に使われた呼び名。
*⑥**官員** 明治の初め、役人や官吏のことをこう呼んでいた。

たおぼえがある。そのとき自分をだいていてくれたのは、母親だったような気がする。

　でも、今夜は、つれていってやれない。

「ほたる、まだ飛んでへんやろ。」

「ううん、みよちゃんが、もう見たって言うてたもん。ホロホロ光って、きれいやったって。」

「けどなあ……。」

　どうやってごまかそうかと考えていたら、親方が、一升びんと湯のみぢゃわんをもって、やってきた。

「正吉、しっかり食べとるか。」

　酒くさい息をはきながら、どかっと横にすわる。

「育ちざかりなんやから、えんりょせんと、腹いっぱい食べなあかんで。」

　酒ずきな親方で、「のんべえ太平」と呼ばれている。よえばかならず歌がでる。

♪*④ざんぎり頭を　たたいてみたら
　文明開化の　音がする。

という*⑤御一新のころはやった歌をはじめ、

♪ひげをはやして　*⑥官員ならば
　ねこやねずみは　みな官員

と、政府のお役人をひにくったのまででる。
いつもは、早そうににげだすのだが、今夜は、そのしぶいのどを、ちょっとだけ聞いてみたい気がする。
＊⑦新京極のしばい小屋で、サイフの中身だけをいただくという「中ぬき」のわざにいどんでしくじり、この親方につかまった。
そのあと、めしを食わせてくれながら、親方の言ったセリフがふるっていた。

「おまえも、いつかは、ほれた女といっしょになって子どもをつくるやろ。その子が大きゅうなったとき、胸をはって、『お父の仕事はスリや』て言えるか。」

さすがのドジ吉も、この説教には、めんくらった。

もの心ついたときには、もうスリの仲間にいたし、そんな行くすえのことまで、考えてもみなかった。自分が、だれかの親になるなんて、思いもよらなかった。

「どや、正吉。土打ちは？」

トクトクと湯のみぢゃわんに酒をつぎながら、親方が仕事の話をしてきた。

「へえ、だいぶなれました。」

土打ちとは、ねんどに砂と水をまぜながらくわと足でねりあげる作業のことをいう。こしが、なまりをぶらさげたようにだるくなるが、レンガの生地を作る大切な仕事だ。

「きょう入ったねんどは、すこしねばりが弱いさかい、砂の量に気いつけるんやで。」

「へえ、そないします。」

「おまえは、のみこみが早いし、先が楽しみや。」

親方は、おだてるのがうまい。ついその気になって、自分の一人前の職工すがたを思いうかべたりする。

でも、すぐに首を横にふる。

スリの世界しかしらない者が、このまま、かたぎの仕事を続けられるはずがない。いまに、大きなしくじりをやらかすに決まっている。そのときは、いくら人のいい親方だって、てのひらをかえすように態度が変わるだろう。いずれ追いだされるのが、オチだ。

花ちゃんが、横から親方のかたをつかんでゆする。

「なあ、おとっつあんも、正吉にいちゃんにたのんでえなあ。」

「うん？　なんや。」

親方の目が、とろんとくずれて、ひとりむすめをひざの上に座らせる。酒くさい息に鼻をつまみながら、花ちゃんが言う。

「うち、ほたるがりに行きたいねん。」

「おお、そらええ。」

親方の太いまゆが、だらしなく下がる。

「わしも若いころは、かみさんとそろいのうちわを持って、よう行ったもんや。正吉、もうわしのゆかたが着れるやろ。出してもろて、行ってこい。」

＊⑦新京極　京都市中京区四条大橋西側の、三条通りと四条通りの間にある繁華街。

「けど、あの……。」
「なんやおまえ、わしのうちのゆかたでは、いややっちゅうのか。」
「いえ、そんな。」
「ほな、行ってこい。川に、はまらんように、ちょうちん持っていかなあかんで。」
グビリと湯のみぢゃわんをあけた親方は、
♪ほー　ほー　ほーたるこい
あっちの水は　にがいぞ
と歌いながら、職工(しょっこう)たちのところへ行ってしまった。

すこし遠くまで来すぎた。
ほたるをさがして、川づたいにだいぶ歩いた。目印にしているレンガ製造所(せいぞうしょ)のえんとつが、先っぽのほうしか見えなくなった。
あたりに人かげもないし、さげたちょうちんのロウソクも、小さくなってきた。
「花(はな)ちゃん、ぼちぼち帰ろうか。」
「いや、帰らへん。」
おしゃべり花(はな)ちゃんの口数が、めっきりへった。つないだ手も、ポッテリ熱い。どうやら、ねむくなってきたようだ。
「ほたる、また、こんどとりにこようか。」
なんとかなだめすかして早く帰り、にげだすしたくをしなければならない。
ところが花(はな)ちゃんは、首を横にふった。
「いや。」
がんこなところは、親方にそっくりだ。
「ほな、おんぶしたるわ。」
しゃがんで背中(せなか)をむけると、すぐにおぶさってきた。げたをぬがせ、歯のほうをあわせてふところへつっこむ。
「ほんまのほんまに、またこんど来る？」
「うん。ほたるが、ぎょうさん飛びはじめたら来ような。」
「ほな、指きり。」
ドジ吉(きち)の右手はちょうちんをにぎっているし、左手は花(はな)ちゃんのおしりをささえている。
「両手がふさがってるし、指きりできひんわ。」
「ほな、口だけでもええよ。」

と、花ちゃんは歌いだす。
♪ゆびきり　げんまん
うそついたら　針千本　のーます
ゆびきった
いっしょに歌いながら、ドジ吉は、夏草のしげる土手道を歩きはじめた。
――もし、このままずっと、背中のぬくもりを感じつづけることができたら……。
だが、足を洗うのは、こわい。かたぎの世界で、まっとうに生きていく自信がない。親方の気が変わって、見はなされでもしたら、たまらない。
それならいっそ、このままスリでいるほうが、楽だ。
背中がズシリと重くなり、小さなねいきが首すじにかかりはじめた。
「花ちゃん、ごめんな。」
とつぶやく。
「指きりしたけど、守れへんわ。」
花ちゃんをおんぶするのも、これが最後かもしれない。
――あれっ？

レンガ製造所のほうが、いやに明るい。ちょうちんやカンテラが、いくつも動きまわり、裏山へ登っていく。なにかあったらしい。

背中の花ちゃんをゆすりあげ、足を早めて小さな土橋をわたる。

そのとき、ガサッと草がゆれて、黒いかげがひとつ、道へおどりでた。

「だれや?」

向けたちょうちんのあかりの中に、赤色のももひきがうかんだ。

——囚人や!

次のしゅんかん、ちょうちんがたたきおとされ、真っ暗やみになった。

身をひるがえしてにげようとしたとたん、うでをつかまれて、引きもどされた。するどくとがった物が、わきばらにグリッとおしつけられる。

「さわぐな。橋の下へおりろ。」

ハッとした。聞きおぼえのある声だ。

——もしかして?

命じられたまま橋の下へおりながら、おそるおそるたずねてみる。
「あのう、ひょっとして、あなたは――。」
「静かにしろ。たったいま、人をひとりあやめてきたところや。じたばたすると、てめえも――。」
いっしゅん、体がこおりついた。
だがその声は、まちがいなくホクロの安親分のものだ。
「おら、ドジ吉です。」
橋の下の暗やみの中で、相手がかたの力をぬいて、フッと笑った。
「聞いたことのある声やと思うた。おまえなら話は早い、そのゆかたをぬげ。」
「ぬいだら、ふんどし一丁ですわ。」
「かわりに、わしのこの赤びらをくれてやる。」
「けど、このゆかたは借り物やし……。」
「ぬすっとに、借り物もへったくれもあらへん。さっさとぬがんかい。」
「へえ、すんまへん。」
せなかの花ちゃんを、そっと草の上におろす。「ううん」とぐずったので、あわてて胸をたたいてあやす。
さっき親分が、「人をあやめてきた」と言ったのが気になる。
――ほんまに、だれかをころしてきたんやろか……。
赤いつつそでと、ももひきをぬいだ親分が、かたをこづいて、せかす。
「早くしな。やつらが山狩りしているまに、ずらかるんや。」
しかたなく、へこおびをときはじめる。
そのとき、
「おおい、正吉！　お花！」
とさけぶ声が、かすかに聞こえた。

レンガ製造所の親方や職工たちが、心配してさがしにきたらしい。ちょうちんが、遠くで三つ四つゆれている。
「ちぇっ、こっちへ来やがる。急げ。」
「へ、へえ。」
ぬいだゆかたをさしだすと、かわりに赤い囚人服がおしつけられた。
「これを着て、わしと逆のほうへとべ。」
「なんで、逆に走るんですか。」
「ドジ！　おとりになるに決まってるやろ。」
「えっ、おとりに――。」
「ワシが、ずらかりやすいように、思いきり目だって走れ。」
「そのあと、おらは、どないなるんやろ。」
「どないでも勝手にしろ。さっさとせんかい。」
しょうことなしに、赤いつつそでに手を通し、ももひきもはいた。囚人になったみたいで、あまり、いい気もちがしない。
「花ちゃん！　正吉！」と呼ぶ声が、しだいに近づいてくる。
「橋をわたって、向こう岸を左へつっ走れ。行け！」
「へえ。」
飛びだそうとしたとき、ガサッと草の音をさせて、花ちゃ

んが、ねがえりをうった。「あっ、いたっ」と、小さな声をあげる。

草の先が、顔にささったらしい。すぐに、「いたいよお」と泣きだした。

あわてて、だきおこす。

「よしよし、どうもない。」

ところが花ちゃんは、ドジ吉の胸をつきはなして、もっと大声で泣きさけんだ。

「こわいよお。」

ハッと気づいた。ドジ吉は赤い囚人服を着ているのだ。

「だいじょうぶ、おらや。ドジ――、いや正吉や。泣かんとき、静かにし。」

いくら言ってもきかない。おびえてしまっている。

いきなり、親分がドジ吉をつきとばして、花ちゃんを草の上におしたおした。

「うるせえ、べーべー泣くな。」

と、大きな手で口をふさいだ。

「うっ、うむむ……。」

と、花ちゃんが、手足をバタバタさせてもがく。だが、親分は手をゆるめず、ようしゃなくおさえつける。

「行け、ドジ吉。早く！」

「け、けど……。」

バタついている小さな手足の動きが、しだいに弱まっていく。

――こ、ころす気やろか。

ドジ吉の背中を、つめたいものが走った。

「親分、やめてくれ。死んじまう！」

「さわぐな。こんなガキ、死のうと生きようと――。」

ふいに、花ちゃんの手足がバタッと草むらに落ちて、動かなくなった。

「やめろ！」

ドジ吉は、ホクロの安の背中へ、頭からぶつかっていった。

ごろごろと、草の上を重なってころがり、パッとはねおきた。

「なに、しやがる。」

安の右手がシュッと動き、ほほに、つきさすようないたみが走った。するどく、とがった物をにぎっている。

ドジ吉は、やみの中でホクロの安をにらみつけた。

「スリは、人ごろしをせえへんのがほこりやと教えてくれた

のは、あんたやないか。」
「やかましい。きれいごとを言ってられる場合か。」
かまわずドジ吉は、草むらの中の小さな体をだきおこした。
「花ちゃん、しっかりするんや、花ちゃん！」
ゆすりながら、ほっぺたをたたく。
ところが、ぐいとえり首をつかまれて、ひきおこされた。
「行け！　やつらが来た。」
そのとき、「ウワァーン」と花ちゃんの泣き声がひびいた。
失っていた意識がもどったのだ。
とたんに、安の右手が、さっとふりあげられた。
「あぶない！」
いっしゅん早く、ドジ吉は、花ちゃんの体におおいかぶさった。ドスッとにぶい音がして、背中に焼けるようないたみが走った。
「お花！」
という声とともに、バタバタと足音が近づき、土橋の上で止まった。すぐに、ちょうちんが川原につきだされる。
「そこで泣いてんのは、お花か。どないした？」
「くそっ。」
ホクロの安が、川原の草をけって、にげはじめた。
「待て！」
バラバラと職工たちが追う。
橋の下のくらやみを、ちょうちんが照らした。そのあかりの向こうに、親方の四角い顔を見たとたん、ドジ吉の体から、いっぺんに力がぬけた。そのまま、やみの底へ引きこまれるように、スーッと気を失った。

気づいたときには、ふとんの上にねかされていた。
柱につるされたランプのあかりで、ボーッとあたりのようすがわかる。いつもねている職工部屋ではなく、親方一家がねとまりしているところらしい。
さらしで巻かれた背中のきず口が、ズキズキと痛い。
あれから、ホクロの安は、どうしたのだろう。にげのびたのだろうか。
どっちにしても、もうここにはいられない。
ドジ吉の正体が、ヒゲの主任や職工たちにまで、知れわたったにちがいない。親方だって、ひとりむすめをあんな目に

あわせたのだから、ゆるしてはくれないだろう。「出ていけ」と言われてから、負け犬のようにしっぽをまいてにげだすのは、いやだ。

背中のきずはいたむが、歩けないほどではなさそうだ。

——よしっ、いまのうちに、消えてやろう。

そっと身を起こしかけて、ドキッとした。まくらもとに、だれか座っている。

首を回してみると、花ちゃんだった。

座ったまま、いねむりをしている。水にぬらしたてぬぐいをにぎり、こっくり、こっくり船をこいでいる。そのてぬぐいで、ドジ吉のあせをふいてくれていたらしい。

——あんなこわい目にあったたっちゅうのに、あほやな。

その小さな体を、いままで自分がねていたふとんの上に、そっと横にした。

ふっくらした白いほっぺが、ランプのあかりで、少し赤らんでみえる。

「おおきに、花ちゃん……。さいなら。」

くるっときびすをかえして、たたみの上を静かに歩く。部屋のしきいをまたぎかけたとき、目の前に、四角い顔が、ぬうっとあらわれた。

「けが人は、ねてな、あかんやろ。」

「親方——。」

ドジ吉は、深く頭をさげた。

「お世話になりました。」

それだけ言って、横をすりぬけようとしたが、親方のごつい手で引きもどされた。太いまゆが、きゅっとつりあがっている。

「また、スリにもどる気か？」

答えられずに、顔をそむけたとたん、

パシッ

と、ほほが鳴った。クラッときて、思わず、しきいにひざをついた。

親方が、仁王さまみたいに目の前に立ちはだかる。

「そのしきいから、一歩でも外へ出てみろ。足こし立たんようにしてやる。」

打たれたほほをおさえるドジ吉の頭の上から、親方のダミ声がふってくる。

「スリにもどっても、おまえの親分は、もういいひんぞ。」

「えっ！」

「ついさっき、重いなまりの玉をひきずりながら、獄舎へひかれていったわ。」

「つ、つかまったんですか！」

「あの男、北工場の納屋からぬきとった五寸くぎで、看守をめったづきにして、殺してしもうたさかい、もうシャバへは出てこれんやろ。」

ドジ吉は息をのんだ。やっぱり、ホクロの安は人をあやめ

たのだ。
「正吉、あいつと同じ道を歩きたいのか。暗い獄舎に一生つながれたいのか。」
「けど、親方。」
ドジ吉は、顔をあげて言いかえした。
「化けの皮がはがれてしもうたのに、このまま、ここにおるわけにはいきまへんやろ。」
親方が、ひざをついてすわった。
「心配あらへん、主任には、もう話をつけた。そら、職工たちから、白い目で見られるかもしれん。後ろ指もさされるやろ。けど、それをのりこえなあかんのや。」
「……。」
「正吉、わしもむかしは、ぬすっとやったんや。」
「えっ！」
「官軍と幕府軍のいくさで、ふた親をなくした六つの子どもが、あの御一新の混乱を生きぬくには、人さまの物をいただくしかなかった。野荒し、置引き、さい銭どろぼう……。よう、つかまらへんかったもんや。」
親方の手が、ドジ吉のかたにおかれた。

「ちょうど、おまえぐらいの年のとき、ふっと思うたんや。わしは、こないなことをするために、生まれてきたんやろか。死ぬまで、ぬすっとしかできんのやろか……。そしたら、なんやさみしゅうなってな。」

それと同じ気もちに、ドジ吉もおそわれたことがある。なにも、好きでスリをやっているわけではない。できることなら、まっとうな仕事をしたい。だが、身にまとわりついたものが、重すぎる。

「正吉、勇気をだせ。なにも、清水の舞台からとびおりろとは言わん。せめて、どんぶりばちいっぱいの勇気をふるいおこしてみろ、いっしょにささえてくれる者が、きっとおる。」

それだけ言うと親方は、ポンとかたをたたいて立ちあがった。ドジ吉の横を通りぬけて、ふとんのそばへ行き、花ちゃんをだきあげる。

「このわがままむすめが、一晩じゅうねないでかいほうする言うて、きかんのや。」

ぼやきながら、しきいのところへもどってきた。

「ゆっくり休んで、はようその傷をなおしてくれんことには、お花もほたるがりの相手がおらんでなあ。ハッハッハッハ……。」

笑い声を残して、親方が、となりの部屋へ消えた。

ドジ吉は、しきいに手をついたまま、そこから動けなかった。

（終わり）

●作家紹介

吉橋通夫

一九四四年岡山県に生まれ、現在京都に住んで、執筆活動中。

歴史物語を得意とし、主な作品に『たんばたろう』、『京のほたる火』などがある。

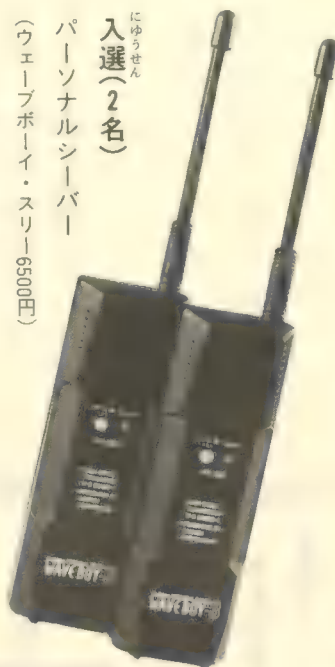
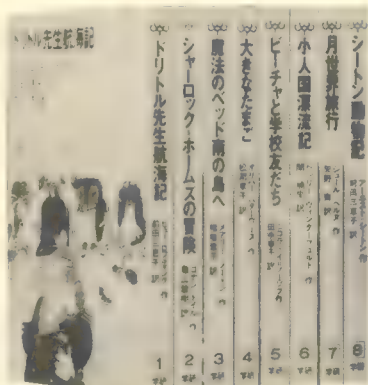
今年は、読み物特集の作品に手をくわえ、現代ものの楽しい作品を学研から発行する予定ではりきっている。

趣味は山登りで、今年の夏も沢でカモシカとにらめっこしたり、夜空の天の川を見ているはず。

はがき感想文コンテスト／作品募集

「読み特」を読んで
はがき一枚に
感想文を
書いてみませんか。
優秀作品には
賞品を
さしあげます。

賞品

入選（2名）
パーソナルシーバー
（ウェーブボーイ・スリー6500円）

佳作（10名）
学研小学生文庫
（8さつセット4080円）

★応募のきまり★

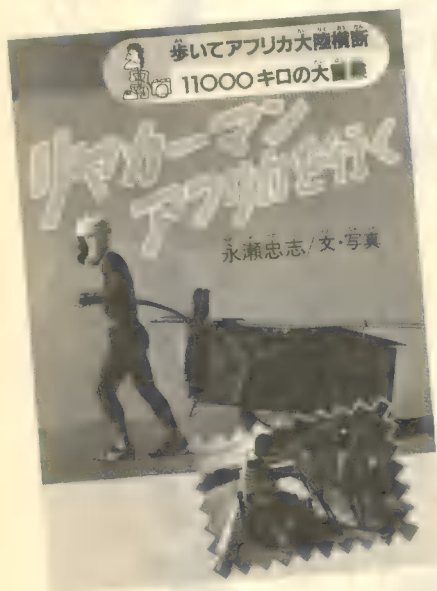
①この本にのっている作品の中から、おもしろかった作品、よかった作品を一つ選んで、その感想をはがきに書いてください。

②感想文は、この本の終わりについている応募はがき（官製はがきでもよい）に書いて、切手をはってお送りください。

③はがきには、かならず作品名を書くこと。

④**しめきり**
一九九二年十月三十一日（消印有効）

⑤**送り先**
〒142—55　東京都荏原郵便局私書箱45号
「6年の読み特・はがき感想文」係

⑥**発表**
一九九二年度「6年の読み物特集(下)」誌上。

SFユーモア

ふしぎで ひやりとする体験

ちょっとこわくてぐんと楽しい

林多加志・作／うすい しゅん・絵

外出禁止をおかして、タケシとトシオは映画館へ。やっていたのは、『ドラキュラ伯爵、月に行く』。

◎学級閉鎖で映画に行く

電話のベルが鳴った。ぼくは、ところかまわずかかってくる電話がきらいだ。

「ママ、電話、電話。」

テレビの前にねっころがり、朝からずっとテレビばかり見ていたぼくは、台所にいるママに大声で言った。

「まったく、おうちゃくなんだから……。」

ブツブツ文句を言いながら、ママがやってきて、受話器を取りあげた。

「はい、ヤマモトです。……、あっ、トシちゃん。いるわよ。今、かわるから。」

ママはそう言うと、受話器をぼくの方につきだして、

「タケシ、あんたによ。」と言った。

手をのばしたが、とどかないので、しかたなしに、ぼくは電話の方にはいずっていった。

「もし、もし。」

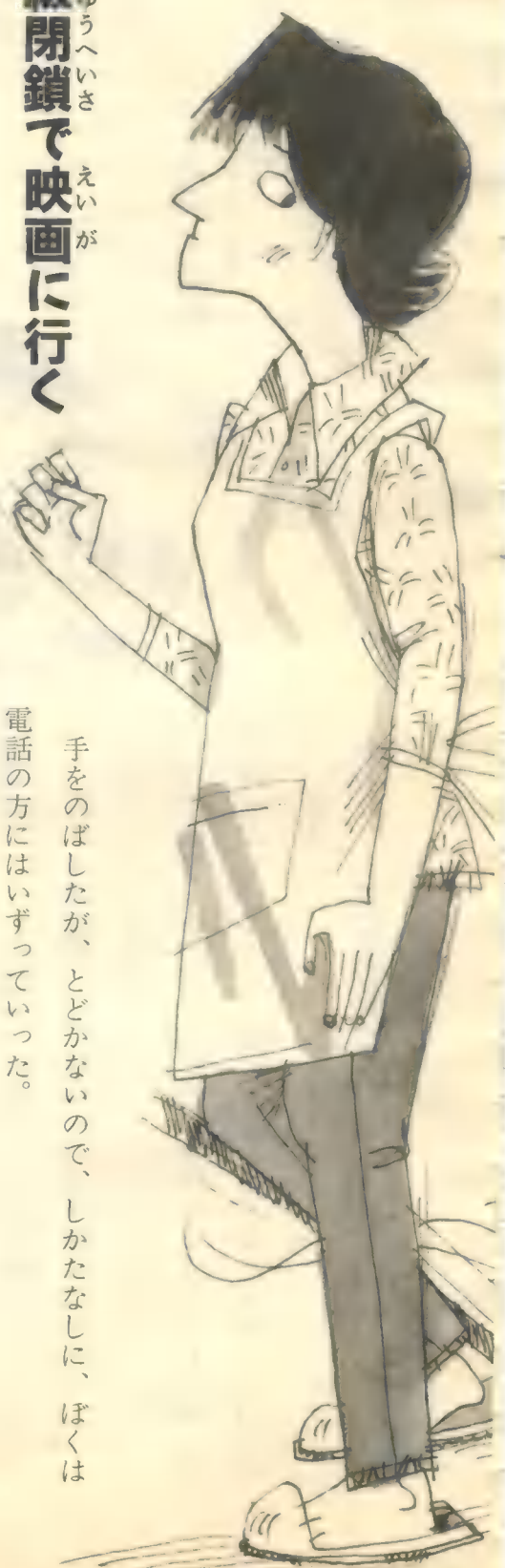
受話器の向こうから元気なトシオの声が流れてきた。

「あっ、タケちゃん。ぼくだよ。ねえ、これから、映画、見にいかない。タダ券が二枚あるんだ。日曜、祭日は行けないというやつなんだ。」

「じょうだんじゃないだろうな。じょうだんは休み休み言えっていう……。」

「ちがうよ。もうちょっとで期限が切れちゃうから、おまえ行ってこいって、お父さんがくれたんだ。」

「でも、学級閉鎖なのに、映画なんて行ってもいいのかなあ……。」

〝ピーヒャラ、ピーヒャラ〟の食中毒がぼくたちのクラスで

起こり、ぼくたち元気組も学校は休み。つまり学級閉鎖ってわけ。でも、学校のある時間に外出してはいけないことになっているのだ。

「なーに、見つかんなけりゃ、だいじょうぶさ。」

受話器の向こうのトシオは自信たっぷりに言った。

ママに映画行きのことをしゃべると、

「あんたにゴロゴロされていちゃ、じゃまだから、行ってらっしゃい。電車賃もあげるわ。おこづかいももちろん、あげるわよ。」

と、ぼくの映画行きには大賛成だった。

ぼくはというと、外は雨だし、なんとなくボーッとしていたかったのに……。

よほど、ぼくのことがじゃまらしい！

というようなわけで、ぼくとトシオは映画を見にいくことになった。

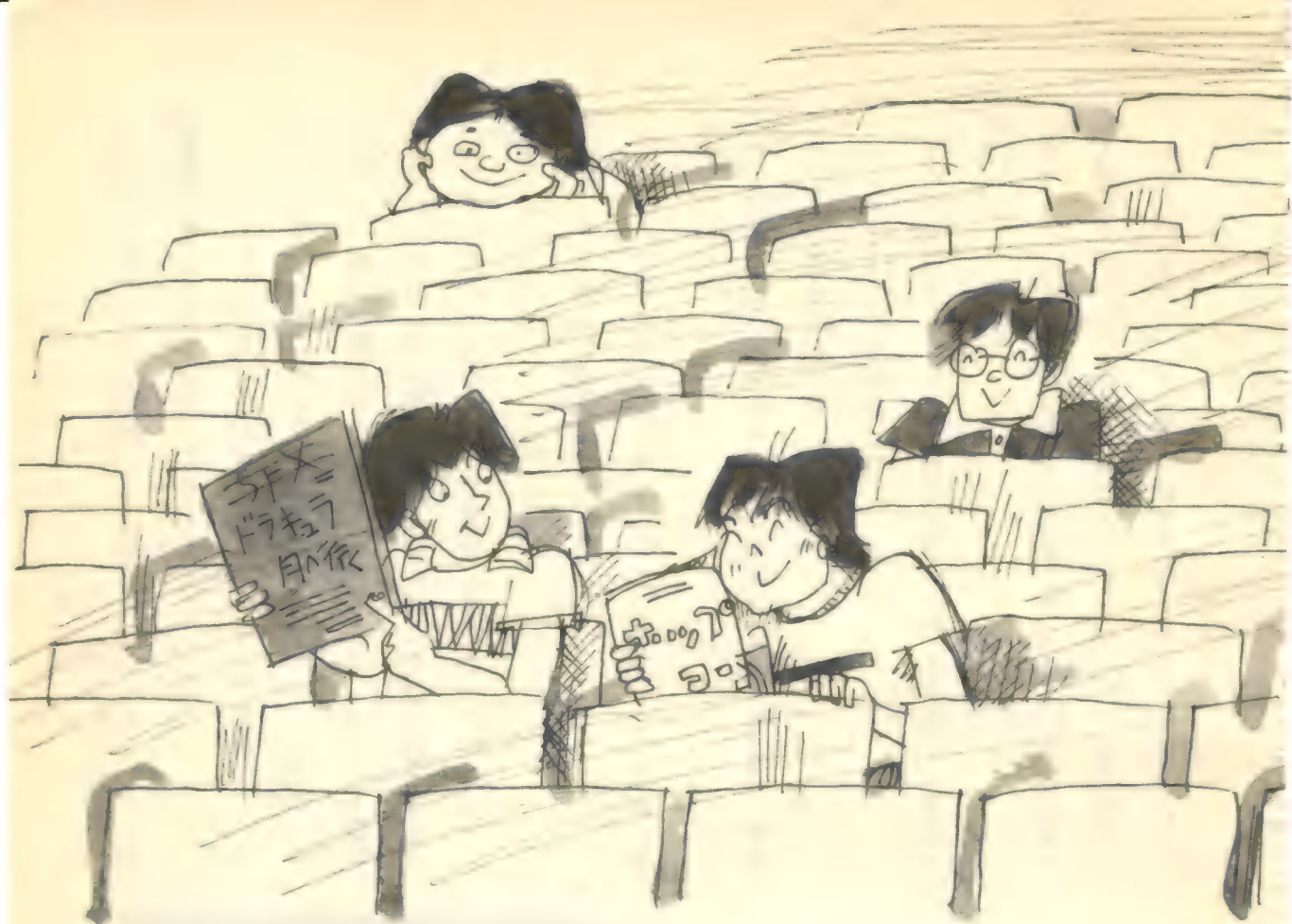
ぼくたちは駅の改札口で待ちあわせをして、映画館に向かった。

映画館は、ぼくたちの駅から三つ先の駅前のビルの中。平日の昼間だから、電車の中も、駅ビルも子どもの姿がなかった。

窓口でチケットを売るおねえさんも、たいくつそうにしていた。

「いらっしゃいませ。」

と、口では言うが、どことなくふきげんそうだ。もしかしたら、ぼくたちのことを、とんでもない不良だと思っているのかもしれない。

ぼくはトシオに耳打ちした。

「気にするなよ。ぼくたち、悪いことしているわけじゃないんだから。」

トシオは、五百円硬貨を一枚出して、売店でパンフレットを一部買った。ぼくは買わなかった。そのかわりに、ポップコーンを買った。

「へへ。ぼく、パンフレット集めるのが趣味なんだ。」

と、トシオがじまんげに言った。

「ふーん。」

ドアを開けたら、映画は始まっていた。

「最後まで見たら、もう一度、最初から見ようぜ。」

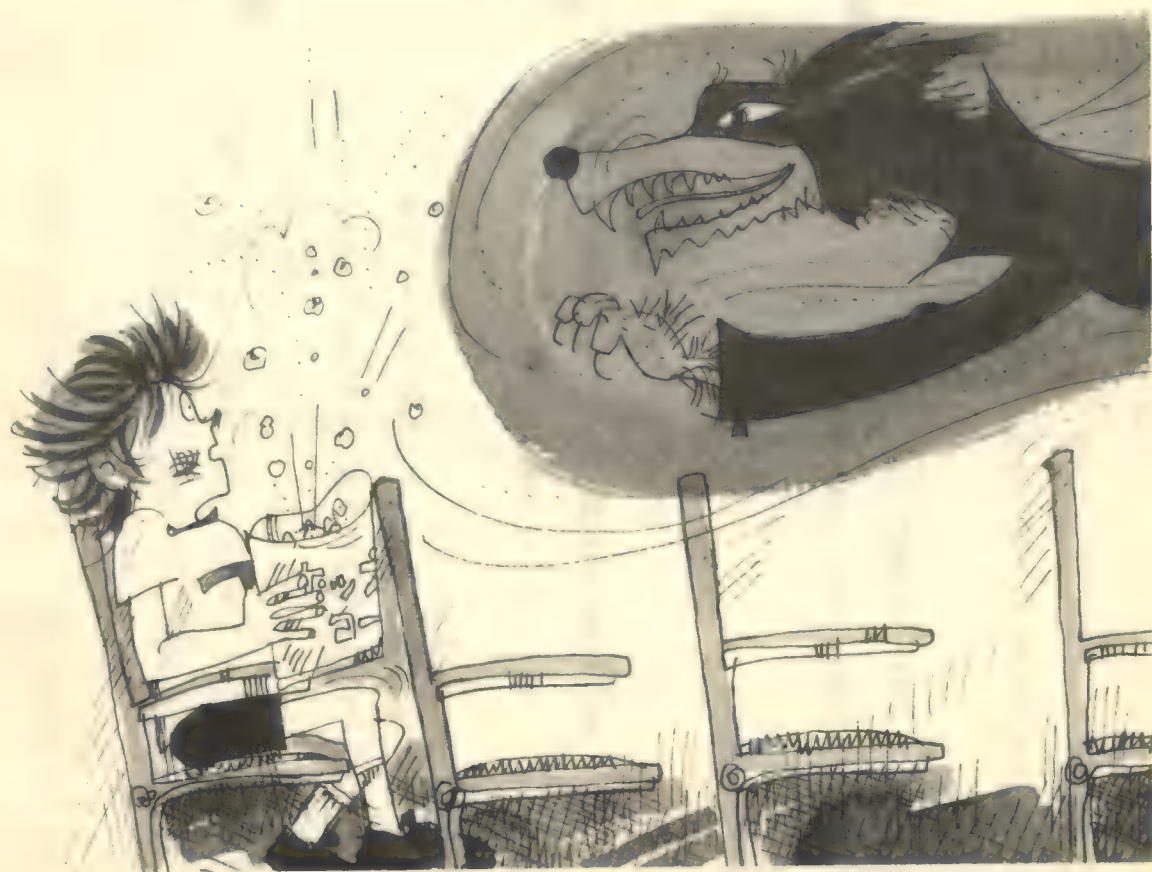
トシオがそう言うので、

「うん。おもしろかったら、ね。」

と、ぼくは答えた。

大学生風の男の人が入ってきた。ぼくたちは、そのあとについて歩き、真ん中のいちばんいい席にこしかけた。男の人の三列前だ。

目が暗がりになれてきたので、ぼくは、あたりを見まわした。ほとんど客がいない。五人だけだ。よほどの映画好きかよほどのひま人にちがいない。

映画は『ドラキュラ伯爵、月に行く』というSFX（特殊撮影）をふんだんに使ったSF&ホラー作品だ。
スクリーンではちょうど主人公のドラキュラ伯爵が、ハンサムな青年から血に飢えた吸血鬼に変身するシーンを映しだしていた。顔の血管が青くうきあがるとドクンドクンと脈打ち、それから少しずつ鼻からあごにかけてが前に盛りあがりだし、そして口が大きくさけて完全にオオカミに変身した。
ぼくは、〝あれっ？〟と思った。
「これ、ドラキュラ映画だったよね。」
ぼくはそっと、〝すごい、すごい〟とつぶやいているトシオにきいてみた。
「そうだよ。このドラキュラはコウモリばかりでなく、オオカミにも変身するのさ。」
トシオはぼくに耳打ちした。
ぼくはポップコーンをほおばりながら、スクリーンを見つめた。
オオカミに変身したドラキュラが、街に出て、次から次へと人間をおそいだした。スクリーンいっぱいに、血だらけの口が映しだされた。そして、いきなり、ぼくたちの方にドラ

キュラが飛びかかった。
「うわっ。」
ぼくたちは思わず悲鳴をあげた。ほんとうに、スクリーンから飛びだしてきて、ぼくたちをひと飲みするような気がしたからだ。
「こわいね。」
「うん。」
ぼくのうでにとりはだがたっていた。
やっぱ、来てよかった！

◎となりに座（すわ）った変なおじさん

「はい、ごめんなさいよ。」
いつやって来たのか、黒のレインコートでマントのように身を包んだ中年のおじさんが、ぼくたちの前をわざわざ通りぬけて、ひとつ席をあけて座（すわ）った。
「ほかに席はいくらでもあいているのに。」
トシオがぼくの耳に口を近づけささやいた。
「むかつくな。」
ぼくがそう答えると、トシオのやつ、
「変態（へんたい）だったら、どうしよう？」
と、つぶやいた。
ぼくは、またとりはだがたった。
ぼくのひとつあいた向こうに、そのおじさんが座（すわ）っているんだ。被害（ひがい）にあうとすれば、トシオではなく、ぼくのほうだ。
「なにをボソボソつぶやいているんだ。周りの者にめいわくだろ。」
おじさんが大きな声でどなった。
どっちがめいわくだ！　でも、ぼくたちはだまっていた。だまるしかなかったからだ。
ぼくは、チラリ、チラリとおじさんのことを観察した。
レインコートは黒のヨレヨレ、浮浪者（ふろうしゃ）が着ているのより少しましという程度（ていど）。そして、頭には黒のベレー帽（ぼう）。
（画家かな？）
おじさんがレインコートの内ポケットに手をつっこんだ。
なにをするのかと、ジッと見ていたら、小さなウイスキーのびんを取りだした。そして、小さなコップに注いで、チビリ、チビリと飲みはじめた。
（なんだ、よっぱらいか！）

ぼくはほっとして、スクリーンに目をやった。

ドラキュラ映画といっても、昔のものじゃなかった。ドラキュラ伯爵はまるで、スーパーマンみたいに空を飛び、大きなビルを爆破したり、飛行機のつばさを折ってついらくさせたり、とにかくはでに悪いことばかりをやるのである。それに対して、人間のほうは、空飛ぶオートバイやレーザー銃、それにサイボーグなんかでやっつけようとするんだけど、いつもドラキュラ伯爵は裏をかいてにげてしまう。

にげるときにかならず、

「ウワハハハ、ウワハハハ。」

と、ドラキュラ伯爵は高笑いをした。

そして、そのたびに、となりの変なおじさんも、

「ウワハハハ、ウワハハハ。」

と、ドラキュラ伯爵そっくりに高笑いをした。

ぼくは、そのたびに、そっとおじさんをぬすみ見た。

おじさんは食い入るような目で、楽しそうにスクリーンを見ていた。そして、思い出したようにウイスキーを飲んだ。でも、それは飲むというよりも、なめるという感じだ。

映画はいよいよクライマックスにさしかかった。ドラキュラ伯爵をやっつける毒薬が月面基地で開発され、ドラキュラ伯爵はそれをうばいに月に行くことを決意する。

ドラキュラ伯爵はコウモリに変身して、打ちあげ直前の宇宙船にもぐりこんだ。そして、宇宙船が大気圏を脱出したころから、乗組員を一人、また一人と殺していく。

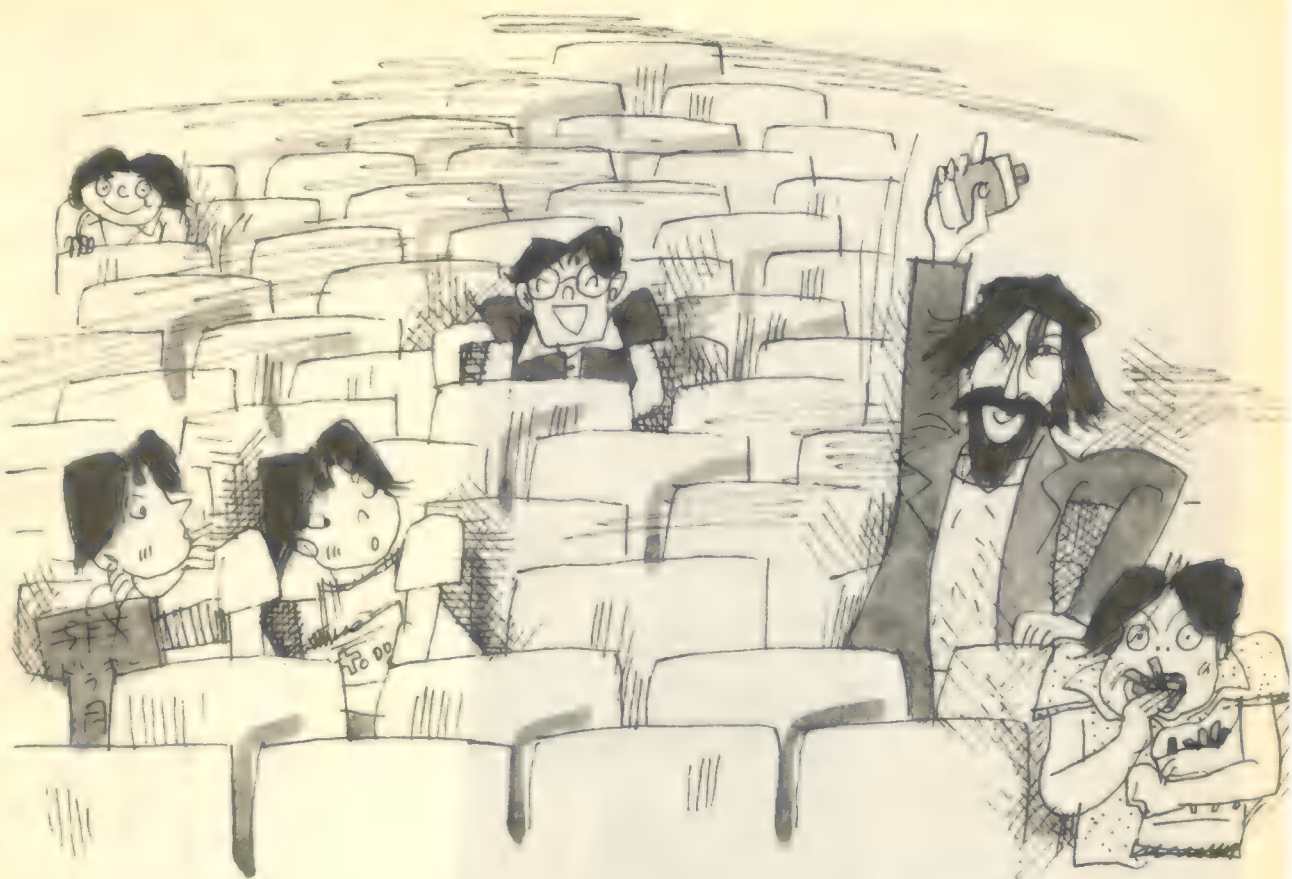
船長がこのことに気づき、「ドラキュラがしのびこんでいる。」と言って、ドラキュラ退治の作戦を考えだす。ゴミ捨て部屋に追いこんでから、ドアを開けて、宇宙の果てに捨ててしまおうというのだ。

そして、乗組員全員に十字架のネックレスをわたし、宇宙食用のニンニクエキスを体にまぶさせた。三チームに分かれて、ドラキュラ探しを始めた。一チームは、逆にゴミ捨て部屋に追いこまれて、宇宙の果てに捨てられてしまう。もう一チームはドラキュラ伯爵のゲリラ作戦によって、ぜんめつさせられてしまう。そして、船長のいるチームだけが残った。

「おい、船長。一対一の対決で、勝負を決めようぜ。」

と、ドラキュラ伯爵がどなった。船長も、

「よし、わかった。」

と、答える。
二人は宇宙船の真ん中で、光線銃を持って、背中合わせになった。五秒間前に歩いて、ふりむいてうつという果たしあいだ。
「ワン。」
「ツー。」
「スリー。」
スクリーンに乗組員が大写しになった。彼らは、光線銃でドラキュラ伯爵をねらっていた。
「フォー。」

光線銃の引き金が引かれようとした。その瞬間、となりのおじさんが、

「あぶない！」

と、大声でさけんだ。

聞こえたのか、光線銃の引き金が引かれたのと、ドラキュラ伯爵が身をふせたのはどうじだった。乗組員がいっせいに光線銃で、ドラキュラ伯爵をうちはじめた。ドラキュラ伯爵は転がりながら、ひきょうな乗組員をうちころした。そして、船長の光線銃もうちおとした。

「命だけは助けてください。」

船長は手を合わせてドラキュラ伯爵をおがむ。ドラキュラ伯爵が近づくと、船長はいきなり十字架を前につきだした。ふつうだとドラキュラは十字架に負けてしまうのだが、この映画のドラキュラはちがった。それをうばいとると、遠くへ投げすててしまった。

「いつまでも、そんな非科学的なものにやられるわたしではない。ウワハハハ。」

そしてニヤリと笑うと、船長の首すじにかみつくと、みるみる船長はやせ細り、ひからびたミイラになってしまう。

「中華風の味がして、こいつの血はうまいな。ウワハハハ。」
ドラキュラの血のついた口がスクリーンいっぱいに映った。
「ウワハハハ。そうそう、わが一族は昔からグルメだったのさ。ウワハハハ。」
おじさんは腹をかかえて、大笑いした。
ぼくはゾーッとした。体がこわばって、動かない。
〝わが一族？……ということは……？〟
横目でおそるおそるおじさんを見た。
スクリーンの色がうつりこんでいるのか、おじさんの顔が赤くなったり、青くなったりしていた。そして、目が異様に赤々とかがやいていた。暗やみで見るネコの目みたいに。

◎おじさんはドラキュラの一族？

ぼくは息を殺して、トシオにささやいた。
「向こうに行こうよ。」
トシオもぼくと同じことを感じていたらしい。だまったまま、うなずいた。
ぼくたちは音を立てないようにそっと立ちあがろうとした。
「なんだ、おまえたち。わしのそばがいやだとでも言うのか。」
いきなりおじさんは決めつけるような口調でどなった。
「…………」
ぼくたちは金しばりにあったみたいに、動けなくなってしまった。
「だいたい、なんでおまえたちみたいな子どもがこんな時間にいるんだ。」
おじさんは目をつりあげ、ぼくたちをにらみつけた。すごみのある目だ。
（ドラキュラ！）
ぼくの頭にフッとそんな言葉がうかんだ。
「ウロチョロしないで、終わるまでそこに座っていろ！　あとでたっぷり血を吸いとってやる。」
おじさんがぼくたちに命令した。
催眠術にかかったみたいに体から力がぬけ、ぼくはイスにへたりこんだ。トシオもへたりこんだ。
（ドラキュラ！　そんなばかな。そんなのいるわけないじゃないか。血を吸いとると言ったけど、悪いじょうだんさ。そうさ、たんなるよっぱらいさ。運が悪くても、警察官か不良を取りしまる補導員さ。）

ぼくの目はスクリーンを見ていても、心はずっと別の所にあった。

（だいじょうぶさ。警察官や補導員だとしても、学級閉鎖なんだから、ズル休みじゃないし、第一、ママが〝行ってらっしゃい〟と許してくれているんだもの。）

ぼくは自分に何回もいいきかせた。

（もしかしたら、この映画館に入る人は全員ドラキュラの手下なのかもしれない。）

そんな考えがぼくの頭にうかんできた。

映画館の受付のお姉さん（おばさん？）やチケットを切ったおばさんのふきげんそうな顔がうかんできた。

（そういえば、無表情で、うす気味悪かった。ここにいる客も、なんとなく変なかんじだった！）

映画のほうは、ぼくの気もちとは関係なく終わりに近づいていった。

宇宙船をうばいとったドラキュラ伯爵は、月へと向かった。

ドラキュラがおそってくることを知った月面基地から、次つぎと宇宙船が飛びたち、ドラキュラの宇宙船におそいかかる。

しかし、ドラキュラ伯爵のみごとなそうじゅうで、相手の攻撃をかわし、爆破していく。そのたびに、画面いっぱいに火の玉が飛びちった。

「ようし、うまい。さすがだ。」

「いっちょうあがり。」

変なおじさんは、ウイスキーをなめながら、さかんにドラキュラに声援を送っていた。

そして、ぼくは、おじさんの声を聞くたびに、

（助けて！　ドラキュラがぼくたちを殺す！）

というさけび声をあげたくなった。でも、声は出なかった。

心の中で、どうか、映画が終わりませんように、といのった。

月面基地についたドラキュラ伯爵の宇宙船は、月面基地の学者がしかけた爆弾で、大爆発した。しかし、ドラキュラはコウモリに変身して、逃げてしまう。

そして、とうとうドラキュラ退治の毒薬研究室の入り口にたどりついた。西部劇のガンマンみたいに光線銃をかまえて、ドラキュラ伯爵はそのドアをけとばして開けた。

「ようこそ、ドラキュラ伯爵。あなたが来るのを待ちわびていました。この薬が本当に効くか、ようやく実験ができます。」

うすよごれた白衣を着た学者が、旧式のピストルをかまえて立っている。

「残念だけど、たぶん、効かないと思いますね。わたしは不死鳥ですから。ウワハハハ。」

「ハハハハ。肉はとけ、骨はくさり、最後はほこりになってしまうのが、あなたの運命です。」

学者も笑う。ピストルが火をふいた。

カチン。

タマの形をした注射針が床に落ちた。ドラキュラの体を通りぬけて、壁に当たったのだ。

「たしかに当たったはずなのに。」
首をかしげる学者の顔。
バキューーン！
白衣が血で染まっていく。そして、苦痛にゆがむ学者の顔。
「なぜだ？」

学者がつぶやいてたおれると、入り口のドラキュラのわきに、もう一人のドラキュラが歩みでてきた。そして、ドラキュラのかたに手を置こうとするが、かたをすりぬけてしまう。
「これだから専門バカは困る。科学者でありながら、3D（立体）影像も知らないのだろうか。ウワハハハ。」

◎消えてしまった変なおじさん

「ウワハハハ。やはりドラキュラ映画の最後はこうでなくてはいけないな。」

ぼくたちは身動き一つしないで、おじさんの声を聞いていた。

「おい。そこの二人、なんとか言え。」

なんとか言えと言われても、なにも言えない。

「これで、二人とも最後だな。」

スクリーンに大きく「ジ・エンド」と出た。たしかに最後だ。

次から次へと、スクリーンに出演者の名前が英語で出てきた。

チラリと見ると、トシオは手をにぎりしめ、目を思いっきりつぶっていた。

場内が明るくなったのが、マブタの裏からもわかった。

ドクン。ドクン。

自分の心臓の音が聞こえる。

「これで、第一回目の上映を終わりにします。」

館内放送が流れだした。

「?」

(でも、目を開けたら、口を大きく開けたオオカミがいたらどうしよう?)

ぼくはおそるおそる目を開けた。そして、変なおじさんの方をゆっくりと見た。

だれも座っていなかった。

「トシオ。いなくなっている。」

ぼくは、手をにぎり、目をつぶっているトシオに声をかけた。

「えっ、本当?」

トシオとぼくは顔を見合わせた。トシオの顔は真っ青だ。

きっとぼくの顔もそうにちがいない。

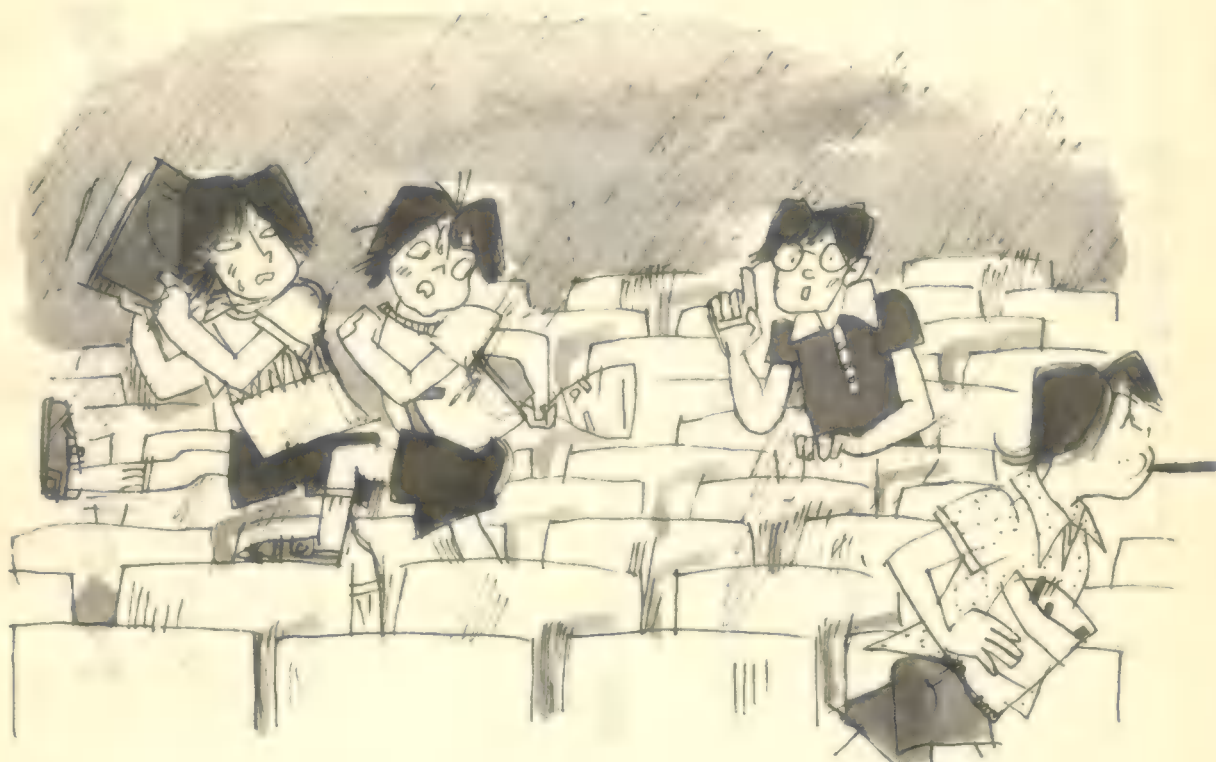
「こわかったね。」

と、トシオが言った。

「うん。殺されるかと思った。」

ぼくも答えた。

「あのおじさん、どこに行ったのかな?」

「いないね。でも、出口で待ちぶせしてたりしないかな。」

トシオがだまってしまった。ぼくもだまりこくった。
おびえをかくすためか、トシオが、
「きっと、たちの悪いよっぱらいだよ。」
「そうさ。よっぱらいさ。ドラキュラなんているわけないもの。」
ぼくは自分にいいきかせるように言った。声に出したら、本当にそう思えてきた。
「そうさ、そんなの、科学的じゃないよな。」
ぼくは帰りたかった。でも、帰りたいと言ったら、いかにも弱虫に見られてしまう。
「はじめから、もう一回見ていく？」
トシオが反応(はんのう)すると思って、ぼくは聞いてみた。
「そうだね。はじめの部分、見れないで帰れないよな。」
トシオはそう言うと、パンフレットを開いた。トシオも、弱虫と思われたくないから、そう言ったのかもしれない。
「ひゃあ！」
トシオが変な声を出した。
「ここ、読んでみて。あらすじだと、最後はドラキュラ伯爵(はくしゃく)、薬で死ぬことになっている。」

「えっ、うそだろ。」

ぼくはトシオが指さしているところを読んだ。本当だ！

「ひえっ！」

ぼくは悲鳴をあげて立ちあがった。

「きみたち、どうかしたの？」

ぼくたちの後ろ三列目に座っていた大学生風の人が声をかけてきた。

ぼくたちと同じようにとちゅうから映画館に入ってきたので、はじめから見ようとしているらしい。

「すみません。今の映画で最後に死んだのは……学者でしたよね？」

トシオがそうたずねると、男の人は、

「えっ、ねぼけてたんじゃないの。最後に死んだのはドラキュラだよ。薬入りのピストルにうたれて、肉がとけ、骨がくさり、ほこりになってしまうシーン、すごかったじゃないか。」

ぼくとトシオは顔を見合わせた。

こんどはぼくがたずねた。

「それじゃ、ぼくのそばにいた男の人、どこに行ったか、知ってますか？」

「やっぱり、きみたち、ねぼけてるよ。きみたち、ずっと二人きりだったじゃないか。」

ぼくたちはまた顔を見合わせた。トシオの顔がまた青くなっていた。

そして、ぼくたちはどうじに同じ言葉をつぶやいた。

「やっぱり、帰ろうよ。」と。

（終わり）

●作家紹介

林多加志

千葉県船橋市に生まれる。出版社に勤務したのち独立し、フリーライターとして雑誌などに記事を書いている。『ウソつきのススメ』で講談社児童文学新人賞を受賞。

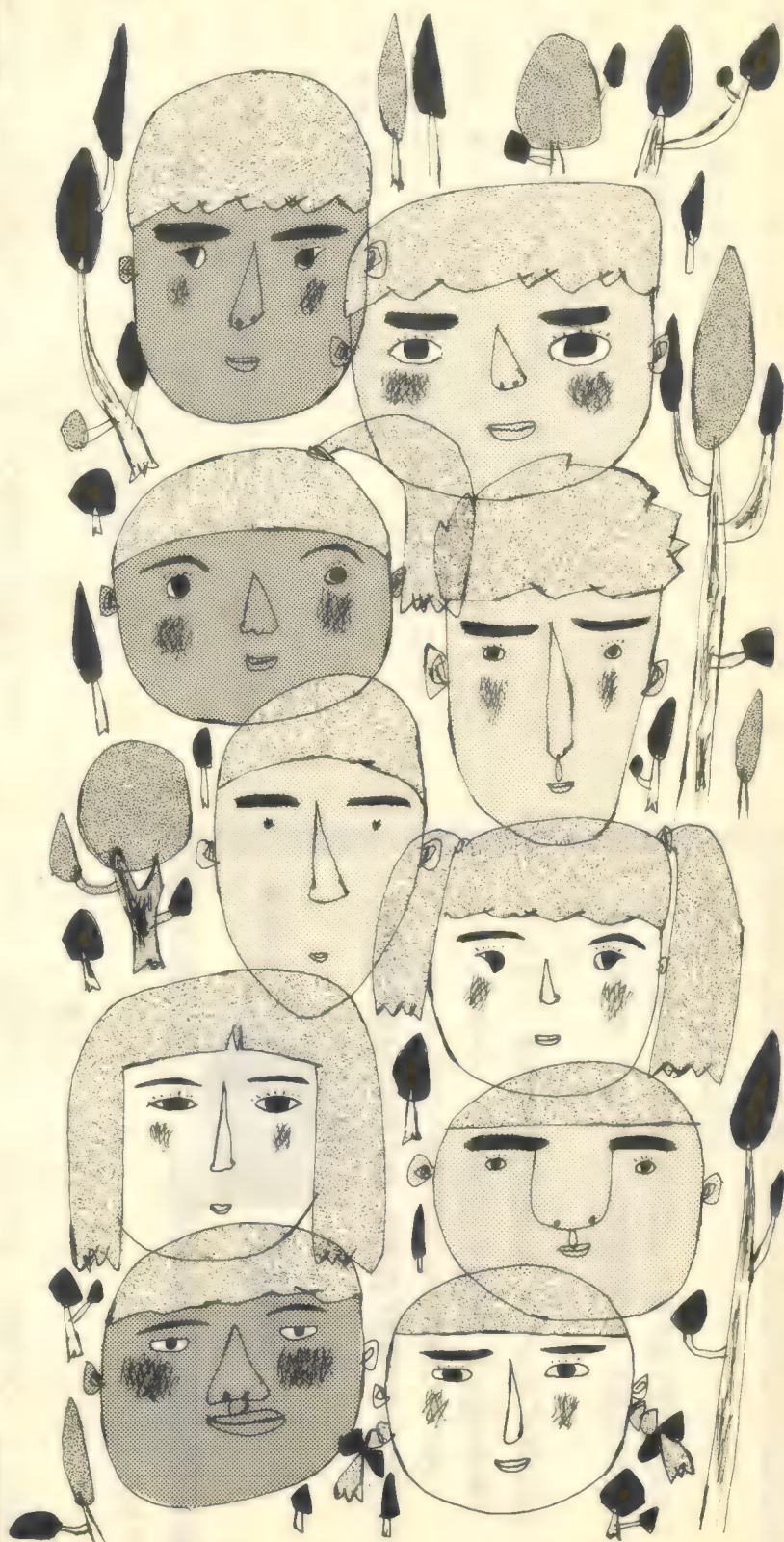
これから、男の子の読み物を書いていきたいとはりきっている。

趣味は落語、プロレス、SF映画だが、今年の夏も、キャンプや海、野外音楽会にはぜったいに出かけると今から楽しみにしているそうだ。

《生活読み物》キャンプ村にくりひろげられる新しい体験

ヤマユリの村の 子どもたち

三好京三・作／秋山 薫・絵

森沢分校の五人が、分校の裏山にあるキャンプ村にやってきた。そこで、南関小学校の五人組に出あった。

夏休みにはいって最初の日曜日の昼近く、プールのそばの雑木林では、あぶらぜみがジージー鳴いている。プールと雑木林のさかいめの流れの土手には、ヤマユリが白い大きな花をいくつもさかせ、強いかおりをはなっていた。

分校の裏山にあるキャンプ村は、おそらく昼ねの時間なのだろう、ひっそりと静かだ。

赤い屋根に白いかべの分校校舎と、バンガローやテントのあるキャンプ村を、ときおりながめやりながら、森沢分校高学年の小学生たちが、プールで水遊びをしている。四年生の正人、五年生の麻美、秀年、六年生の義久、千秋の五人だ。

みな黒々としたはだをして元気そうだが、四年生の正人はちょっとやせていて、こしつきもどこやらへなへなしている。五年前に、おとうさんを病気でなくした子だ。

十時ごろからプールに入っているので、水遊びにはそろそろあきている。しかし、五年生の秀年が、プールの下の用水路から、直径三十センチほどのビニール管を見つけてきてプールにしずめこんだ。そして、

「わあい、ぞうの玉乗り。」

なんて言いながら、足でころがしている。

「どれ、おれにもかせ。」

義久が秀年をおしのけて管に乗った。とたん、よろけて水中にたおれこんだ。

「しっぱい、しっぱい。しかし秀年なんかに負けてはいられない。」

そして両うでを水平にあげ、玉乗り、というよりは管乗りをする。

「わたしにもかして。」

「わたしにも。」

麻美も千秋も、おもしろがって管乗りをした。おしまいには正人までが、

「ぼくにもできるかなあ。」

と首をかしげながらやってみた。ころんでばかりいたけれど、すこしは乗れた。

「さあ、次は浦島太郎をやろうか。」

と義久が言い、みなプールサイドに置いたビート板を取りにむかったとき、キャンプ村から数人の子どもたちがおりてき

た。水泳パンツに水着姿だから、プールを使いにやって来たのだ。

「ちっ、つまんない。」

正人がしたうちをした。プールは、キャンプ村がひらかれているあいだ、分校の子どもたちとキャンパーたちと、両方で使うことになっているのだ。

「まあ、待て。」

義久が新来の客たちを見つめながら、正人をなだめた。

「あの男の子たちは、もしかすると、秀年とぼくのおとくいさまかもしれない。」

おとくいさまというのは、秀年と義久がキャンプ村の売店においてもらっている、カブトムシやクワガタを買うお客さまのことだ。きのうの分は、みな売れてしまったと、けさ売店のかかりのおばさんが言っていた。

近づいてくる子どもたちも、小学校高学年の年ごろだ。やはり男の子三人に女の子二人。プールに着くと、目のぎょろりとしたリーダー格の男の子が、しゃがみこんでプールに手を入れた。とたん、

「わあ、つめてえ。」

ととびあがった。

「これじゃあ、先生が禁止しなくったって入れねえ。」

「やっぱり、心臓まひになりそう?」

かしこそうな顔の女の子がきいた。

「これじゃあ、だれでも一発さ。」

「だって、あの子たち、入っているじゃない。」

「やばん人だからだよ。山のやばん人。」

なにいと秀年が向かっていこうとしたとき、

「やだあ、あれ、なんなの?」

と別の女の子が水面を指さした。義久たちの前を、とかげのかたちをした黒いものが二ひき、ゆっくり泳いでいる。なんだ、こんなもの、と正人が、

「イモリだよ。腹が真っ赤なんだ。」

と教えてやった。

「気もちわりい。」

キャンパーたちはしりごみをした。そうしながら正人のようにやせた男の子が、

「あれ、あっちにも変なのがういている。」

とさけんだ。ミズカマキリがすいすい泳いでいる。

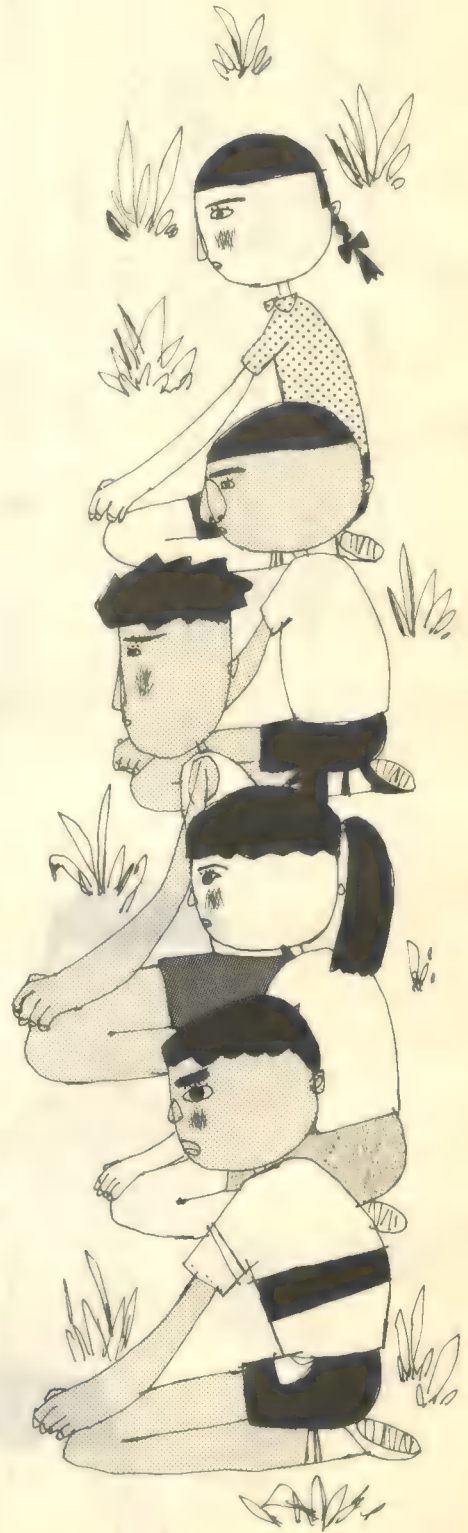
「ミズカマキリさ。こわくないよ。」
こんどは義久が教えてやった。
「こわくないだって？」
最初にプールに手をつっこんだリーダーらしい男の子が息まいた。
「虫のうじゃうじゃいるプールがこわくないなんて、やっぱりおまえたち、やばん人なんだ。そうだろう、山のやばん人。」
「なんだって。」
秀年が進みでようとするのを、義久が、よせ、とおさえた。キャンパーには、たまにがらが悪いのがいるのだ。
かかってこないとみて安心したのか、むこうは口ぐちにはやしたてた。
「やあい、やばん人。くまの子、やまざる。」
「早くいえばバーカ。」
「いなかもん。」
すると、それまでぐっとだまっていた麻美が、
「プールにはこんなのもいるよ。」
と、なにかをキャンパーたちに投げつけた。

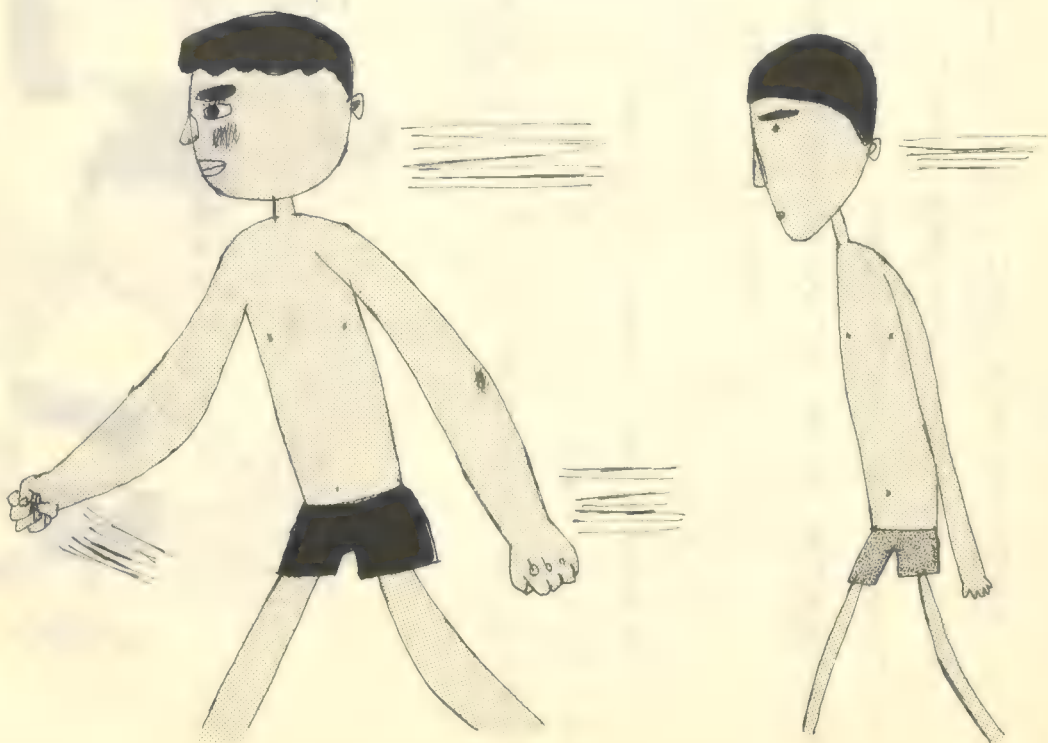
「きゃあ、カエル。」
キャンパーたちはうきあしだった。
「そら、もう一ぴき。」
色白で美人の麻美は、ほっぺたをピンクにそめて、腹の白い、ふとったイボガエルをまた投げこんだ。
「ばか、やばん人、なにをする。」
キャンパーたちはいっさんににげていく。
「あんたたちこそいくじなしの弱虫でしょう。」
こんどは千秋がイモリをつかんでは次つぎにキャンパーの後ろ姿に投げつけた。この千秋、やばん人どころか、毎年の学芸会の劇の台本を、先生にかわって執筆するほどの秀才なのだ。
バンガローのかげにキャンパーたちが消えると、ふいに正人がすすりあげた。
「なんだ、どうした。」
義久が正人のかたに手をおいた。
「いやだよう、ぼくいやだよう。」
「だから、なにがいやだって。」
「転校するんだよ。」

「だれが。」
「ぼくが。お母さん、再婚するんだって。」
「再婚？　どこへ。」
「町へ。」
　みなびっくりした。正人は泣きじゃくりながら、
「町には、今のようないじわるないじめっ子ばかりいるんでしょう。ぼく、いやだよ、行きたくないよ。」
と義久にすがりつく。みな暗い顔になった。義久は、
「転校かあ。」
と、声をおとして正人のかたをだいた。

　分校五人組はその日の午後から、正人とのお別れキャンプをやることにした。正人のお母さんの再婚は急に決まったらしく、村の人たちも分校の先生たちも、まだだれも知らない。月おくれ盆（八月十三日から十六日まで）の前に村を出ていくというのだから、正人と遊べるのはあと半月くらいである。それでにわかな自主キャンプとなったのだ。
　バンガローを二つ借り、午後二時ごろ、ビート板を持ってキャンプ場の木立ちの中をプールに向かった。すると、黄色の大型テントの前に、さきほどの五人がかしこまって正座をしている。そばに白いワンピースの女の人がいて、きつい顔で、一同を見おろしているのだ。
「わあい、いいきみ。」
　おもわず正人がひやかして、ふりかえった女の人ににらまれた。
　正座の五人の前を通りすぎようとしたとき、キャンプ場のスピーカーがなった。
「南関市東小学校の吉川先生、お電話が入っております。至急、管理棟事務室までおこしください。」
　吉川先生というのは、今の女の人らしく、そそくさと白いスカートをひるがえし、土手を管理棟の方へ登っていく。その姿が消えるのを見すますと、秀年がさっそくふりかえってきいた。
「あんたたち、南関市か？」
　この村から二十キロばかりはなれた、人口十八万ほどの都市だ。村で、町というときは、この南関市をさしている。
「そうだよ。」

ぎょろ目のリーダー格が、ぶっちょうづらでこたえた。
「どうしてしかられているんだ。」
「木登りだよ。木登りをしたら、正座一時間と決まっている。」
「木登りで？」
秀年が信じられないように、とんきょうな声をあげた。
「あぶないんだってさ。五年前、うちの学校の六年生がここでキャンプをしたとき、木登りで落っこちてうでの骨を折った。」
「それくらいで……。」
もどってきた分校の子どもたちは、みな気のどくそうな顔をした。ついでのように義久がきいた。
「ところであんたたち、きのう、クワガタやカブトムシを、売店で買ってくれたかい。」
「買ったさ。」
リーダーではない、いちばん背の低い子が、待っていたように答えた。
「ぼくも敏行くんも昭則くんも、さゆりちゃんも由美ちゃんも、みんな買ったよ。」
「それはありがとう。」
「どうしてありがたいんだい。」
リーダーは、敏行という名前らしい。
「今、達也が言ったように、全員が買ったんだ。南関のデパートのねだんの、三分の一か四分の一だから。ところがあの先生、どうしたと思う？　テントの中にクワガタやカブトがいるのはこわいって、ぼくたちがねむっている夜のあいだに、みんなにがしてしまったんだぜ。」
「一ぴき五百円もするのに。」
秀年がさけんだ。カブトムシのおすが五百円、ノコギリクワガタが四百円、そして赤カブトとなると八百円、それが売り手の義久や秀年の手に入ってくるお金だ。
「お金を返せばいいでしょう、だってさ。先生、たしかにぼくたちに買ったねだん以上のお金は出したけれど、腹が立つだろう。だから、きのうは、禁止されているプールに行ってみたし、今日は木登りをしてやったのさ。」
「あたりまえだよ、キャンプだもの。」
みんなも同情した。キャンプ村の所長さんは、いつも、キャンプの目的は、自然のなかで野性をとりもどすことだ、と言っている。ちなみに、その所長さんというのは、秀才千秋

のお父さんだ。
やがて、義久が思いきってさそった。
「みんな、正座なんかやめて、プールへ行かないか。またしかられたら、ぼくたちもいっしょに正座をしてあげるから。」
東小学校の子どもたちは、たがいに顔を見合わせていたが、やがて敏行が立ちあがり、
「よし、行こう。」
と言うと、わあ、行こう、行こうと、みんなテントへかけこんだ。
まもなく着がえて出てくると、十人いっしょになってプールへ急いだ。そのあいだに、東小の子どもたちが、全員六年生であることがわかった。
準備体操をし、体を洗ってプールへ入った。東小の子どもたちは、初めこわごわだったが、がまんして入っているうちに、冷たさを忘れて泳ぎまわったり、水かけやおにごっこなどの遊びをしたりするようになった。イモリやイボガエルは、分校の子どもたちがとって捨ててやった。
最後に、午前中にやらないでしまった、浦島太郎をやることにした。どういう遊びかというと、ビート板をたいらにしてまたにはさみ、両手で水をかいて進むのだ。つまり、ビート板はかめで、泳ぎ手は竜宮城をめざす浦島太郎。
これはおもしろくて、ビート板がなかなかまたにおさまっ

てくれず、たいていは太郎になれずにころんでもぐりこんでしまう。
「じゃ、秀年、おまえ、もはんえんぎをやってみろ。」
義久が命令したとき、分校校舎の方から声がした。
「南関・東小学校の横田敏行くんと、分校の正人くん、そこにいますか。」
見ると、キャンプ村職員の悦男さんである。分校のせんぱいだ。
「はあい、います。」
二人はいせいのいい返事をした。
「ちょっと、事務室まで来てください。」
みな心配そうに二人を見た。正人はともかく、敏行は吉川先生にこっぴどくしかられるのではないか。
「なんでもないよ。行ってくる。」
みんなの視線をはじきかえすように言って、敏行はプールから出、正人もそれに続いた。しかしやっぱり心配で、一同は、二人が土手をあがり、悦男さんといっしょにキャンプ場の管理棟に消えるまでじっと見おくっていた。

3

どこかよそのキャンパーたちが、上の森の方で、キャンプファイヤーの歌をうたっているのが聞こえる。空には星ひとつ見えないやみの夜だ。

義久がバンガローの前で合図をした。

「はい、敏行くん、スタート。」

「やだなあ。どっかに麻美ちゃんがいておどかすんだろう。」

南関・東小学校と森沢分校合同のきもだめしだ。じつは東小学校六年生のキャンプは、この七月初めにすでに行われているのだが、そのとき、かぜなどで欠席した五人が、あらためて吉川先生に引率されて来ているのだという。

吉川先生といえば、今日の午後、敏行と正人が呼ばれて事務室へ行ったとき、そこには所長さんと吉川先生がいて、もう水泳も木登りも禁止しないことに決めた、ということだった。ようすをわかっていた所長さんが、電話を受けにやってきた吉川先生に、キャンプの目的を言いふくめたのかもしれない。

敏行は、そのことを伝えるために呼ばれたらしいが、正人はなんのために呼ばれたか、報告しなかった。みんながいくらきいてもこたえない。

そんなことで、吉川先生は合同キャンプも子どもたちにまかせ、自分は今も事務室の所長さんの所だ。

「ねえ、義久くん。麻美ちゃんはどのへんにいるの？」

敏行はわんぱくに見えるが、どうもきもは小さそうだ。

「それがわからないからおもしろいんです。」

このきもだめしの係は、どきょうのいい義久と麻美で、あとはみなためされる側だ。

「さあ、敏行くん、スタートして。」

せかされると、カンテラを持った敏行は、しかたなさそうに出ていった。

まず、土手をおりてプールまで行く。雑木林のヤマユリのそばには、江戸時代の農民のお墓があって、そこにしるしのついたわりばしがのっているから、それを一本とり、次にはプールから少しはなれた、道路わきの空家に入る。空家には、なぜかぶつだんだけが残されていて、そこには二本のろうそくがともされ、わりばしが置かれている。それを取って分校にまわり、校庭を一周して帰ってくる、というのがコースだ。

五分ちかくかかり、息せききって敏行は帰ってきた。そして義久にしょうこのわりばしをさしだしながら、

「わあ、こわかった。みんな、こしをぬかすなよ。」

と言った。おどかすつもりではない、しんそここわかったらしいのだ。

そのせいか、出かけていってもすぐに帰ってきてこうさんしたり、

「ねえ、二人でいっちゃだめ？」

なんて弱音をはいたりする子がでてきた。

全部回った子も、たいていはべそをかき、なみだぐんで帰ってくる。初めから、何度スタートさせても動かなかった正人だけが残った。

「さあ、正人、おまえのためのキャンプなんだぞ。がんばってやれ。」

義久が少しこわい顔で言うと、正人は、

「行くよ、行くよ。義久くん、そんなにおこらないでよ。」

とへっぴりごしで出ていった。プールのあたりまで行くと、

「おほとけさま、出ないでね、出ないでね。」

なんて言っている。そのとき秀年が、

「なあみんな、空家に行ってみよう。」

と言いだした。

「正人は分校いちばんのおくびょう者だから、空家でどんなにこわがるか、見物しよう。」

「それもおもしろい。」

と係の義久まで賛成した。

自分がこうさんしたり、おびえて泣いたりしたのも忘れ、一同はこっそり逆方向から空家に回っておくざしきにひそんだ。

やがて、こわいよ、こわいよ、と言いながら正人が現れた。カンテラの明かりを下からあびた正人は、なみだで光る目が変につりあがって、それこそこわい顔になっている。

正人はくつのまま板の間にあがった。するとなんどのほうで、ササーッ、ササーッとほうきの音がする。

「やめてよ、麻美ちゃん。そこをはいているのは麻美ちゃんでしょう。」

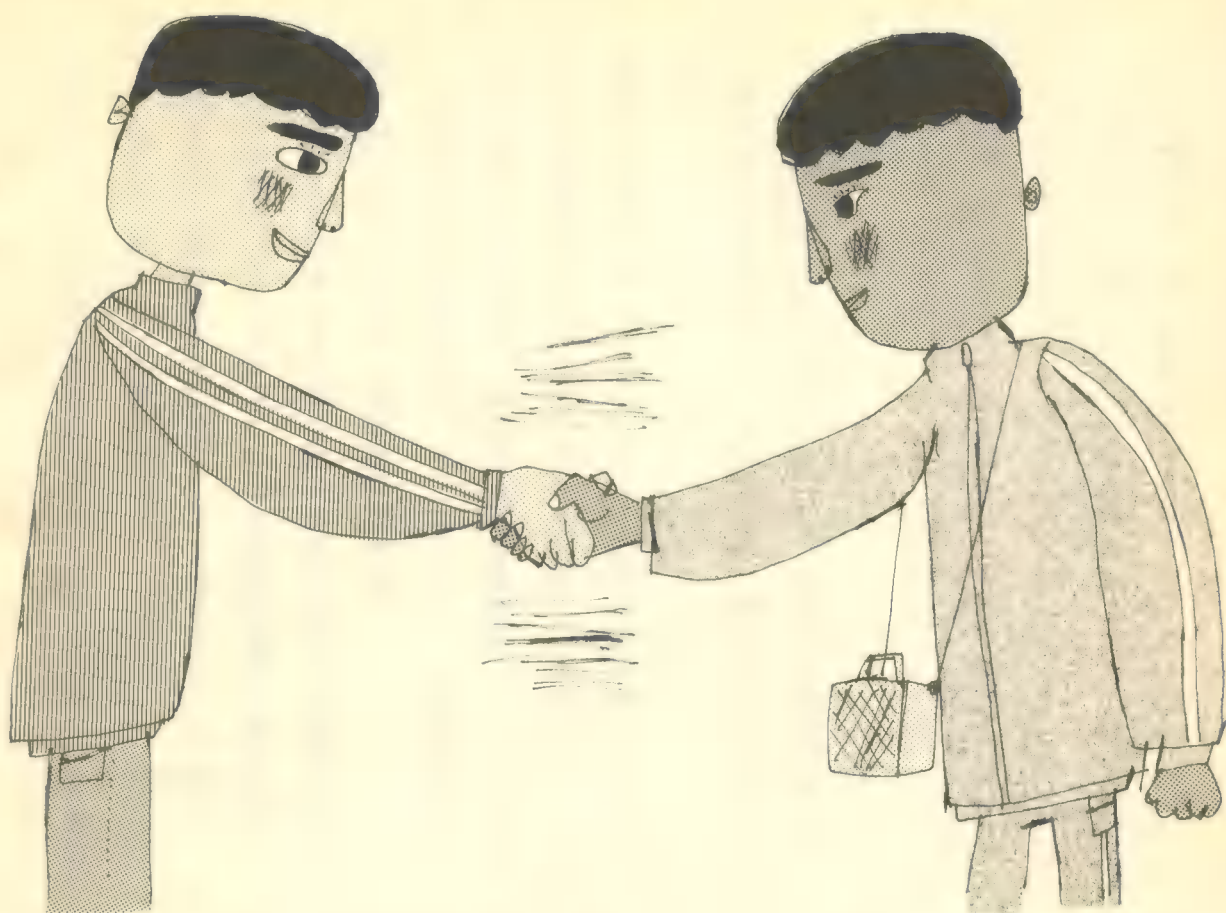
正人はべそをかき、泣き声になった。しかしほうきの音は

やまない。ゆっくりと、ササーッ、ササーッ。部屋は真っ暗でしめっぽい。
「やだよお、麻美ちゃん。もうやめて出てきてよ。」
泣きわめくと、ほうきの音がはたとやんだ。正人も息をのんだ。そこへ、白い着物を着て、かみをふりみだした女の人が、ふわりと現れた。麻美なんかより、ずっと背が高い。
「きゃ、きゃ、きゃ。」
正人はおかしな悲鳴をあげると、その場にこしをつき、両手だけをばたばたさせた。
「助けて、助けて。だれか助けにきてえ。」

もう、身も世もあらず泣くので、とうとう義久が出ていった。
「だいじょうぶだ。みんな来ているよ。さあ立って。」
手をかしたが正人は立ちあがれない。こしがぬけてしまったのだ。みんな出てきて、
「へえ、こしをぬかすって、こんなの。」
「こしがぬけた子って、初めて見た。」
などと言いながら、めずらしそうに正人を見おろす。
「ごめん、ごめん。」
高げたをぬぎ、もとの背にもどった麻美が、白い着物のまま、顔を両手でかくして正人の前にうずくまった。
「ほんとうに麻美ちゃん？」
こしをぬかしたまま正人はきいている。
「そうよ、ほら。」
両手をのけると、これがのっぺらぼうのお面だ。
「わあ。」
と正人はひっくりかえった。そのまま動かない。こんどは気絶だった。
「薬がききすぎたかな。」

義久が気のどくそうにしゃがみこんだ。
「いいさ、これもいい思い出だ。」
秀年が言うと、麻美がお面をとって、
「ごめん、ごめん、正人。」
とかたをゆする。そばで、
「こりゃあ、ゆかい。」
と言った子がいた。東小で背のいちばん小さい達也だ。
「こしぬけと気絶と、一度に二つも見ちゃった。」
昭則、さゆり、由美など、東小の子たちが、小さく声をあわせて笑った。すると、
「もうがまんできないぞ。」
敏行が笑った仲間たちの前に立ちはだかった。
「人の苦しみが、そんなにおかしいか。ぼくはおまえたちとのキャンプなんか、もうごめんだよ。」
そして、気絶した正人をだきあげ、カンテラを持つと、こうふんした顔のまま空家を出ていった。

午前四時ごろだろうか。バンガロー入り口の窓ガラスの向こうは白じろと明るくなっている。義久はこっそり体を起こし、上の気配をうかがった。二段ベッドの上には、ゆうべこしをぬかした正人がねているのだ。頭をつきあわせたとなりには秀年。
二人の規則正しいねいきが聞こえる。だいじょうぶだと、

こっそりベッドから足をおろした。スポーツウェアのままねているから、着がえの必要もない。
静かにドアをおして外に出た。気づかれなかったらしい。これでは自分一人だけ大もうけだとほくそえんで歩きだしたとたん、ドアがあいて秀年が出てきた。ぬけめのないやつだ。秀年は、どくっけのない顔で笑っている。
二人そろって急ぎ足になった。虫とりだ。カブトやクワガタのいるひみつの木は、義久と秀年しか知らない。いや、もともとは自分だけの木を持っていたのだが、やがてたがいに相手の木も見つけてしまい、それが二人共同の木になったのだ。
朝日が上がる時間には、まだ間があった。分校のはす向かいの山の頂上に登りついたときは、二人とも息をはずませていた。
「こっちからやるか。」
義久が、幹がひとかかえもあるクヌギの木を見あげた。
「うん、きのうはいなかったから、今日はいるかもしれない。」
それから二人は、せえのっとかけ声をかけ、力まかせにクヌギの木をけった。カサカサと音をさせ、虫がふった。二人はいそいで地面にかがみこんで、のみとりまなこになる。
「いたぞ、ノコギリクワガタ。」
「こっちはミヤマだ。」
「カブトはどうだ。」
「いない。あ、またミヤマクワガタ。」
最初の木で、義久はノコギリクワガタのおす三びきにめす一ぴき、それにカブトのめすが一ぴきだった。秀年はミヤマクワガタだけ、おす三びきにめす二ひき。ねだんはどれもおすが高くてめすが安い。
「まあまあだな。」
秀年がえものをかごに入れながら言った。
「たいりょうだよ。二人とも、もう千円以上かせいだ。」
義久は満足そうだ。
「さあ、次の木へ行こう。」
ところが、あとの二本は、なんどけっても虫がふってこなかった。
「しかたがない。じゃ、向かいの山だ。」
山をおり、道路をはさんで南側の山に移った。この山のひみつの木も、頂上近くにある。やぶをこぎのぼっているう

ちに、スポーツウェアが朝つゆでびしょびしょにぬれてしまった。

目的地によほど近づいたとき、人の声がした。

「秀年、いる。」

義久が声をひそめて言って頂上をにらんだ。耳をすますと、たしかに人声だ。あいまいに、わあい、というようなさけび声もまじっている。

「秀年、おまえ……。」

と義久はけわしい顔をした。

「だれかにあそこの木を教えなかったか。」

「教えない。」

と、反射的にうちけしてから、秀年は、すぐ気がついたように、

「一回だけ、正人を連れてきたことがある。」

と首をすくめた。

「それ、みろ。だからこうしてぬけがけされる。あのさけび声は、たしかに正人だ。」

秀年をしかりつけ、ずんずん急いで行くと、たしかに正人がはしゃぎまわって虫を拾っている。そして、そのあいぼう

は、なんと、東小の敏行だった。
「やいやいやい。」
義久にしかられた秀年は、二人の間におどりでて、いたけだかにさけんだ。
「ここはぼくと義久くんの虫とり場だぞ。正人、なんでよそものをこのひみつの場所へ連れてきた。」
ゆうべのようにこしをぬかしそうにおどろき、口を大きくあけた正人は、すぐにべそになった。そして、とぎれとぎれに、
「ごめんなさい。ぼくは、敏行くんと、ぼくは……。」
と言ってしゃくりあげた。敏行が進みでた。
「わりい、わりい。ここがきみたちの虫とり場とは知らなかったんだ。正人が、ゆうべやさしくしてもらったお礼だと、連れてきてくれたものだからね。それから、じつは正人とぼく、あと半月後には、兄弟になるんだ。」
とっさに義久は、二人がきのう、キャンプ村の事務室に呼ばれたわけを理解した。正人のお母さんは、きっとこれもお母さんのいない敏行のお父さんと再婚するのだ。それを二人は、所長さんか吉川先生からつげられ、けれどもはずかしがって、みんなにはひみつにしていた——。
「わかった、かまわないよ。」
と義久は敏行に手をさしのべた。
「今日とったカブトやクワガタは、みんな、正人と敏行くんと東小のみんなにあげるよ。」
敏行は笑顔になって義久の手をにぎった。義久からわけをきかされた秀年も、しゃくりあげている正人の頭をなで、
「よかったね。いい子と兄弟になれて。」
と言った。気がつくと、周りには白いヤマユリがいっぱいさいて四人をすごくいい香りでつつんでいるのだった。

（終わり）

●作家紹介

三好京三

昭和六年岩手県胆沢郡に生まれる。岩手県下の小学校の教員を二十七年間勤める。
昭和五十二年、第四十一回文学界新人賞受賞（『子育てごっこ』）。昭和五十年、第七十六回直木賞受賞（『子育てごっこ』）。小説家として現在に至る。

★SF★

メイ・デイ、こちら宇宙都市

火星開発基地からのメッセージ

光瀬 龍・作／金森 達・絵

ケイとヒロシは、火星開発基地「スペース・サイド・タウン」で生まれ育った。ビイーッ！ ビイーッ！ とつぜんけたたましく警報が鳴りだした。

★1★

ビイーッ！ ビイーッ！ ビイーッ！

とつぜん、けたたましく警報が鳴りだした。

なんだろう？

ケイも、ヒロシも、バン先生も、石になったように体をかたくした。

つづいて、てんじょうのスピーカーがさけんだ。

《ドーム内の空気が急激にうすくなっています。いそいで宇宙服とヘルメットを着けてください。原因はただいま調査中です。》

「たいへんだ！」

バン先生は、いそいでロッカーから三人分の宇宙服とヘルメットを引きずりだした。一つは大きく、二つは小さい。

ケイもヒロシも十一歳。小さな宇宙服は子ども用だ。

この火星の開発基地『スペース・サイド・タウン』で生まれた子どもは、五歳になると、宇宙服を自分で着ることができるように練習する。

バン先生は二人のヘルメットのとりつけぐあいや、呼吸装

置のはたらきをたしかめた。
タウン全体がさわがしくなってきた。
「なにが起きたのかしら？　先生、あたし、こわいわ。」
ヘルメットの通話器から流れでるケイの声がふるえていた。
「だいじょうぶだよ。」
バン先生がケイをひきよせた。
「先生、今日はもう学校は終わりだよな。」
なんだかヒロシはうれしそうに電子ノートやガクコン（学習用コンピューター）を、バッグの中へしまいこんだ。
生徒はケイとヒロシの二人しかいないが、ここは『スペース・サイド・タウン』の小学校だった。教室はたった一つしかないが、これでもりっぱな小学校だ。
「こら、ヒロシ。」
バン先生の宇宙服の手が、ヒロシのヘルメットをこづいたとき、またスピーカーがさけびはじめた。
《ドームの中の空気がうすくなったのではなく、空気中の酸素が失われていることがわかった。原因はなお調査中。》
「先生。空気の中の酸素だけがへっているって、どういうこと？」

空気の五分の四は、ちっそ。五分の一が酸素。あとはごくわずかな物質だ。

バン先生は大きなヘルメットをゆっくりとふった。

「さあ、わからん。たぶん、だれか酸素だけ吸いこんでいるんじゃないかな。」

あとは笑い声でごまかした。

「ね、先生。ゆうべのUFOと関係があるのかしら?」

「そうだよ。きっとそうだよ。」

大きくうなずいたのはヒロシだった。

「エイリアンがせめてきたんだ。いまにおれたち、みんなエイリアンにくわれちゃうんだ。」

ヒロシは両手を広げると、ケイにおそいかかるまねをした。

「ギャオウ!」

ケイはひややかにヒロシから目をそらした。

「ばかみたい。」

★2★

このごろ、よくUFOが現れた。

この火星の夜空高く飛ぶ。

きのうのことだった。

一個のUFOが、『スペース・サイド・タウン』のドームすれすれまでおりてきた。

タウンは、東京ドームの二十倍の大きさのドームでおおわれていた。地下に、それと同じ大きさの町がある。

そのドームにふれるぐらい低くおりてきたUFOは、とつぜん、小さなボールを発射した。

ボールはドームに小さなあなをあけ、タウンのどこかに落ちたはずなのだが、まだ発見されていなかった。

それでさえ大事件なのに、こんどは空気中の酸素がなくなるとは!

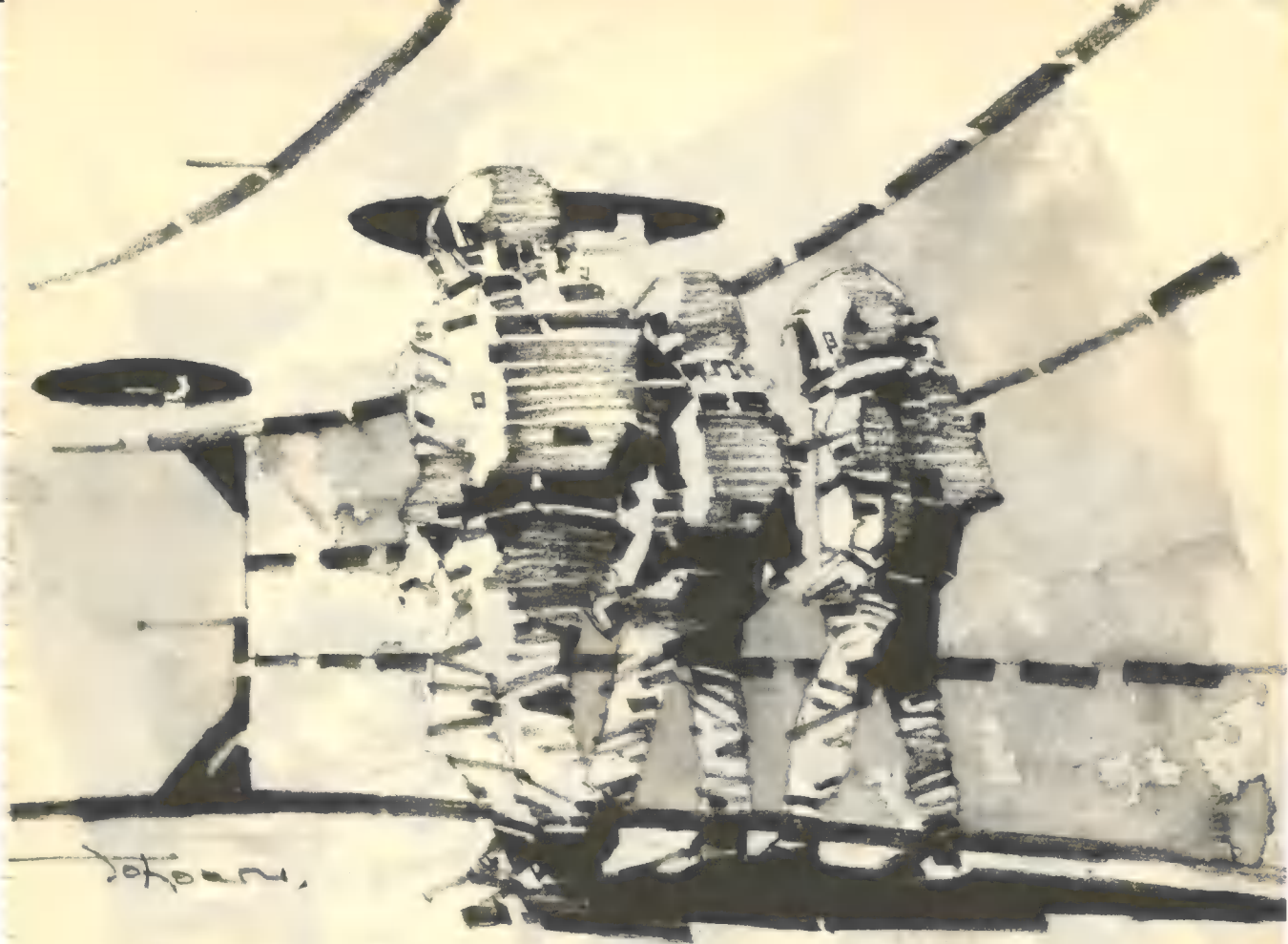
「なあ先生。このぶんじゃ、あしたもあさっても、学校、休みだよな。エイリアンさまさまだ。空気でもなんでももってってくれ。」

「ヒロシ。おまえ、そのぐらいしか考えること、ないのか。」

バン先生の大きな目が、ヘルメットの中でぎょろりと動いた。

「なーんて思ってみただけ。」

ヒロシは首をすくめたが、ヘルメットの中だから、外から

(263) メイ・デイ、こちら宇宙都市

は見えない。

コツン！　バン先生の指が、ヒロシのヘルメットをはじいた。

市民全員にエアボンベがくばられた。

酸素製造工場が全力をあげて作った酸素が空気中に放たれたが、それがいつまで続くかわからない。

学校は、ヒロシがのぞんでいたように休みになった。

ケイのお父さんもお母さんも、スペース・パイロットで、宇宙船に乗りくんで何日も前から火星をはなれている。ヒロシのお父さんはタウンの発電所の技術者で、お母さんはけいび隊員だ。二人ともつとめから帰ってこられない。それでケイもヒロシも、バン先生の部屋でくらすことになった。

「なんだ。一日じゅう先生といっしょじゃ、学校休みになったって意味ねえよ。」

ヒロシは口ではぶつぶつ言っていたが、その顔を見るとうれしそうだった。タウンの人びとは、みな四、五人で班を作り、タウンのすみずみまで調べてまわった。

だが、空気中の酸素が失われていく原因はまったくわから

なかった。
　はげしい不安の中で、三日、四日と過ぎていった。

「おれたちも調べにいこう。」
「先生。あたしたちもおてつだいしたいわ。」
　ケイとヒロシの言葉に、バン先生はちょっと考えていたが、すぐうなずいた。
「よし。待っていろよ。」
　バン先生は、けいび隊の本部へ電話をかけた。
　それによると、けいび隊をはじめ、タウンの人びとは、なにかみょうなことはないか、これまで見たことがないような物があったりしないか、注意して見まわっているのだという。
「そのぐらいなら、なにも危険はないだろう。参加するとしよう。」
「やった！」
　バン先生を先頭に、ケイとヒロシたちはタウンの通路へ出た。
　この『スペース・サイド・タウン』の人口は一一八〇人。その半分の人びとが今仕事についている。半分の人びとは休んだりねむったりしているはずだが、その人たちは、今タウンの中を見まわっているのだ。タウンはせまくるしいようでも広く、見まわりの人びとはどこを歩いているのか、通路はしいんと静まりかえっていた。
「いいか。かべやてんじょうのひっこんだような所はとくにねんいりに見るんだぞ。」
「そこになにかあるの？」
「それがわからないから調べるんじゃないか。」
　通路は照明でま昼のように明るい。
　三人はゆっくりと進んだ。
　二日がかりでタウンの中を、すみからすみまで調べて歩きまわったが、変わったことはなにも発見できなかった。
「ああ。くたくたでもう一歩も歩けないよ。」
「あたしも。」
　ケイもヒロシも通路に座りこんでしまった。
　だがやめるわけにはいかない。酸素はどんどんへりつづけ、酸素工場で作る量ではまにあわなくなってきているという。
　このままでは、あすあたりから、地球や月へひなんがはじ

まるという。一〇〇〇人もいっぺんに運べるような宇宙船などないから、少しずつ送りだすのだ。

「この火星をすてるのかい。おれ、いやだよ。」

「わけのわからないことで、にげだすなんてはずかしいわ。」

こんなことでにげだしたら地球や月の学校へ移っても、そこでいじめられるかもしれない。

4

ヒロシのヘルメットに、青い細かい粉のようなものがはらはらとふりかかった。

「なんだろう?」

ふりあおいだが、なにもない。明るいてんじょうに、四角な、長い長い箱のようなエアダクトがのびているだけだった。エアダクトは空気を送っているのだ。

「またふってきたぞ。」

ケイもバン先生もふりあおいだ。

アルミの板で作られた銀色のダクトは、タウンのすみずみまでのびて、空気を運んでいる。

ダクトはところどころ、ようせつでつないである。三人の

頭の上に、そのつなぎ目があった。その部分に、ほんのわずか、すき間があいたらしい。三人の目に、そのすき間からまた、ちりのような、細かい青い粉がわきだし、はらはらと散るのが見えた。

「先生。あの長い箱みたいなもの、空気を運ぶ管なんだろう。」

「ああ、そうだ。」

「あんな、青いほこりみたいなものがつまっているのかな。」

「ほら。また出てきたわ！」

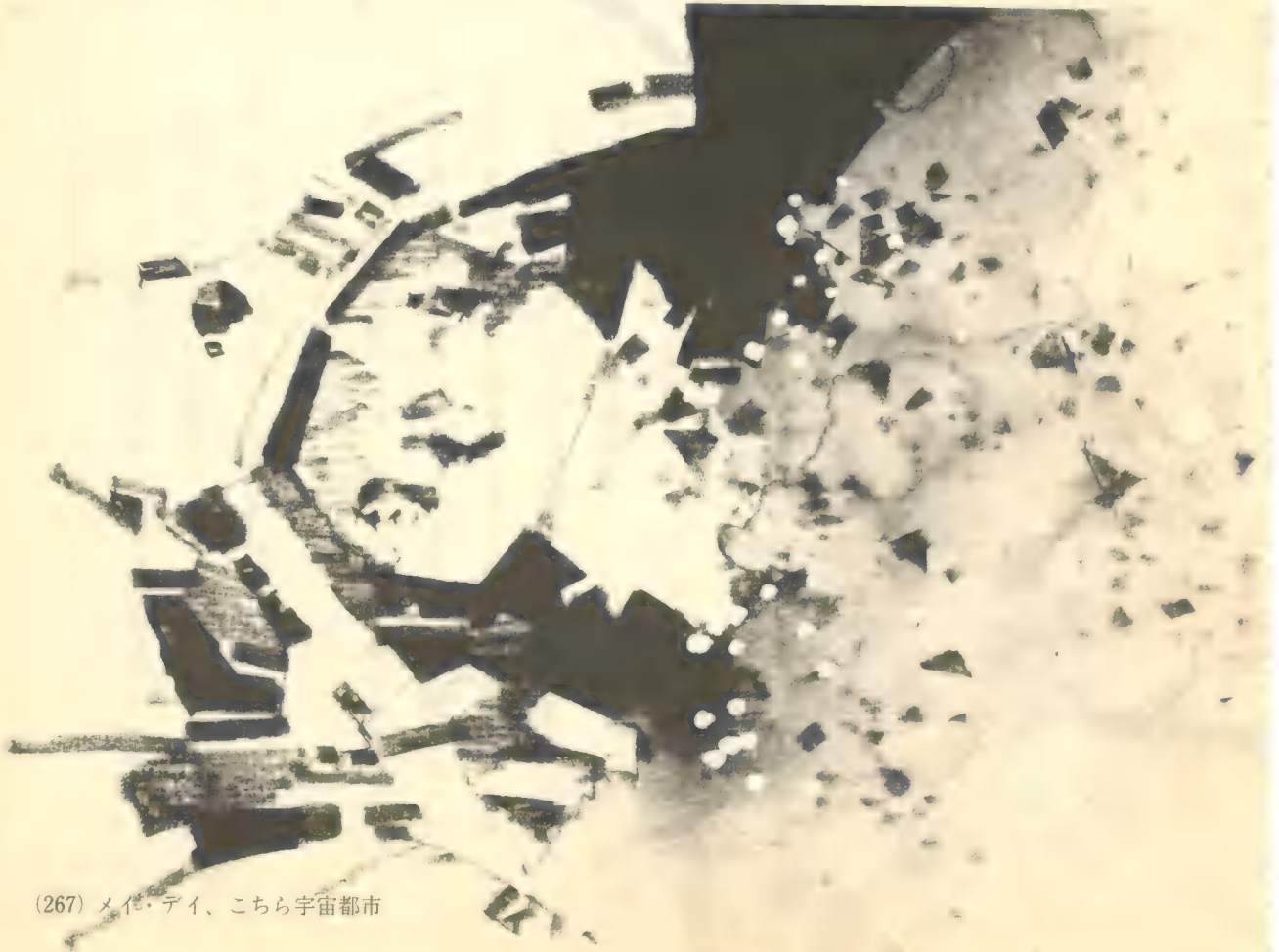
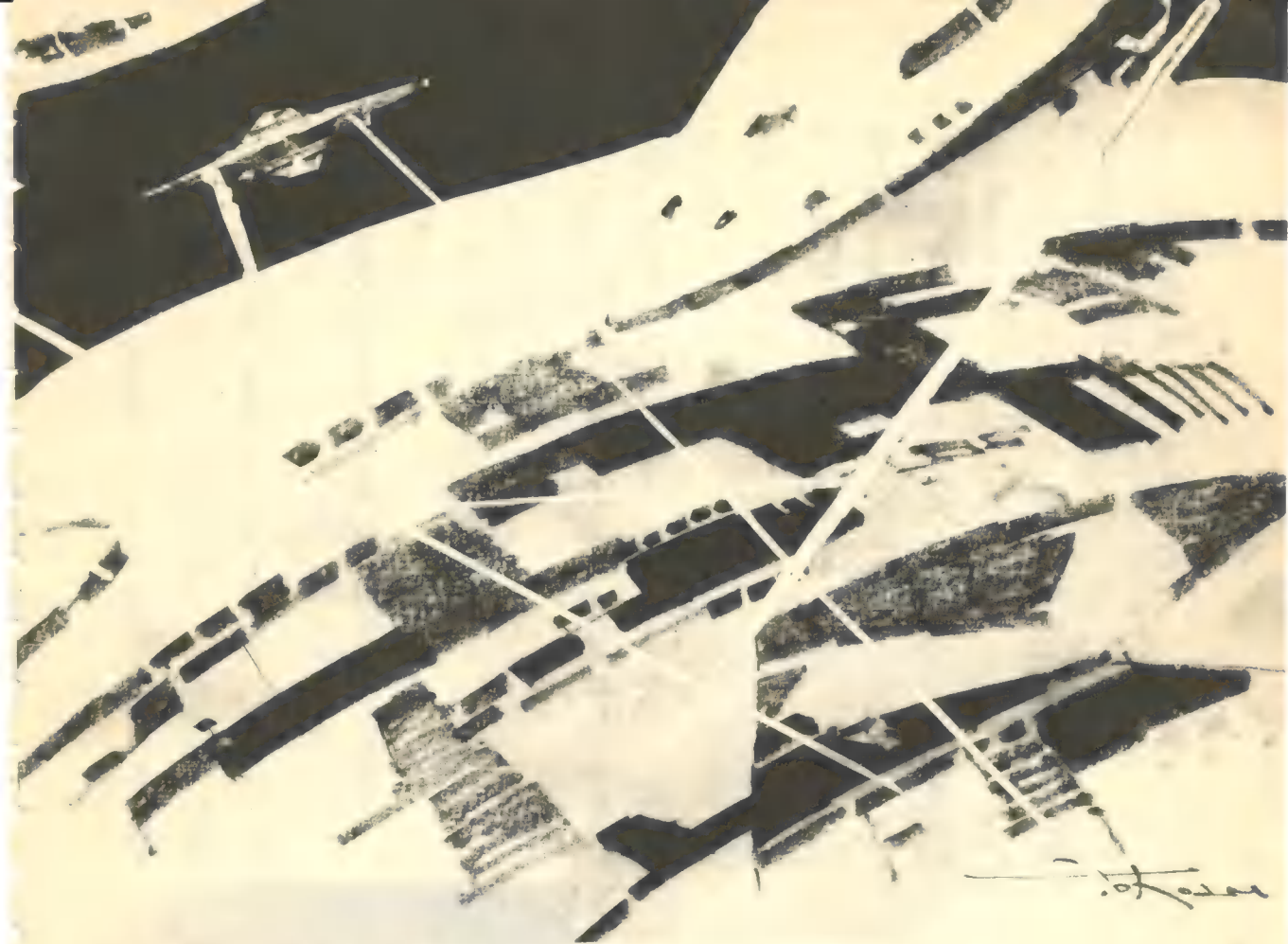
バン先生は走っていって、どこからか長いはしごをかついできた。それをかべに立てかけ、てんじょうのダクトに手をのばした。

バリッ、バリバリッ！

バン先生はすごい力でアルミ板をやぶった。

ぱあっ、と青い粉が、けむりのようにふきだした。ものすごい量だ。あとから、あとからあふれだしてくる。照明の光がうす暗くなった。

「ダクトの中はいっぱいだぞ。ケイとヒロシ、けいび隊に連絡してくれ。大いそぎだ！」

けいび隊や科学者たちが集まってきた。

「これはなんだ？」

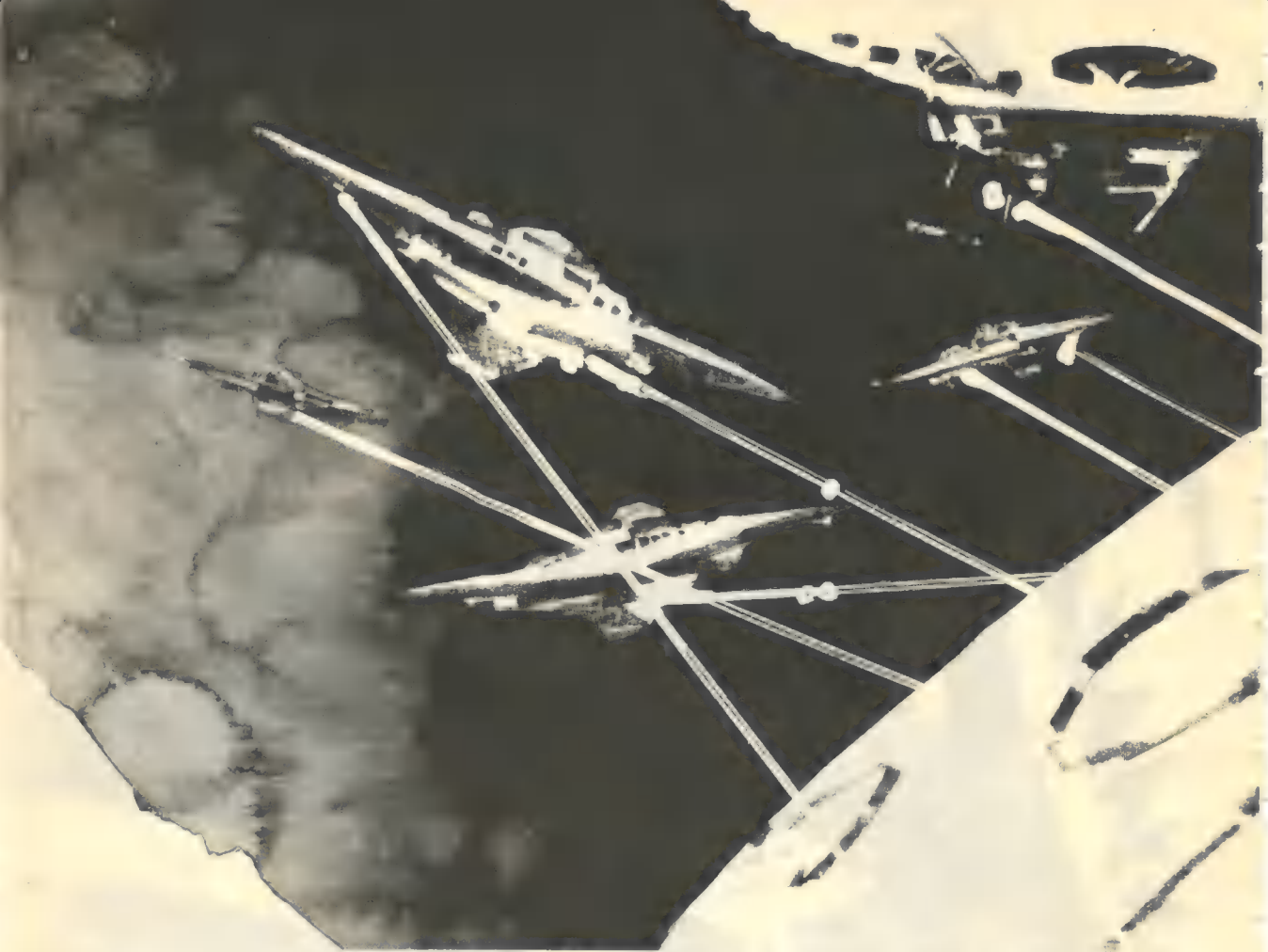
「このあいだ、調べたときはこんなものはなかったぞ。」

大さわぎになった。科学者たちは、その青い粉のようなものを、ガラスびんに入れて研究室へ持ちかえった。

次の日、科学者たちから、たいへんなことが発表された。

《エアダクトの中の青い粉のようなものは、人類にとって未知のカビである。このカビはもうれつに酸素をとりこみ、はんしょくする。タウンの空気中から酸素がなくなったのは、このカビのせいである。》

さあ、ダクトの大そうじがはじまった。ダクトの中へもぐりこんだり、アルミ板をひっぱがしたり、消毒液で洗ったり、そうじ機で吸いとって、ドームの外へふき出したり、十時間後には、完全にカビは消えた。バン先生も、ケイも、ヒロシも、バケツやデッキブラシやぞうきんを持って走りまわった。

酸素の消失は完全に止まった。空気は正常に酸素をふくみ、タウンの人びとはどうやらヘルメットをぬぐことができた。

バン先生も、ケイもヒロシも、おそろしいカビの発見者として、すっかり有名人になった。

だが、そのカビはいったいどこからやってきたのだろう？ 火星ではもちろん、地球でもまったく知られていないカビだった。

そのなぞだけが残った。

★5★

タウンのドームすれすれにUFOが飛んだ。

まるで星が動くように夜空のおくから現れ、次つぎにドームへ向かって急降下してきた。そしてなにかを発射した。

小さなロケットだった。ロケットは青いほのおを引いてドームめがけて突進した。

ビイーッ！　ビイーッ！　ビイーッ！　ビイーッ！　……

警報がけたたましく鳴りつづけていた。

「早くにげろ！」

「こっちへ来るぞ！」

「助けてくれ！」

バリバリバリ……

ごおううう！

にげまわる人びとの後ろからほのおが追ってきた。通路はけむりでいっぱいだ。

バン先生にうでをつかまれ、ケイもヒロシも、けむりをくぐって走った。

そのけむりの中から奇怪なものが姿を現した。

全体の形はライオンに似ている。だが、カマキリの、かまのある前足のようなものが三、四本、頭からつき出ている。足はくねくねとよく動く、タコの足のようなものが何十本もついている。背中には大きな鏡が立っていて、ギラギラとかがやいていた。全長は一〇メートルもあるだろう。

全身がよろいのように金属でおおわれ、しんちゅう色にかがやいていた。

背中の鏡が、ギラッ！　と光った。目のくらむような光線が走ると、かべがどっとほのおにつつまれた。

柱のかげから、けいび隊が光線銃をうちはじめたが、とてもくいとめることなどできない。

けむりの中から、さらに二つ、三つ、四つと現れた。

通路を重く厚い鋼鉄のとびらがふさいだ。

どんな怪物でも、うち破ることはできないだろう。

だが、三分もたたないうちにとびらの内側にいる人たちは、青くなった。とびらが真っ赤に焼けてきたのだ。

やがてとびらは中央の部分からどろどろにとけ、ぽっかりと大きなあなが開いた。そこから怪物の頭がのぞいた。

光線がひらめき、周りは火の海になった。

人びとはしだいにタウンの地下部分へと追いつめられていった。地下部分の中央には、発電所や酸素製造工場などだいじなしせつが設けられている。だが、そこへとじこめられたら、もはや宇宙空港などのある地上へのがれでることなどできなくなる。けっきょく、追いつめられてぜんめつだ。

「先生、あれなんだろう？」

「地球から助けにきてくれないのかしら？」

「先生はなんとかして二人をここから救いだしたい。ほかののことはなにも考えられない。」

バン先生は二人を両わきにかかえて、地下深くのびている階段を走りくだった。地下室はにげてきた人びとでいっぱいだった。

まだ発電所は動いているから照明もついているし、酸素製造工場も酸素を作りつづけているが、それもいつまで続くかわからない。
「医薬品が足りない！」
たくさんの負傷者を手当てしているお医者さんやかんごふさんの間からさけび声が上がった。
医薬品倉庫は、ドームにおおわれた地上部分の、十二階にあった。
「よし。おれがとってこよう。」
バン先生が通路へとびだした。ケイとヒロシもつづいた。

ドームにおおわれた地上部分は、めちゃめちゃにこわされていた。三人は怪物の目をのがれ、どうやら十二階の医薬品倉庫にたどりついた。いろいろな薬を、背負ってきたふくろにつめた。
「うーん。重いや。」
「ふらふらするよ。」
大きなふくろをかついで、えっちらおっちら歩く三人は、たちまち怪物に見つかってしまった。
「いけねえ。いそいでにげるんだ！」
三人はふくろを引きずってにげた。怪物は光線をひらめかせて追いかけてくる。
ピカッ！　ピカッ！　光線が走るたびに、てんじょうやかべが、真っ赤なほのおをあげてとけ、くずれおちた。
ふくろを引きずっていなければ、にげるのは楽だが、重いふくろは三人の自由をうばった。
ガチャリ……ガチャリ……ガチャリ……怪物はしきりにようすをさぐっていた。
おもおもしい金属のひびきが、遠くなったり近くなったりした。
そのうちにあなのそばで音がとまった。
ギリギリギリ、ガリガリガリ！
コンクリートのかべがけずり取られ、粉になってとびちった。
「うわあ！」
あなをむりやりおしひろげて怪物が進入してくる。
三人はあなのおくへしりぞいた。だが一〇メートルほどで

ゆきどまりだった。
カマキリのようなはさみがのびてきた。
はさみがケイの足をとらえた。
「キャーッ！」
ケイの体がずるずると引きずられてゆく。ヒロシとバン先生がケイに飛びついた。
二人がケイの両手をつかんだ。
「いたい！」
ケイがひめいをあげた。
「ヒロシ！　ぜったいにはなすなよ。」
バン先生はさけぶと、コンクリートのかけらを拾いあげ、それで怪物(かいぶつ)のはさみにたたきつけた。
一回。二回。三回。金属(きんぞく)の表面はびくともしなかった。コンクリートのかけらがくだけちった。バン先生は新しいかけらで打ちすえた。
ガシン！
怪物(かいぶつ)のはさみが、とつぜん、ぐにゃっとまがり、ぽろりと落ちた。ヒロシははさみをおし開くと、ケイを引きはなした。
グワーッ！

怪物はすさまじいさけび声を発すると、バン先生におそいかかった。
ガシン！　コンクリートのかたまりが、怪物の横腹にくいこんだ。
怪物の動きがみょうにおそくなった。体の動きがてんでにばらばらになった。
全体が白っぽくなり、しんちゅう色のかがやきが失われて、ボール紙のようになった。
グシャッ！　バン先生の一げきで、怪物の胴体は引きさけ、内部の精密な機械がのぞいた。それも白茶色に色が変わり、緑色や黒のさびが現れていた。
三人はふくろを引きずってあなからはいでた。
あちこちで怪物がうずくまり、横たわっていた。粘土ざいくのように色が変わり、中には茶色のさびだらけになっているのもあった。
「先生！　おれたち、助かったみたいだぜ。」
「先生。怪物たちはどうしてだめになってしまったの？」
バン先生は、完全に動かなくなっている怪物に近より、しきりに調べていた。

「ううむ。この怪物は金属製だ。だが、この金属は地球では知られていないものだぞ。それにしてもひどくさびている。なぜだろう？」

バン先生は首をかしげた。

「金属は酸素にふれるとさびる。この怪物を作った宇宙人のすんでいる星には酸素がないんだろう。だから、この『スペース・サイド・タウン』のドームの中では、この怪物はさびだらけになってこわれてしまったんだ。」

科学者たちが調べた結果は、バン先生が考えたとおりだった。UFOの宇宙人たちはドームの中の酸素を失わせるために、あのカビをつめたロケットをドームにうちこみ、それから怪物をおさめたロケットを発射したのだ。

かれらは、火星に進出した地球人が、じゃまだったのだろう。

「また、やってくるぞ。」

宇宙のなぞは深い。

今夜も、火星の夜空高くUFOが飛んでいた。

（終わり）

●作家紹介

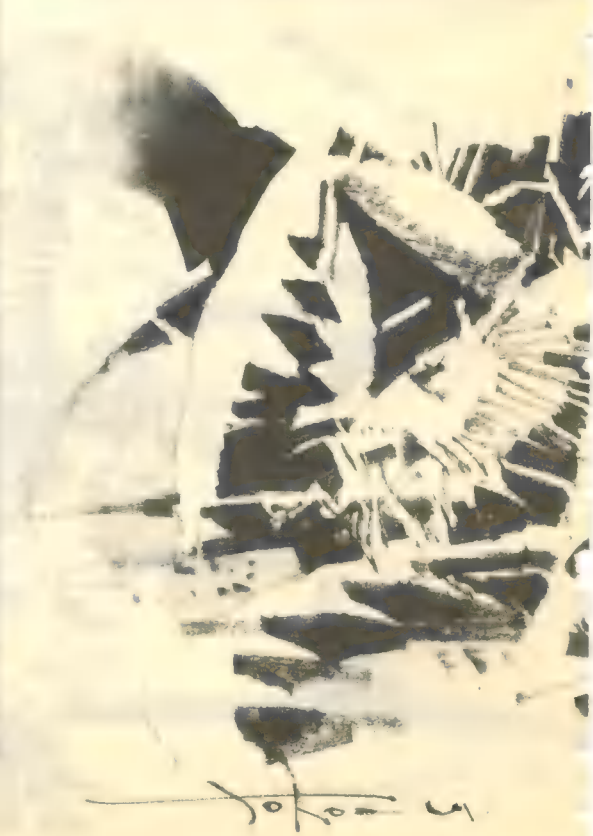
光瀬　龍

昭和三年生まれ。東京都出身。東京教育大学理学部動物学科卒業後、同校哲学科に学ぶ。女子校で十一年間生物と地学を教えたあと、作家生活に入る。

壮大なスケールのSF作家として知られ、また時代小説の分野でも異才を発揮。代表作に『ロン先生の虫眼鏡』『たそがれに還る』『百億の昼と千億の夜』『カナン5100年』『秘伝宮本武蔵』『ミイラ獲りのバラード』『喪われた都市の記録』など。

おもしろ読み物クイズ

すてきな賞品(しょうひん)が当たる

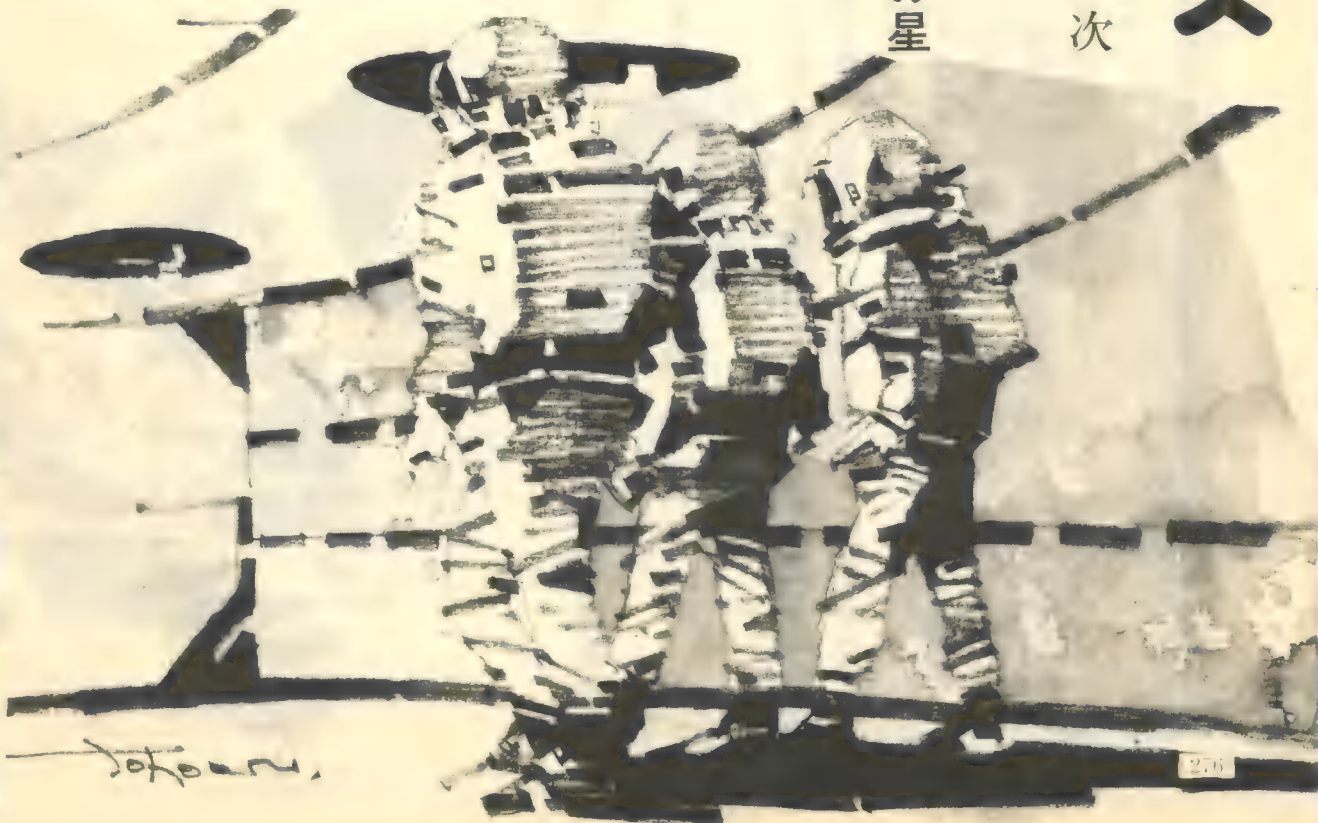
問題

「メイ・デイ、こちら宇宙都市(うちゅうとし)」を読んで、次の問題の答えを番号で答えてください。

おそわれた宇宙都市(うちゅうとし)があったのは、次の星のうちどれだったでしょう。

①月
②火星
③金星

すぐおうぼしよう!

①答えを、この本の終わりについているアンケート用はがきか、官製(かんせい)はがきに書いて送ってください。
②しめきり➡一九九二年十月三十一日

③送り先➡〒142-55 東京都荏原郵便局私書箱第45号「6年の学習・科学読み物特集」係
④賞品(しょうひん)➡もくじの写真の賞品(しょうひん)がちゅう選で当たります。
⑤発表➡一九九二年度「6年の読み物特集㊦」誌上(しじょう)

第38回青少年読書感想文 全国コンクール
課題図書を読んで応募しよう
小学校 高学年の部 (4・5・6年)
かたやぶりの個性をもつユッチとアンのさわやかな友情をえがいた物語。きみたちのクラスに、こんな友だちがいたらユカイだろうなぁ。
学研の新●創作シリーズ
コロッケ天使
上條さなえ・作
岡本 順・絵
A5判・本文146ページ定価910円(税込)
書店で発売中。
コロッケ天使
上條さなえ/作 岡本 順/画
第38回青少年読書感想文全国コンクール
☆課題図書☆
学研 販売局
第38回青少年読書感想文 全国コンクール
課題図書小学校高学年の部(4・5・6年)
ひとりぼっちのロビンフッド
飯田栄彦・作●定価1,200円(税込)●理論社
ぼくと屋久犬テツは大イノシシにふきとばされ、気がついてみるとぼくの魂がテツの体の中に入っていた。緊迫感あふれる痛快な物語。
峠をこえたふたりの夏
三輪裕子・作●定価1,100円(税込)●あかね書房
母親を亡くした双子のユウキとサキは夏休みに父親と一緒に楽しく峠をこえるはずだった。が、三人は峠で台風に襲われてしまう。
北の森にヒグマを追って
—ヒグマ研究にかけた情熱—
青井俊樹・作●定価1,240円(税込)●大日本図書
ヒグマ生息動態調査地区に指定された北大天塩演習林の日本最初のテレメトリーによる調査のようすを、エピソードをまじえて語る。

こんなときお客様相談コーナーへご連絡ください

学研の各種製品についてのお問い合わせ，ご注文などは，本社または下記最寄りの支社内にあるお客様相談コーナーまでご連絡ください。

★転居なされた場合も，ひき続き「学習・科学」をご購読ください。

支社名	郵便番号	所在地	電話
北海道支社	064	札幌市中央区南17条西14の1の30	(011)563-7611
旭川事務所	070	旭川市2条9丁目右10号 安田火災ビル4階	(0166)24-6541
釧路支社	085	釧路市末広町13の2 太陽生命ビル6階	(0154)25-4541
青森支社	030	青森市栄町1－8－19	(0177)41-4311
秋田支社	010	秋田市山王5の15の33	(0188)63-4515
山形支社	990	山形市北山形2の5の41	(0236)44-1515
岩手支社	020-01	盛岡市黒石野2の9の3	(0196)61-2821
仙台支社	980	仙台市青葉区二日町12の30 日本生命仙台勾当台西ビル	(022)264-3131
福島支社	963	郡山市並木3の2の23	(0249)23-3011
群馬支社	371	前橋市古市町426の3	(0272)53-0781
栃木支社	320	宇都宮市弥生1－7－16	(0286)33-1405
茨城支社	310	水戸市見和1－299－12	(0292)54-6141
千葉支社	260	千葉市汐見ヶ丘町8の12	(043)246-7077
埼玉支社	336	浦和市根岸4の7の9	(048)861-6811
神奈川支社	220	横浜市西区北幸2の8の4 横浜西口KNビル13階	(045)324-0311
東京中央支社 〈担当地区＝千代田，中央，港，品川，大田，目黒，世田谷，渋谷，新宿，杉並，中野，文京，豊島，練馬，板橋，北各区，島部〉	141	東京都品川区西五反田4の28の5	(03)3493-3150
東京城東支社 〈担当地区＝台東，江東，墨田，江戸川，葛飾，足立，荒川各区〉	130	東京都墨田区緑2の8の13	(03)3635-2351
東京立川支社 〈担当地区＝23区と島部以外の市町村(多摩地区)〉	190	立川市錦町5の5の35 寺沢ビル	(0425)27-3361
山梨支社	400	甲府市塩部二丁目2番30号	(0552)52-7121
新潟支社	950	新潟市女池1445	(025)284-6101
富山支社	939	富山市雄山町7の16	(0764)21-9188
金沢支社	921	金沢市泉野出町4の6の4	(0762)43-6151
福井支社	910	福井市松本2の5の8	(0776)26-0488
長野支社	380	長野市柳町50の1	(0262)35-3505
静岡支社	420	静岡市東町1の1	(054)251-3611
名古屋支社	465	名古屋市名東区上社1の908	(052)773-1121
岐阜支社	502	岐阜市早田栄町5の27 明昌ビル2階	(0582)32-2128
三重支社	514	津市栄町2の90	(0592)27-1164
滋賀支社	520	大津市におの浜2の1の21 IKKO大津ビル	(0775)23-1864
京都支社	606	京都市左京区田中関田町22の8	(075)781-8241
和歌山支社	640	和歌山市毛革屋丁36番地	(0734)36-1377
奈良支社	630	奈良市大宮町7の2の5	(0742)34-6722
大阪支社	535	大阪市旭区高殿2の5の13 学研大阪ビル	(06)925-7600
南大阪事務所	591	堺市百舌鳥陵南町3－13 乾ビル	(0722)70-2314
神戸支社	652	神戸市兵庫区大開通10の1の4	(078)576-6611
山陰支社	690	松江市北田町70	(0852)23-3553
山口支社	747	防府市新田874 藤本ビル2階	(0835)22-0441
岡山支社	703	岡山市浜1の8の22	(0862)73-1221
広島支社	732	広島市東区光町2の4の11	(082)264-1721
高松支社	760	高松市福岡町4の26の20	(0878)22-1133
愛媛支社	790	松山市三番町7丁目1-21 協栄生命松山ビル10F	(0899)21-4195
徳島支社	770	徳島市中洲町1の44 千代田生命徳島ビル	(0886)23-0221
高知支社	780	高知市仲田町2番11号	(0888)32-0143
福岡支社	812	福岡市博多区博多駅南6の7の1 学研福岡ビル	(092)475-3621
北九州事務所	802	北九州市小倉北区紺屋町12-4三井生命北九州小倉ビル5階	(093)511-6561
佐賀支社	840	佐賀市天神1の2の55 益本天神ビル3階	(0952)24-7285
長崎支社	850	長崎市宝町6番7号	(0958)42-0606
大分支社	870	大分市金池南1丁目2607番地-1	(0975)43-5740
宮崎支社	880	宮崎市橘通東4の2の6 東邦生命ビル2F	(0985)22-8611
熊本支社	862	熊本市大江4の16の5	(096)362-2385
鹿児島支社	890	鹿児島市上荒田町12の8	(0992)57-7771
沖縄支社	900	那覇市久茂地3の22の1 日高ビル4階	(098)863-4454

グリーンマークを
学校にもっていこう。
緑のゆたかな学校にしよう。

グリーンマークを集めると学校に緑のなえ木がプレゼントされます。

★グリーンマーク1枚で1点，在校生徒数100人未満の学校では300点，200人未満では500点，300人未満では700点，500人未満では1000点，800人未満では1500点，800人以上では2000点で，なえ木1セットがプレゼントされます。

■問い合わせ先　〒104　東京都中央区銀座2－16－12
グリーンマーク実行委員会事務局　電話 03－543－1470

グリーンマークは古紙の再生利用を進めることにより森林資源を生かし緑を守るシンボルです。

ご注意ください

最近，小社の代理店と全く関係のないセールスマンが学研と偽ってご家庭を訪問しているケースがふえています。そして，小社以外の他社商品を販売したり，さらには，学習百科事典や図鑑類の予約受注を行って，前金を受領している事実も発生しています。小社の代理店を通じて行う百科事典や図書類，教育機器等の販売では，

(1)必ず訪問カードをお渡しして，身分や訪問目的をはっきりさせています。

(2)商品と引きかえ時に，初めて代金または頭金をいただくシステムになっています。

そこで，ご契約の際，氏名及び代理店名，出版社名をご確認され，現品受領前に，代金や頭金などをお支払いなさらないようお願い致します。

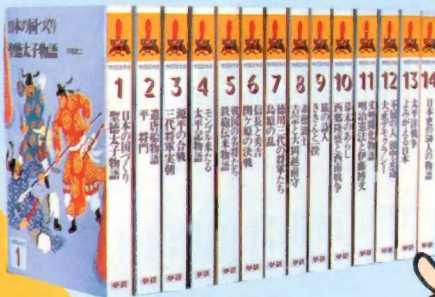
学習・科学「6年の読み物特集」
1992年7月10日発行
定価1000円(消費税込み)
発行人・本郷左智夫／編集人・福田昌弘
発行所・株式会社　学習研究社
東京都大田区上池台4－40－5
案内番号　東京(03)3726－8111
印刷所・大日本印刷株式会社

振替口座番号・東京8－142930

★この月刊学習教材に関するお問い合わせ，お気づきの点がございましたら，下記あてにご連絡をお願いいたします。
文書は…〒146 東京都大田区仲池上1－17－15
学研「お客様相談センター」6年の読み物特集
電話は…編集内容は　(03)3726-8279(編集部直通)
お申し込み，その他は　0120-45-4333(お客様相談センター)

企画・編集　木幡英次（編集長）
石川秀弘／阪田毅／飯塚一男

編集協力　川面弘行
青森県南津軽郡広船小学校／
青森県りんご協会

A・D　日高逸雄
表紙　カワキタ カズヒロ

ホントだから、ドキドキしちゃう!
聖徳太子・徳川家康・西郷隆盛など，日本史上の重要人物たちが大活躍。
学研 物語日本史 全14巻
■セット定価＝21,000円／各巻 1,500円（消費税込み）
教科書によく登場する
歴史上の重要人物たちが大活躍。
ホントにあったドキドキドラマ。
ワクワク楽しみながら，歴史に
強くなれちゃうよ!
エジプト文明から現代まで，ぜひ知っておきたい世界の重要な歴史を，人物中心に紹介。
学研 物語世界史 全12巻
■セット定価＝18,000円／各巻 1,500円（消費税込み）
●お申し込み・お問い合わせは…「学習」「科学」をお届けしている学研教育コンパニオンへ。

定価1000円（消費税込み）

なまえ

Printed in Japan 814-121-60